

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告V

飯氏遺跡群2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集



1994

福岡市教育委員会

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告・V
飯氏遺跡群2

正誤表

誤	正
図版目次 PL. 18(2) 出状況	→出土状況
PL. 61(2) 8号甕棺	→38号甕棺上甕
PL. 61(3) 38号甕棺上甕	→8号甕棺
PL. 61 (2) 38号甕棺	→38号甕棺上甕
(3) 8号甕棺上甕	→8号甕棺

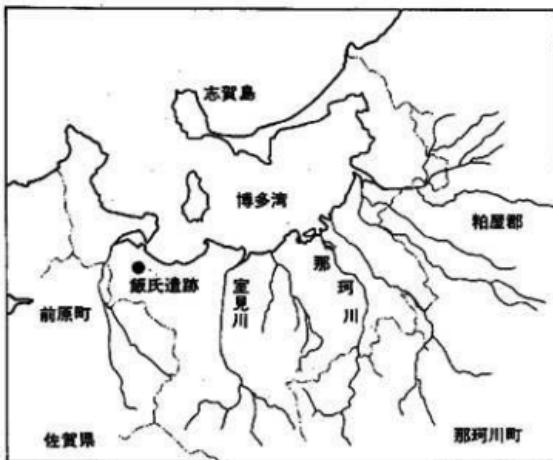
P196 Fig. 173…図中の蓋-1, 壺-2, スケールは10cm

No-26370

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書V

飯氏遺跡群2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集



1994

福岡市教育委員会

序

一般国道202号線は福岡市を起点に唐津市、伊万里市、佐世保市に至る延長203kmの西九州の幹線道路です。福岡市は明治以来九州の政治、経済の中枢都市として発展し唐津街道と呼ばれた国道202号線は西九州と福岡市を結ぶ動脈として重要な役割を果たしていましたが、モータリーゼーションの発達した現在では幹線道路としての機能が低下し、沿線住民の日常生活にも支障を来たしています。今宿バイパスはこの交通混雑の緩和及び地域開発の促進を目的として福岡市西区福重から糸島郡二丈町福井まで23.8kmのバイパスです。福岡市域内では福重から周船寺まで共用が開始され、全体でも前原市の一部を除き完成しまもなく全線が共用できることでしょう。

今回報告する飯氏地区は伊都国を中心地、糸島平野の東端にあたり早良・福岡平野とを結ぶ交通の要衝にあたり多くの遺跡があります。特に国指定遺跡の大塚古墳や丸隈山古墳、鶴崎古墳等の前方後円墳や古墳時代後期の群集墳など古墳密集地城として知られています。福岡市では今宿バイパス建設に伴い九州地方建設局と事前協議を重ね、やむを得ず現状保存出来ない箇所については発掘調査を行い、記録保存を実施しています。発掘調査は平成3年度で終了し、多くの成果を得ることが出来ました。ここに報告する飯氏遺跡群II・III区は弥生時代の甕棺墓を初めとし古墳時代の住居等を検出しました。甕棺に副葬された鏡は大陸との交流をうかがわされる貴重な資料です。他に多くの遺構、遺物が出土し多大な成果を得ることが出来ました。

最後になりましたが、発掘調査に際し福岡国道工事事務所の関係者及び地元の方々を初め発掘調査から整理、報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財保護や普及、教育等に活用いただければ幸甚に存じます。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　言

1. 本書は一般国道202号線今宿バイパス建設に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯氏に所在する飯氏遺跡群II、III区(3次調査)の報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会が建設省の委託を請け平成元年8月15日から平成2年8月15日まで実施した。
3. 発掘調査で検出した遺構は種類毎に記号を附し、甕棺をK、土壙をSK、溝状遺構をSD、掘立柱建物をSB、竪穴住居跡をSC、土壙墓をSR、ピットをSPと表記し、遺物にもそのように注記をしている。
4. 本書に使用した遺構実測図の作成は調査担当者が行い、遺物の実測図の作成は担当者の他に濱石正子、撫養久美子、入江のり子、林由紀子、熊塙御堂和香子、山下智美が行い、打製石器の実測及び文章執筆には杉山富雄氏(福岡市教育委員会)の手を煩わした。
5. 本書に使用した図の製図は濱石正子、撫養久美子、入江のり子、熊塙御堂和香子、山下智美、藤村佳公恵が行った。
6. 本書に使用した写真的うちアドバルーン写真は空中写真企画にお願いし、遺構は松村、宮井、長家が行い、遺物写真は松村、宮井が撮影した。また図版カラーの全景は朝日航洋、鏡は米倉秀紀(福岡市博物館)の協力を得た。PLの左端の番号はFig.の番号である。
7. 本書で使用する方位は全て磁北である。
8. 本書の執筆はII区、及びIII区の甕棺墳墓及びまとめを宮井、その他を長家、松村が執筆し、編集は担当者と協議して松村が行った。
9. 本書に関する実測図、写真的記録あるいは遺物類は平成6年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
10. 本書に関するデーターは以下の通りである。
11. 付録として飯氏遺跡群5次調査の報告を収録した。原稿執筆は常松幹雄が担当した。

遺跡調査番号	8921			遺跡略号	I I J -3
調査地地籍	福岡市西区大字飯氏字鏡原			分布地図番号	120
開発面積	39,156.4m ²	調査対象面積	12,000m ²	調査面積	9,487m ²
調査期間	1989年(平成元年)8月15日～1990年8月15日				

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
II. 遺跡の位置と環境	5
III. 調査の記録	
1. 飯氏遺跡群II区の調査	
(1) 調査の概要	7
(2) 妻棺墓	
1) 前期～中期初頭の妻棺墓	7
2) 後期の妻棺墓	29
(3) 土壙	42
(4) 溝	55
(5) 道構検出面その他の出土遺物	56
2. 飯氏遺跡群III区の調査	
(1) 妻棺墓	
1) AE群の妻棺墓	59
2) AW群の妻棺墓	64
3) BE群の妻棺墓	82
4) BW群の妻棺墓	92
5) CE群の妻棺墓	128
6) CW群の妻棺墓	129
(2) 土壙墓	129
(3) 土壙	133
(4) 竪穴住居跡	157
(5) 握立柱建物	180
(6) 井戸	187
(7) 溝状道構	189
(8) その他の遺構	193
(9) ピット出土の遺物	195
(10) 打製石器	196
IV. まとめ	202
V. 飯氏遺跡群5次調査	209

挿図目次

Fig. 1 国道202号線今宿バイパス路線内遺跡位置図(1/25,000)	3
Fig. 2 周辺遺跡分布図(1/16,000)	4
Fig. 3 16号墳棺墓(1/20)・16号墳(1/8)実測図	8
Fig. 4 2号墳棺墓(1/20)・2号墳(1/8)実測図	9
Fig. 5 18号墳棺墓(1/20)・18号墳(1/8)実測図	10
Fig. 6 20号墳棺墓(1/20)・20号墳(1/8)・20号墳棺墓出土遺物(1/2)実測図	11
Fig. 7 6・14号墳棺墓実測図(1/20)	12
Fig. 8 6号墳棺墓実測図(1/8)	13
Fig. 9 14号墳(1/8)・14号墳棺墓出土遺物(1/2)実測図	14
Fig. 10 21号墳棺墓実測図(1/20)	15
Fig. 11 21号墳棺墓実測図(1/8)	16
Fig. 12 23号墳棺墓(1/20)・23号墳(1/8)実測図	17
Fig. 13 24号墳棺墓実測図(1/20)	18
Fig. 14 24号墳棺墓実測図(1/8)	19
Fig. 15 28号墳棺墓実測図(1/20)	20
Fig. 16 28号墳(1/8)・28号墳棺墓出土遺物(1/2)実測図	21
Fig. 17 17号墳棺墓実測図(1/20)	22
Fig. 18 17号墳棺墓実測図(1/8)	23
Fig. 19 9号墳棺墓実測図(1/20)	24
Fig. 20 9号墳棺墓実測図(1/8)	25
Fig. 21 11・26号墳棺墓実測図(1/20)	26
Fig. 22 11号墳棺墓実測図(1/8)	27
Fig. 23 26号墳棺墓実測図(1/8)	28
Fig. 24 3号墳棺墓実測図(1/20)	29
Fig. 25 3号墳棺墓実測図(1/8)	30
Fig. 26 1・4号墳棺墓(1/20)・1・4号墳(1/8)実測図	31
Fig. 27 12・15・19・22・25号墳棺墓実測図(1/20)	32
Fig. 28 15・19・22・25号墳棺墓実測図(1/8)	33
Fig. 29 29号墳棺墓(1/20)・29号墳(1/8)実測図	34
Fig. 30 5・7・8・10号墳棺墓実測図(1/20)	35
Fig. 31 5・7・8・10号墳棺墓実測図(1/8)	36

Fig.32	7号斐棺出土鏡拓影(2/3)	37
Fig.33	13・27号斐棺墓(1/20)・13・27号斐棺(1/8)実測図	38
Fig.34	2・3・5・6号土壤実測図(1/30)	39
Fig.35	2号土壤出土遺物実測図(1/4・1/2)	40
Fig.36	3・6号土壤出土遺物実測図(1/4)	43
Fig.37	8・15～17号土壤実測図(1/60・1/40・1/30)	44
Fig.38	15・17・18号土壤出土遺物実測図(1/4・1/8)	45
Fig.39	18・19・22号土壤実測図(1/40・1/60・1/30)	46
Fig.40	19号土壤出土遺物実測図(1/4・1/2)	47
Fig.41	1・3号溝実測図(1/40)	48
Fig.42	2号溝実測図(1/40)	49
Fig.43	2号溝出土遺物実測図(1)(1/4・1/8)	50
Fig.44	2号溝出土遺物実測図(2)(1/4・1/2)	51
Fig.45	1・2号溝出土石器実測図(1/2)	52
Fig.46	5・6号溝実測図(1/80・1/60)	53
Fig.47	5号溝出土遺物実測図(1/4)	54
Fig.48	斐棺墓構内出土遺物実測図(1/4)	57
Fig.49	擾乱・遺構面出土遺物実測図(1/4・1/8)	58
Fig.50	Ⅲ区斐棺墓配置図(1/300)	60
Fig.51	AE群1・26号斐棺墓実測図(1/30)	62
Fig.52	1号斐棺実測図(1/8)	63
Fig.53	26号斐棺実測図(1/8)	64
Fig.54	43号斐棺実測図(1/8)	65
Fig.55	AW群2号斐棺墓(1/30)・2号斐棺(1/8)実測図	66
Fig.56	3～5号斐棺墓実測図(1/30)	67
Fig.57	3号斐棺実測図(1/8)	68
Fig.58	5号斐棺実測図(1/8)	69
Fig.59	6号斐棺墓(1/30)・6号斐棺(1/8)実測図	70
Fig.60	8号斐棺墓(1/30)・8号斐棺(1/8)実測図	71
Fig.61	10・11号斐棺墓実測図(1/30)	72
Fig.62	10号斐棺実測図(1/8)	73
Fig.63	11号斐棺実測図(1/8)	74
Fig.64	12・15号斐棺墓実測図(1/30)	75

Fig.65	12号斐棺实测图(1/8)	76
Fig.66	15号斐棺实测图(1/8)	77
Fig.67	23号斐棺墓实测图(1/30)	78
Fig.68	23号斐棺实测图(1/8)	79
Fig.69	7·9·14·13·17号斐棺墓实测图(1/30)	80
Fig.70	4·7·9·13·14·17号斐棺实测图(1/8)	81
Fig.71	32·34号斐棺墓实测图(1/30)	83
Fig.72	32号斐棺·32号斐棺墓出土遗物实测图(1/8·1/2)	84
Fig.73	34号斐棺实测图(1/8)	85
Fig.74	35·37号斐棺墓实测图(1/30)	86
Fig.75	35号斐棺实测图(1/8)	87
Fig.76	37号斐棺实测图(1/8)	88
Fig.77	61号斐棺墓(1/30)·61号斐棺(1/8)实测图	89
Fig.78	27·59号斐棺墓实测图(1/30)·27·59号斐棺实测图(1/8)	90
Fig.79	16·18号斐棺墓实测图(1/30)	91
Fig.80	16号斐棺实测图(1/8)	92
Fig.81	18号斐棺实测图(1/8)	93
Fig.82	22·28号斐棺墓实测图(1/30)	94
Fig.83	22号斐棺实测图(1/8)	95
Fig.84	28号斐棺实测图(1/8)	96
Fig.85	31·36号斐棺墓实测图(1/30)	97
Fig.86	31号斐棺实测图(1/8)	98
Fig.87	36号斐棺实测图(1/8)	99
Fig.88	33号斐棺墓(1/30)·33号斐棺(1/8)实测图	100
Fig.89	38·44号斐棺墓实测图(1/30)	101
Fig.90	38号斐棺实测图(1/8)	102
Fig.91	44号斐棺实测图(1/8)	103
Fig.92	46号斐棺墓(1/30)·46号斐棺(1/8)实测图	104
Fig.93	46号斐棺实测图(1/8)	105
Fig.94	47号斐棺墓(1/30)·47号斐棺(1/8)实测图	106
Fig.95	50号斐棺墓(1/30)·50号斐棺(1/8)实测图	107
Fig.96	19~21·24·25·29号斐棺墓实测图(1/30)	109
Fig.97	19~21号斐棺实测图(1/8)	110

Fig. 98	24·25·30号墓棺实物图(1/8)	111
Fig. 99	30·39·40号墓棺墓(1/30)·39·40号墓棺实物图(1/8)	113
Fig. 100	41·42号墓棺墓(1/30)·41·42号墓棺·50号墓棺墓出土遗物(1/8)实物图	114
Fig. 101	45·48·53·56·57·62号墓棺墓实物图(1/30)	115
Fig. 102	45·48·53·56号墓棺实物图(1/8)	117
Fig. 103	63~65号墓棺墓实物图(1/30)	118
Fig. 104	57·62~65号墓棺实物图(1/8)	119
Fig. 105	51·58号墓棺墓实物图(1/30)	121
Fig. 106	51·58号墓棺实物图(1/8)	122
Fig. 107	60号墓棺墓(1/30)·60号墓棺(1/8)实物图	123
Fig. 108	54·55号墓棺墓实物图(1/30)·54·55号墓棺(1/8)实物图	124
Fig. 109	49号墓棺墓实物图(1/30)·49号墓棺(1/8)实物图	125
Fig. 110	49号墓棺实物图(1/8)	126
Fig. 111	52号墓棺墓实物图(1/30)·52号墓棺(1/8)实物图	127
Fig. 112	1·2号上填墓实物图(1/30)	130
Fig. 113	3·4号土壤墓实物图(1/30)	131
Fig. 114	5·6号上填墓实物图(1/30)	132
Fig. 115	2号土壤实物图(1/30)	134
Fig. 116	2·3号上填出土遗物实物图(1/4)	135
Fig. 117	3·7号土壤实物图(1/30·1/60)·7号土壤出土出土遗物实物图(1/4)	136
Fig. 118	5号土壤实物图(1/30)	137
Fig. 119	5号土壤出土遗物实物图(1)(1/4)	138
Fig. 120	5号土壤出土遗物实物图(2)(1/4)	139
Fig. 121	5号土壤出土遗物实物图(3)(1/4·1/2)	141
Fig. 122	10号土壤实物图(1/60)	142
Fig. 123	18号上填实物图(1/30)	143
Fig. 124	18号土壤出土遗物实物图(1/4)	144
Fig. 125	8号土壤实物图(1/40)	145
Fig. 126	9号土壤实物图(1/30)	146
Fig. 127	8·9号土壤出土遗物实物图(1/4)	147
Fig. 128	12·13·16·25号土壤实物图(1/30)	148
Fig. 129	16·25号土壤出土遗物实物图(1/4)	149
Fig. 130	17号土壤(1/60)·17号土壤出土遗物(1/4)实物图	150

Fig.131	20~23号土壤実測図(1/30)	152
Fig.132	21~23号土壤出土遺物実測図(1/4)	153
Fig.133	甕棺墓内混入遺物実測図(1)(1/8・1/4)	154
Fig.134	甕棺墓内混入(2)・擾乱出土遺物実測図(1/8・1/4・1/2)	155
Fig.135	1号住居跡実測図(1/60)	157
Fig.136	1号住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)	158
Fig.137	2号住居跡実測図(1/60)	159
Fig.138	2号住居跡出土土器実測図(1/3)	160
Fig.139	3~5号住居跡(1/60)・4号住居跡出土土器実測図(1/3)	161
Fig.140	6号住居跡(1/60)・6号住居跡出土土器実測図(1/3)	162
Fig.141	7・11号住居跡実測図(1/60)	163
Fig.142	7・8・11号住居跡・7~9号溝実測図(1/80)	164
Fig.143	7号住居跡出土土器実測図(1)(1/3)	165
Fig.144	7号住居跡出土土器実測図(2)(1/3)	166
Fig.145	8号住居跡(1/60)・8号住居跡出土遺物実測図(1/3)	167
Fig.146	9号住居跡実測図(1/60)	168
Fig.147	9号住居跡出土遺物実測図(1/3)	169
Fig.148	10号住居跡実測図(1/60)	170
Fig.149	10・11号住居跡・9号溝出土遺物実測図(1/3)	171
Fig.150	12号住居跡実測図(1/60)	172
Fig.151	24号土壤実測図(1/30)	172
Fig.152	26・27号土壤実測図(1/30)	174
Fig.153	28号土壤実測図(1/40)	175
Fig.154	26~28号土壤出土遺物実測図(1/3・1/4)	176
Fig.155	28号土壤出土遺物実測図(1/4・1/2)	177
Fig.156	29号土壤実測図(1/30)	178
Fig.157	30・32号土壤実測図(1/30)	179
Fig.158	29・30・32・37号土壤出土土器実測図(1/3)	180
Fig.159	37号土壤実測図(1/30)	181
Fig.160	1~6号掘立柱建物実測図(1/100)	182
Fig.161	7~9・11~13号掘立柱建物実測図(1/100)	183
Fig.162	14~16号掘立柱建物・12・18・31号溝実測図(1/100)	184
Fig.163	掘立柱建物出土土器実測図(1/3)	185

Fig.164	17号掘立柱建物実測図(1/100)	186
Fig.165	'2・3号井戸実測図(1/30)	188
Fig.166	2・3号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)	189
Fig.167	13~15号溝実測図(1/120)	191
Fig.168	6・27・28号溝実測図(1/120)	192
Fig.169	6・11号溝出土遺物実測図(1/3)	193
Fig.170	13~15号溝出土遺物実測図(1/3・1/4)	194
Fig.171	18・23・27号溝出土土器実測図(1/3)	195
Fig.172	28・29・31号溝出土土器実測図(1/3)	196
Fig.173	S X-1出土遺物実測図(1/4)	196
Fig.174	ビット出土遺物実測図(1)(1/4)	197
Fig.175	ビット出土遺物実測図(2)(1/3)	198
Fig.176	ビット出土遺物実測図(3)(1/3・1/2)	199
Fig.177	打製石器実測図(1)(1/1)	200
Fig.178	打製石器実測図(2)(1/1)	201
Fig.179	糸島における甕棺の変遷	204・205

図 版 目 次

- P L. 1 III区全景
- P L. 2 (1) II区全景 (2) 28号甕棺
- P L. 3 (1) 7号甕棺 (2) 7号甕棺出土鏡
- P L. 4 (1) III区甕棺群 (2) 7号住居跡出土須恵器
- P L. 5 (1) II区調査区全景(東より) (2) II区調査区全景(北より)
- P L. 6 (1) II区調査区全景 (2) II区16号甕棺墓(南より)
- P L. 7 (1) II区18号甕棺墓(北より) (2) II区18号甕棺墓(南より)
- P L. 8 (1) II区20号甕棺墓(東より) (2) II区20号甕棺墓(南より)
- P L. 9 (1) II区 6号甕棺墓(東より) (2) II区21号甕棺墓(南より)
- P L. 10 (1) II区24号甕棺墓(西より) (2) II区28号甕棺墓
- P L. 11 (1) II区17号甕棺墓(西より) (2) II区25号甕棺墓(西より)
- P L. 12 (1) II区19号甕棺墓(西より) (2) II区26号甕棺墓(西より)
- P L. 13 (1) II区 3号甕棺墓(西より) (2) II区29号甕棺墓
- P L. 14 (1) II区 7号甕棺墓出土状況(南より) (2) II区 7号甕棺墓(北より)
- P L. 15 (1) II区 8号甕棺墓(東より) (2) II区10号甕棺墓(東より)
- P L. 16 (1) II区27号甕棺墓 (2) II区 2号土壙
- P L. 17 (1) II区15号土壙 (2) II区16号土壙
- P L. 18 (1) II区19号土壙(北より) (2) II区19号土壙鉄剣出状況
- P L. 19 (1) II区 2号溝(西より) (2) III区般氏遺跡群遠景(西より)
- P L. 20 (1) III区甕棺列全景(北より) (2) III区 1号甕棺墓(西より)
- P L. 21 (1) III区26号甕棺墓(西より) (2) III区 2号甕棺墓(東より)
- P L. 22 (1) III区 3号甕棺墓(北より) (2) III区 4・5号甕棺墓(東より)
- P L. 23 (1) III区 6・7・8号甕棺墓(東より) (2) III区11号甕棺墓(東より)
- P L. 24 (1) III区15号甕棺墓(西より) (2) III区23・24号甕棺墓(西より)
- P L. 25 (1) III区34号甕棺墓(西より) (2) III区37号甕棺墓(南より)
- P L. 26 (1) III区32号甕棺墓(西より) (2) III区35号甕棺墓(西より)
- P L. 27 (1) III区61号甕棺墓(西より) (2) III区16号甕棺墓(東より)
- P L. 28 (1) III区16・18号甕棺墓(北より) (2) III区18号甕棺墓(西より)
- P L. 29 (1) III区28号甕棺墓(東より) (2) III区31号甕棺墓(西より)
- P L. 30 (1) III区33号甕棺墓(東より) (2) III区36号甕棺墓(西より)
- P L. 31 (1) III区38号甕棺墓(西より) (2) III区44号甕棺墓(西より)

- P L.32 (1) III区46号甕棺墓(東より) (2) III区47号甕棺墓(西より)
- P L.33 (1) III区50号甕棺墓(東より) (2) III区19号甕棺墓(東より)
- P L.34 (1) III区20号甕棺墓(北より) (2) III区21号甕棺墓(南より)
- P L.35 (1) III区25号甕棺墓(東より) (2) III区30号甕棺墓(東より)
- P L.36 (1) III区39号甕棺墓(東より) (2) III区40号甕棺墓(東より)
- P L.37 (1) III区41・42号甕棺墓(東より) (2) III区45号甕棺墓(東より)
- P L.38 (1) III区48号甕棺墓(東より) (2) III区56号甕棺墓(南より)
- P L.39 (1) III区63号甕棺墓(東より) (2) III区64号甕棺墓
- P L.40 (1) III区65号甕棺墓(南より) (2) III区51号甕棺墓(西より)
- P L.41 (1) III区58号甕棺墓(西より) (2) III区60号甕棺墓
- P L.42 (1) III区49号甕棺墓(西より) (2) III区1号土壙墓
- P L.43 (1) III区2号土壙墓 (2) III区3号土壙墓(西より)
- P L.44 (1) III区4号土壙墓 (2) III区祭祀遺構列(北より)
- P L.45 (1) III区1・2号土壙(西より) (2) III区7号土壙
- P L.46 (1) III区18号土壙(北より) (2) III区17号土壙(南より)
- P L.47 (1) III区1号住居跡(西より) (2) III区2~6号住居跡
- P L.48 (1) III区3号住居跡(西より) (2) III区4・5号住居跡(西より)
- P L.49 (1) III区7号住居跡(西より) (2) III区7号住居跡出土状況
- P L.50 (1) III区9号住居跡(西より) (2) III区10号住居跡(西より)
- P L.51 (1) III区27号土壙(東より) (2) III区30号土壙(東より)
- P L.52 (1) III区4号掘立柱建物(北より) (2) III区5号掘立柱建物
- P L.53 (1) III区11号掘立柱建物(西より) (2) III区14号掘立柱建物
- P L.54 (1) III区15号掘立柱建物 (2) III区15号掘立柱建物ピット出土遺物
- P L.55 (1) III区2号井戸(北より) (2) III区3号井戸(北より)
- P L.56 (1) III区8・9号溝(北より) (2) III区7・8号住居跡, 6~9号溝, 11号掘立柱建物
- P L.57 (1) III区9・10号住居跡, 28号土壙, 12号溝 (2) III区14・15号溝(東より)
- P L.58 II区(1) 20号甕棺下甕 (2) 16号甕棺 (3) 28号甕棺上甕 (4) 28号甕棺下甕
- P L.59 II区(1) 11号甕棺下甕 (2) 26号甕棺上甕 (3) 9号甕棺下甕 (4) 26号甕棺下甕
- P L.60 II区(1) 3号甕棺上甕 (2) 7号甕棺下甕 (3) 3号甕棺 (4) 27号甕棺下甕
- P L.61 III区(1) 2号甕棺 (2) 8号甕棺 (3) 38号甕棺上甕 (4) 38号甕棺下甕
- P L.62 III区(1) 5号甕棺上甕 (2) 5号甕棺下甕 (3) 64号甕棺上甕 (4) 64号甕棺下甕
- P L.63 III区(1) 24号甕棺上甕 (2) 24号甕棺下甕 (3) 57号甕棺 (4) 54号甕棺上甕
 (5) 54号甕棺下甕

P L.64 III区1・2・6・7号住居跡出土遺物

P L.65 III区7号住居跡出土遺物

P L.66 III区7・10号住居跡・27・28・30・37号土塙・15号掘立柱建物出土遺物

P L.67 III区11・18・29号溝・SX-1・ピット出土遺物

P L.68 III区石器

P L.69 (1) 5次調査区全景(東より) (2) 5次調査区全景(西より)

P L.70 (1) 1号甕棺墓(東より) (2) 2号甕棺墓(北より)

P L.71 (1) 3号甕棺墓(北より) (2) 5号甕棺墓(東より)

P L.72 (1) 6号甕棺墓(東より) (2) 5・6号甕棺墓出土石剣切先(縮尺1/2)

(3) 5号甕棺墓石剣切先出土状況(北より)

P L.73 (1) 7号甕棺墓(北より) (2) 4号甕棺墓(北より) (3) 8号甕棺墓(北より)

P L.74 (1) 9号甕棺墓(北より) (2) 10号甕棺墓(北より)

P L.75 (1) 11号甕棺墓(北より) (2) 12号甕棺墓(北より)

P L.76 (1) 1号甕棺下甕 (2) 3号甕棺上甕 (3) 5号甕棺上甕 (4) 5号甕棺下甕

P L.77 (1) 7号甕棺上甕 (2) 7号甕棺下甕 (3) 9号甕棺上甕 (4) 9号甕棺下甕

P L.78 (1) 10号甕棺上甕 (2) 10号甕棺下甕 (3) 12号甕棺下甕

I. はじめに

1. 調査に至る経過

一般国道202号線今宿バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は從来、建設省九州地方建設局の委託を受けた福岡県教育委員会によって昭和43年から昭和57年まで福岡市西区拾六町から同西区飯氏間の分布調査、予備調査及び一部の本調査が断続的に実施され、各々報告書が刊行されている。その後、福岡県教育委員会文化課から福岡市域内の文化財については福岡市で対応して欲しいとの要請があり、協議の結果当該地域については福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課がこれを担当することになり昭和61年9月から大塚遺跡の発掘調査に着手し、徳永遺跡群、蓮町遺跡群、飯氏遺跡群、周船寺遺跡群等の調査を実施し、平成3年度にそれまで未買収の飯氏遺跡群I区C調査区の調査をもって今宿バイパス関係の発掘調査を終了した。

今回報告する地区は福岡市文化財分布地図西部IIに記載された飯氏遺跡群の東端にあたる。周知の遺跡であったが遺跡群全体では福岡県文化課が調査を行った飯氏馬場、飯氏鏡原遺跡を含み、さらには丘陵部や谷部、低湿地及び周船寺、谷脇川等の小河川による氾濫源を含み、東西0.7km、南北1kmの広大な面積であり遺跡の存在しない地区も含まれていたので、調査の範囲確定のため蓮町遺跡群の発掘調査時に試掘調査を実施した。その結果飯氏馬場(II)飯氏鏡原(III)の丘陵部及びその裾部のみに遺跡が限定されたので、その箇所を調査対象とした。遺跡の名称は原則的に文化財分布地図に記載されたものをそのまま使用することになっており飯氏馬場遺跡はII区、飯氏鏡原遺跡をIII区として調査を実施した。なお調査期間はII区(A、B調査区)は平成2年1月8日から着手し路線内の家屋撤去遅延のため途中中断し8月15日で終わる。III区は平成元年8月15日～平成2年3月31日、調査面積は9200m²である。

福岡市域内でこれまで調査された今宿バイパス関係の埋蔵文化財報告書は以下のとおりである。

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集	福岡県教育委員会	1970
－福岡市大字拾六町所在の遺跡群－湯納遺跡 宮の前遺跡E地点 高崎古墳群 大又遺跡		
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集	福岡県教育委員会	1971
－福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡－若八幡宮古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡		
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集	福岡県教育委員会	1973
－福岡市大字拾六町所在の遺跡－高崎古墳群 大又遺跡		
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集	福岡県教育委員会	1976
－福岡市大字拾六町所在湯納遺跡の調査－		
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集	福岡県教育委員会	1977
－福岡市西区・糸島郡前原町所在遺跡の調査－湯納遺跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡		
今宿小塚遺跡		

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集	福岡県教育委員会	1984
—今宿高田遺跡—		
大眾遺跡・女原遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集 福岡市教育委員会		1990
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅰ		
徳永遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第242集 福岡市教育委員会		1991
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅱ		
徳永遺跡II 福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集 福岡市教育委員会		1992
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅲ		

2. 調査の組織

平成2年度から同5年度の調査関係者は以下のとおりである。

調査委託	建設省九州地方建設局 福岡国道工事事務所
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 尾花 隆
調査総括	文化財部長 後藤 直 埋蔵文化財課長 折尾 学 柳田純孝(前任) 埋蔵文化財課第一係長 飛高憲雄(前)横山邦繼(現)
調査庶務	埋蔵文化財課第一係 中山昭則 入江幸男
調査担当	埋蔵文化財課第一係 松村道博 宮井普朗 長家伸
試掘調査	埋蔵文化財課第一係 小畑弘巳
調査・整理補助	池田光男 渡石正子 入江のり子 挿斐久美子 山下智美 熊埜御堂和香 子 是田敦
調査作業	太田孝房 鬼丸邦宏 平田信吉 三苦宗登 山崎吉松 朱雀義造 吉岡清己 有吉貞江 池 弘子 上原チヨ子 柴田シズノ 清水文代 末松信子 末松克子 杉村文子 津田和子 中牟田サカエ 中村千里 西島タミエ 西島初子 西納テル子 西納トシエ 能美ヤエ子 野坂康子 古井モモエ 松本愛子 三 苦ヨシ子 森友ナカ 吉岡貝代 吉岡竹子 吉岡蓮枝 吉積ミエ子 那賀久子 那賀ミツ子 箱田邦子 徳重コマキ 徳重忠子 間せつ子 柴田麗子 中村初子 西田マキエ 高木正代 後藤ミサヲ 板田セイコ 小林フミ子 坂本キミ子 大神マツノ 吉岡アヤ子 藤野フジ子 柴田タエ子 小金丸ミネ子 井上 靖崇
整理作業	板田千恵子 太田頼子 西原山紀子 太田次子 太田順子 濱野年代 午田恵子 林由紀子 大石加代子 堂園晴美 上妻崎つや子 小森佐和子 山田順子 富永優子 山下恵美子 長谷川君子 焼 早苗

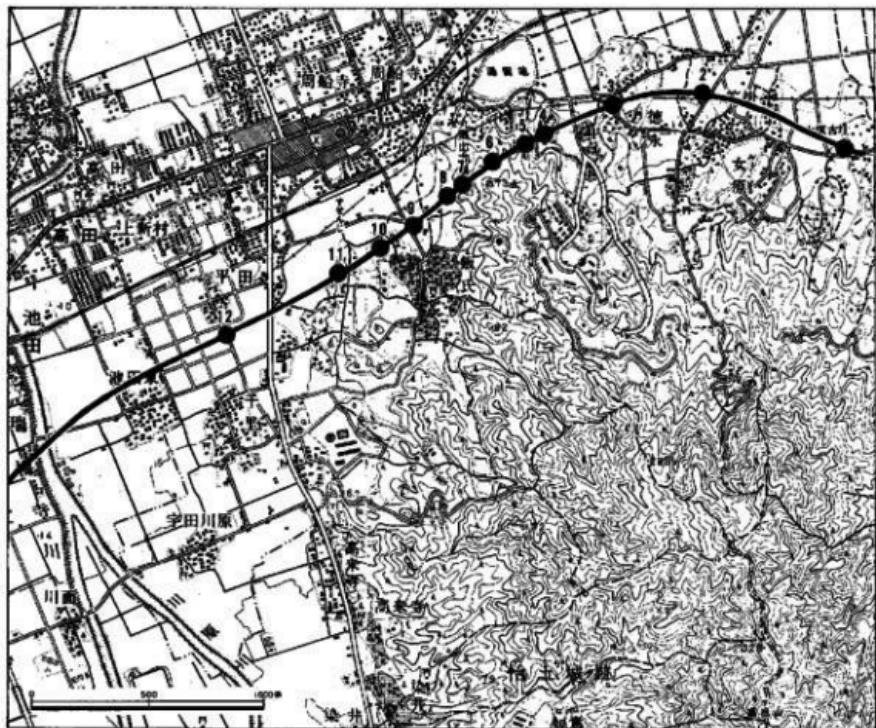


Fig. 1 國道202号線今宿バイパス路線内遺跡位置図(1/25,000)

地点	遺跡名・大字	地区 番号	遺跡 番号	調査 年次	調査地所在地	調査面積 m ²	調査期間	調査担当者	性 質
1 大塚遺跡 5次	OTS	8540		西区今宿字大塚	1,200	880904～881229	二宮忠司、吉武史		中世集落
2 女原遺跡 3次	MBR	8669 8720		西区女原字中牟田, 池	7,500	881110～890301 870701～871021	二宮、松村道博、 吉武		古墳時代集落、城
3 鶴永遺跡群 I 区	TKU	8836		西区鶴永	1,200	880410～880610	松村、宮井晋嗣		中・近世集落
4 鶴永遺跡群 II 区	TKU	*		*	1,110	880901～881006	松村、宮井		古代包含層
5 鶴永遺跡群 III 区	TKU	8846		*	1,750	880117～880331	松村、宮井		古墳時代集落
6 鶴永遺跡群 IV 区	TKU	*	*	*	1,310	880301～880331	松村、宮井		古墳時代包含層
7 鹤町遺跡群 I 区	HMC	8820		西区鶴氏字鶴町	1,000	880420～880720	松村、宮井		弥生時代終末～中世集落
8 鹤町遺跡群 II 区	HMC	*	*	*	1,210	*	松村、宮井		古墳時代・中世集落
9 鶴氏遺跡群 I 区 3次	I.I.J	8921		西区鶴氏字井尻他 (750)	6,800 930415～930723	880515～880110 930415～930723	松村、宮井、長瀬 洋		弥生時代後期基層、古墳時代集落
10 鶴氏遺跡群 II 区	I.I.J	*		西区鶴氏字ムクサガ	650	930108～930815	松村、宮井、長瀬		弥生時代後期基層、古墳時代集落
11 鶴氏遺跡群 III 区	I.I.J	*		西区鶴氏字鶴原	8,200	880815～880331	松村、宮井、長瀬		弥生時代後期基層、古墳時代集落
12 潟船寺遺跡群6次	S.S.J	9021		西区大字千葉郡御崎 町	7,500	930401～930314	松村、宮井		弥生時代集落、縄文時代含層

Tab. 1 國道202号線今宿バイパス路線内遺跡調査一覧表



1. 志登支石墓群 2. 了拾塚古墳 3. 備氏1号墳 4. 丸隈山古墳 5. 山の鼻2号墳 6. 山の鼻1号墳
 7. 下谷古墳 8. 若八幡宮古墳 9. 小松原1号墳 10. 今宿大塚古墳 11. 谷上古墳 12. 本村5号墳
 13. 平原遺跡 14. 先山古墳 15. ワレ塚古墳 16. 鉄龜塚古墳 17. 高上大塚古墳 18. 黒敷1号墳
 19. 三雲南小路遺跡 20. 端山古墳 21. 茶臼塚古墳 22. 桑山古墳 23. 井原2号墳 24. 井原1号墳
 25. 高祖古墳 A. 備氏遺跡群 B. 二云・井原遺跡群

Fig. 2 周辺遺跡分布図(1/16,000)

II. 遺跡の位置と環境

飯氏遺跡群は糸島平野の東縁にあたり福岡市西区飯氏に所在する遺跡群である。糸島平野の南には背振山稜から派生する浮嶽、獅子舞嶽、井原山等の標高800~900mを測る山塊が聳え、さらにその北には飯場山、土丸山、高祖山等標高400~700mの中起伏の山地を形成し背振主稜とは独立した地層群となり、階段状に低くなり洪積台地、沖積平野となる。これらの山塊に源をもつ長野川、畠山川、瑞梅寺川の沖積作用により低地を形成し、海岸線に砂丘が発達するためその背後は排水不良となり過湿地を生み出している。糸島半島の中部以南から背振山塊の軸部にわたって糸島花崗閃緑岩が広く分布している。さらに飯場付近は変成岩類があり泥、砂質岩、チャート、緑色岩を伴い、その北方には塩基性岩類も認められる。²¹⁾

糸島平野と今宿平野とを界する高祖山からは多くの低丘陵及び台地、沖積高地を生み出しているが、今回調査した飯氏遺跡群Ⅰ区はその東側にあたる。西側を瑞梅寺川の支流の一つである周船寺川から枝別れた谷脛川により限られ、東は高祖山(416m)から北へ延びる低山地の麓までの沖積微高地の先端部に位置する。山麓から北へ展開する狭い微高地でその規模は東西150m、南北200m、標高14m前後を測り、南から北へ緩やかに傾斜する。

糸島平野の中心部に位置する前原市は律令時代には怡土郡にあたり古くは『魏志倭人伝』にいうところの伊都国にあたり平原遺跡を初めとして縄文時代から各時代にわたる多くの遺跡がある。以下糸島平野東部から福岡市域にかけての主要な遺跡を概観する。

縄文時代前期の遺構、遺物は少なく飯氏鏡原遺跡、若八幡宮前遺跡等の調査時に付随して遺構外から押型文土器が採集されている。後、晩期になると著しく遺跡数が増加し沖積微高地への進出が窺われる。三雲遺跡群の石橋・サキゾノ地区の調査では住居跡や埋甕、千里シビナ遺跡²²⁾(周船寺遺跡群第3次調査)でも埋甕が検出されている。弥生時代~古墳時代の遺跡では近年、井原、三雲遺跡群²³⁾が調査され住居跡や墳墓が数多く検出されているが、古くは江戸時代の国学者青柳種信は『柳園古器略考』を著し三雲南小路、井原縄溝の甕棺から発見された多数の古鏡や青銅器、玉類をまとめている。末瀬國から奴國に至る中繼地点にあたり、一大卒を置く伊都國の繁榮を垣間みることが出来る。弥生時代全般にわたりこれまで多くの遺構が調査されているが甕棺を除き特筆すべきものは少ない。後期から終末期の今宿五郎江、浦志遺跡から小銅鐸が各々1点出土しており注目される。古墳時代になるとこの地域には首長基である前方後円墳が増加する。調査地点の北北東350mには丸隈山古墳があり、今宿平野の丘陵先端、あるいは独立丘上に若八幡宮古墳や山の鼻古墳、鎌崎古墳、今宿大塚、飯氏二塚等の今宿古墳群を形成している。若八幡宮古墳の主体部は木棺直葬で4世紀中ごろ、丸隈山古墳は内部主体が竪穴系横口式石室で5世紀初頭、今宿大塚古墳は二重環濠をもつ6世紀前半代といわれている。一方瑞梅寺川流域には端山、築山古墳がある。このなかで最も古いものは端山古墳であろう。内部主

体は明らかではないが墳丘確認調査の出土遺物から4世紀中ごろであろう。同様に築山古墳も内部主体等は不明であるが墳丘確認調査の出土遺物から4世紀末頃と考えられる。又雷山川流域の曾根丘陵には先山、ワレ塚、錢瓶塚、高上大塚古墳は5世紀前半から以降の構築であり盟主層の変化を窺わせる。高祖山から派生する丘陵部には300をこえる群集墳が築かれている。集落址は先に述べた三雲、井原遺跡群の調査で弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡を多く調査し多くの成果が得られている。調査地点の南約2kmの位置に朝鮮式山城怡土城がある。「統日本紀」によれば吉備真備等により天平勝宝8年に築城が始まり神護景雲2年に完成されたとされる。高祖山の西斜面を利用して構築された山麓に土壘、水門、城門が設けられている。

- 註1 福岡市 「福岡市土地分類細部調査報告書」 1990
- 2 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集—福岡市大字徳永、飯氏所在の遺跡」 1971
- 3 福岡県教育委員会 「三雲遺跡 III」福岡県文化財調査報告第63集 1982
- 4 福岡市教育委員会 「千里シビナ遺跡」福岡市文化財調査報告第88集 1982
- 5 福岡県教育委員会 「三雲遺跡 I ~ IV」福岡県文化財調査報告 1980~1983
前原町教育委員会 「井原遺跡群」前原町文化財調査報告第25集 1987
前原町教育委員会 「井原遺跡群Ⅳ」前原町文化財調査報告第32集 1990
前原町教育委員会 「井原遺跡群」前原町文化財調査報告第35集 1991
- 6 福岡市教育委員会 「山の鼻一号墳」福岡市文化財調査報告第309集 1992
- 7 福岡市教育委員会 「九隈山古墳」福岡市文化財調査報告第146集 1986
- 8 福岡市教育委員会 「鷲崎古墳」福岡市文化財調査報告第112集 1984

III. 調査の記録

1. 飯氏遺跡群II区の調査

(1) 調査の概要

II区は、バイラン土からなる台地部が沖積微高地下に沈んでいく境界線付近に立地する。かつて飯氏馬場遺跡として甕棺墓、土塙墓、石棺墓などが調査され、今回も同様な遺構の存在が予測された。調査の結果甕棺墓29基をはじめ、甕棺墓に関連すると思われる土塙などが検出された。

(2) 甕棺墓

飯氏遺跡II区では、弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓23基及び弥生時代後期の甕棺墓6基、総計29基の甕棺墓が検出された。調査時には検出順に1号から遺構番号を振ったが、報告時には、まず前期末～中期と後期に分け、さらに出土数の多い前者については形態分類を行って、所謂金海式甕棺の時期的な形態変化に留意しながら記述していこうと思う。

1) 前期～中期初頭の甕棺墓

a. 甕棺の分類

形態分類に当たっては、前期的な「壺型」系統の甕棺から中期的な「甕型」系統の甕棺への変化に留意して、プロボーション、口縁部形態、文様や突帯の有無などを基準とした。変化の流れとしては、すばまる頬部を持つものから持たないものへ、如意状口縁部端に粘土帯を貼付して肥厚させたものから平坦口縁へ、文様の喪失、突帯の出現などが想定される。

1類 まだ壺の形態に近く、最大径が胴部のかなり下位にあり、底から直線的に口縁部へ向かって若干すばまりつつ伸びる。口縁部は大きく緩く外反する。口縁部の粘土帯貼付は厚く幅狭で、断面コ字状を呈する。沈線は口縁のやや下と、肩部と胴部の境に2～3条巡らせる。

2類 所謂典型的な金海式甕棺である。最大径が胴部中位に近くなり、口縁部に向かって緩くすばまる。口縁部は大きく緩やかに外反し、端部上面に広く厚い粘土帯を貼付する。接合面は強いヨコナデにより凹面を呈する。端部上下両端にヘラ、板小口等で刻目を施す。口縁下の沈線は1類に比べて口縁近くに上がって来る。底部は厚い平底である。

3類 壺の肩部の名残を持つすばまりはほとんど見られず、口縁部直下で強く外反する。口縁部は2類に比べて内部への張出しが大きくなる。口縁肥厚部の接合面の凹面はほとんどなくなり坦面をなすようになる。端部の刻みを持たないものや、底部は厚い平底、もしくは上げ底気味になる。

4類 器形は完全に中期的な甕の形態を呈する。口縁部は鋤先状を呈する。胴部突帯を持つものが現れる。

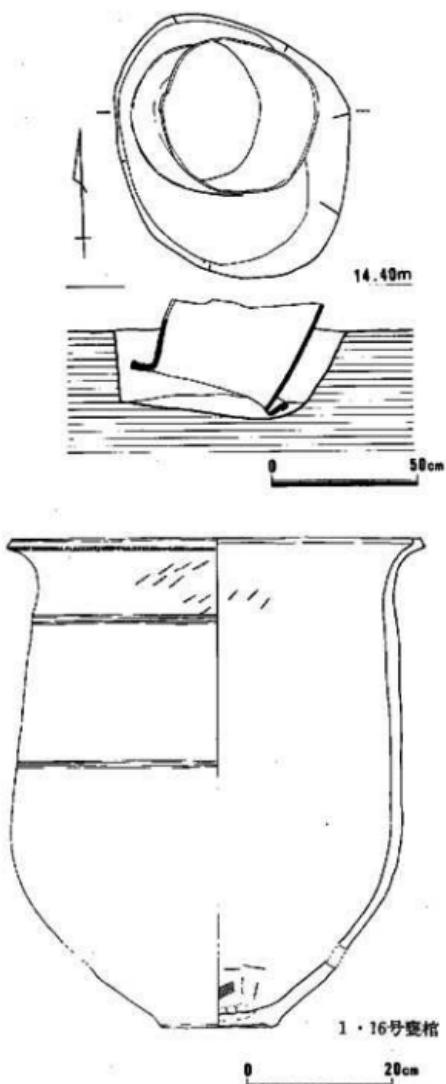


Fig. 3 16号斎棺基(1/20)・16号斎棺(1/8)実測図

b. 調査の記録

16号斎棺基 (Fig. 3, PL. 6, 58)

C 4 区で検出した。蓋を逆さに伏せた倒置式の斎棺基である。現状ではやや斜めになっている。東側の掘方壁の方が傾斜が緩く、こちら側から倒位のまま甕を滑らせて安置したものであろう。掘方はほぼ円形で径0.75mを測る。主軸をN-86°-Wに取る。

斎棺 口縁端の上部に断面コ字形の幅狭の粘土帯を貼付した1類である。刻みは下端のみに施す。底部はわずかに高台状を呈する平底である。胸部最大径は底部から約1/3にある。口縁下の沈線は2、3類に比べてかなり低い位置にある。内外面ともナデ調整で、板小口状の工具痕が見られる。口径55cm、底径15.8cm、器高約68cmを測る。

2号斎棺基 (Fig. 4)

C 5 区で検出した。上蓋を削平された合わせ棺である。主軸はN-143°-Eを向く。埋置角は67°である。堀方は平面梢円形である。二段掘りにして、下甕の胸部最大径以下を据えて安定を割っている。掘方の長0.95m、幅0.85mを測る。

上甕 底部を欠く。口縁部の屈曲は弱いが、口縁端部の肥厚は広く、上下両端に刻目を持つことから、2類と考えておきたい。胸部内面上半部にハケメが見られる。口径42cm。

下甕 口縁部を欠くが、器形から1類と考えられる。口縁下に1条、肩部と

胴部との境に2条の沈線を巡らす。底部は厚い平底である。胴部下半部に焼成後外からの穿孔を施す。底径11.8cm、現器高50cmを測る。

18号甕棺墓 (Fig. 5, PL. 7)

C4区で検出した。上甕を削平されるが、下甕の口縁部を打ち欠き、肩部付近まで上甕をかぶせている。主軸はN-76°Wを向く。埋置角は60°である。掘方は二段掘りで、1段目の床面から下甕の形態に合わせた土壙を掘り込んでいる。掘方はほぼ円形で径約1.1mを測る。

上甕 口縁部の屈曲は弱いが、貼付した粘土帯は広く、1類もしくは2類であろう。口縁端部は下端のみに刻目を施す。内面はミガキを施す。口径58.2cmを測る。

下甕 口縁部を欠くが器形から1類であろう。肩部と胴部の境に2条の沈線を巡らす。外面はミガキ、肩部内面にハケメが見られる。内底部に雑な工具痕が見られる。底径15.2cm、現器高約60cmを測る。

20号甕棺墓 (Fig. 6, PL. 8, 58)

C4区で検出した。上甕を削平されるが、下甕の中に差し込んだものと思われる。主軸はN-65°Wを向く。埋置角は52°である。掘方は現状では梢円形で、長0.9m、幅0.8mを測る。下甕の底部付近より磨製石鎌1点、また覆土中からも磨製石鎌が1点出土している。

上甕 口縁の屈曲は弱い。1類もしくは2類であろう。刻みは口縁下端のみに施す。沈線は見られない。口縁内面にハケメが見られる。また下甕の中から底部

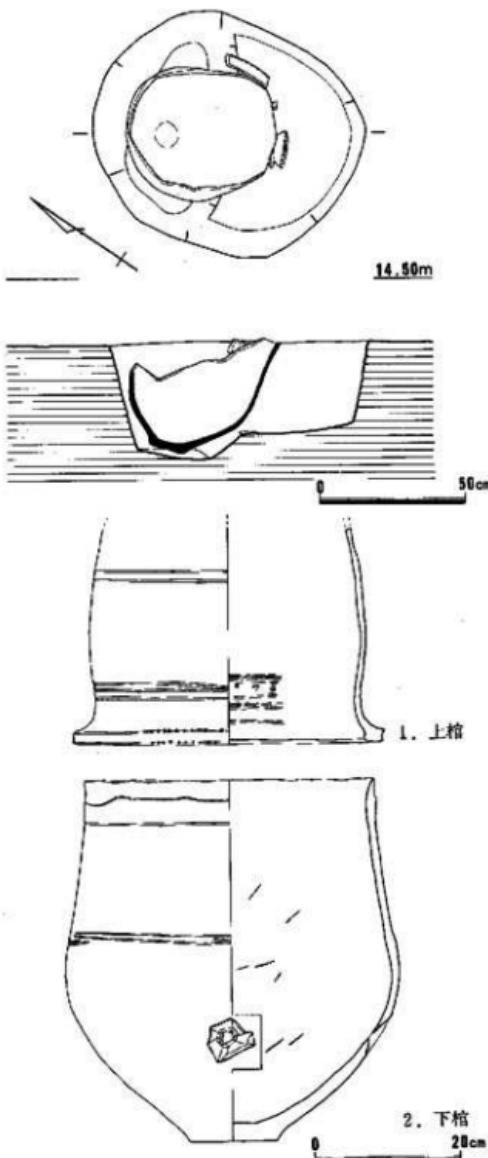


Fig. 4 2号甕棺墓(1/20)・2号甕棺(1/8)実測図

50cm

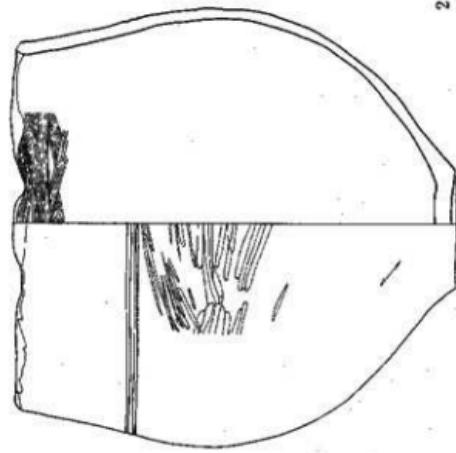
14.50m



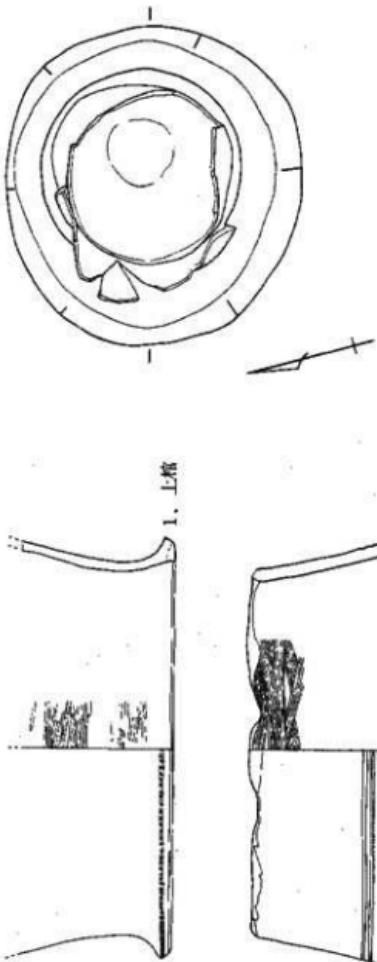
Fig. 5 18号變壓器(1/20)・18号變壓器(1/8)実測図

2. 下部

20cm



1. 上部



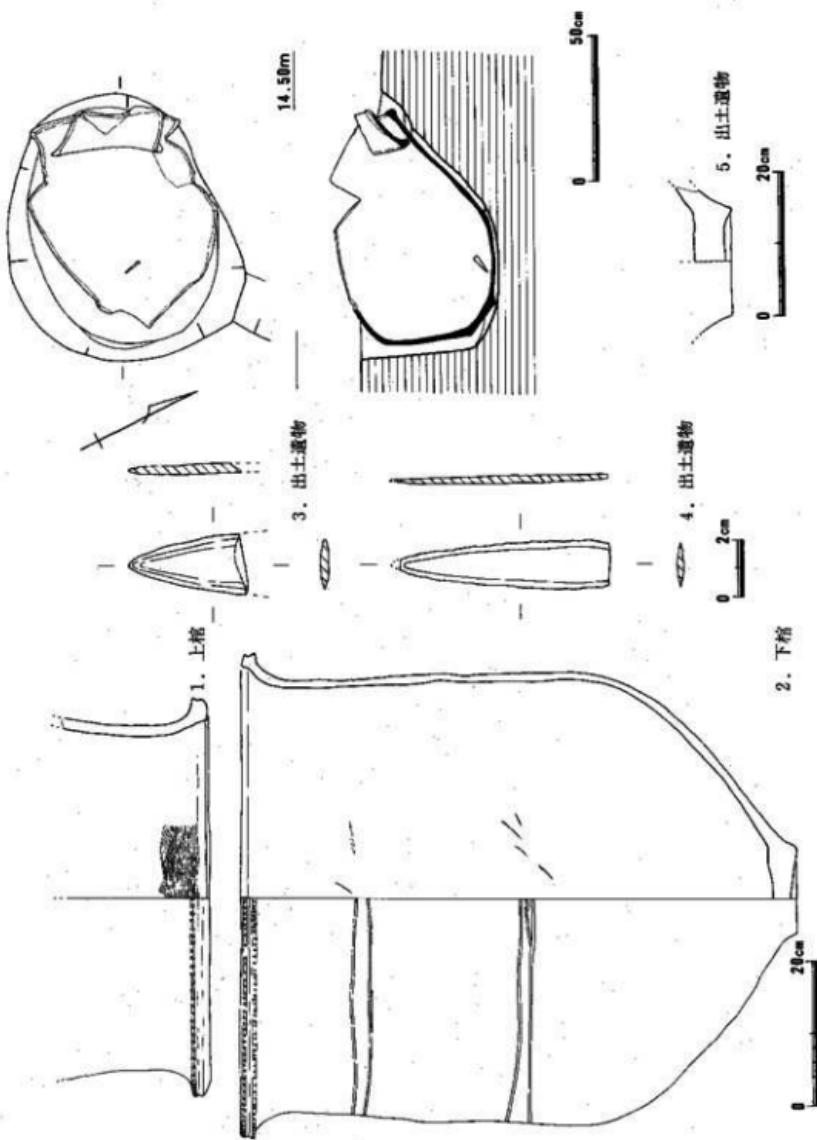
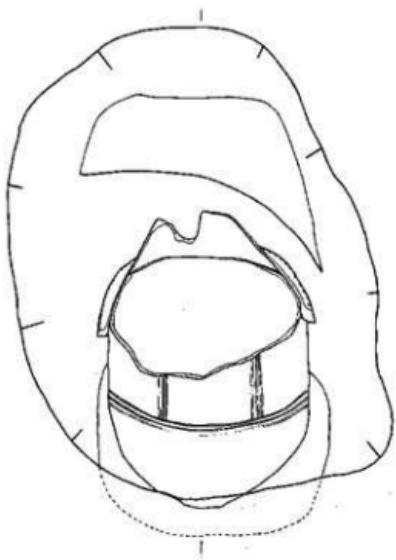
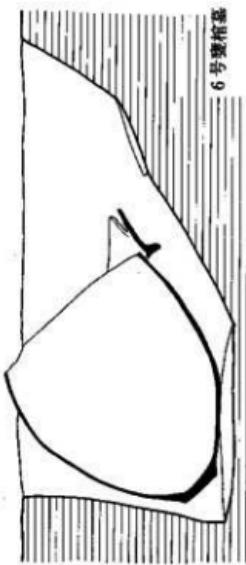


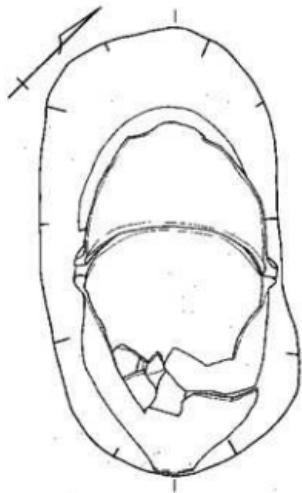
Fig. 6 20号墓葬(1/20)·20号墓室(1/8)·20号墓室出土遗物(1/2)实测图



14号



6号

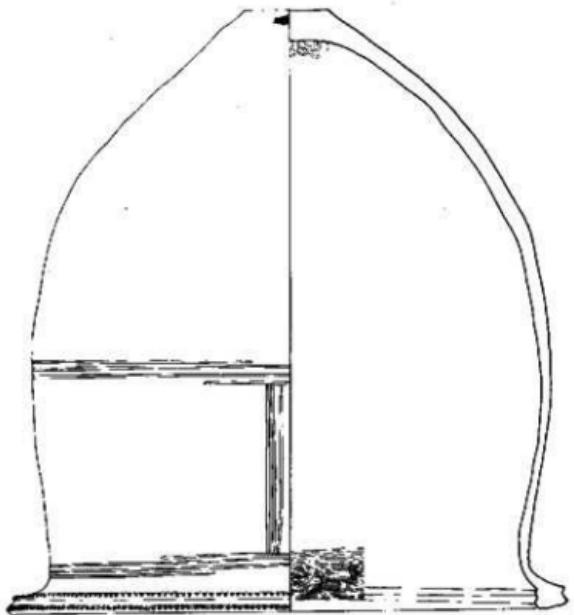


14号

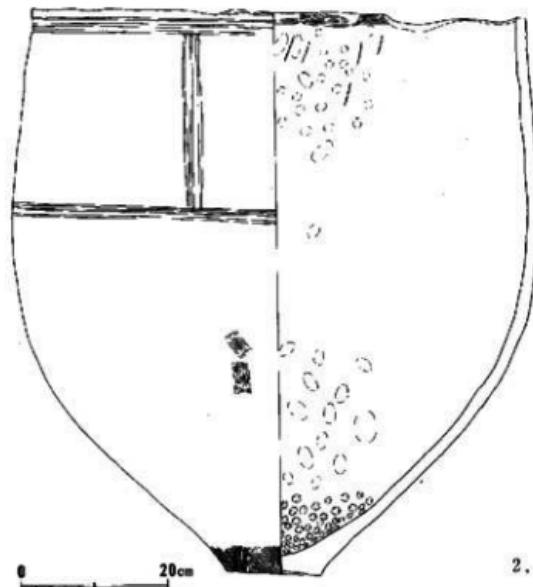


14号
50cm

Fig. 7 6·14号楚格勒奥图(1/20)



1. 上棺



2. 下棺

Fig. 8 6号墓棺実測図(1/8)

片が出土しているが、上蓋のものと考えられるが現状では接合しない。わずかに高台状を呈する厚い底部である。口径55cmを測る。

下蓋 1類であるが、肩部のすばまりはかなり弱くなっている。断面コ字の幅狭の粘土帯を口縁端に貼付する。口縁下と胴部中位に2条の沈線を巡らす。底部厚く、やや上底状をなす。口径65cm、底径11.4cm、器高80cmを測る。

6号墓棺墓 (Fig. 7, 8, PL. 9)

C4区で検出した。下蓋はほとんど遺存していたが、上蓋はほとんど破壊されていた。口縁部を打ち欠いた下蓋に上蓋をかぶせている。主軸はN-16°-Eを向く。埋置角は42°である。上蓋と掘方床面との間に掘削した地山土を再び埋め込み、上蓋の安定を図っている。掘方は長1.65m、幅1.25mを測る。

上蓋 2類。底部は厚い平底で、ほぼ中位にある最大径から口縁部にかけて緩くすばまり、口縁部直下で強く外反する。最大径のわずかに上位と口縁部直下に横位の沈線を施す。端部の処理から見て一筆

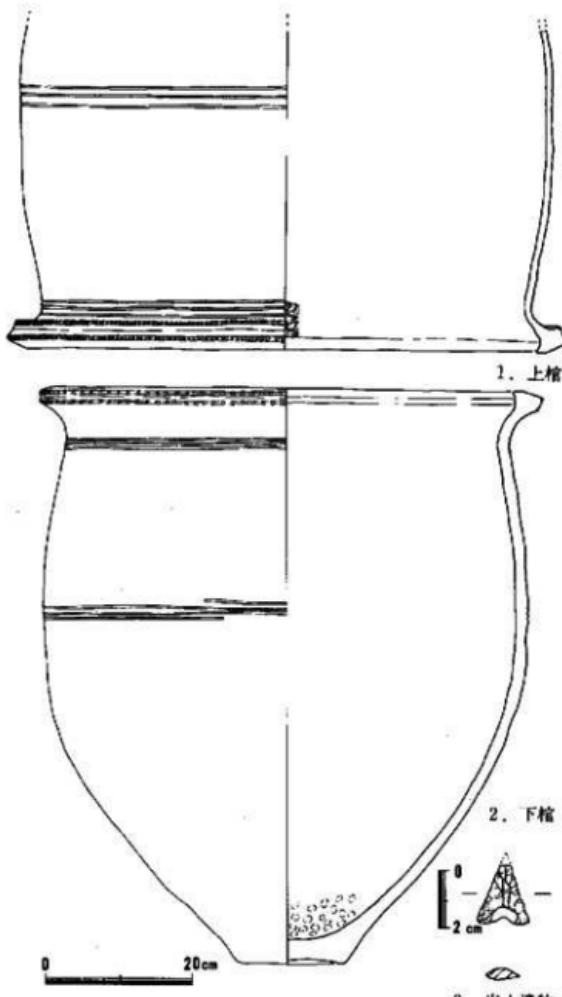


Fig. 9 14号櫛棺(1/8)・14号變棺墓出土遺物(1/2)実測図

上櫛 2類。口縁部の屈曲は強いが、やや短い。最大径付近と口縁部直下に沈線を施す。横位のものが認められるが、全周の1/3の遺存のため、縦位の存否は不明である。口縁部内面にハケメが認められる。残存部から推定した口径は77cmほどであるが、合口であることから見て、下櫛とそう大きな口径差は考えにくい。若干の歪があると思われる。

書きの回転施文の可能性がある。両沈線の間を縦位の沈線でつなぐ。沈線はそれぞれ3条1単位である。口縁部両端に刻目を持つ。刻目は貝殻施文である。外面はヘラ状工具による丁寧なナデ、内面は口縁部にハケメ、底部に指頭痕が見られる。口径75.1cm、底径11.8cm、器高84cmを測る。

下櫛 口縁部を打ち欠くが、2類である。上櫛とはほぼ同形同大であるが、底部はやや薄い。上櫛と同様口縁部内面に横向方向のハケメ、底部内面に指頭痕が見られる。底部外面にもハケメが見られる。現器高約70cm、底径11.8cmを測る。

14号變棺墓 (Fig. 7, 9)
C3区で検出した。下櫛の一部と上櫛の大部分が削平される。上櫛と下櫛の口縁部同士を合わせた變棺墓である。主軸はN-45°Wを向く。埋置角は38°である。掘方は長橢円形で長1.5m、幅0.85mを測る。

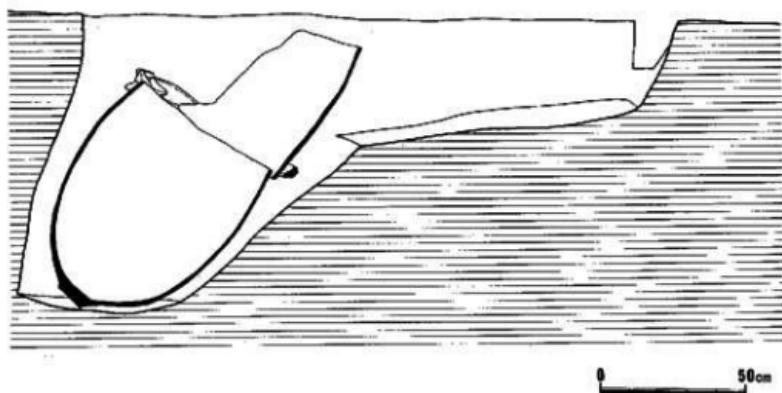
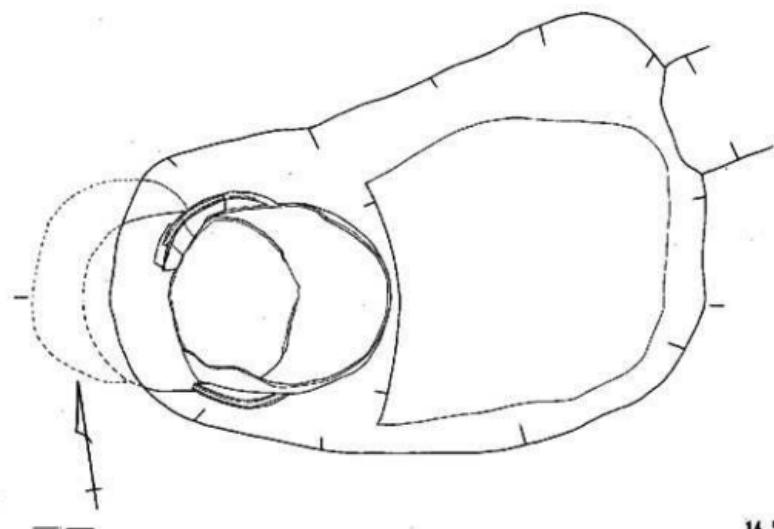


Fig.10 21号廻棺基実測図(1/20)

下甕 器形的には2類に属するが、口縁部端面の凹面がかなり浅くなっている。上半部の遺存は約1/2なので、縦位の沈線はなかった可能性が高い。底部内面に指頭痕が見られる。復原口径67.6cm、器高80cm、底径13.8cmを測る。

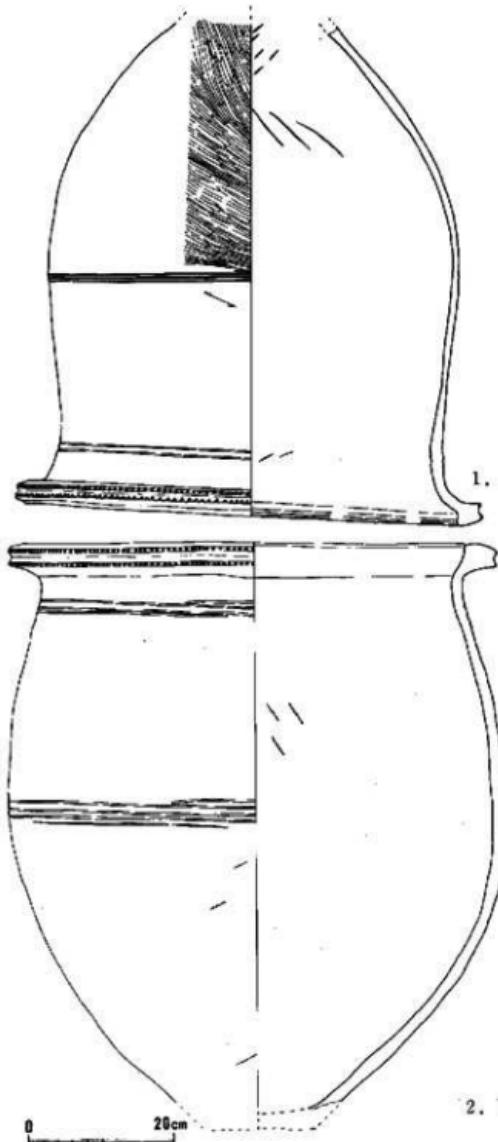


Fig.11 21号玉棺実測図(1/8)

21号玉棺 (Fig.10,11,
PL.9)

C3区で検出した。上蓋の大部分を削平される。下蓋の口縁部を打ち欠き、上蓋をかぶせたものとも見られるが、復原した下蓋には口縁部が遺存しているので、崩落したのかもしれない。主軸はN-99°-Eを向く。埋置角は53°である。下蓋はややオーバーハングした掘方内に納められ、前面には広い段状部を持つ。掘方は長2.05m、幅1.2~1.4mを測る。

上蓋 2瓶。底部を欠く。口縁部下に2条、最大径のやや上に3条の沈線を施す。縦位の沈線は施さない。外面の胴部下半にミガキを施す。内面はヘラ状工具によるナデで下半部に工具痕が見られる。口径63.6cm、現器高68cmを測る。

下蓋 2類である。底部は焼成が悪く粘土に還元しており、取上げができなかつた。口縁部下に3条、最大径付近に3条の沈線を巡らす。沈線は一筆書きと思われる。縦位の沈線は施さない。内外面工具によるナデ

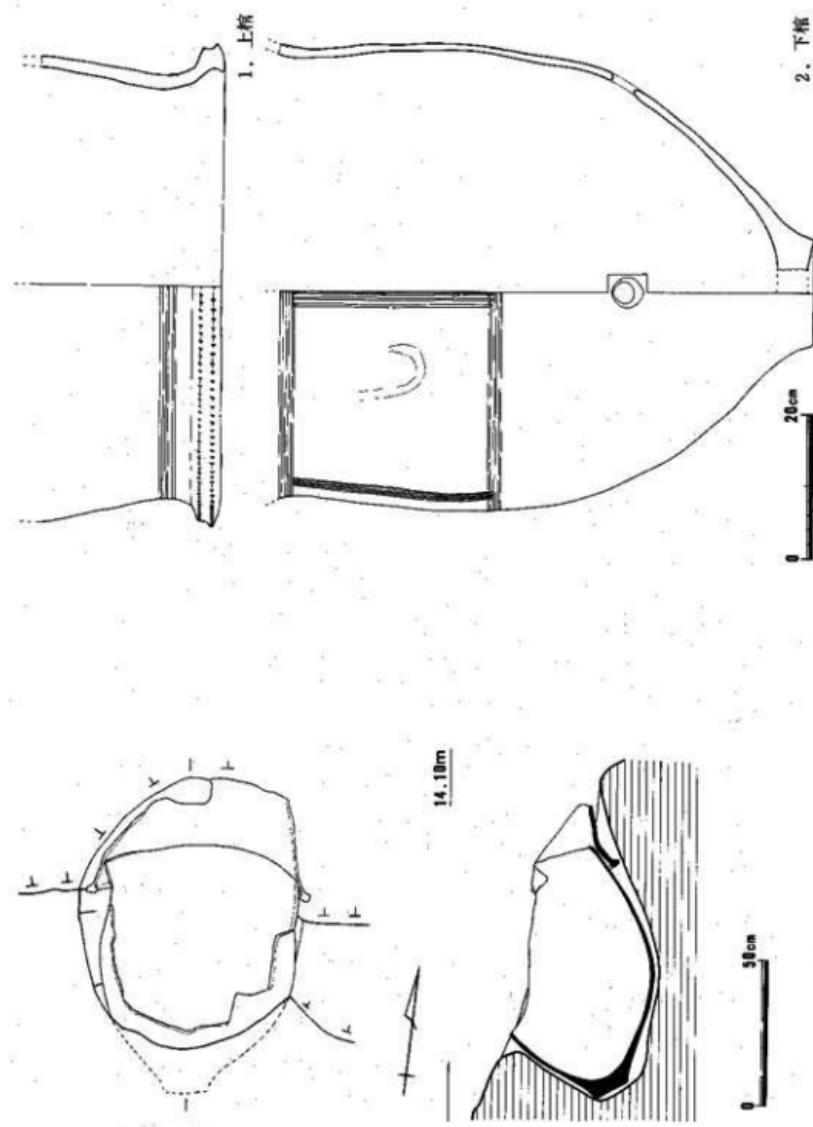


Fig.12 23号青铜器(1/20)·23号青铜器(1/8)实物图

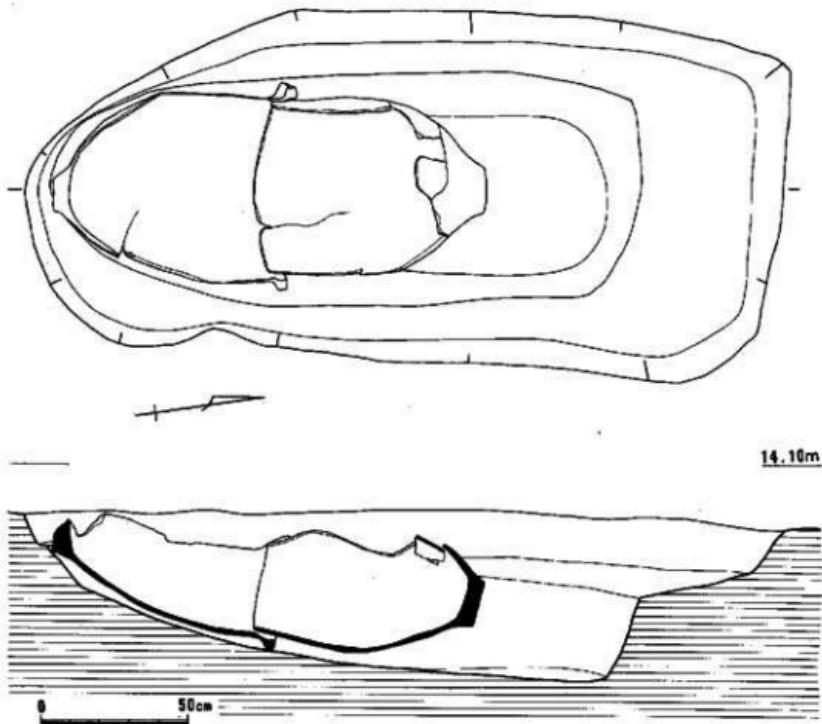


Fig.13 24号斂棺墓実測図(1/20)

で、工具痕が残っている。口径62.5cm、現器高約79cmを測る。

23号斂棺墓 (Fig.12)

C3区で検出した。北半分を削平される。下甕の口縁部を打ち欠き上甕をかぶせている。主軸はN-7°-Wを向く。埋置角は28°である。掘方は下甕の大きさ一杯に掘られ、底部は横穴を掘つて納めている。掘方の幅は約0.85mを測る。

上甕 上部のみの破片であるが、2類である。口縁部下に3条の沈線を巡らせる。遺存部からは縱位の沈線は認められない。復原口径67.4cmを測る。

下甕 口縁部を打ち欠くが2類である。底部は厚く、やや上げ底気味になる。胴部最大径および口縁下に3条の沈線を巡らせ、両沈線間を縱位の沈線で結ぶ。縦横の沈線で囲まれた区画の一つに釣針状の文様を描く。また胴部下位には焼成後の穿孔がある。現器高約75cm。

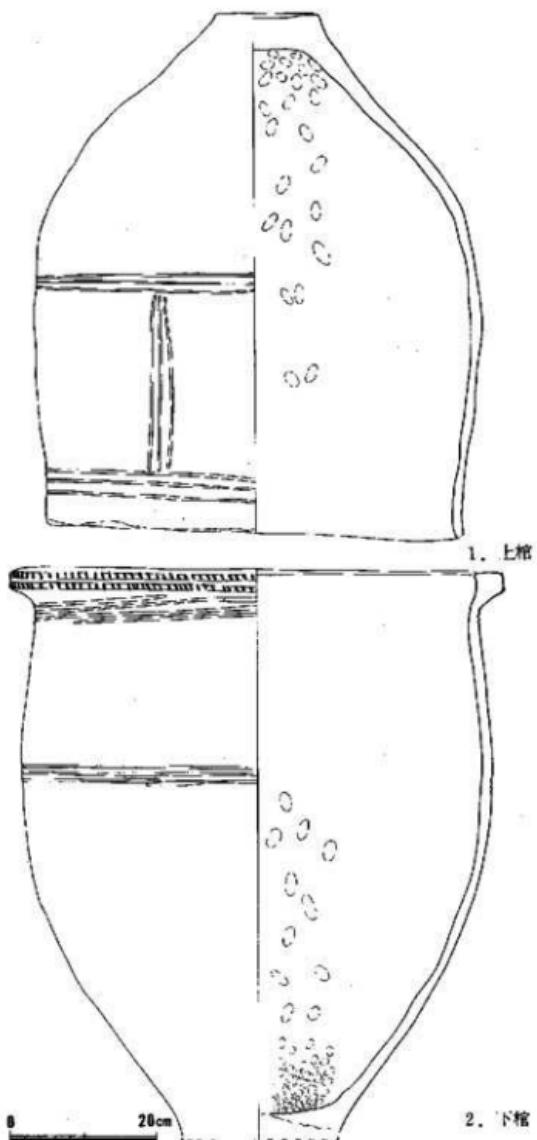


Fig.14 24号窯棺実測図(1/8)

24号窯棺墓 (Fig.13,14,
PL.10)

C3区で検出した。掘方南壁に接している方が下窯と考えられるから、上窓の口縁部を打ち欠き、下窓のなかに差し込んだことになる。主軸はN-61°-Eを向く。埋置角は10°で、水平に近くなっていることが注意される。掘方は長方形に近く、床に窯棺の幅だけの土壤を掘った二段掘りの掘方である。長2.7m、幅1.2mを測る。

上窓 2類。口縁部を打ち欠く。口縁下と最大径のやや上に3条の沈線を巡らす。両沈線間は継位の沈線で結ぶ。底部外面、口縁部内面にハケメ、胴部内面には指頭らしき痕が見られ、内底面に特に顕著である。底径14cm、現器高約78cmを測る。下窓 2類。口縁部下と胴部最大径のやや上に沈線を巡らす。継位の沈線は施さない。内面は上窓と同様指頭らしき痕が見られ、底部には特に顕著である。底部は焼成悪く、粘土に還元してしまい、取り上げられなかった。口径67cm、器高78.8cmを測る。

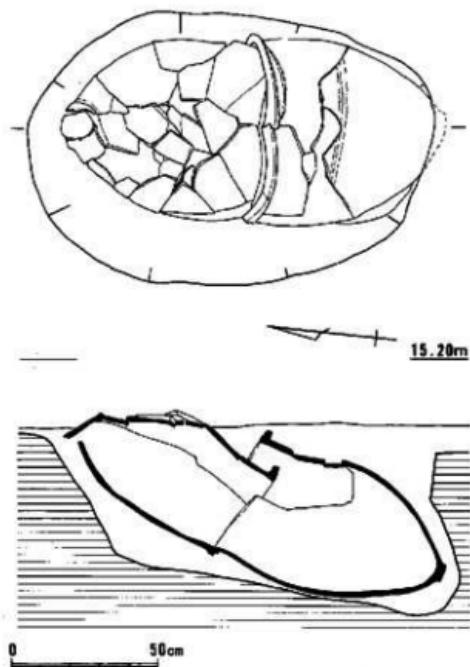


Fig. 15 28号壺棺墓実測図(1/20)

下壺 2類。口縁肥厚部は薄くなっている、頂部が水平面をなしている。他の2類に比べて口縁部の作りが小振りである。口縁部下と胴部中位に沈線を巡らせるが、縦位の沈線は見られない。内面に工具痕が残る。口径57.0cm、現器高64cm。底部は焼成が悪く、粘土に還元して取り上げられなかった。

17号壺棺墓 (Fig.17,18,PL.11)

C4区で検出した。下壺の口縁部を打ち欠き上壺をかぶせている。主軸はN 17° Eを向く。埋置角は41°である。掘方は二段振りで、1段目の床面から下壺の形態に合わせた上壺を斜めに掘り込む。掘方の大きさは長1.4m、幅1.1mを測る。

上壺 壺の肩部である。やや長胴気味で肩の張る器形に復原できよう。外面は胴部は横方向、底部付近は右下がりのミガキである。

下壺 2類である。上壺をかぶせるために口縁端部のみを打ち欠く。口縁を打ち欠いた他の壺棺が屈曲部から上をすべて打ち欠くのに比べると特徴的である。口縁下と胴部中位に沈線を巡らせる。縦位の沈線は見られない。口縁上端面にハケメが見られる。現口径65cm、底径13.8cm

28号壺棺墓 (Fig.15,16,PL.10,58)

D5区で検出した。主軸はN 6° -Wを向く。埋置角は23°である。上面は壊れているが、下面の状況から、上下壺の口縁部を合わせた合口と考えられる。掘方は長楕円形で長1.4m、幅0.95mを測る。下壺の下半部は横穴を掘って安置している。

上壺 2類。口縁肥厚部が薄くなり、接合部の凹面が浅くなるなどやや新しい要素がうかがえる。底部も他の2類壺棺に比べると薄くなっている。口縁部下と胴部中位に沈線を巡らす。一筆書きの回転と思われる。縦位の沈線は施さない。口縁部内面にハケメが見られる。口径55.3cm、底径11.0cm、器高62.9cmを測る。

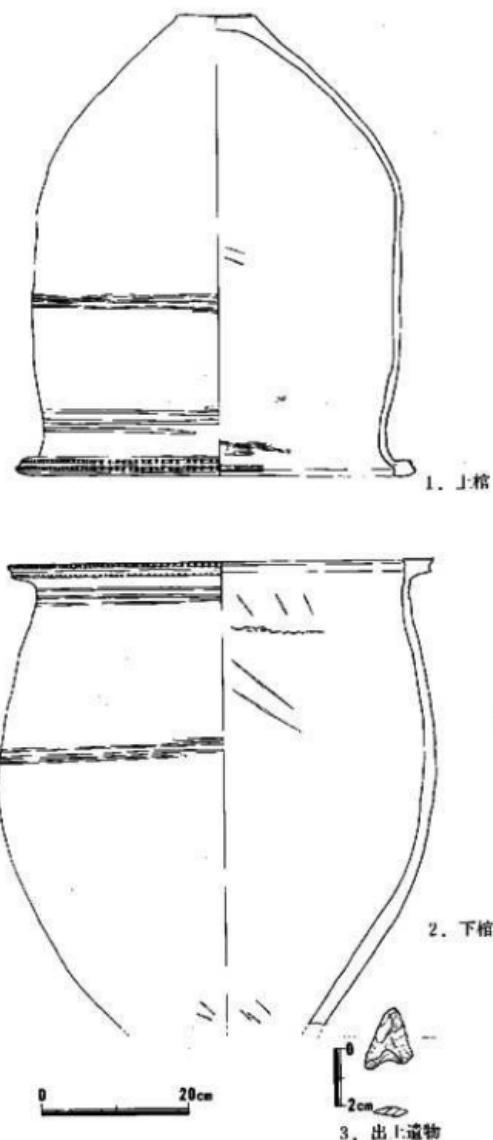


Fig.16 28号葬棺(1/8)・28号葬棺墓出土遺物(1/2)実測図

器高79.4cmを測る。

25号葬棺墓 (Fig.27,28,PL.11)

C3区で検出した。上蓋の大部分と下蓋の半分以上を削平される。主軸はN-13°-Eを向く。埋置角は51°くらいであろう。掘方の現況は長0.7m、幅0.6mを測る。

上蓋 2類である。下蓋より大形の蓋を用いる。底部は厚く、わずかに高台状を呈する。胴部中位に沈線を巡らせ、縱方向にも4条の沈線を施す。底径10.5cm、現器高63cmを測る。

下蓋 器形から見て1類と思われる。外面は右下がりのミガキを施す。底径10.8cm、現器高29cmを測る。上蓋、下蓋とも出土状況から見て、遺存部より上位を打ち欠いている可能性が高い。

9号葬棺墓 (Fig.19,20)

C4区で検出した。下蓋の中に上蓋を胴部中位付近まで差し込んでいる。主軸はN-3°-Wを向く。埋置角は23°である。掘方は二段掘りで下蓋の下半部は横穴を掘って納めている。掘方内および周辺部に土器が散見するが、流れ込みと思われる。掘方は長方形に近く長2m、幅1.1mを測る。

上蓋 2類である。口縁内面端部にも刻目を施すのが特徴的である。口縁下と胴部中位に沈線を巡らせ、沈線間を縱位の沈線でつなぐ。縱位の沈線は対面する位置に2単位施す。底部は粘土化して取上げ不能。口径61.6cm、現器高68cmを測る。

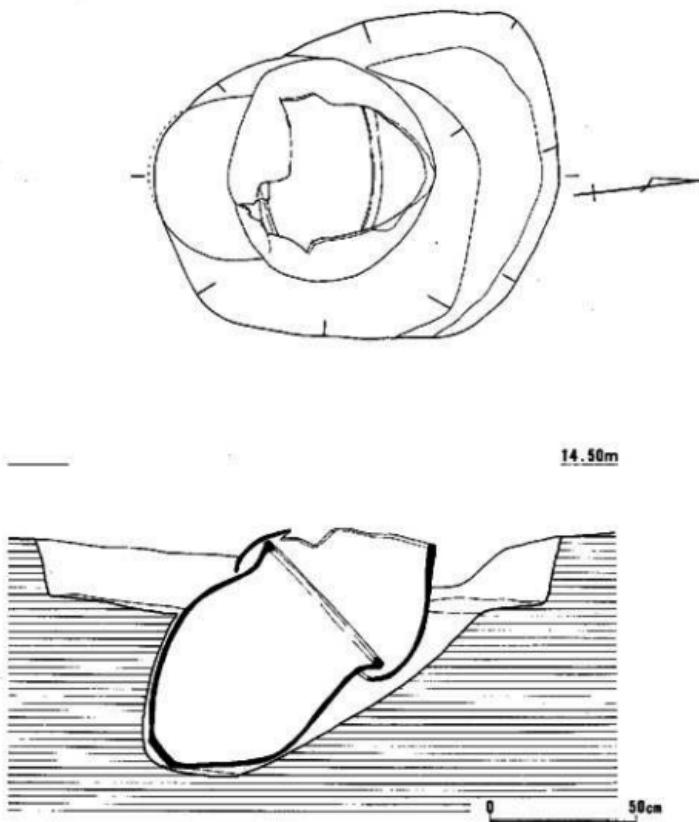
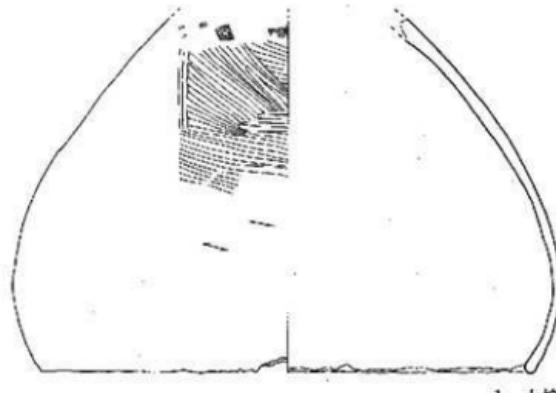


Fig.17 17号斐格基実測図(1/20)

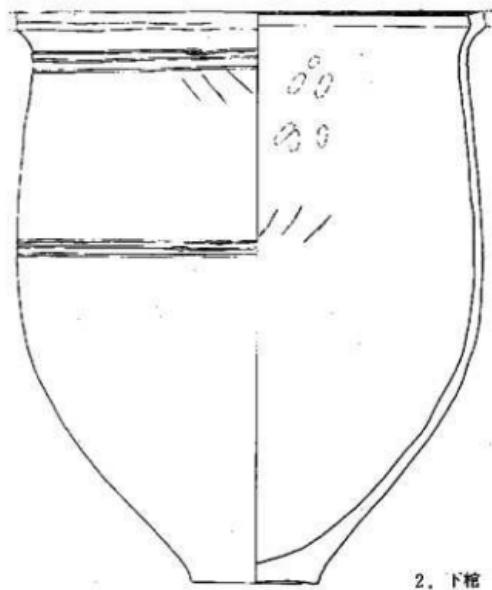
下巻 3類である。体部は直線的に口縁へ向かって伸び、口縫は短く外方へ屈曲する。肥厚は薄く、内方へ突出する。外端部はヨコナデによる浅い凹面をなすが、上下端とも刻目は施さない。沈線も見られない。底部は若干上底気味になる。口縫内部だけでなく胴部内面にもハケメが見られる。口径70cm、底径12.5cm、器高87cmを測る。

11号斐格基 (Fig.21,22,PL.59)

D4区で検出した。合口焼箱である。上巻は口縫の一部しか残っていない。主軸はN-8°-Eを向く。埋置角は58°である。掘方は現状では円形であるが、合口部分に段が見られ、本来は長椭円形であったものと考えられる。長1m、幅1mを測る。



1. 上棺



2. 下棺

0 20cm

Fig.18 17号變棺実測図(1/8)

上棗 2類である。口縁下と洞部中位に一筆書きの沈線を巡らす。底部は厚い平底で外面にハケメ、内面に指頭痕が見られる。口縁部内面にもハケメが見られる。口径63.2cm、底径14.2cm、器高75.3cmを測る。

下棗 3類である。口縁部は肥厚部がほとんど立たず、外端部は平坦面をなす。内部にも突出し鋤先口縁に近くなる。口縁上下端には刻目を施す。口縁下、洞部の沈線は施さない。口径55.4cm、底径12.8cm、器高72.3cmを測る。

25号變棺墓 (Fig.21, 23, PL.12, 59)

D4区で検出した。合口變棺である。北側を削平される。主軸はN-15°-Eを向く。埋置角は36°である。棺方は長楕円形と考えられる。現長1.85m、幅1.1mを測る。

上棗 4類である。口縁部が内側へ突出した鋤先状を呈する。外端部はヨコナデによる平坦面を持ち、2、3類の特徴を繼

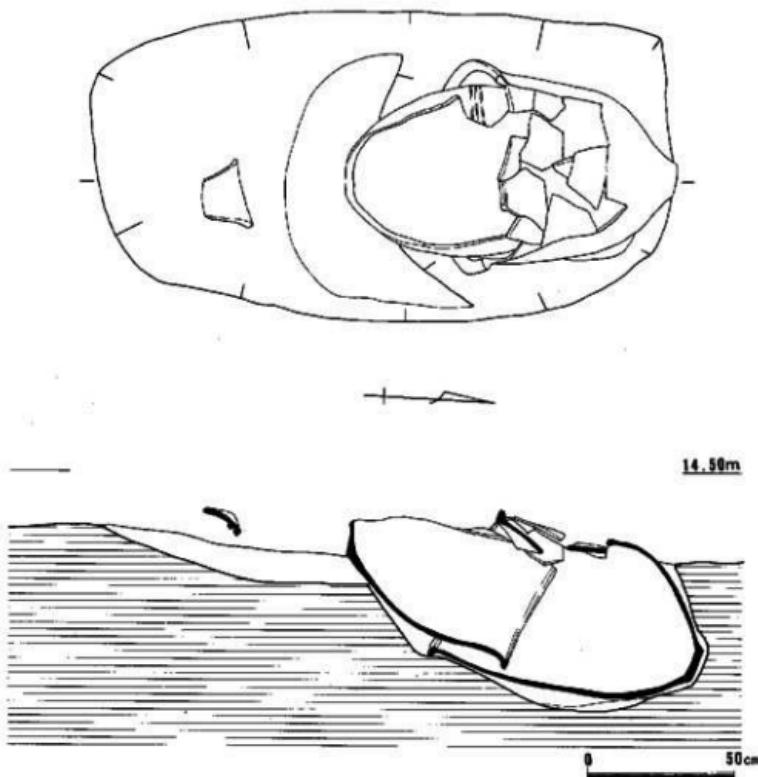


Fig.19 9号斎棺墓実測図(1/20)

承する。沈線は見られない。口徑59.7cmを測る。

下甕 4類であるが、口縁下で緩く屈曲し沈線を持つという古い要素と、口縁形状や胴部突帯に見られる新しい要素が1個体に同居した極めて特徴的な斎棺である。胴部突帯は沈線の直下に施される。底部は上底状を呈する。口徑62cm、底径12.6cm、器高85cmを測る。

3号斎棺墓 (Fig.24,25,PL.13,60)

D4区で検出した。上半部を削平され、上甕の下半、下甕の口縁の一部を欠く。上甕を下甕の中位付近までかぶせている。主軸はS-29°Wに向く。埋置角は45°である。上甕と下甕の重なった間隙から扁平な石が出土したが、自然石であり、人為的なものかどうか不明である。掘方は本来は主軸方向に長い楕円形であろう。下甕側の壁をやや横に掘り込み、下甕の安定を図る。

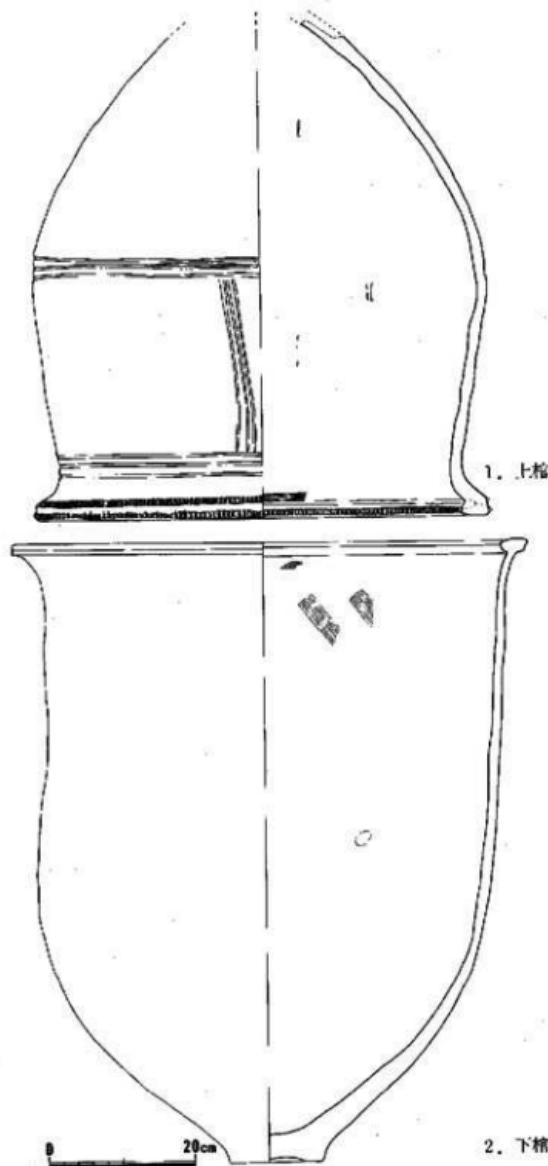


Fig. 20 9号墓実測図(1/8)

現長1.1m、幅1.2mを測る。

上蓋 4類である。口縁は内外に短く突出し、断面3角形を呈する。外端部は平坦面をなさず、むしろ丸くおさめる。口縁下で屈曲する。胸部中位に断面三角の突帯を1条巡らす。底部は上底状を呈する。口径72.2cm、底径12cm、器高約85cmを測る。

下蓋 4類である。口縁は逆L字状を呈する。外端部は広い平坦面をなし、上下両端に刻目を施す。口縁下では屈曲しない。口縁下の2条沈線、縦方向の1条沈線が見られるが、ルジメントと見做されよう。口径55.8cm、底径13cm、器高75.3cmを測る。

1号墓棺墓 (Fig.26)

以下に記述する1、4、12、15、22号の各墓棺墓は削平が著しく、形態分類に耐えるほどの遺存がないものである。1号墓棺墓はC5区で検出した。西半分を削平される。下蓋の半分しか残っていない。主軸はN·139°Eを向く。埋置角は45°である。单棺か合棺かは不明。墓壙は墓棺に沿う楕円形であろう。

墓棺 胸部下半のみの破片である。長胴で底部に向かってゆるくすぼまる。底部は厚く、やや上底になる。底径12cmを測る。

内外面ナナ調整。

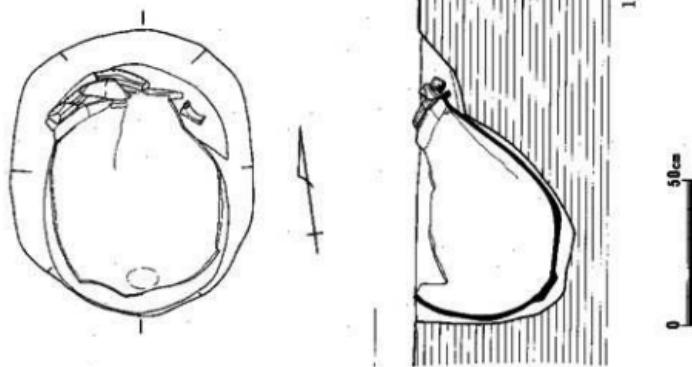
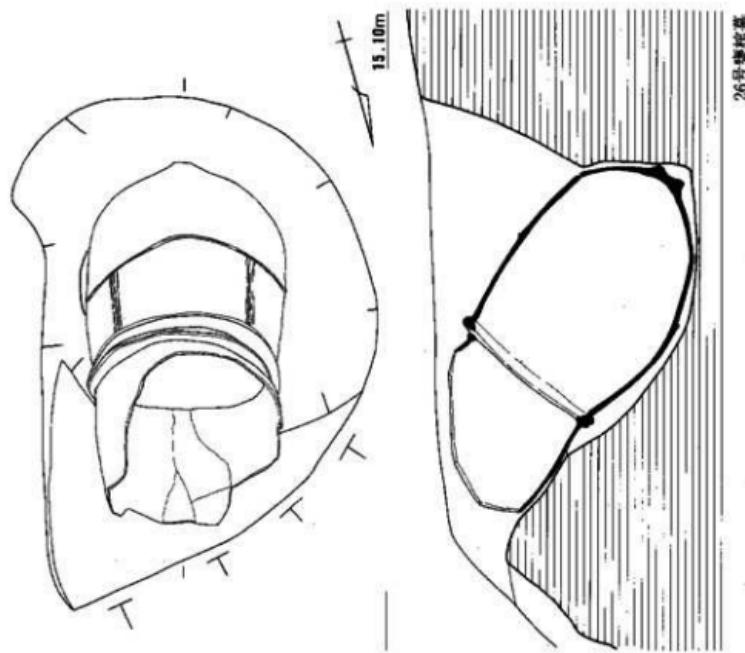
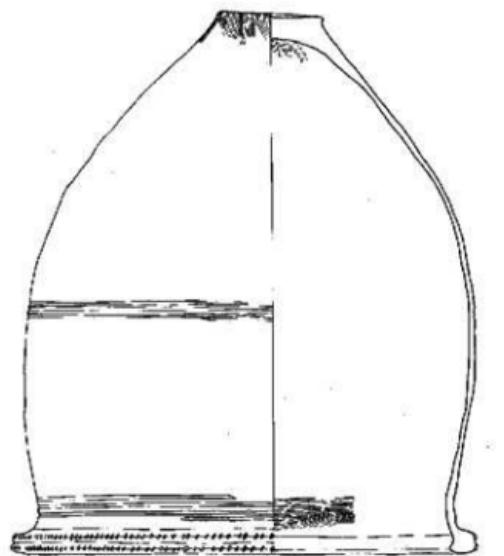
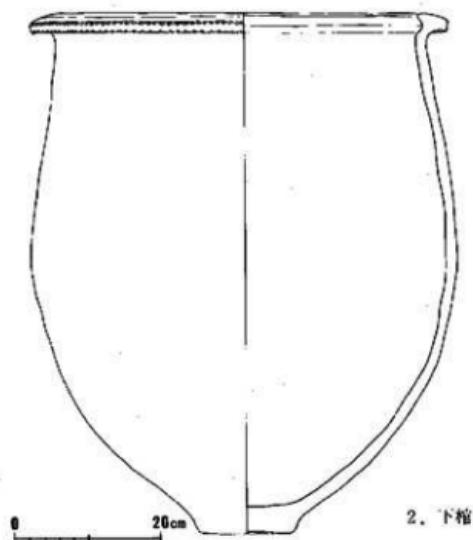


Fig.21 11·26号墓棺室測圖 (1/20)



1. 上棺



2. 下棺

Fig.22 11号雙棺実測図(1/8)

4号雙棺墓 (Fig.26)

D4区で検出した。下甕の底部のみ遺存する。主軸はN-25°-Eを向く。埋置角は65°くらいであろう。下甕の形態に合わせた掘方を掘っている。掘方の現長0.6m、幅0.65mを測る。

甕棺 脊部下半の破片である。底部は厚くやや上底になる。底径11cmを測る。

12号雙棺墓 (Fig.27)

D3区で検出した。甕棺の遺存状況と、掘方の形状から、東西に長い精円形の後世の擾乱により、削平されているものと思われる。主軸はN-57°-Wを向く。埋置角は45°くらいであろう。

甕棺 脊部下半のみの破片である。かなり胴が張る器形である。底部は厚く、わずかに上底を呈する。外面中位は水平から右下がり、底部付近は右下がりのミガキ、内面はナデ調整される。

15号雙棺墓 (Fig.27,28)

C4区で検出した。下甕底部のみの遺存である。主軸方向、埋置角などは不明である。残った底部からのみ推測するとほぼ正位置に掘えられたとも思われる。遺存した掘方はほぼ径40cmの円形を呈する。

甕棺 底部のみの破片である。底部から直線的に立ち上がる。底部は厚く、わずかに高台状を呈する。

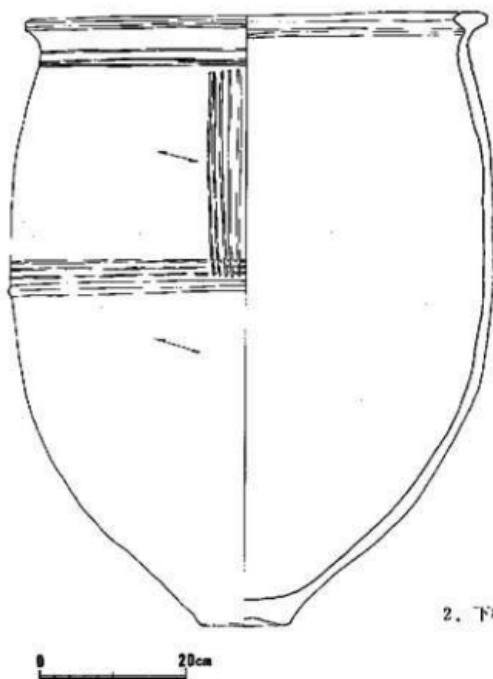
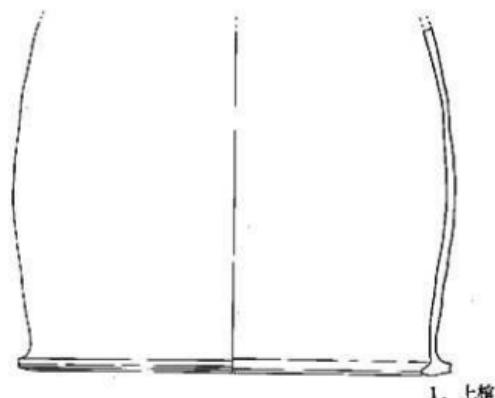


Fig. 23 26号壺棺実測図(1/8)

底径11.4cmを測る。外面はミガキ、内面はナデ調整される。

22号壺棺墓 (Fig.27, 28)

C3区で検出した。北西側を大きく削平される。掘方の下半部は下窓の形状に合わせて掘られたものと思われる。主軸はN-43°-W、埋置角は33°くらいであろう。

壺棺 偏球形の胴部を持つ壺形土器の胴部片である。最大径は中位よりやや上部に来るものと思われる。底部はやや上底になる。底径10.5cmを測る。胴部外面は右下がり、底部外面は縦方向のミガキを施す。

29号壺棺墓 (Fig.29, PL.13)

29号壺棺墓は、形態不明ではなく1から4類には該当しない壺形土器を用いた壺棺墓である。D5区で検出した。南壁に近い大形の壺の方が下窓になろう。主軸方向はN-23°-W、埋置角は14°である。掘方は平面精円形断面逆台形を呈する土壤で、段状部などは認められない。長1.25m、幅1mを測る。上窓 壺の胴部を用いる。底部はわずかに高台状を呈する厚い平底である。外面は右下がりのミガキを施す。底径9.8cm、胴部最大径41.5cm、現器高約30cmを測る。

下窓 上窓と同じく肩部以上を打ち欠いた壺の胴部を用いる。底部は厚い平底である。外面は胴部に

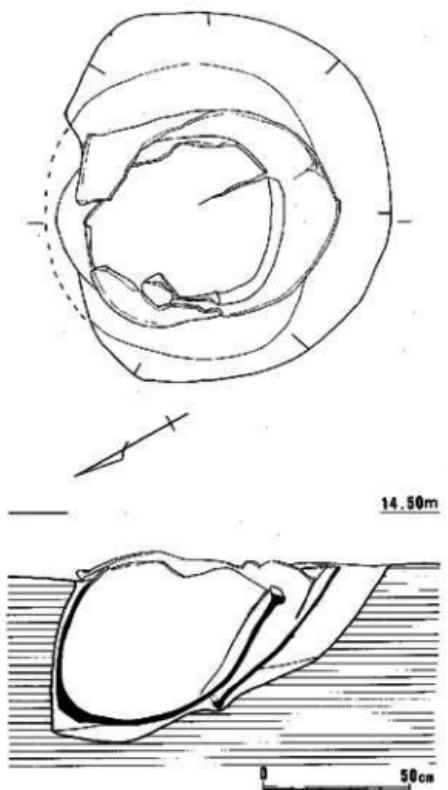


Fig.24 3号壺棺墓実測図(1/20)

具で強いナデを施したと思われ、工具の圧痕が見られる。

副葬品 5号壺棺墓からは、ガラス小玉が多数出土した。発掘時の不注意で相当量を取り上げてしまったが、壺棺下面坐で7個確認した。現在奈良国立文化財研究所に分析をお願いしており、機会を改めて報告することにしたい。

7号壺棺墓 (Fig.30,31,PL.14,60)

D4区で検出した。下壺も大半を削平され合壺か単棺かも不明である。主軸はN-159°-Eを向く。埋置角は67°くらいであろうか。掘方断面は下壺の形態に合わせて掘られている。壺棺内は大きく荒され、崩落した壺棺片の上に副葬品である鏡が、これも破碎された状態で散乱してい

ほぼ水平の、底部付近には右下がりのミガキを施す。内面にはナデに用いた工具痕が残っている。底径11.8cm、胴部最大径54cm、現器高約50.5cmを測る。

2) 後期の壺棺墓

後期の壺棺墓については出土数も少なく、遺存も悪いものが多いため検出時の番号順に記述する。なお、後漢鏡を副葬する7号壺棺など型式に重要な問題を持つものがあるがこれらについては後述する。

5号壺棺墓 (Fig.30,31)

D4区で検出した。大半を削平されるが、成人棺であろう。主軸はN-35°-Eを向く。埋置角は不明であるが他の後期壺棺とそれほど大きくならないであろう。残存する掘方は径50cmほどの円形を呈する。断面は壺棺の形態に沿って掘られたものであろう。

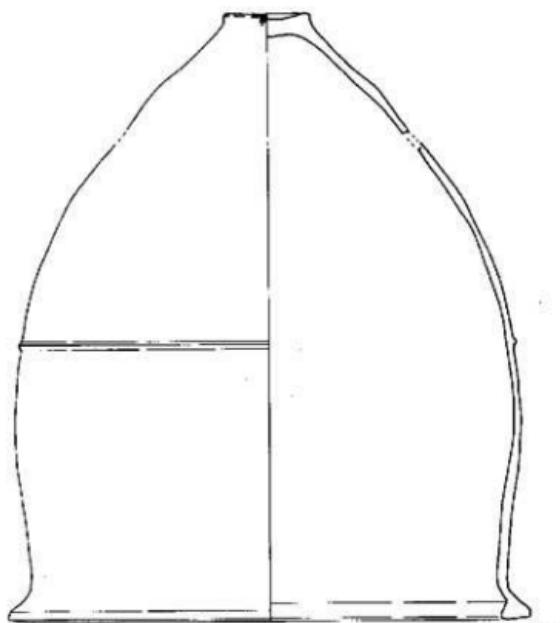
壺棺 遺存が悪く、復元にやや難がある。底部から胴部下半にかけての1/5ほどの破片である。凸レンズ状の底部を持ち、胴部下半に断面三角の幅狭の突帯が2条巡る。ただし下の突帯ははがれて痕跡のみである。外面ハケメ、内面はヘラ状工

具で強いナデを施したと思われ、工具の圧痕が見られる。

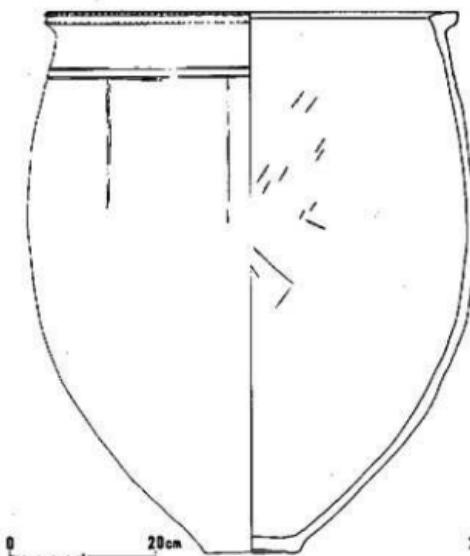
副葬品 5号壺棺墓からは、ガラス小玉が多数出土した。発掘時の不注意で相当量を取り上げてしまつたが、壺棺下面坐で7個確認した。現在奈良国立文化財研究所に分析をお願いしており、機会を改めて報告することにしたい。

7号壺棺墓 (Fig.30,31,PL.14,60)

D4区で検出した。下壺も大半を削平され合壺か単棺かも不明である。主軸はN-159°-Eを向く。埋置角は67°くらいであろうか。掘方断面は下壺の形態に合わせて掘られている。壺棺内は大きく荒され、崩落した壺棺片の上に副葬品である鏡が、これも破碎された状態で散乱してい



1. 上棺



2. 下棺
数面削裁されていた可能性
もあるが、遺存部が少なく、

Fig. 25 3号変棺実測図(1/8)

た。喪棺内部には朱が塗布されていた。

喪棺 口縁部を欠くが、本来打ち欠いて使用されたと思われる。胴部はかなり胸の張る截頭倒卵形を呈する。胴部最大径よりやや下位に断面山形の突帶を2条巡らす。ほぼ同形態の27号喪棺から見て、本来口縁部付け根にも突帶が巡る可能性が高い。底部はわずかに凸レンズ状を呈するが、底部からの立ち上がりは外反する特徴を持つ。外面ハケメ、内面はナデを施す。底部近くに焼成後の穿孔がある。器高58.5cm、底径9.6cmを測る。

副葬品(Fig.32, PL.14) 7号喪棺からは雲雷文内行花文鏡が出土した。鏡は破碎され多数の鏡片となっていたが、これは喪棺自体の破壊に伴うものと思われ、この際に内区の大部分が持ち去られ、本来は完鏡であったと思われる。微妙に径の異なる鏡縁部があることと、図のように復元した際に接点が見られないことから複数面削裁されていた可能性もあるが、遺存部が少なく、

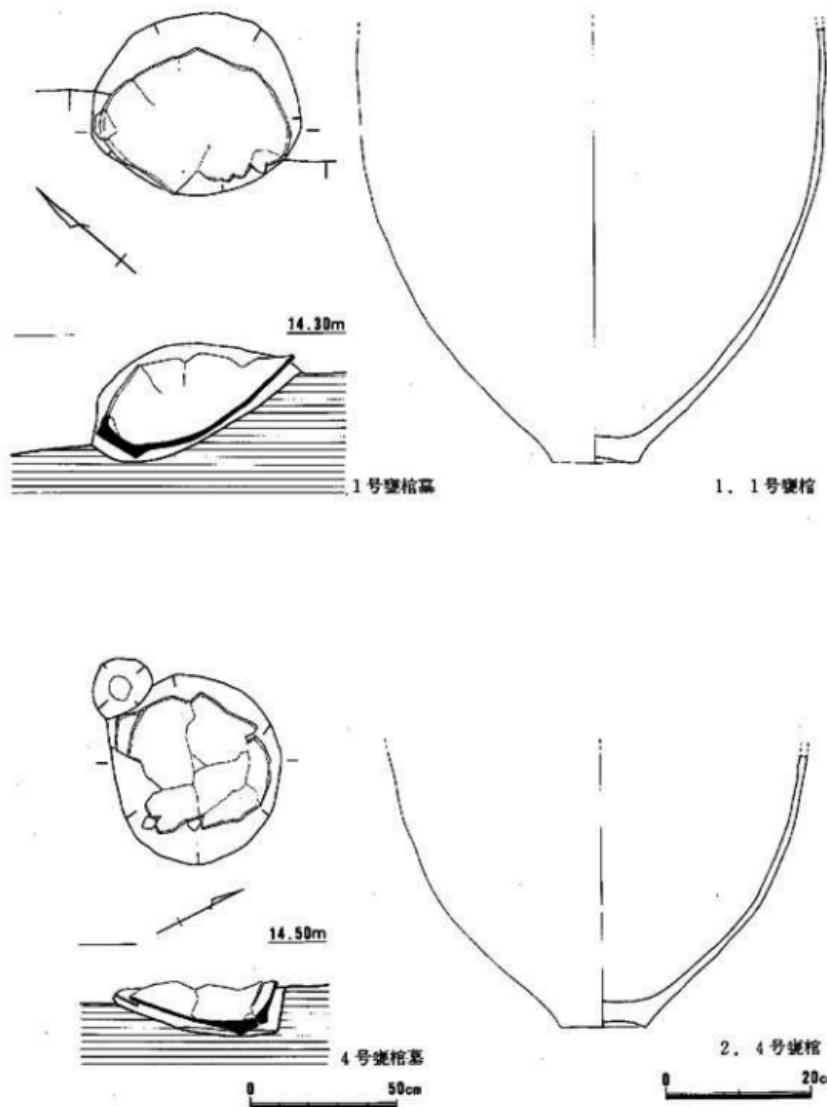


Fig. 26 1·4号墓棺墓 (1/20) · 1·4号墓棺 (1/8) 实测图

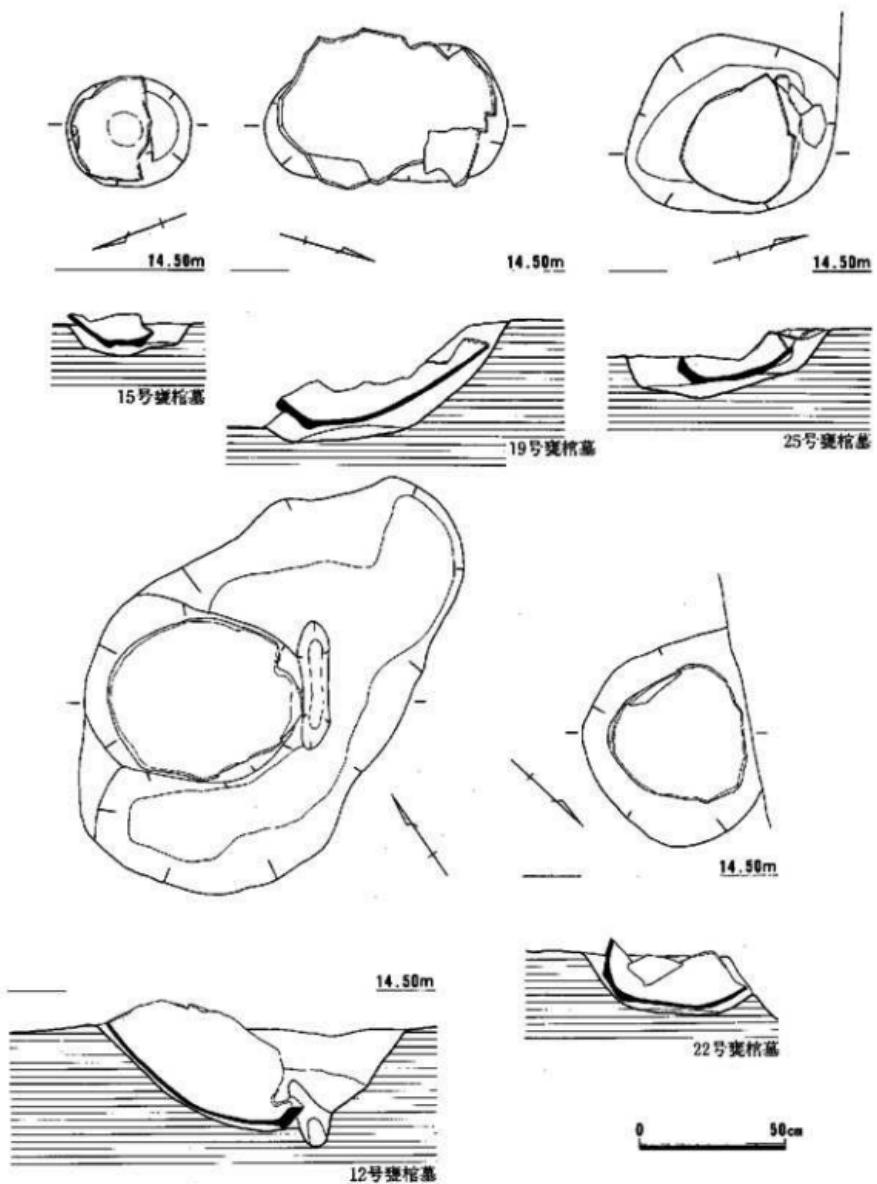


Fig. 27 12 · 15 · 19 · 22 · 25号窯基実測図 (1 / 20)

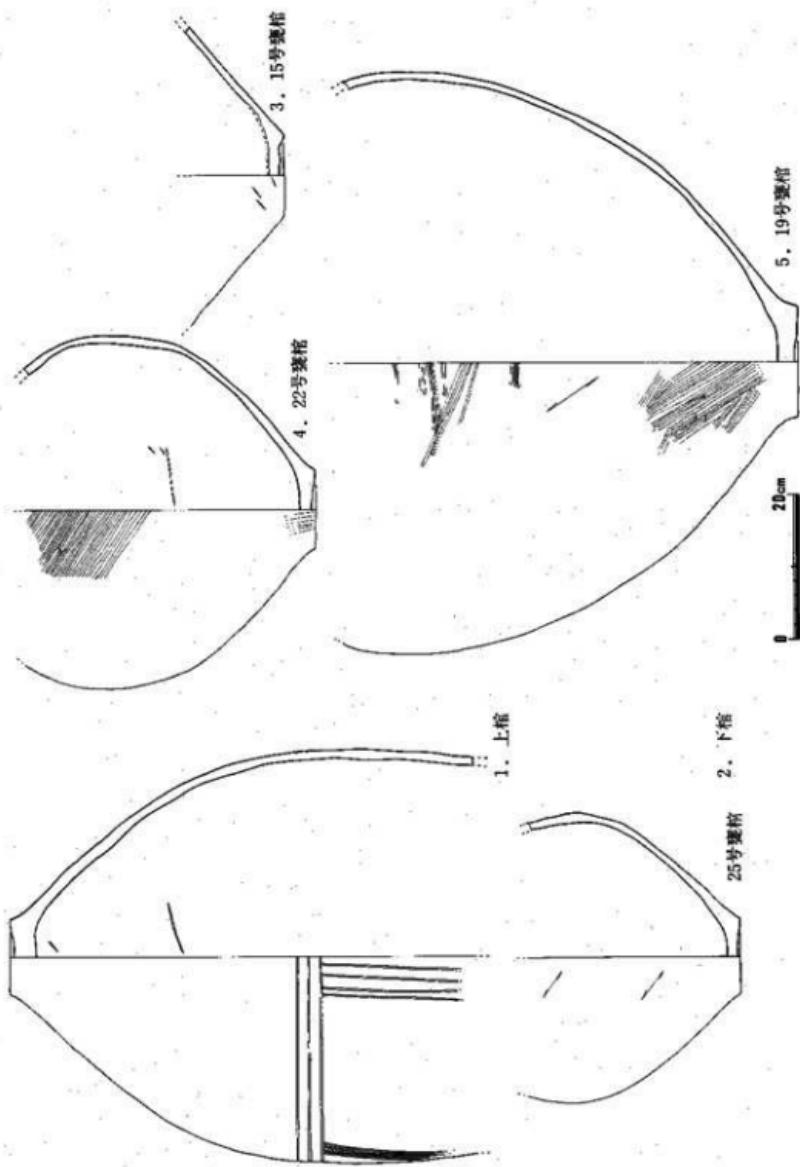
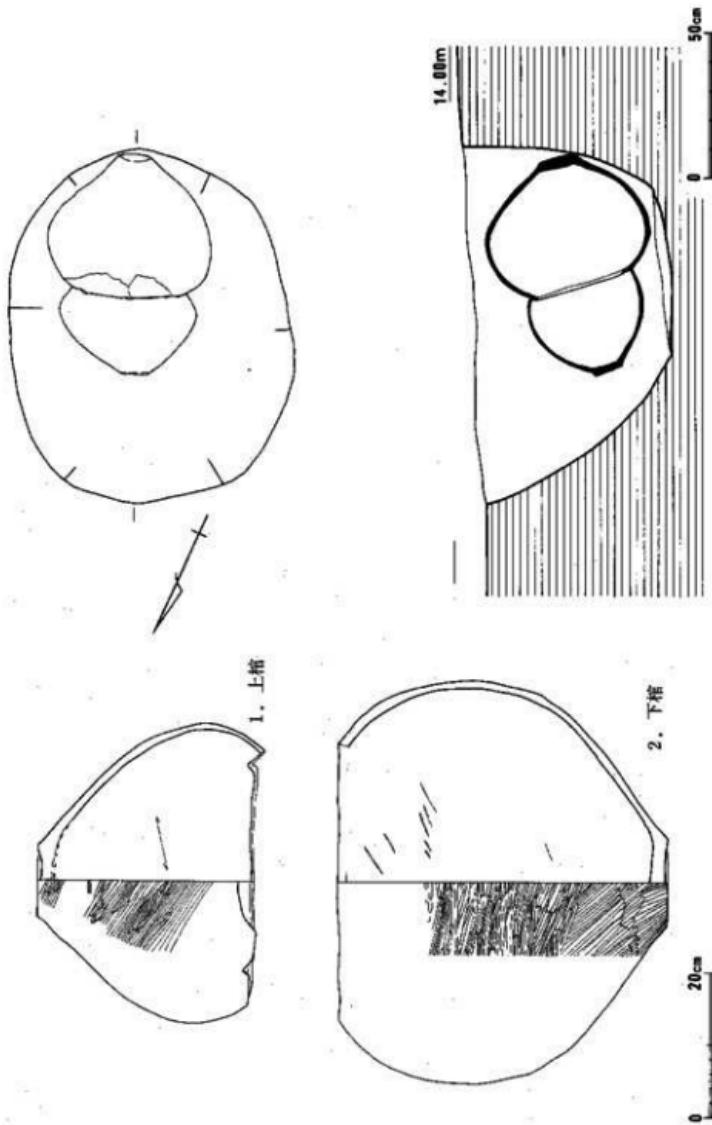
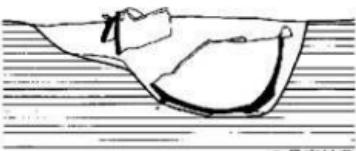
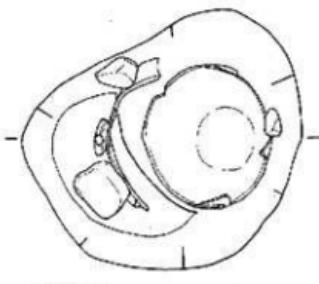
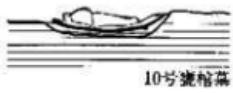
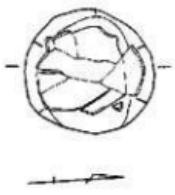
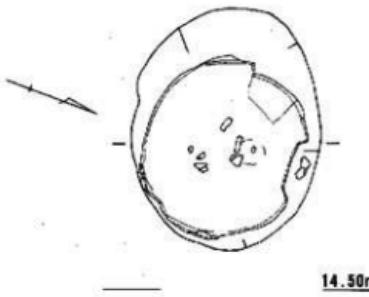
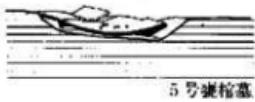
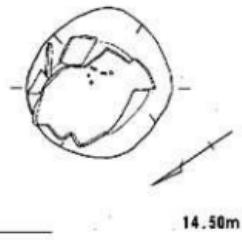


Fig. 28 15·19·22·25号篾片实测图(1／8)

Fig. 29 29号壁棺墓 (1/20)・29号壁棺 (1/8) 美觀圖

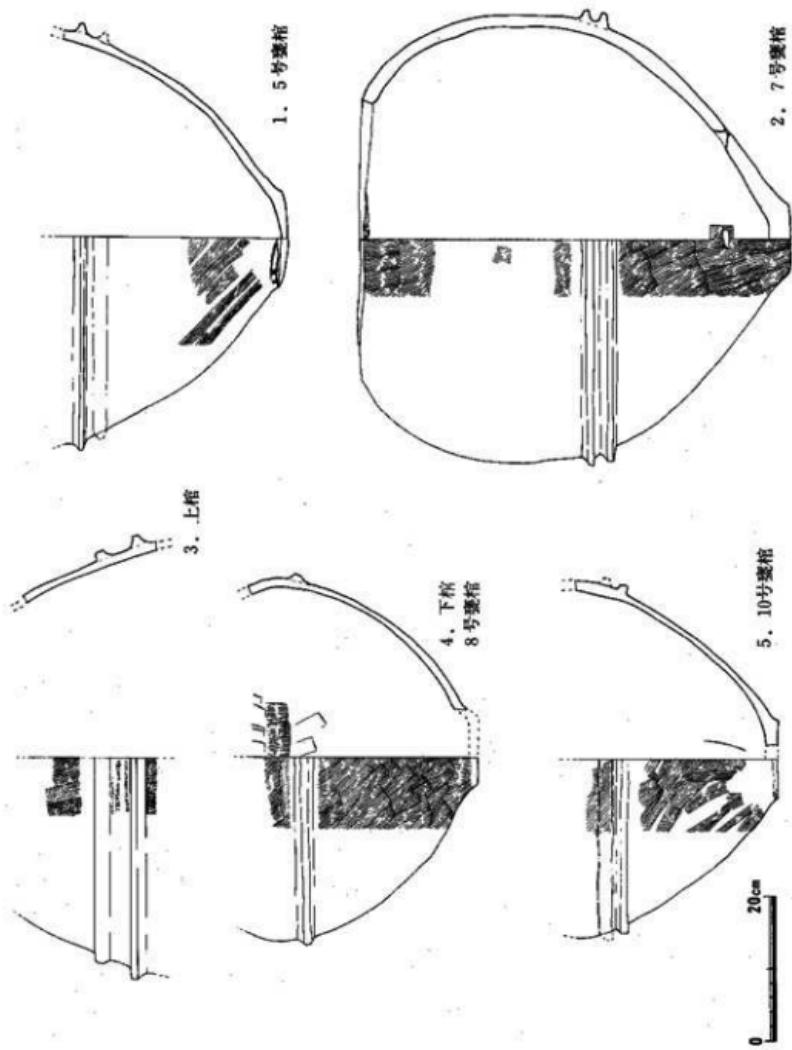




0 50cm

Fig. 30 5·7·8·10号墓椁室实测图(1/20)

Fig.31 5·7·8·10号墓棺实物图(1./8)



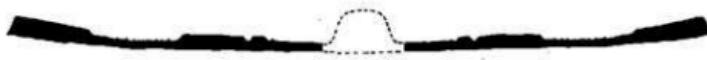


Fig. 32 7号墓棺出土鏡拓影(2/3)

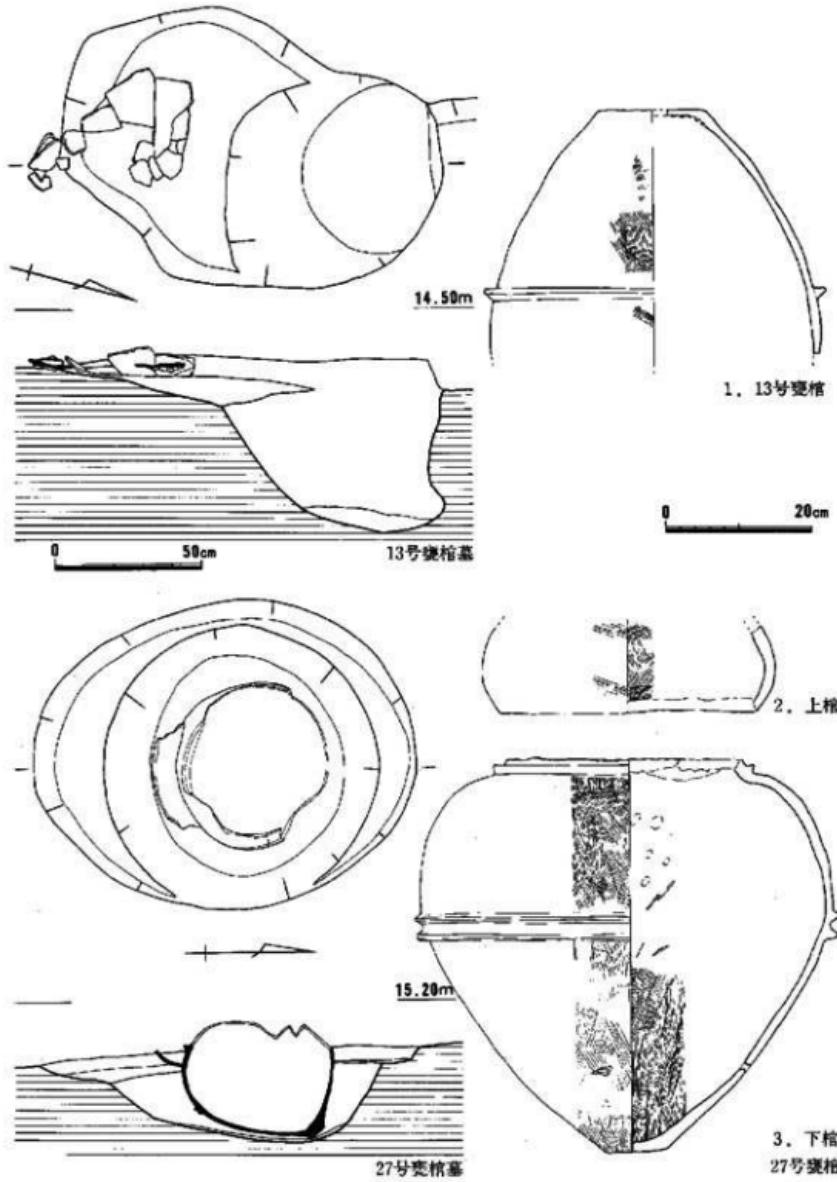


Fig. 33 13·27号墓棺基 (1/20)·13·27号墓棺 (1/8) 实测图

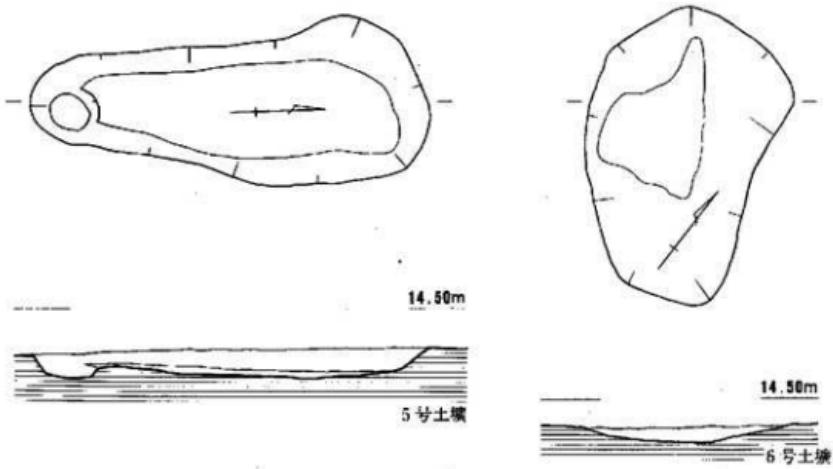
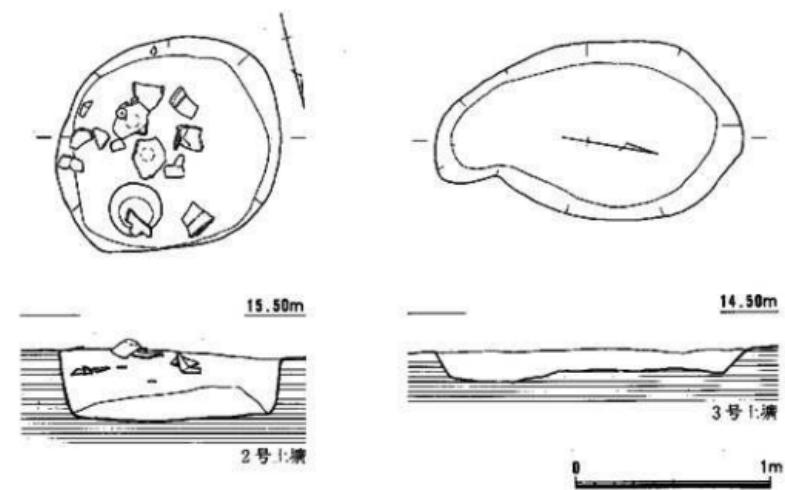


Fig.34 2·3·5·6号土壤实测图(1/30)

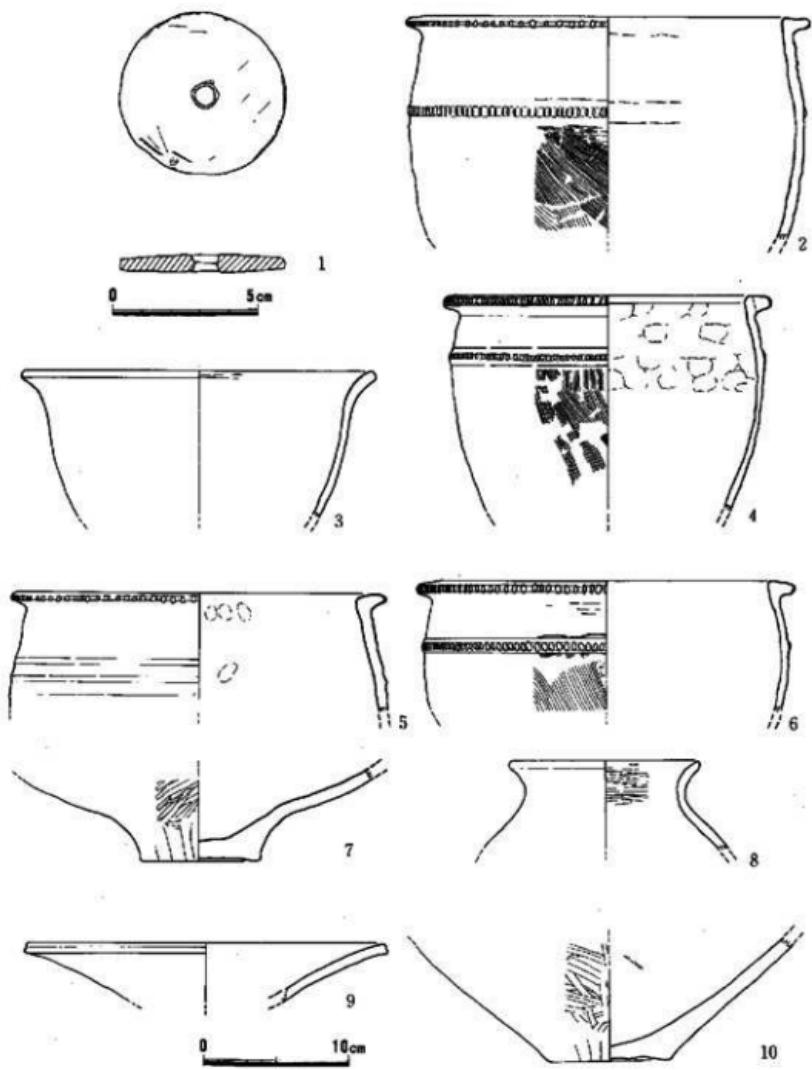


Fig. 35 2号土出土遺物実測図(1/4・1/2)

何とも言えない。鏡式は高橋徹氏の分類では墓雷文内行花文鏡のⅠ式であり、最古形式にあたる。この鏡及び甕棺墓の提起する問題についてまとめて考察することにしたい。

8号甕棺墓 (Fig.30,31,PL.15)

C4区で検出した。後期甕棺のうち唯一合甕であることが確認できた甕棺墓である。主軸はN-5°-Eを向く。埋置角は56°である。掘方は楕円形で、段を持つ。長0.95m、幅0.9mを測る。段状部の破砕された甕棺片の上から平縁の船載鏡片が出土した。現位置は留めていないと考えられるが、下甕の遺存度から見ると、本米棺外副葬であった可能性は高いと思われる。

上甕 脊部下半のみの破片である。最大径よりやや下位に断面山形のシャープな突帯を2条巡らす。外面はハケメ、内面はケズリに近い強いナデを施す。

下甕 脊部下半のみの破片であるが、本来上半部は打ち欠いている。底部からの立ち上がりは強く外反する。脛は強く張り、最大径の若干下位に断面山形の突帯を1条施す。上甕に比べるとシャープさにかける。突帯は外面のハケメ調整の後、貼付予定部位に沈線を巡らせ基線とした後貼り付けている。内面は突帯裏面のやや上位にハケメを施すほかはケズリに近い強いナデである。

副葬品 8号甕棺からは平縁の鏡片が出土している。

10号甕棺墓 (Fig.30,31,PL.15)

C4区で検出した。大半を削平される。主軸はN-4°-Eに向く。掘方は浅い皿状に遺存するのみである。掘方の残存径45cmを測る。

甕棺 脊部下半のみの破片である。最大径のやや下位に2条の突帯を巡らすが、上位の突帯は剥離している。剥離面の観察により、外面のハケメ調整の後突帯が貼付られたことがわかる。底部は平底で、立ち上がりはわずかに外反する。底径10.8cmを測る。

13号甕棺墓 (Fig.33)

D3区で検出した。北側の掘り込みに考慮して甕被り土壇墓のような造構の可能性も考えたが、甕の遺存に比べて掘り込みが深過ぎると思われるのでやはり別の造構と切り合っていると考えた方がよからう。甕棺の遺存は極めて悪いが、ほぼ水平に近い埋置角のようである。主軸はN-15°-Wを向く。

甕棺 脊部下半のみの破片である。最大径のかなり下位に断面山形の突帯を1条巡らす。底部はほぼ平底で、立ち上がりはごくわずかに外反するが、ほとんど直線的である。

27号甕棺墓 (Fig.33,PL.16,60)

D5区で検出した。上甕のはんどと下甕の上位1/3程を欠く合口の甕棺である。主軸はほぼ南北方向を向く。掘方は現状では長1.3m、幅1.1mの楕円形を呈し、2段掘りである。

上甕 瓢もしくは甕の頸部以上を打ち欠いたものであろうか。外面に右下がりの粗いハケメ、内面には縦方向のハケメ、打ち欠き部付近の内面は横方向のハケメを施す。

下甕 口縁部を欠く。胴部は截頭倒卵形を呈する。肩部は強く張るが、底部に向かって急にすぼまる。頸部付け根に断面三角の突帯を1条巡らす。最大径は肩部付近にあり、そのやや下位、胴部中位に近い位置に断面山形のシャープな突帯を2条巡らす。底部はやや凸レンズ気味の平底で立ち上がりはやや外反する。底径8.8cmを測る。7号甕棺と比べると、プロポーション、底部形態、突帯の特徴等において、よく類似していると言えよう。

(3) 土壙

土壙は21基検出したが、調査の結果近世、近代以降の擾乱と判明したものも多い。ここでは弥生時代のものを中心に報告する。

2号土壙 (Fig.34,35,PL.16)

調査区西側、台地部の西端付近で検出した。形態はほぼ円形である。径は1.2mを測る。深さは現況で40cmほどである。遺物は上層に集中する。出土遺物からは中期初頭の時期が与えられる。該期には、調査区周辺では埋葬造構、生活造構ともそれぞれ検出されている。今回の調査区内で検出した前期～中期甕棺のうち4類としたものは中期に下がる可能性もあるが、仮に前期末を下らないとしても、これに直続すると思われる甕棺墓は1970年の福岡県教育委員会による調査で検出されている。福岡県教育委員会による報告書(「今宿バイパス関係埋蔵文化財報告書」第2集 1971)に掲げる3号甕棺は4類と見ることができようが4類の中でも後出的である。また4号甕棺墓は4類に統く5類ともすべき甕棺で確実に中期に下がるものである。しかし同時に県調査区では中期初頭の竪穴式住居跡も検出されており、該期の他の集落には珍しく集落と墓域が極めて近接している。従って2号土壙はどちらにも伴う可能性がある。ここで集落と墓域の分布を見ると、生活造構は台地部東側、埋葬造構は西側に見られる。この点を重視するなら、埋葬造構に伴う可能性が考えられよう。III区では列埋葬の西側に祭祀遺構列が見られたが、その先駆的なものとは考えられないであろうか。

出土遺物 Fig.35-1は滑石製の紡錘車である。中央孔に向かって若干厚くなる。孔は両面穿孔である。石質はあまりよくない。径5.5cmを測る。2は甕である。口縁部は逆L字状を呈する。上面はほぼ水平である。胴部上半に突帯を巡らす。口縁部端と、突帯の双方に刻目を施す。口縁と突帯の間はハケメをナデ消している。胴部は突帯に向かってわずかに張る。口径28cmを測る。3は鉢であろう。口縁部は外反する如意状を呈する。端部は平坦面をなす。外面はナデを施す。口径24cmを測る。4も甕である。口縁部は貼付による逆L字状を呈する。上面はほぼ水平である。胴部上半に突帯を巡らす。口縁部端と、突帯の双方に刻目を施す。口縁と突帯の間はハケメをナデ消している。突帯部に最大径があり、胴部は突帯に向かってわずかに張る。口径22cmを測る。5も甕である。口縁部は逆L字状を呈する。上面はほぼ水平である。胴部上半に突帯の剥離痕跡が見られ、突帯が巡っていたと判断される。口縁部端に刻目を施す。口縁と突帯の間はハケメをナデ消している。胴部はわずかに張る。口径26cmを測る。6も甕である。口縁部

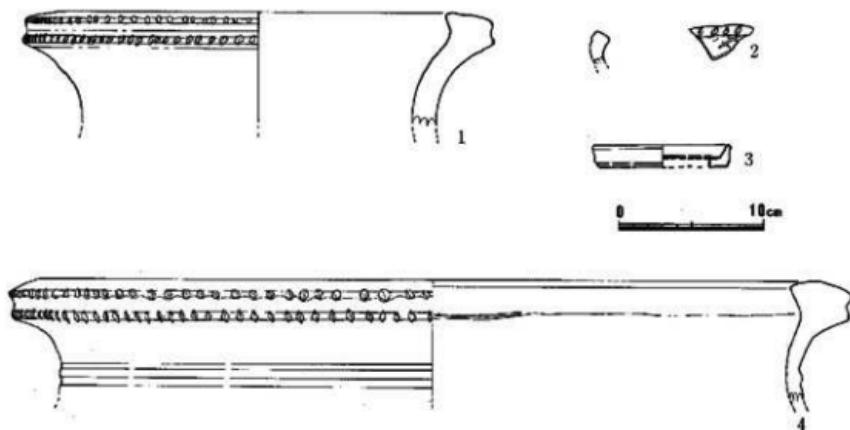


Fig.36 3・6号土壙出土遺物実測図(1/4)

は逆L字状を呈する。上面はほぼ水平である。胴部上半に突帯を巡らす。口縁部端と突帯の双方に刻目を施す。口縁と突帯の間はハケメをナデ消している。最大径は突帯部であり、胴部は突帯に向かってわずかに張る。口径26cmを測る。7は壺底部である。底部は上底で突出気味である。底部からの立ち上がりは弱く、かなり大形品と思われる。外面にはミガキが施される。底径8cmを測る。8は壺である。外反する単口縁である。頸部は短く、肩は張らない。かなり丸みを持つ胴部であろう。頸部内面までミガキが施される。口径13cmを測る。10は壺底部である。平底で外面にはミガキを施す。底径9cmを測る。

3号土壙 (Fig.34,36)

8号甕棺墓の北側で検出した。長楕円形を呈する浅い土壙である。長1.75m、幅1mを測る。出土遺物 Fig36-1は土壙の南端で出土した。壺の口縁部である。口縁部の内側を肥厚させ、接合部を強いヨコナデで凹面をなし、上下端に刻目を施す。口径32cmを測る。2は如意状口縁の甕片である。口縁端に刻目を持つ。3は須恵質の小片で器形に疑問がある。後世の混入と思われる。

5号土壙 (Fig.34)

15号甕棺墓の南側で検出した。長楕円形の土壙である。長2.3m、幅0.8mを測る。出土遺物はない。

6号土壙 (Fig.34,36)

11号甕棺墓の西側で検出した。長楕円形に近い不定形の土壙である。長1.7m、幅1mを測る。出土遺物 Fig36-4は大甕の口縁部である。口縁は肥厚し上下端に刻目を施す。隣接する11号

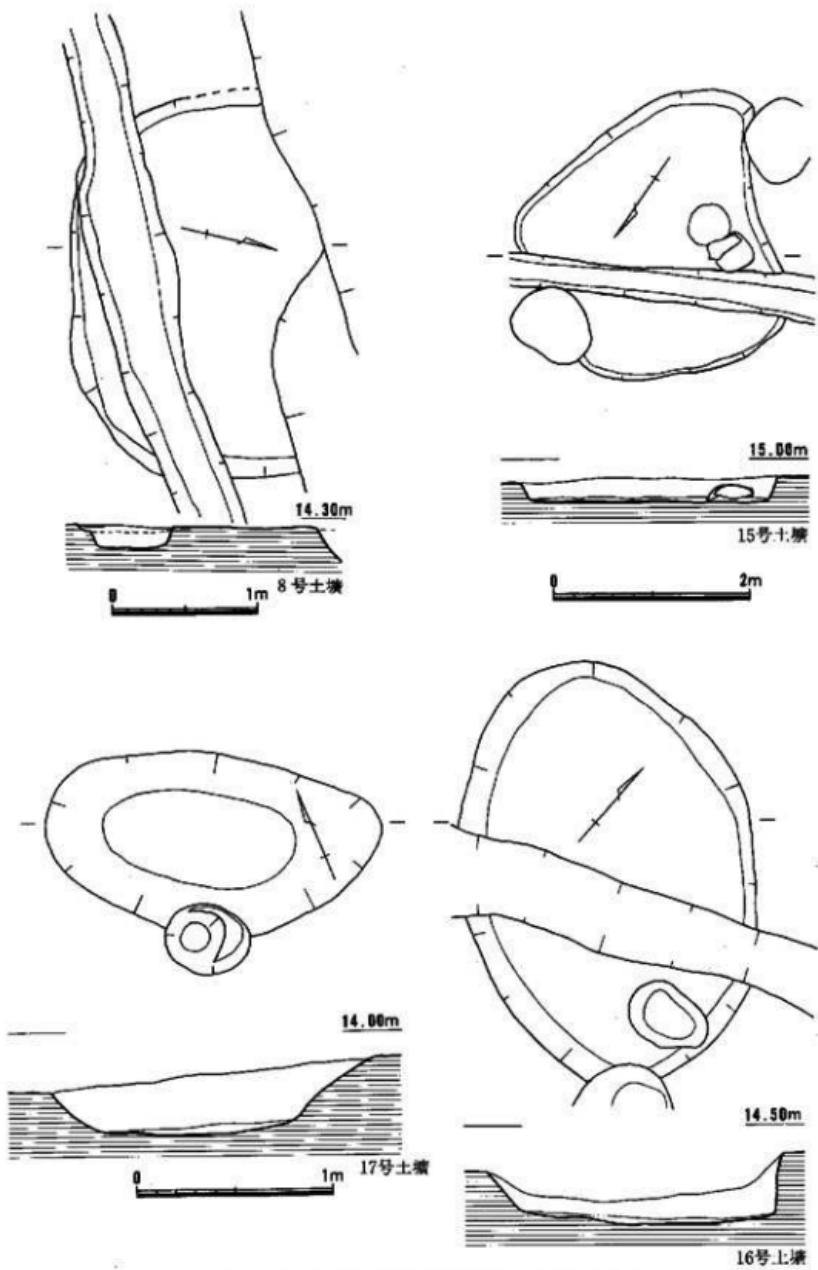


Fig.37 8・15～17号土壤実測図(1/60・1/40・1/30)

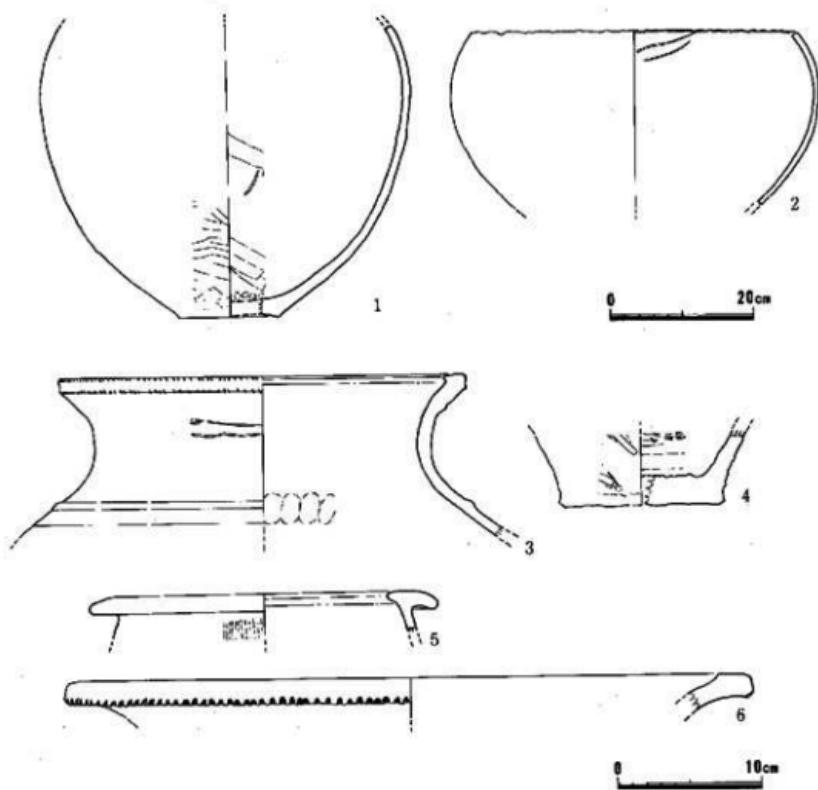


Fig.38 15・17・18号土塚出土遺物実測図(1/4・1/8)

壺棺墓の上蓋に類似しており、同一個体であろう。

8号土塚 (Fig.37)

20号壺棺墓の東側で検出した。北側を削平されるが、方形もしくは長方形に復原されよう。現況では極めて浅い土塚である。出土遺物は見られない。

15号土塚 (Fig.37,38,PL.17)

8号土塚の東側で検出した。やや崩れた方形を呈する。西辺に半截した大形壺を重ねて伏せている。性格は不明であるが、遺物は埋葬用のものと同種である。

出土遺物 Fig.38-1は大形壺である。肩部以上を打ち欠く。球形に近い胴部で、外面にはミガ

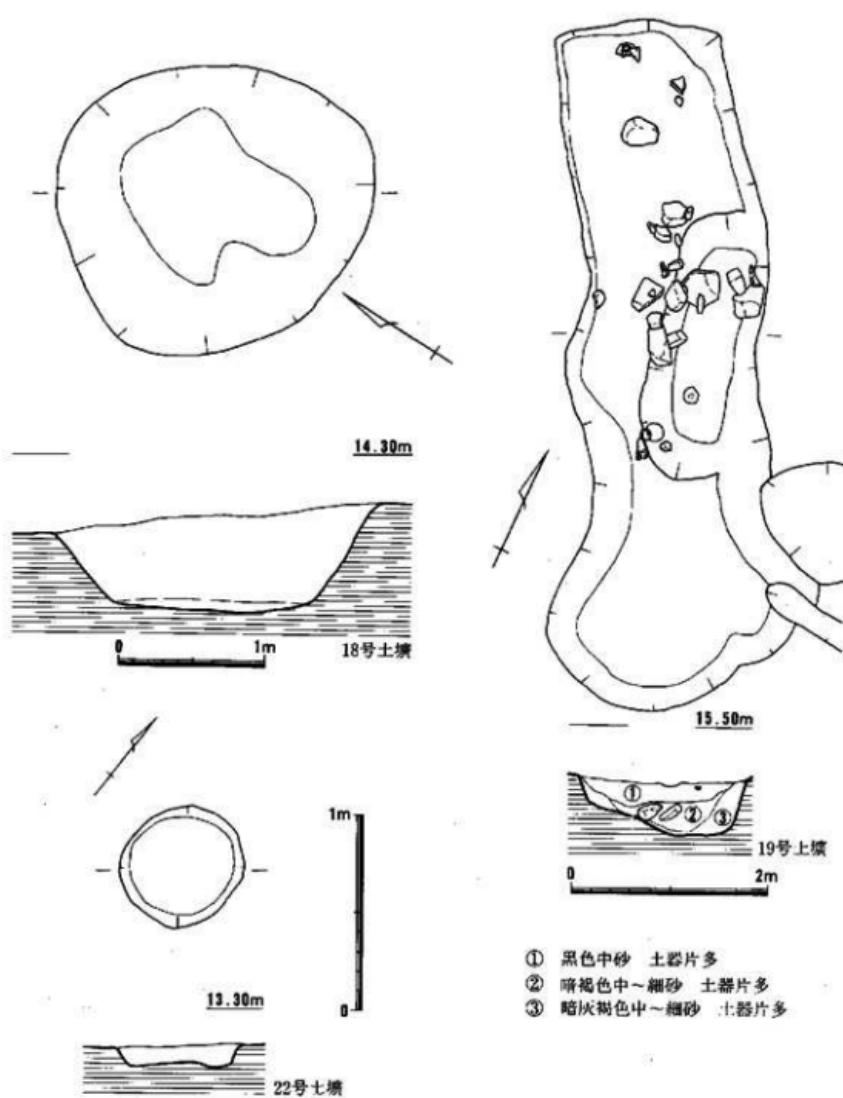


Fig. 39 18·19·22号土壤实测图 (1/40·1/60·1/30)

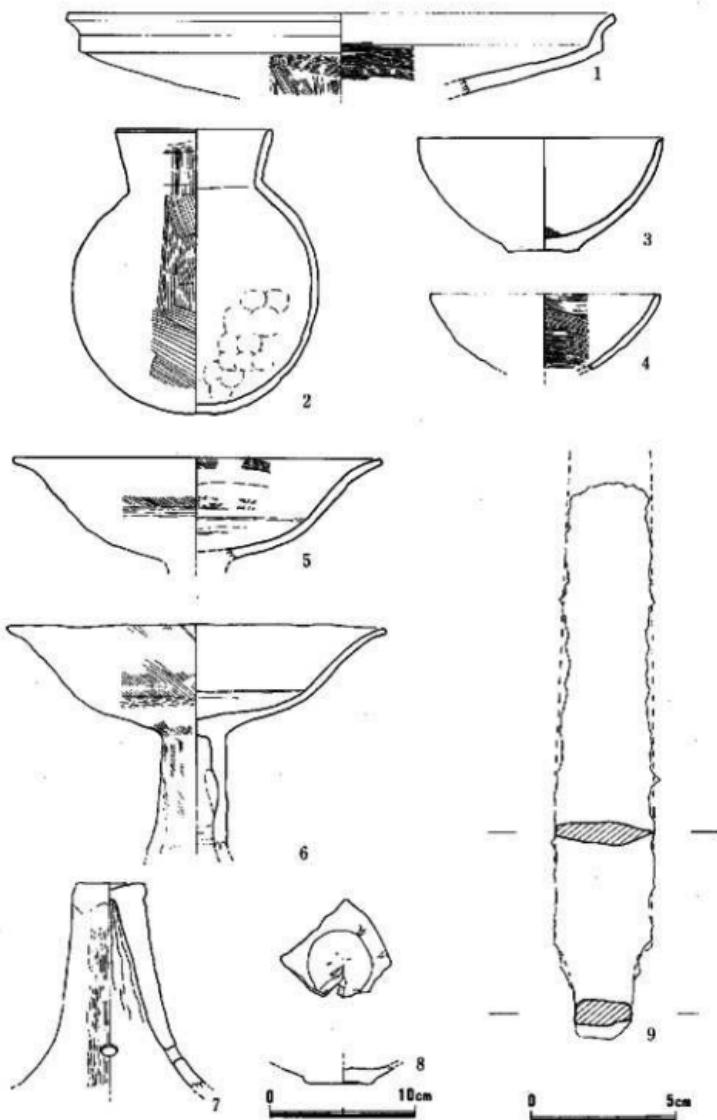


Fig. 40 19号土塘出土遺物実測図(1/4・1/2)

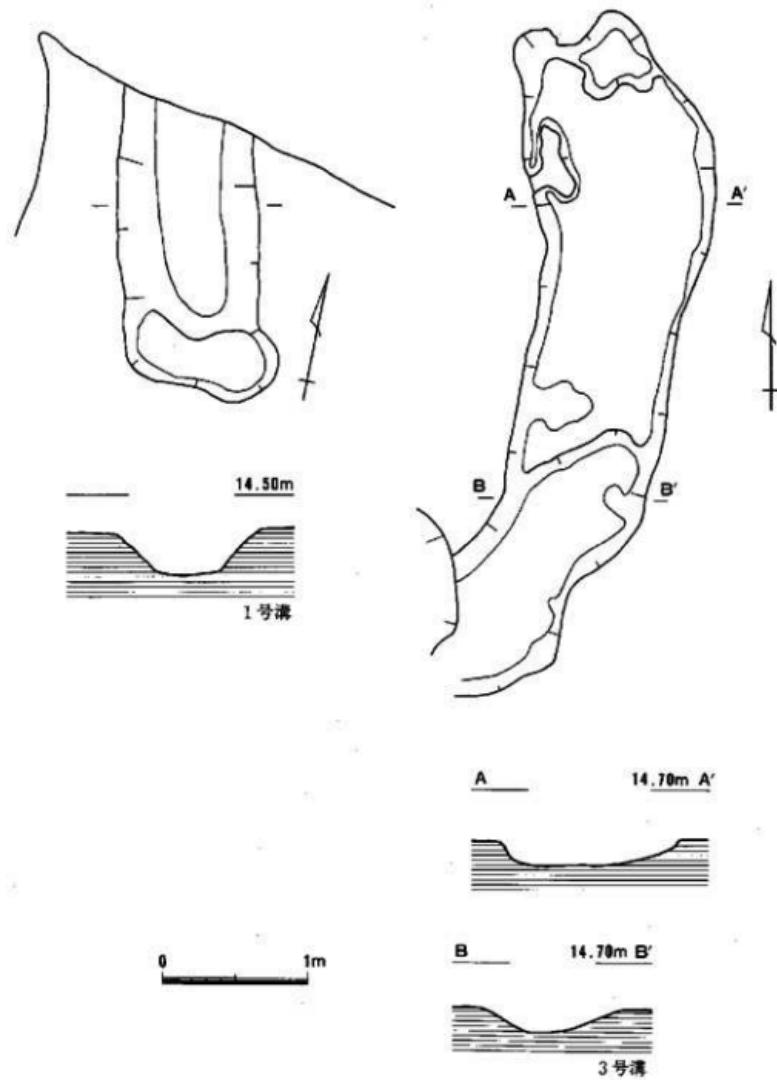


Fig. 41 1・3号溝実測図(1/40)

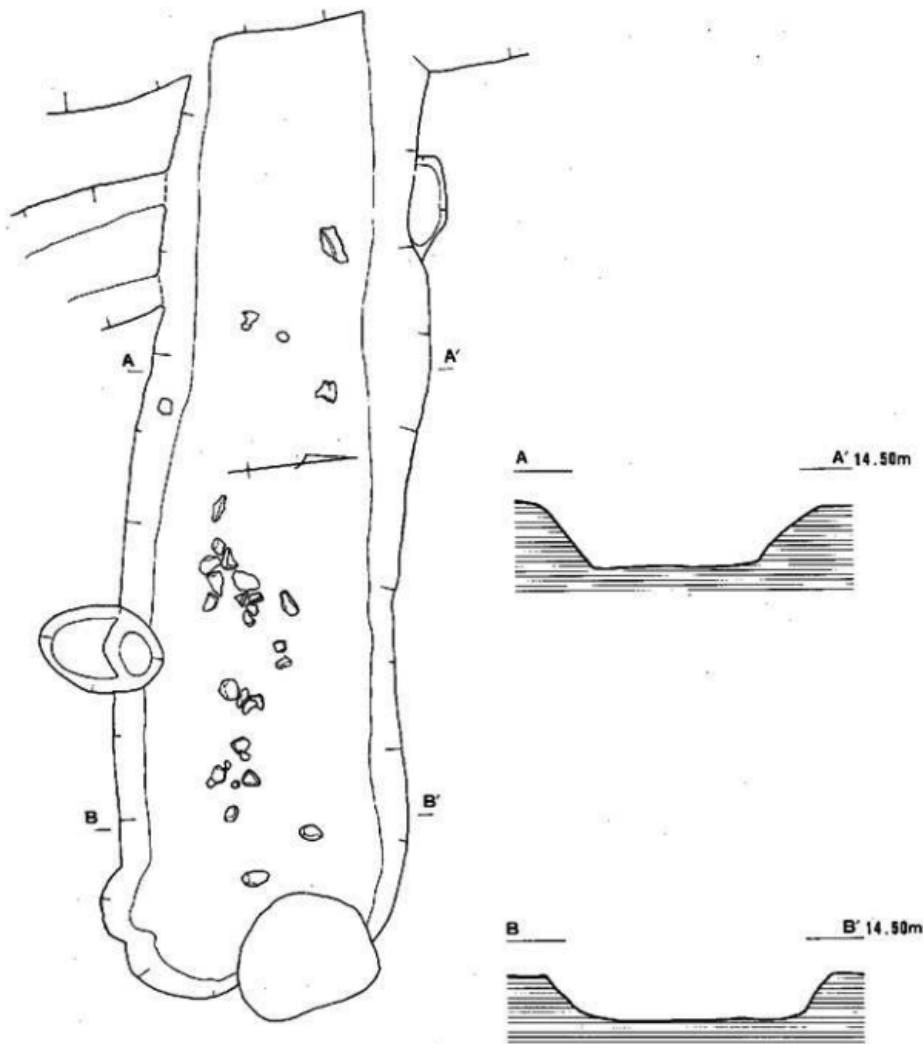


Fig. 42 2号溝実測図(1/40)

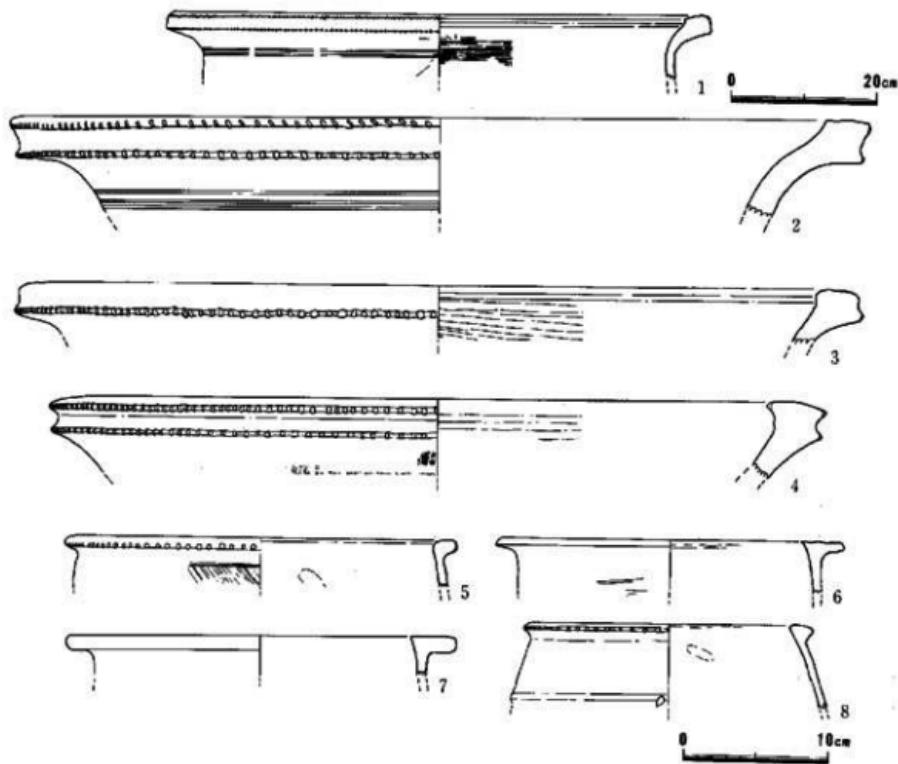


Fig.43 2号溝出土遺物実測図(1)(1/4・1/8)

そもそもは工具による丁寧なナデを施す。底径14cmほどに復原できる。2は1よりやや肩が張る器形になろう。底部を欠く。胴部最大径で52cmほどになろう。3は壺口縁部である。口縁はわずかに肥厚する。端部は平坦面をなし、上下端に刻目を施す。頸部は大きく外反し短い。付け根に突唇状の段を持つ。口径28cmを測る。4は壺底部である。厚い平底である。

18号土壙 (Fig.37, PL.17)

古地部の西北端で検出した。楕円形を呈する土壙で、長2.3m、幅1.6mを測る。性格は不明である。

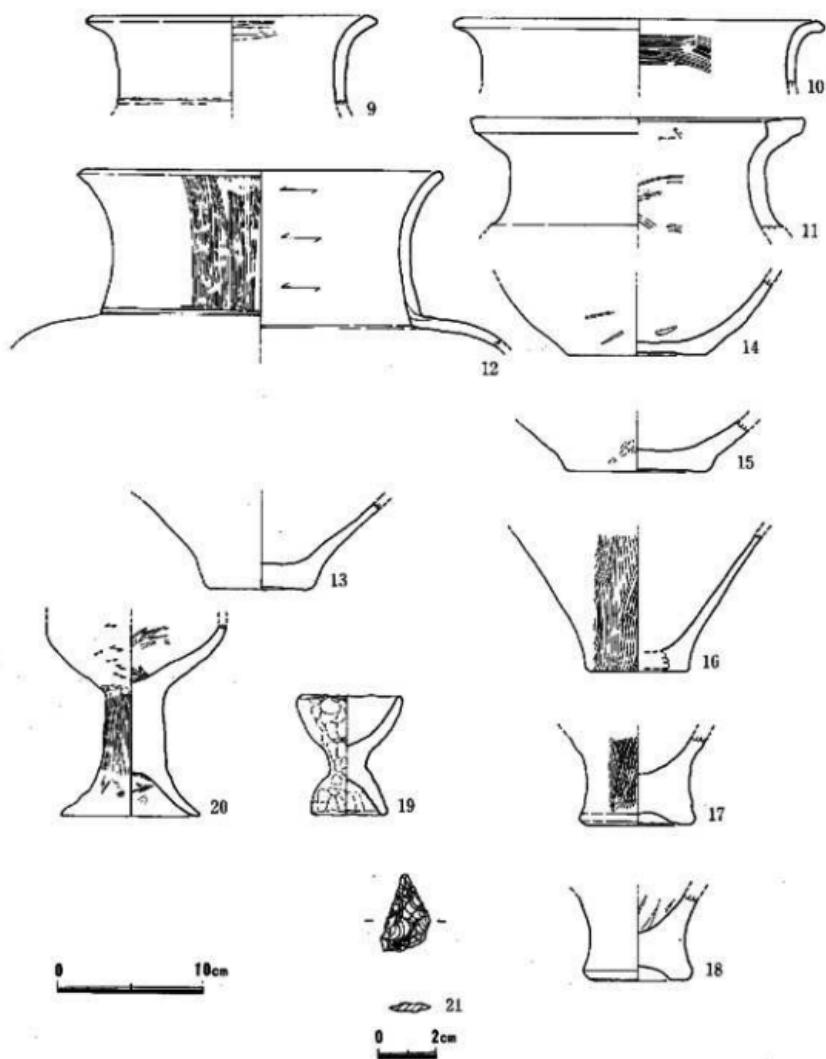
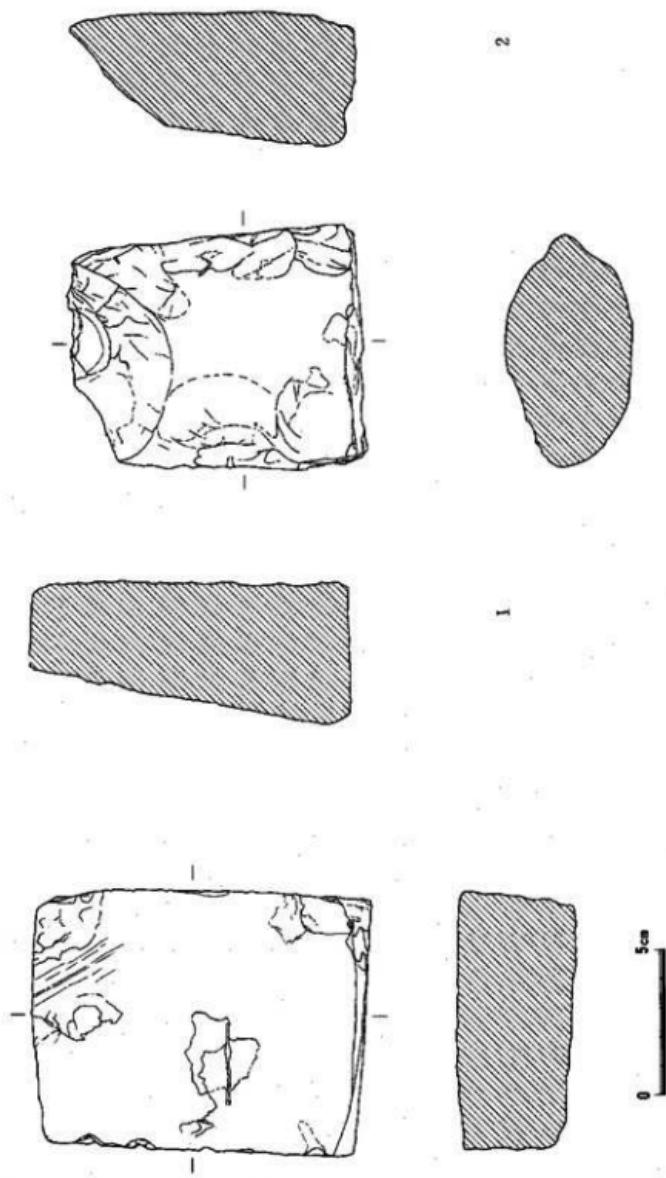


Fig. 44 2号溝出土遺物実測図(2) (1 / 4 · 1 / 2)

Fig.45 1·2号溝出土石器素描圖(1/2)



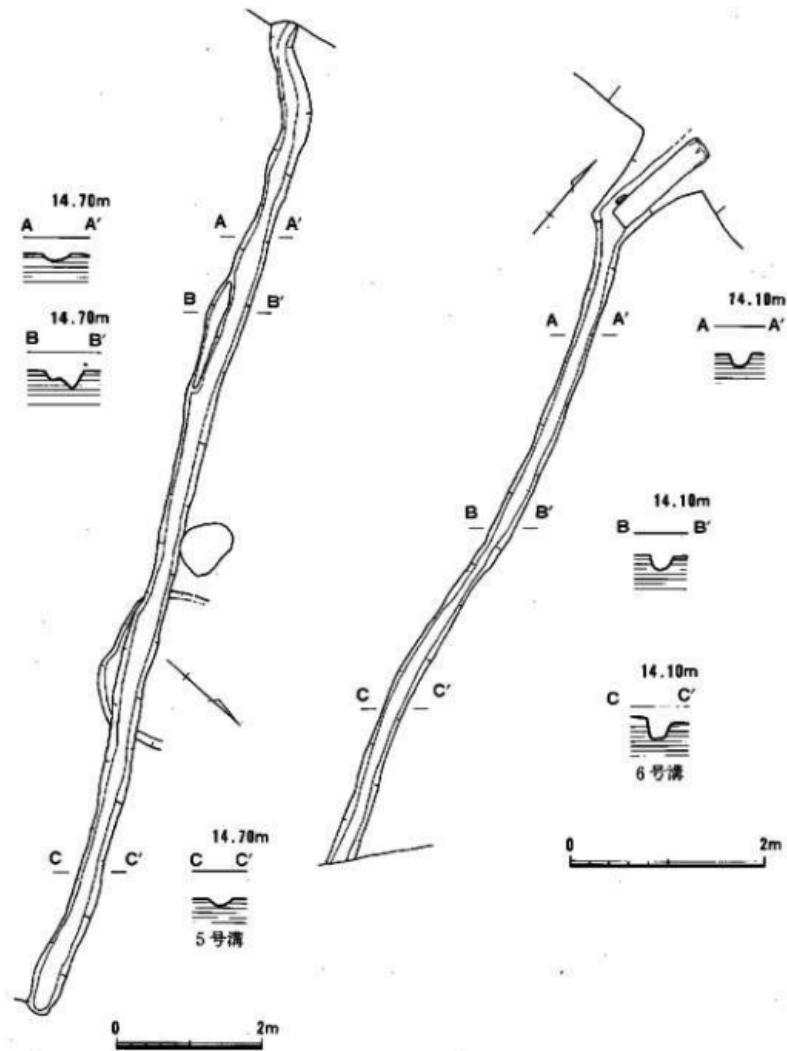


Fig. 46 5・6号溝実測図(1/80・1/60)

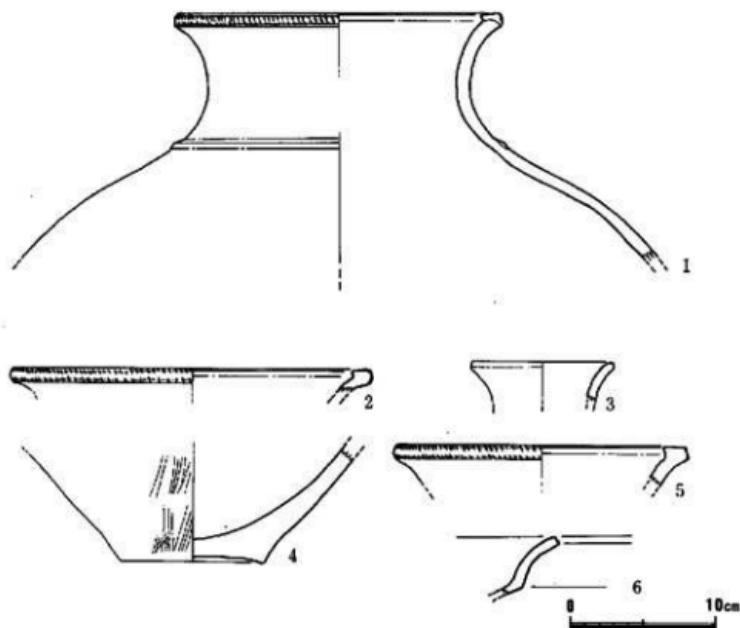


Fig. 47 5号溝出土遺物実測図(1／4)

17号土壤 (Fig.37,38)

29号甕棺墓の西側で検出した。椭円形を呈する土壤で、長1.9m、幅1.1mを測る。性格は不明である。

出土遺物 Fig38- 5は鉗先口縁の甕である。外面にはハケメを施す。

18号土壤 (Fig.39,38)

19号土壤の東側で検出した。円形を呈する。他の土壤に比べて深さがあるが、かなり後世の擾乱の可能性も考えられる。径1 mほどを測る。

出土遺物 Fig38- 6は壺口縁部である。口縁はわずかに肥厚する。端部は平坦面をなし、上下端に刻目を施す。

19号土壤 (Fig.39,40,PL.18)

調査区西南端で検出した。細長い溝状の遺構である。断面は逆台形である。長7 m、幅2 mを測る。遺物を比較的多く出土しており、遺物の項でも述べるとおり、後期甕棺墓地の造営期間とはほぼ重なっている。台地部の西端に位置することからも墓域を画する区画溝の可能性を考えたいが、出土土器は明らかに2時期に分かれる土器が混在しており、出土状況からも複数遺

構の切り合いとは考えられない。この点に疑問も残る。

出土遺物 Fig40-1は高環坏部である。口縁は短く強く外反し、端部は外傾する平坦面を持つ。屈曲部以下にハケメが見られる。復原口径37cmを測る。2は短頸壺である。直線的に開く単口縁で、球形の胴部を持ち、丸底である。外面頸部以下にハケメが見られ、内面底部には指頭痕が見られる。口径10cm、器高19.3cmを測る。3は鉢である。単口縁で、端部を薄く尖らせる。半球形の胴部を持つ。安定した平底である。口径17cm、器高8cmを測る。4も鉢であろう。3より浅い器形である。内面にはハケメが見られる。5は高環坏部である。外面の屈曲部は稜が不明瞭である。内面には沈線状の段を持つ。外面はハケメの後ナデ消している。口径25cmを測る。6も高環坏部である。外面の屈曲部は稜が不明瞭である。内面には沈線状の段を持つ。外面は脚部に至るまでハケメを施した後ナデ消している。口径28cmを測る。脚柱部は脚裾で開くタイプであろう。7は脚柱部である。出土高環はこれだけであるので、5に接続する可能性もある。裾部に向かって緩やかに広がる。4ヶ所に穿孔を施す。外面はハケメが残る。8は底部であるが器種不明。尖り底気味になる。9は鉄劍である。鋒部を欠く。断面は菱形に近いが錐は甘い。茎部長3cm、剣身長30cmほどであろうか。以上の土器群は時期的には2時期に分かれる。1の高環と3の鉢は後期中ごろ、下火限式古段階に位置付けられる。また2、5、6、7は弥生時代終末、西新式に位置付けられる。

22号土壤 (Fig.39)

19号土壤の西側で検出した。床面に礫をしく。径70cmほどの円形である。後世の根締め石を持つ柱穴であろうか。

(4) 溝

溝状遺構は9条検出した。その内弥生時代と考えられる溝と、後世でも形態等はっきりしたものについて報告する。

1号溝 (Fig.41,45)

2号溝に切られる短い溝である。残存長2m、幅1mを測る。

出土遺物 Fig45-1は砾石である。裏面は使用されていない。

2号溝 (Fig.42,43,44,45,PL.19)

調査区西端から斎棺墓群の方に延びる溝である。残存長6.5m、幅2mを測る。断面は逆台形である。前期末～中期斎棺墓と重なる時期と考えられるが、出土遺物に見られるように時期差を持つ土器が混在している。斎棺墓に関連する、祭祀遺構等のようなものであろうか。

出土遺物 Fig43-2は大形甕の口縁であろう。口縁は肥厚させ、上下両端に刻目を施す。口縁部下に沈線を3条巡らす。復原口径58cmを測る。3も大形甕の口縁である。口縁は肥厚させ、下端のみに刻目を施す。復原口径58cmを測る。4も大形甕の口縁であろう。口縁は肥厚させ、接合部は深い凹面をなす。上下両端に刻目を施す。復原口径58cmを測る。1は口径75cmほどに

復原される大形壺である。口縁部は肥厚するが端部は平坦面をなす。上下両端に刻目を施す。口縁部下に沈線を3条巡らす。5は逆L字口縁の壺である。端部下端に刻目を施す。口径27cmを測る。外面にはハケメが見られる。6は鋤先口縁の壺である。端部は丸く取める。7は鋤先気味になる逆L字口縁の壺である。端部は丸く取める。8は胴部上半の突帯に向かって張る胴部を持つ壺である。刻目突帯文系と考えられる。

Fig44-9は壺口縁である。直立気味に立ち上がり口縁端付近で外反する。単口縁である。10も同様な壺であろう。内面にハケメが見られる。11は内側に張り出す口縁を持つ壺である。端部は平世面をなす。12、13は同一個体であろう。丹波の広口壺である。口縁は単口縁である。頸部付け根が締まり大きく肩が張る。頸部外面に縱方向の暗文を施す。口径24cmほどに復原される。14は壺底部である。立ち上がりはあまり外反しない。わずかに上底気味になる。15も壺底部である。安定した厚い平底である。16-18は壺底部である。16は平底で外面はハケメを施す。17は上底であり縦張らない。外面はハケメ。18も同様な壺底部であるが、外面のハケメは消されている。19、20は高坏である。19はミニチュアとすべきか。完形品で、鼓型を呈する。手づくねによって成形し、板状工具によってなで付けて器面調整をしている。極めて堅緻である。20はやや大きい高坏である。器形も少し異なり、脚部は裾広がりになる。外面はミガキを施す。21は黒鐵石製の石鍬である。Fig45-2は玄武岩製の石斧片である。

3号溝 (Fig.41)

13号壺棺墓に切られる深い溝である。位置的には壺棺墓群の東側を画する位置にあるが、出土遺物もなく、性格は不明である。

5号溝、6号溝 (Fig.46,47)

5号、6号溝はともに近世以降の用水路と考えられる。特に6号溝は、台地部から沖積部に落ちる箇所に木製の排水口を設けている。5号溝からは弥生時代遺物が若干混入しておりFig47に図示している。

出土遺物 Fig47-1は短頸壺である。口縁端部に狭い肥厚部を持ち、上下端部に刻目を持つ。頸部付け根に三角突帯を巡らす。肩はあまり張らず、球形に近い胴部を持つ。復原口径22cmを測る。2も同様の壺である。3は単口縁の壺である。4は壺底部。外面にハケメが見られる。5も1、4と同様の短頸壺であろう。以上の土器は弥生時代中期初頭から前半に位置付けられる。6は弥生時代後期後半、下大限式新段階の高坏であろう。

(5) 遺構検出面その他の出土遺物 (Fig.48,49)

壺棺墓内や、後世の搅乱と考えられる遺構、また検出面で出土した遺物のうち特徴的なものについてFig48、49に図示した。Fig48-1は弥生時代後期の大形壺ではないかと考えられる。外反しながら大きく開く頸部を持ち、頸部付け根に突帯を2条巡らす。上突帯は断面台形、下突帯は高いコの字突帯である。2はほぼ完形の小壺である。ミニチュアで時期などよくわからな

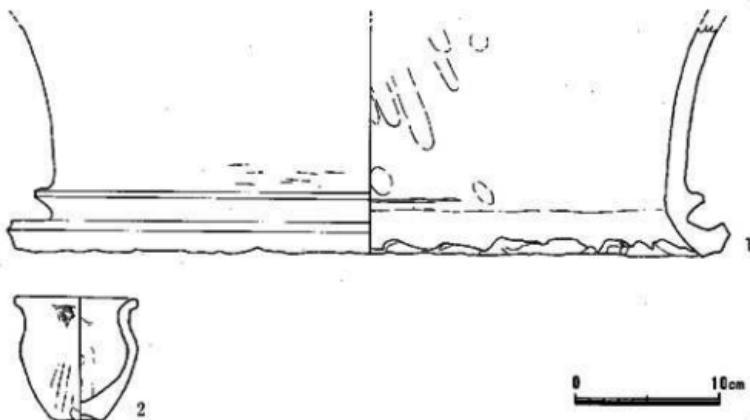


Fig. 48 变形墓出土遺物実測図(1/4)

いが、口縁部の形態、上底状の底部などの特徴から弥生時代前期末から中期の変形墓に伴う時期ではないかと思われる。

Fig49-1は大形壺の口縁である。4類に属する。口縁部下端に刻目を施す。2は逆L字口縁の壺である。胴部上半に突帯を巡らすが、刻目は口縁端のみに施す。3は弥生時代後期の壺であろう。口縁端部に刻目を施し、頸部外面にはハケメを施す。4は逆L字口縁の壺である。外端部に狭い平坦面を持ち、刻目を施す。5は绳文時代押型文土器片である。椭円押型文を施す。6は鉢である。外面には弥生時代後期終末頃の壺によく見られるケズリが見られ、該期のものと考えられる。7は中期初頭に位置付けられる壺の底部である。脚台状の上底を呈する。8も中期初頭に属する壺口縁である。9は近世と思われる摺鉢片である。玉縁状の口縁を持つ。10はミニチュア土器であるが、焼成が他の弥生土器と比べてやや堅緻であり、後世のものかもしれない。11は陶器の碗である。12は内黒の上師器碗である。貼付の高台を持つ。13は陶器の壺と思われる。外面に黒褐色の釉を施す。

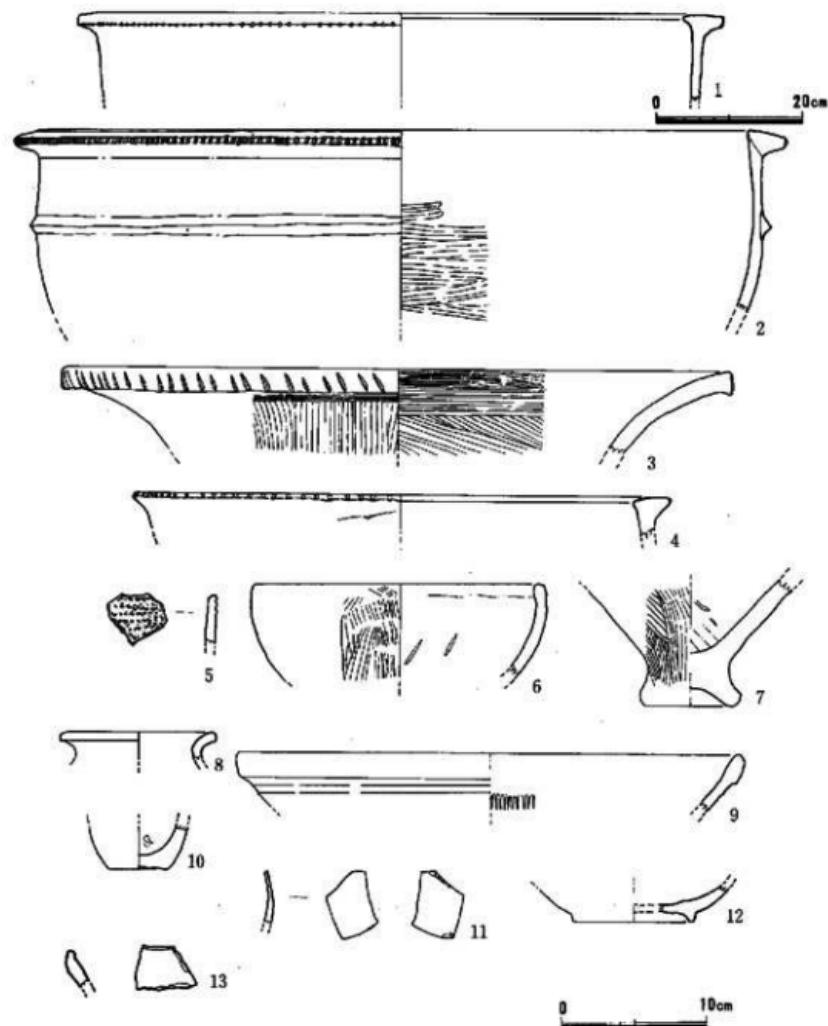


Fig. 49 搪乱・造構面出土遺物実測図(1/4 · 1/8)

2. 飯氏遺跡群III区の調査

(1) 墓地

飯氏遺跡III区では、弥生時代中期中頃～中期後半の甕棺墓65基が検出された。65基の甕棺墓はIII区のはば東端に位置しており、これは南北に延びる丘陵のちょうど頂部に当たる。この丘陵は調査区の北側で大きく削平されており、墓域が更に北側に広がるのは確実である。南側は調査区南端まで甕棺墓が検出されているが、密度が減少する傾向にあり、丘陵南端まで延びる可能性は少ないのでなかろうか。なお、この丘陵は西側から入り込む谷筋により、調査区から400mほどの所で南側を画されており、南端部には後期の前方後円墳である飯氏二塚古墳が築かれている。1992年度から1993年度にかけて行われた確認調査では、墳丘下より甕棺片が発見されている。

今回調査した65基の甕棺墓は、幅5m程の甕棺墓空白域を挟んで整然とした列埋葬を行っている。列はほぼ南北方向であるが、これは丘陵の延びる方向に一致しているためである。また、列を直行する方向にもいくつかの甕棺墓の希薄な箇所が見られ、その付近には列に直行して埋葬される甕棺墓が見られることから、この空白と列直行埋葬の甕棺墓を基準に、全体を何群かに分けることができそうである。調査時には検出順に1号から造構番号を振ったが、報告時には、甕棺列を横断するA～Cの3群に大別する。A群とB群の境は列に直交する主軸を持つ17号甕棺墓付近の空白域、B群とC群の境は同様に56号、57号甕棺墓付近の空白域に設定できよう。さらにそれぞれを東列(E)、西列(W)に細分し、調査区内の甕棺墓をAE～CWの6群に分けて記述し、各群内の時期ごとの造墓の消長を見た後、墓地全体の様相について検討する。

1) AE群の甕棺墓の調査

AE群は西側を大きく削平され、大形棺3基を検出したのみである。削平の状況を加味しても、最北端にある1号甕棺墓の北側には空白域があった可能性が高い。

1号甕棺墓 (Fig.51,52,PL20.)

AE群の最も北側に位置する大形棺である。墓の上半部を削平される。主軸をN-10°-Eに取る。埋置角は9°ではなく水平である。甕棺は鉢形土器と甕形土器からなる合口甕棺墓である。掘方はやや崩れた方形で、両端に低い段を持つ。長2.05m、幅0.85mを測る。掘方壁の傾斜はゆるやかで、甕棺の形態に合わせたものといえよう。

上甕 鋤先口縁の大形鉢形土器(以下、大形鉢と略称する。)である。口縁は外傾する。口縁端は外側はほぼ丸く収め、内側は軽い棱が立つ。口縁下に断面三角の突帯を2条巡らす。底部にかけて緩やかにすぼまり、底部からの立ち上がりは外反する。底部はほぼ平底である。内外面ともハケメの後などで消している。口径75.6cm、底径14cm、器高44.8cmを測る。

下甕 大形の埋葬専用甕形土器(以下大形甕と略称する。)である。口縁部に最大径があり、胴部最大径が口縁直下に来る砲弾形を呈する。口縁部は鋤先口縁である。口縁端は水平に近いが、

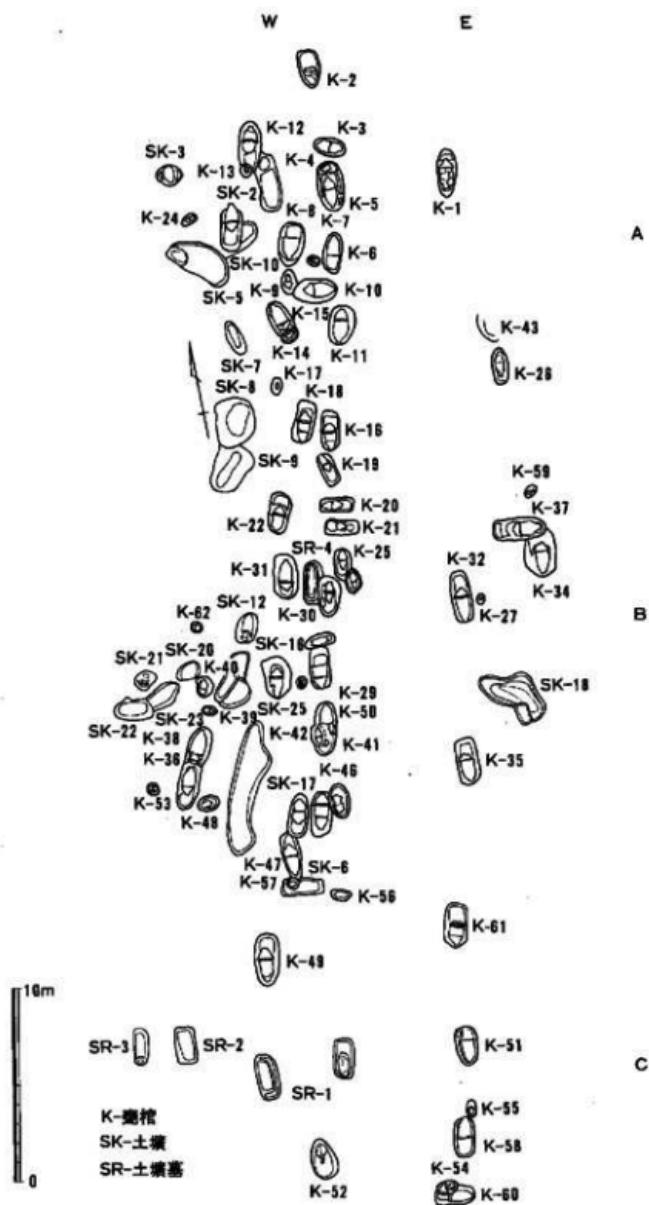


Fig.50 III区變形帶配圖(1 / 300)

やや外傾する。従って最高部は口縁内端部にある。口縁外端部は鈍い平坦面をなし、内端部にはかなり明瞭な棱が立つ。口縁直下に断面三角の突帯を1条、胴部のはば中位に2条巡らす。突帯付近から底部へかけて緩くすぼまる。底部はわずかに上底状を呈する。外面は器壁が荒れており調整が明らかでないが、最終の調整はナデが施されているよう。尚、口縁部および突帯にはヨコナデが施されている。内面もナデが施されているが、工具に依ったものと思われ、圧痕らしき痕跡が観察される。口径72cm、底径14.5cm、器高112.9cmを測る。上縁の方がやや口径が大きい。

26号甕棺墓 (Fig.51,53,PL.21)

A E群の南端に位置する。東側を道路の切通しにより削平される。墓の上半部を削平される。主軸をS-5°-Wに向け、1号甕棺墓と南北が逆になる。埋置角はほぼ水平である。鉢形土器と焼形土器から成る合口甕棺である。掘方は上甕側が方形、下甕側が丸くなる。掘方の床はほぼ平坦である。両端の壁は傾斜を持ち、下甕側については甕棺の形状に合わせたものと見て良かろう。長1.8m、残存幅0.75mを測る。

上甕 大形鉢である。口縁部は鋤先口縁で、大きく外傾する。外端部は鈍い平坦面を成し、内端部は丸く收める。口縁部直下に断面三角の突帯を2条巡らせる。胴部は上半部は丸みを持つが、下半部はかなり直線的である。底部の立ち上がりは外反する。底部はやや上底状を呈する。口径69cm、底径11.5cm、器高39.4cmを測る。

下甕 大形甕である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、胴部最大径が口縁と胴部突帯の中間、即ち器高の上から1/4ほどの所に有る。従って胴部はやや丸みを帯びる。口縁部は内側の張出しが弱い鋤先口縁で、口縁上面が緩く湾曲して内外に下がるため、最高部は口縁上面中央にある。口縁外端部は明瞭な平坦面を成し、細い刻目を施す。口縁直下に1条、胴部中位に2条、断面三角の突帯を巡らす。器壁が荒れており、外面の調整が明らかでないが、口縁部と突帯はヨコナデを施す。他の部位も最終的にはナデ調整されていく。内面は工具によるナデで、工具痕が認められる。口径65cm、底径12.8cm、器高99.8cmを測る。上甕の方がやや口径が大きい。

43号甕棺墓 (Fig.54)

道路の切通しに大きく削平された甕棺墓で、表土除去時に人半が道路側へ崩落した。遺存部については、写真は辛うじて撮影したもの、実測図については道路面との比高差が大きく安全上問題が在り、断念した。

上甕 大形鉢である。口縁は鋤先口縁であるが内側への張出しあは小さい。口縁端部は内外ともほぼ丸く收める。口縁は若干外傾し、最高部は口縁内部端に有る。口縁部直下に断面三角の突帯を1条巡らす。胴部上半は丸みを持ち、底部からの立ち上がりは外反する。底部はほぼ平底である。口径58.8cm、底径11.8cm、器高42.5cmを測る。

下甕 大形甕である。口縁と胴部は削平により失われている。遺存部は胴部突帯付近から胴部

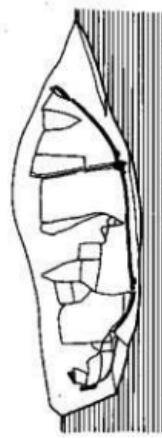
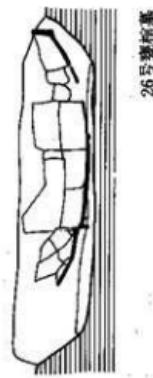
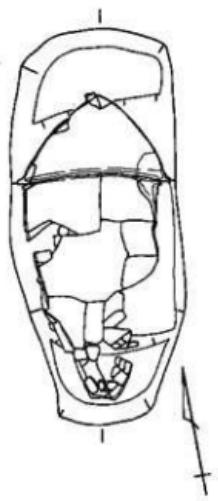
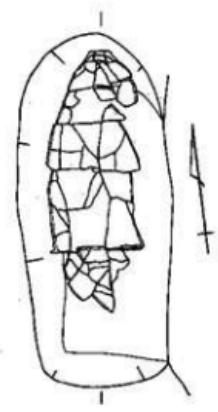


Fig. 51 AE#1 - 26号雙柄蟲測圖 (1 / 30)

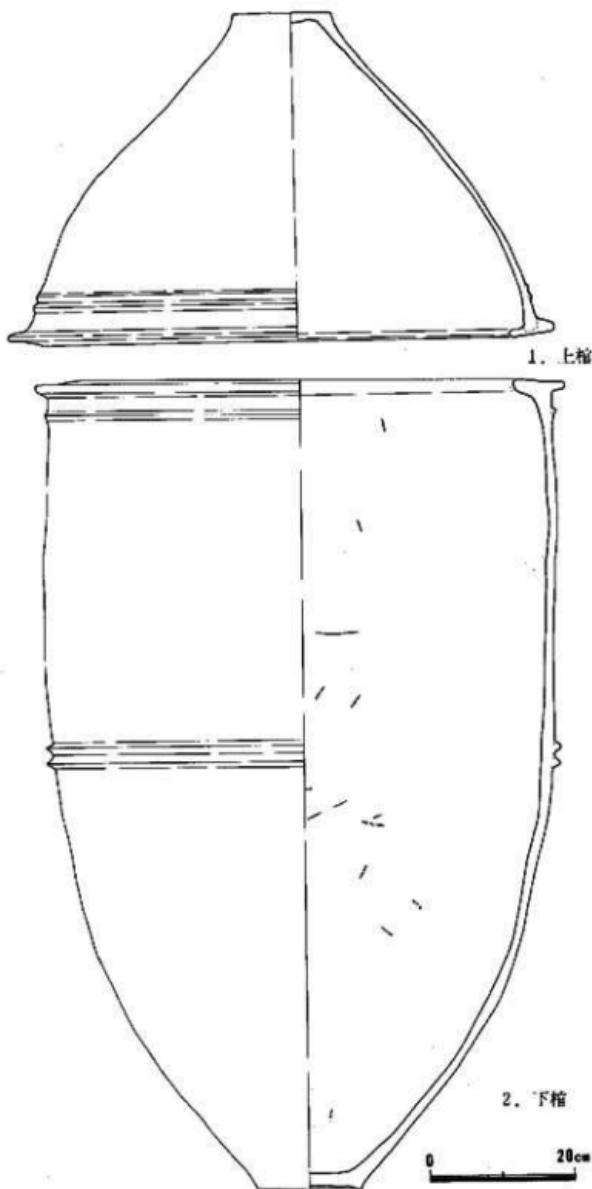


Fig. 52 1号墓棺実測図(1/8)

下半にかけてである。胸部には高くシャープな断面山形の突帯が2条巡る。突帯から上部は緩くそぼまる感があるが、あまり丸みを帯びるとは思われず、26号棺下蓋のようなものより、1号棺下蓋のような器形になるものと思われる。胸部最大径で復原径80cmを測るが、他例と比較するともう少し小さくなるとも思われる。

A-E群の墓棺について、造営順を推測して見よう。1号墓と26号墓を比較すると、26号棺下蓋の方がやや丸みを持つプロポーション、口縁部の内側への張出し、口縁外端部の処理と刻目、等に後出的な要素が認められる。しかしその差異は微細といって良い。また上蓋についてはプロポーションにはほとんど差が無いが、下蓋同様口縁の内側への張出しが弱い。以上の特徴は、形態的には後出的ではあるが、型式差や時期差として認めうるかについてはやや疑問である。次に43号墓と比較すると、上蓋の丸いプロポーションは1、26号に比べて新しい感を受ける。ま

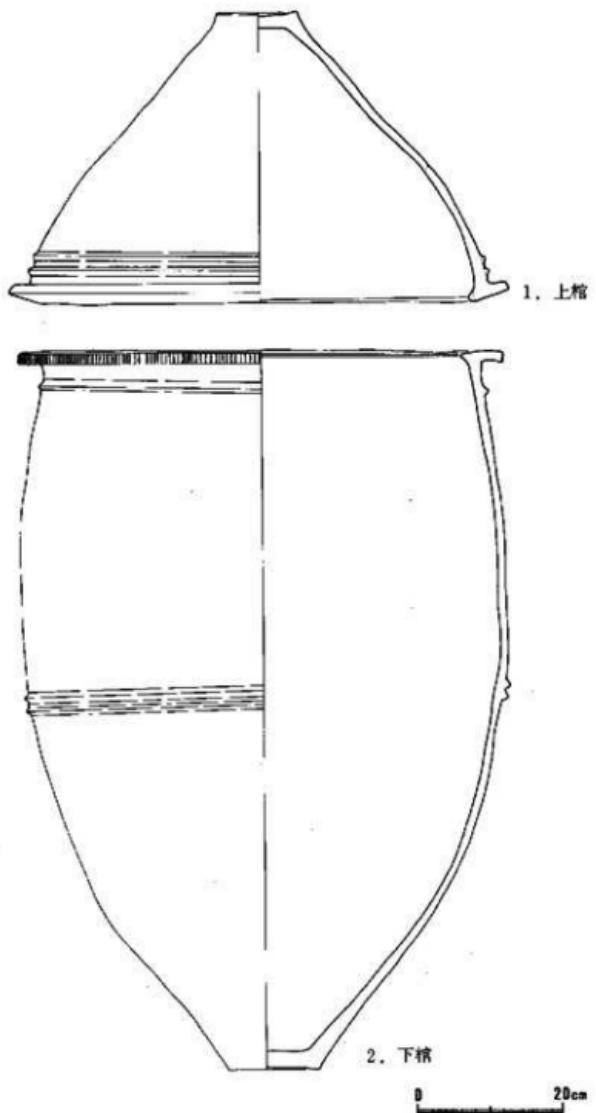


Fig. 53 26号墓実測図(1/8)

た、下蓋のシャープな突帯も同様である。しかし、型式差とみなすのはやはり疑問も残る。これらの墓を分布から見ると、北から1、26、43号と並んでいるので、北側から順に造営されたと考え、ある程度の時間差を考えても良いのかも知れない。

2) AW群の墓群 まず人形棺より報告する。 2号墓 (Fig.55, PL. 21, 61)

調査区内で最北端に位置する。主軸をほぼ南北にとり、ほぼ水平の埋置角を取る。単棺である。掘方は口縁側が方形、底部側が墓棺の形態に合わせた橢円形を呈する。断面は口縁側が比較的直に立つのにたいし、底部側は墓棺の形態に合わせたゆるやかな斜面をなす。掘方の長1.9m、幅1mを測る。

墓棺 大形甕である。口縁は鋤先口縁で外傾する。外端は平坦面を成し、内端は丸く收める。断面三角の突帯を口縁部直下に1条、胴部中位に2条巡らす。底部

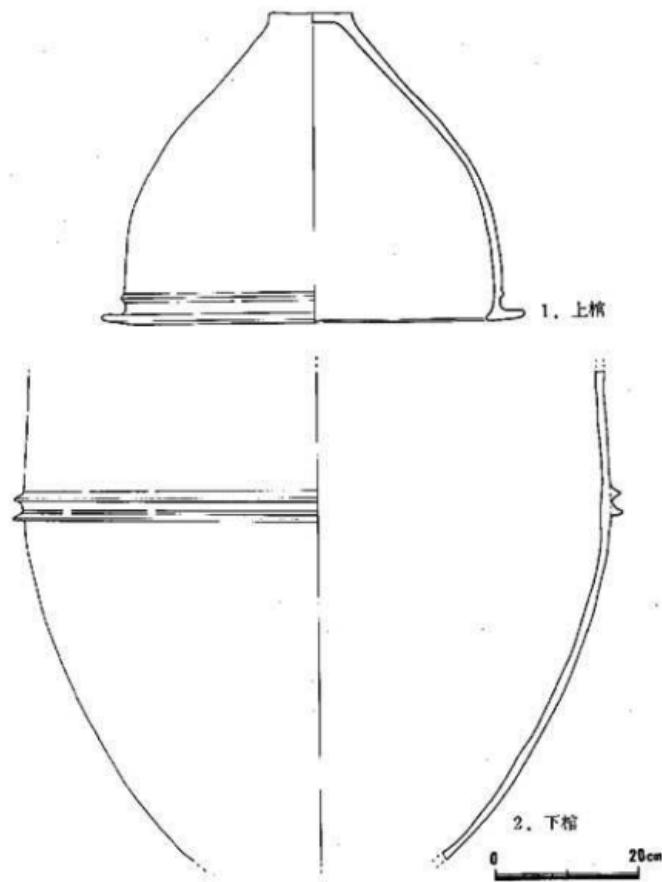


Fig.54 43号壺棺実測図(1/8)

はわずかに上底気味になる。胸部上半はやや丸みを持つ。口徑73.8cm、底徑14.5cm、器高112.9を測る。

3号壺棺墓 (Fig.56,57,PL.22)

2号壺棺の南側で検出した。主軸はN-66°-Wで、列に直行する壺棺である。3号棺と2号棺の間は空白域である可能性もあり、ここを境にさらに北へ伸びる既に削平された1群があつた可能性がある。掘方は長楕円形を呈する。2号棺など列に平行する壺棺墓と比べて掘方が不定

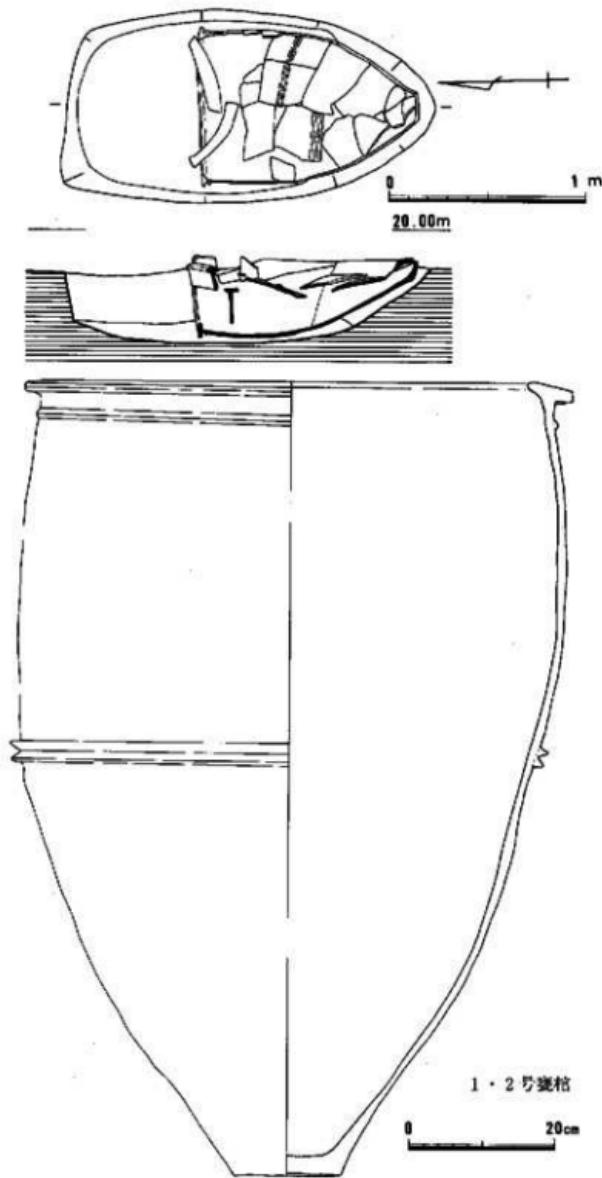


Fig.55 AW群2号墓棺墓 (1/30)・2号墓棺 (1/8)実測図

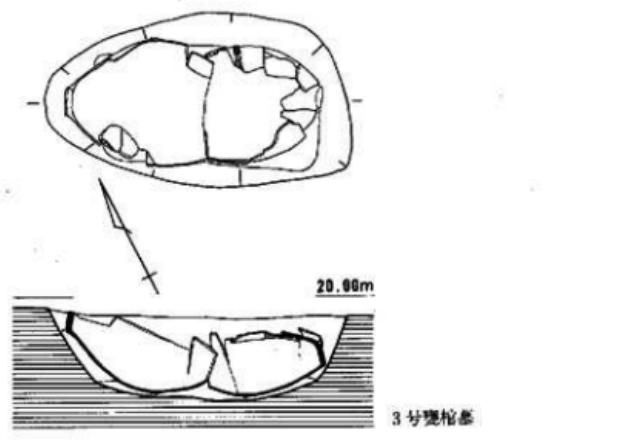
形でかつ余裕が無い。埋置角は10°くらいであろうか。埋置角から東側を上室と考えたが逆の可能性もある。掘方の長1.5m、幅0.9mを測る。

上室 大形甕である。口縁部を打ち欠く。断面三角の細い突帯を口縁部付け根に1条、胴部最大径付近に2条巡らす。最大径は胴部の上位1/3程の所にある。底部は厚い平底である。内外面ともナデで最終調整される。打ち欠き部での径46cm、底径12cm、現器高74.9cmを測る。

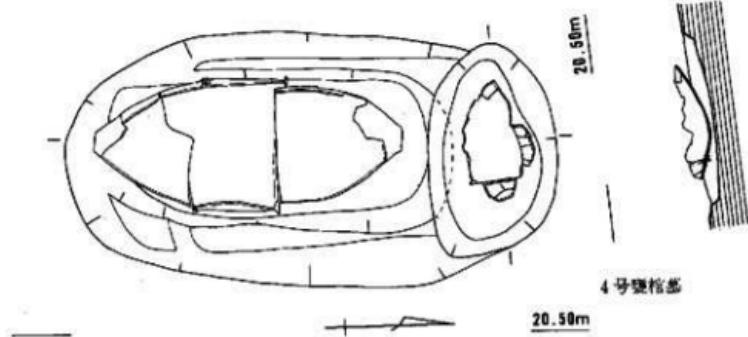
下室 上室と同様口縁を打ち欠く大形甕である。上室よりやや胴部径が小さく細身であるが、突帯の位置などはよく似通っている。突帯は上室より更に細く、あるいは断面M字の1条突帯とすべきであろうか。底部はわずかに上底状を呈する。打ち欠き部での径47.9cm、底径10.8cm、器高63.5cmを測る。

5号墓棺墓 (Fig.56, 58, PL.22, 62)

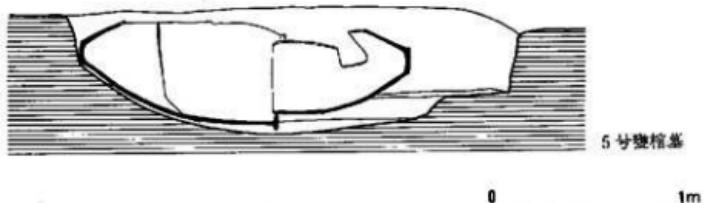
3号墓棺墓の南側で検出。小形棺である4号棺に切ら



3号鹽樁基



4号鹽樁基



5号鹽樁基

Fig.56 3~5号鹽樁基実測図 (1/30)

0 1m

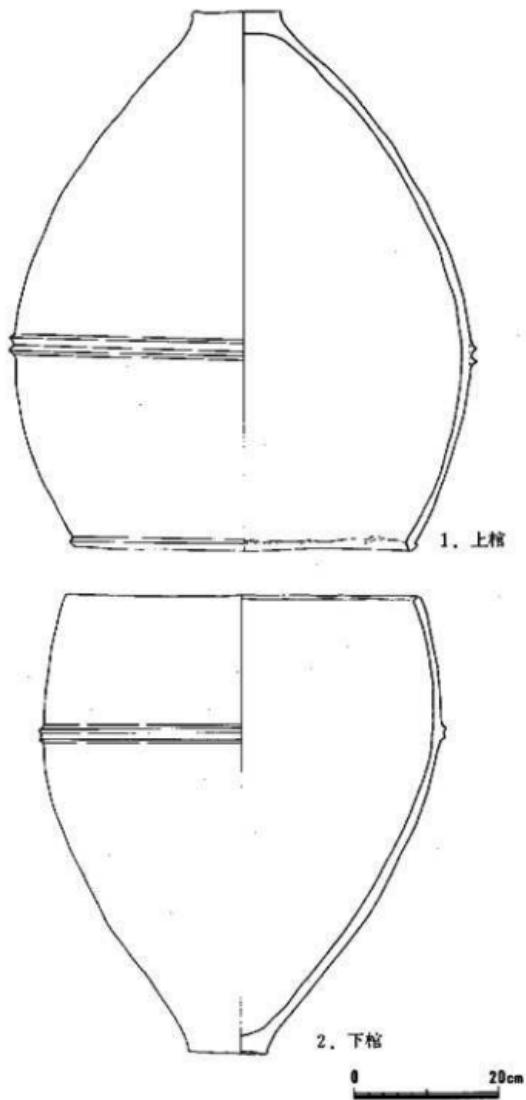


Fig. 57 3号墓棺内測図(1/8)

れる。主軸はN-2°-Eではほぼ南北方向を向く。埋置角はほぼ水平である。上蓋の口縁を打ち欠き、下甕に差し込んでいる。掘方は上甕側が方形、下甕側が橢円形を呈する。一旦床を平坦に掘った後甕棺の形態に合わせてさらに掘り凹めている。掘方の長2.35m、幅1.3mを測る。

上甕 大形甕の上半部を粘土帶の接合部から打ち欠いたものである。調部中位に断面M字の細い突帯を1条巡らす。胴部上位はかなり丸みを持つようである。打ち欠き部での径53.1cm、底径13cm、現器高56cmを測る。

下甕 大形甕である。砲弾形を呈し、胴部最大径は外端での口径を上回らない。口縁下には突帯が無く、胴部中位に断面三角の突帯を2条巡らす。口縁部はほぼ水平で、外側にわずかに下がる。外端部は平坦面を成し、内端部は丸く收める。口径70cm、底径12.3cm、器高97.4cmを測る。

6号甕棺墓 (Fig.59, PL.23)

5号棺の南側で検出した。単棺の甕棺墓である。主軸はN-163°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長椭円形を呈するが、口縁側は方形を意識している可能性もある。掘方壁は両端ともかなり直に近い。長2

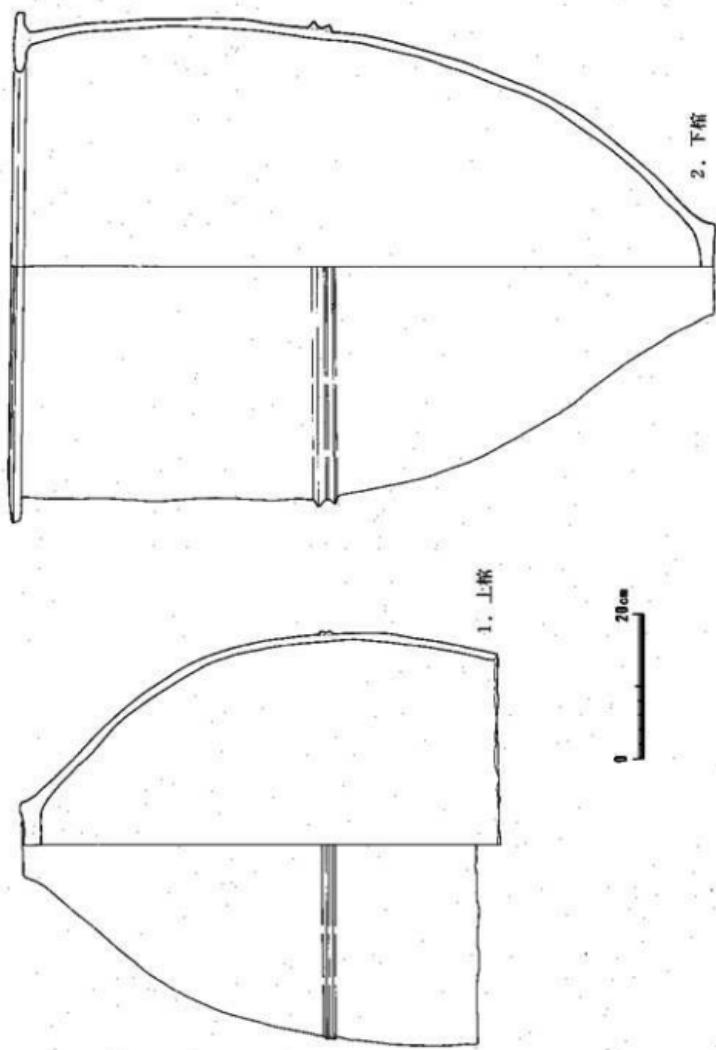


Fig.58 5号麦柄实测图(1/8)

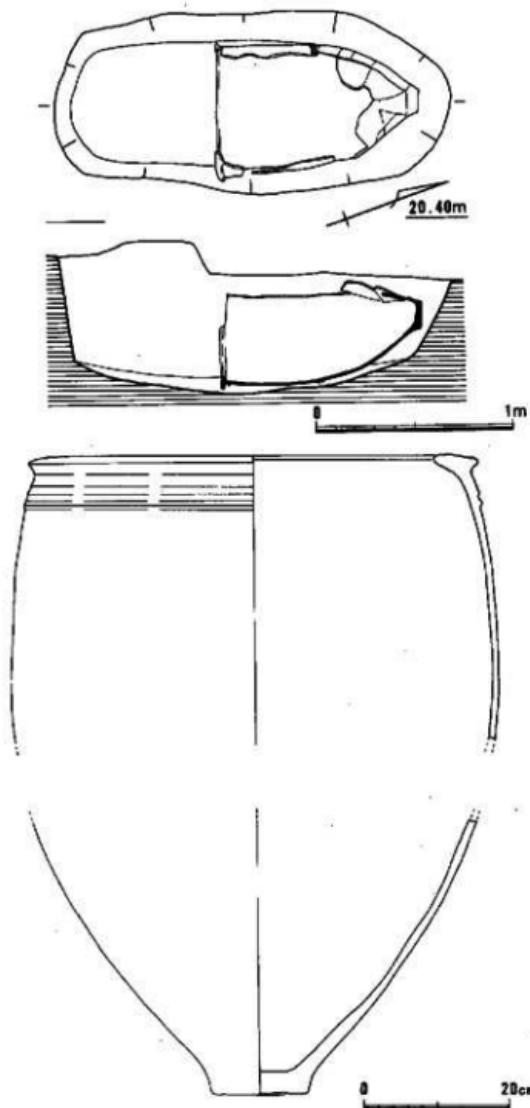


Fig.59 6号墓棺墓 (1/30)・6号墓室 (1/8)実測図

m、幅0.9mを測る。

妻棺 鋸先口縁の大形棺である。遺存が極めて悪い。口縁部は内外に張り出す。水平に近いが、やや外傾する。磨滅しているが口縁下の突帯は断面三角のものを1条巡らすと思われる。また、接合できなくて正確な部位が明らかでないが、胴部中位付近に突帯を2条巡らす。復原口徑60.5cm、底径13cmを測る。器高は100cmほどであろう。

8号墓棺墓 (Fig.60, PL.23, 61)

6号棺の西側で検出した。單棺の妻棺墓である。主軸はN-16°-Eを向く。6号棺とちょうど南北逆になっている。埋置角は6°ではなく水平である。掘方は口縁側が方形で底部側は梢円形を呈する。床を一旦平坦に掘った後妻棺埋置部を形態に合わせて掘り凹めている。さらに底部側には浅い横穴を掘り、安定を図っている。掘方の長2.1m、幅1.3mを測る。

妻棺 脇部最大径が口縁部直下にある砲弾形を呈する大形妻である。口縁は内外に大きく張り出す鋸先口縁で、大きく外傾する。口縁直下に断面三角の突帯を1条、胴部中位若干下に断面山形の高い突帯を2条巡らす。

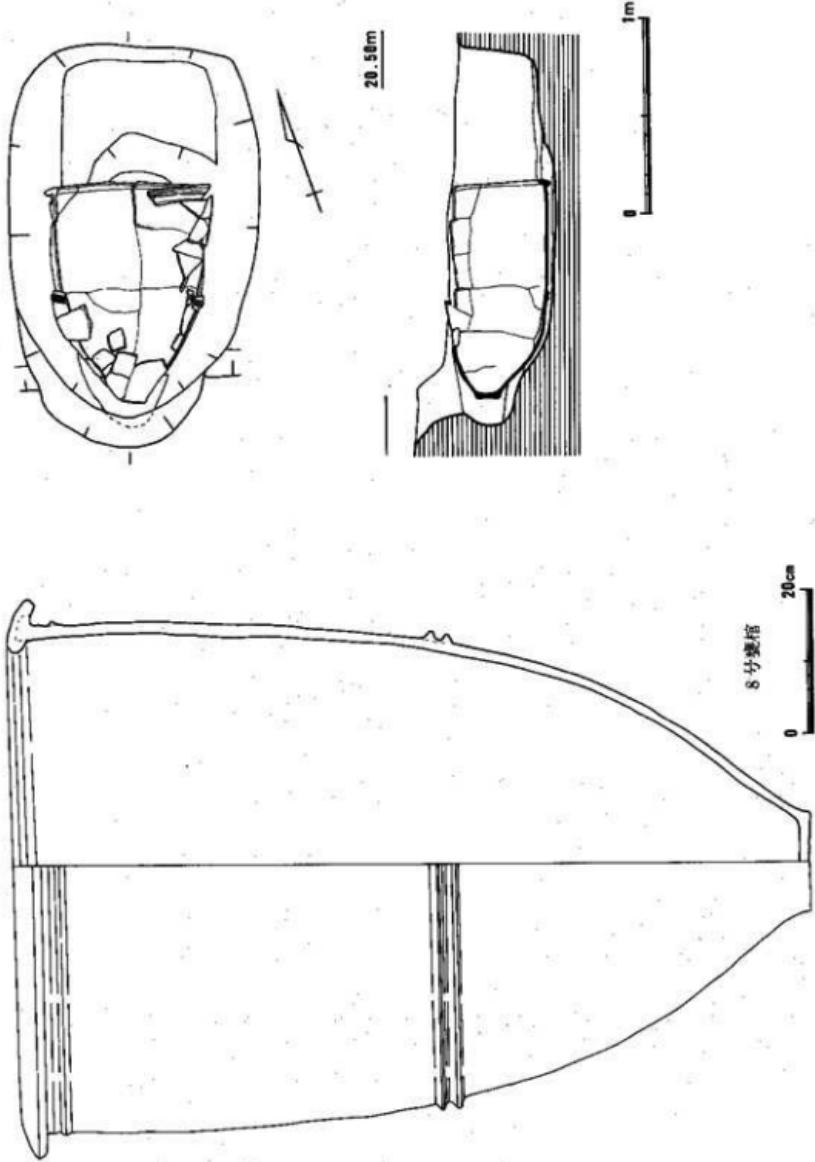


Fig. 60 8号鑄模 (1/30) · 8号鑄模 (1/8) 施測圖

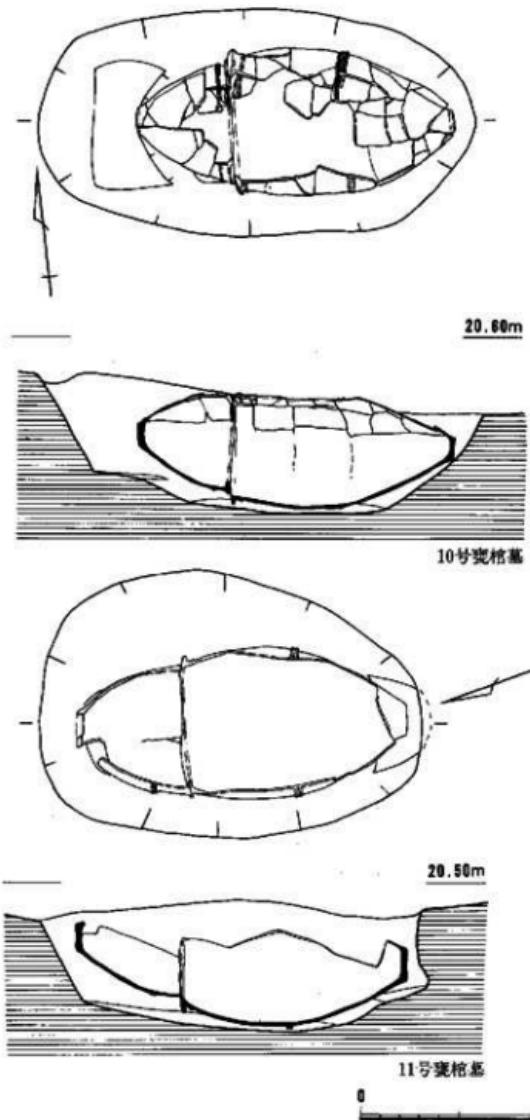


Fig. 61 10・11号墓柾実測図(1/30)

口径76.4cm、底径13.6cm、器高111.1cmを測る。

10号墓柾基 (Fig.61,62)

6、8号棺の南側で検出。大形棺で東西軸を取る数少ない例である。主軸はN-83°-Wに取る。埋置角はほぼ水平である。掘方は長楕円形を呈し、長2.2m、幅1.2mを測る。上甕側に段を持つ。上甕 大形甕である。口縁は鋤先口縁で内外に張出し、大きく外傾する。端部は内外とも平坦面を成す。口縁下に断面三角の突帯を1条巡らす。口縁に比して器高が高く丈高の感が有る。外面に底部近くにハケメが残る。口径60.3cm、底径12.2cm、器高45.1cmを測る。

下甕 大形甕である。胴部最大径が上位1/4ほど、即ち胴部突帯と口縁の中間付近にあり、かつ口径を上回る。口縁は鋤先口縁で、内外に張出し、やや外傾する。口縁外端は平坦面をなす。口縁直下に1条、胴部中位に2条の断面三角突帯を巡らす。口径55.9cm、底径12.2cm、器高111.5cmを測る。

11号墓柾基 (Fig.61,63, PL.23)

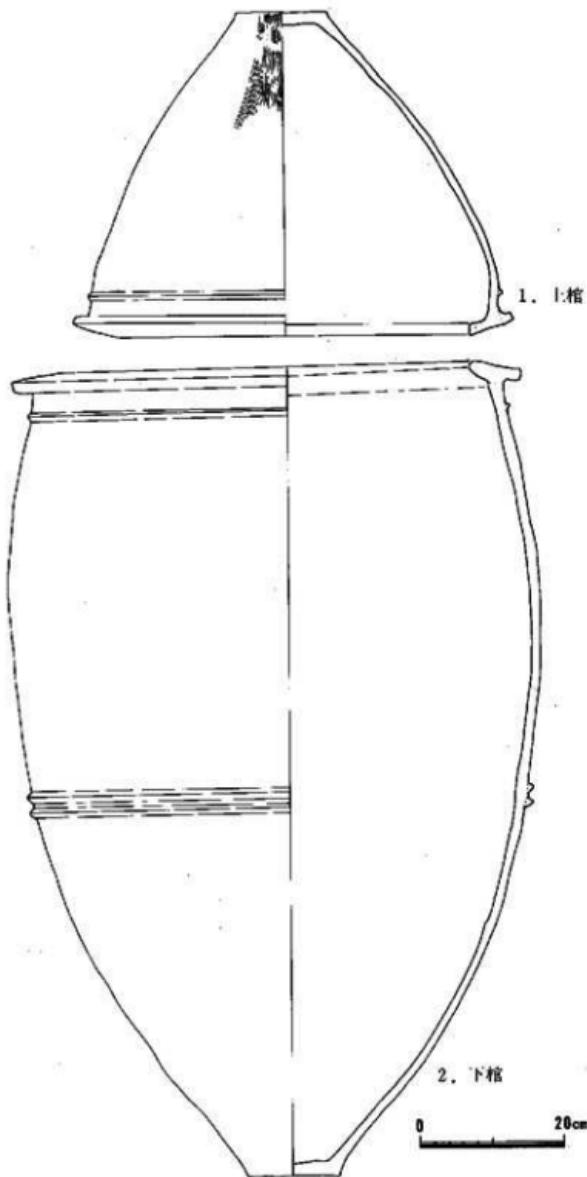


Fig. 62 10号甕棺実測図(1/8)

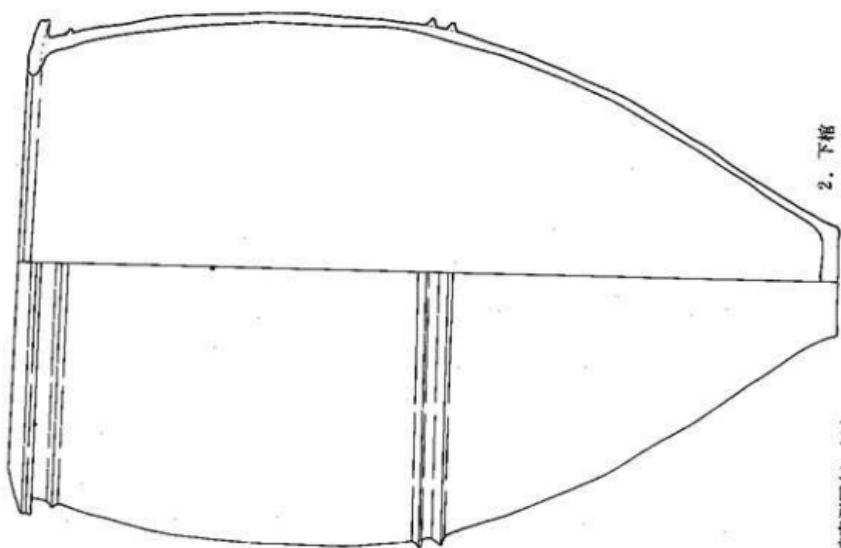
10号棺の南側で検出。主軸をN-17°-Eに取る。埋置角は5°である。掘方は楕円形を呈する。調査区内で主流をなす列に平行する甕棺墓は、掘方内の上甕側に比較的広い空間を取るのが通有であるが、この11号棺は掘方に余裕が無い。下甕底部側には小さな横穴を穿つ。掘方長1.95m、幅1.45mを測る。

上甕 大形甕の胸部突帯から1段上の接合面で打ち欠いたものであろう。突帯は細い断面山形突帯である。打ち欠き部での径58cm、器高55cmを測る。

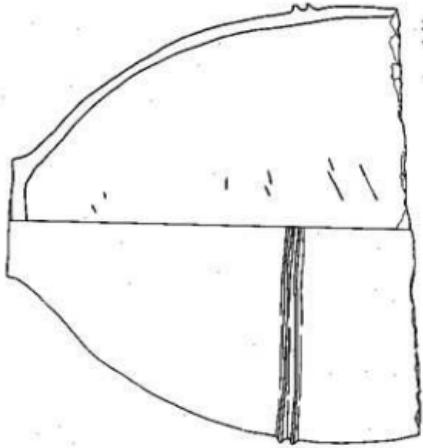
下甕 10号墓下甕と同様胸部最大径が口径を上回る丸みを帯びた甕棺である。口縁は内外に張り出す鋤先口縁で大きく外傾する。外端は平坦面をなす。口縁直下に1条、胸部中位に2条の三角突帯を巡らす。口径56cm、底径15cm、器高113cmを測る。

12号甕棺墓 (Fig. 64, 65)
5号棺の西側で検出。5号祭祀土壙に切られる。主軸はN-168°-Wを向く。埋置角は30°で、調査区内では傾

2. 下棺

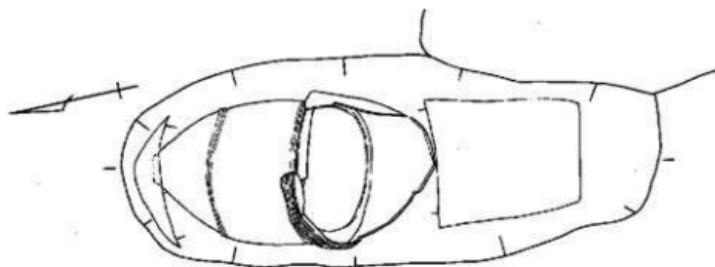


1. 上棺

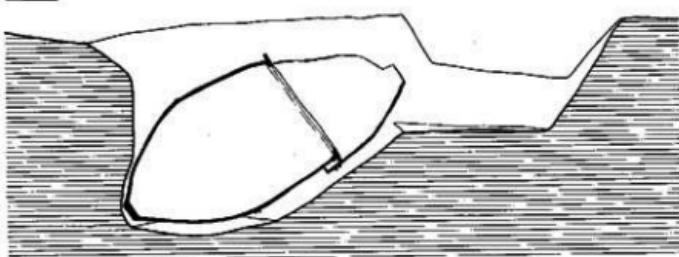


20cm

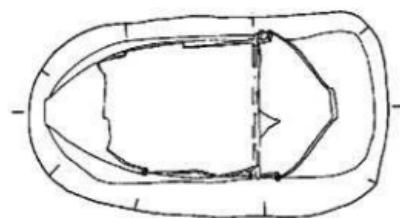
Fig. 63 11号墓棺槨剖面(1／8)



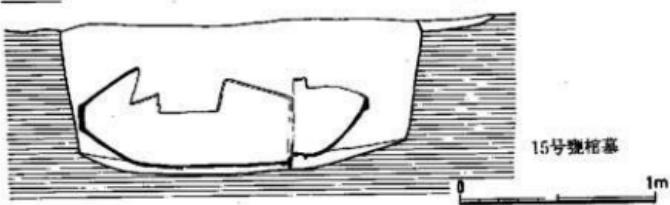
20.00m



12号墓



20.50m

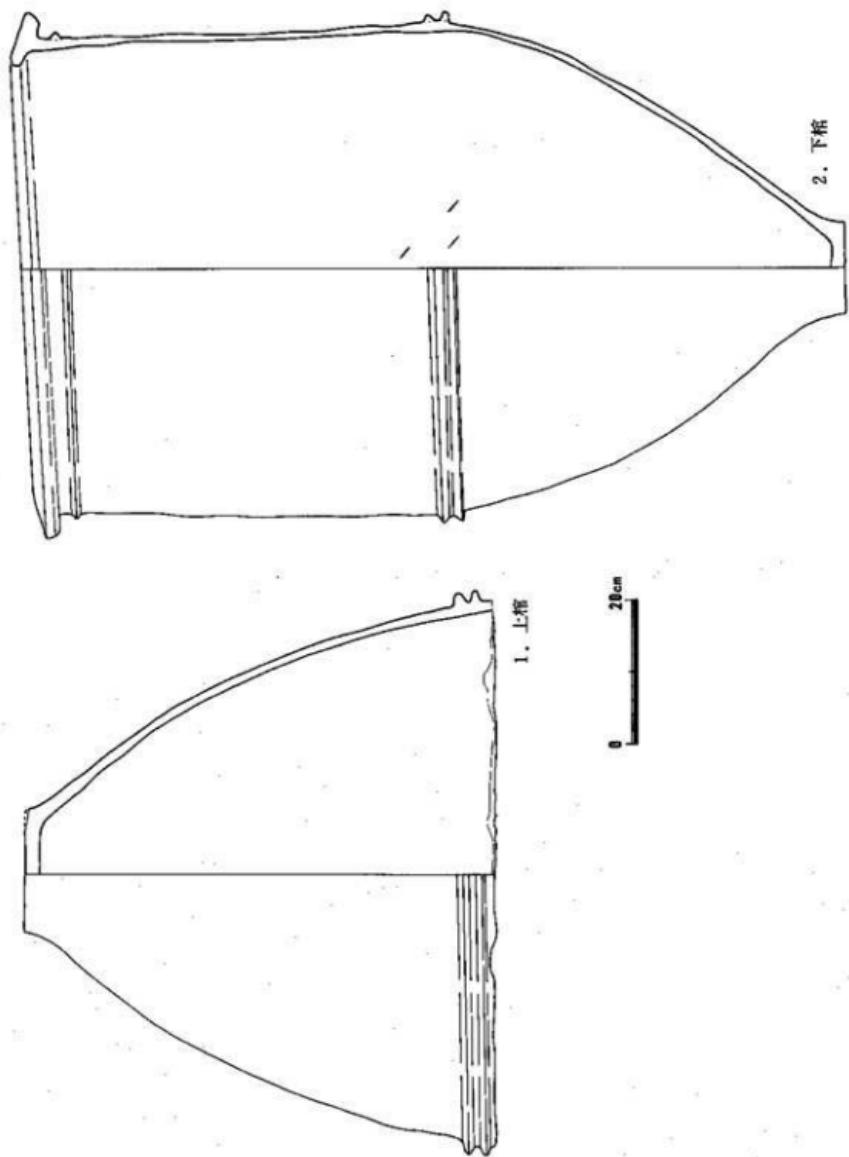


15号墓

1m

Fig. 64 12·15号墓实测图 (1/30)

Fig. 65 12分腰棉实测图(1/8)



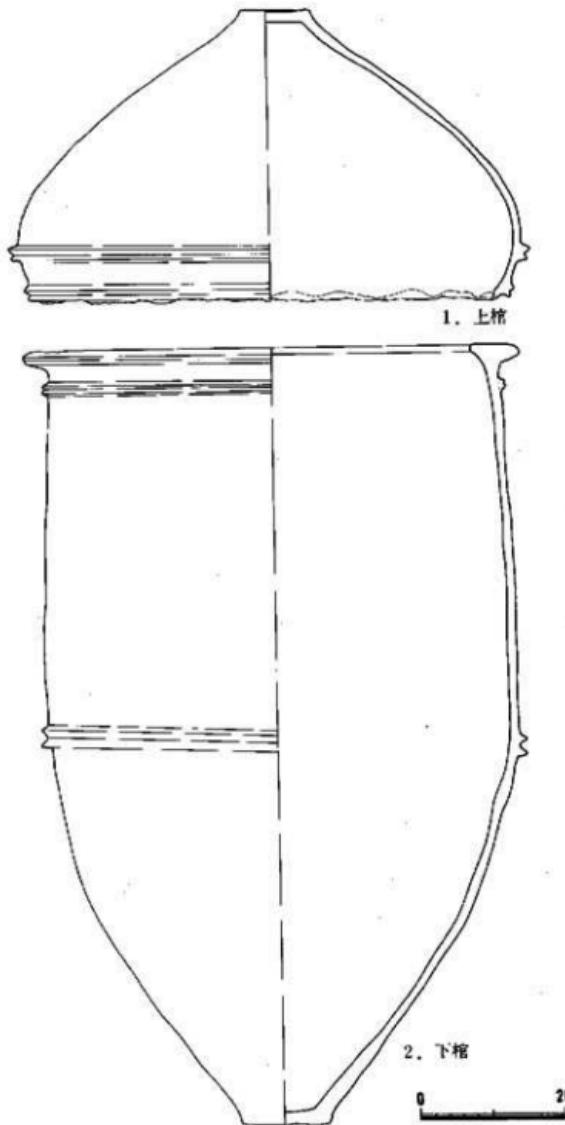


Fig. 66 15号墓棺実測図(1/8)

斜を持つ数少ない例である。掘方は長方形で上蓋の南側に広く平坦な段状部をもち、掘方の中央やや南から斜めに掘り込んで斂棺を安置する。下蓋底部側はわずかに壁を挟り込む。長2.8m、幅1.05mを測る。斂棺は蓋の上部を除いたものを上蓋に用い、下蓋に被せている。上蓋 大形壺の胸部突帯以上を打ち欠いたものである。突帯は2条の高い山形突帯である。打ち欠き部での径75.5cm、底径16cm、現器高64cmを測る。

下蓋 破壘形を呈する大形壺である。口縁は内外に張り出す鋸先口縁で、大きく外傾する。外端は平坦面をなす。口縁直下に三角突帯を1条、胴部中位に高い山形突帯を2条巡らす。口径73cm、底径15cm、器高112.7cmを測る。

15号墓棺墓 (Fig.64, 66, PL.24)

11号棺の西側で検出。主軸をN-162°-Eに取る。14号墓棺墓に切られる。埋置角は4°ではほぼ水平である。掘方は上蓋側は方形、下蓋側は椭円形を呈する。掘方の號

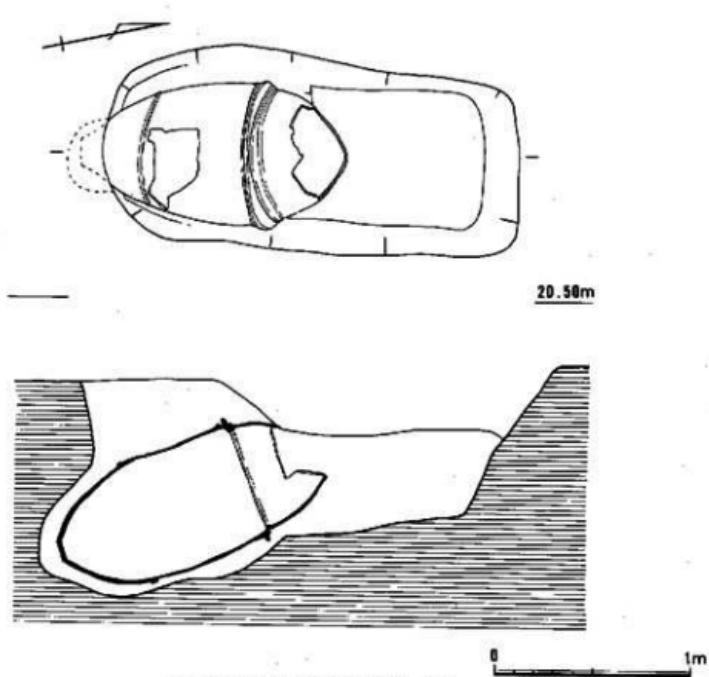


Fig. 67 23号玉棺墓実測図(1/30)

は両端とも直である。掘方長1.85m、幅1mを測る。

上甕 広口部の肩部位上を打ち欠いたものである。胴部には断面M字の突帯が2条巡る。底部は若干上底状を呈する。打ち欠き部での径64cm、底径10cm、現器高40cmを測る。

下甕 砲弾形を呈する大形甕である。口縁は銛先口縁であるが内側への張出しあり。外端はほぼ丸く收め、内端に狭い平坦面をなす。口縁直下に断面M字の突帯を1条、胴部中位に三角突帯を2条巡らす。口径67cm、底径12.5cm、器高108cmを測る。

23号玉棺墓 (Fig.67,68,PL.24)

8号棺の西、12号棺の南で検出した。主軸はN-11°-Eを向く。埋置角は20°で大形棺では12号棺とこれのみが水平埋置でない。掘方はほぼ長方形で、上甕の北側に広く平坦な段状部を持つ。掘方はほぼ中央から斜めに掘り込み甕棺を安置する。下甕底部側はかなり深い横穴を穿つ。掘方長2.1m、幅1mを測る。

上甕 大形甕である。口縁は銛先口縁であるが、内側への張出しあり。外端は平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条施す。胴部上半は丸みを帯びる。口径64.8cm、底径14.2cm、器高

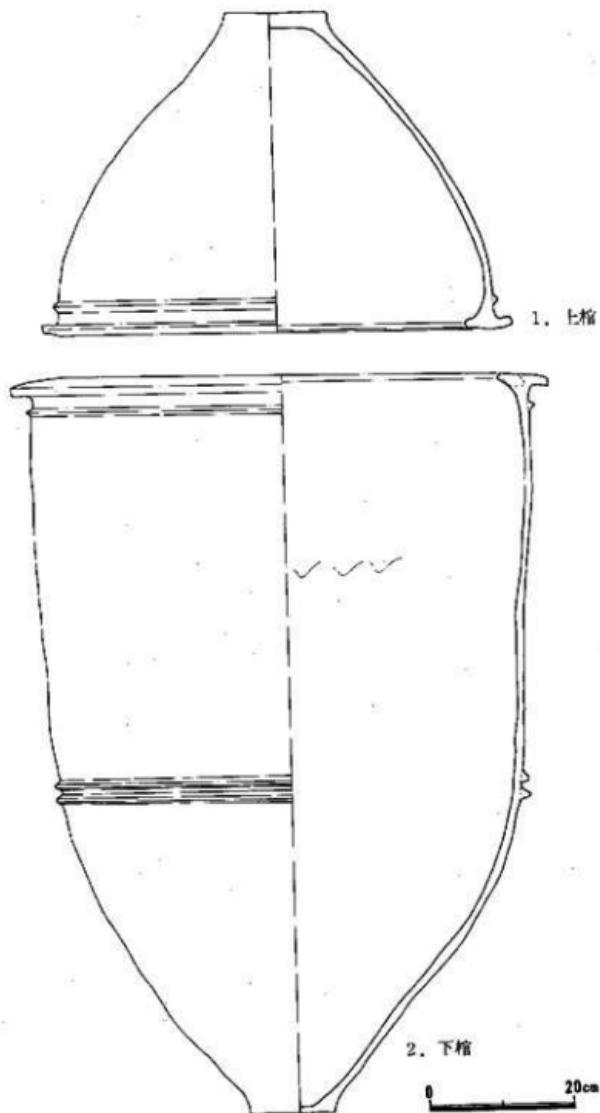


Fig. 68 23号墓実測図(1/8)

43.4cmを測る。

下甕 口徑に最大径が有る砲弾形の大形甕。口縁は鋤先口縁で、内側への張出しはやや小さい。外端は平坦面をなす。口縁直下に三角突帯を1条、胴部中位に山形突帯を2条巡らす。口径72.6cm、底径11.4cm、器高102.8cmを測る。

4号墓棺墓 (Fig. 56, 70, PL. 22)

次に小形棺について報告する。4号墓棺墓は5号棺の北端で検出した合口甕棺である。主軸をN-60°-Wに取り、5号棺とはば直行する。掘方は長椭円形で削平が著しく、浅い皿状に遺存している。長1.05m、幅0.7mを測る。

上甕 甕と思われるが口縁下からのプロポーションから見て、鉢になる可能性もある。口縁は鋤先口縁で、内側より、外側に大きく張出し、外端付近でやや下がる。口縁下に三角突帯を1条巡らす。復原口径36.7cmを測る。

下甕 甕である。口縁は鋤先口縁で、内側への張出しは小さい。胴部上半は丸み

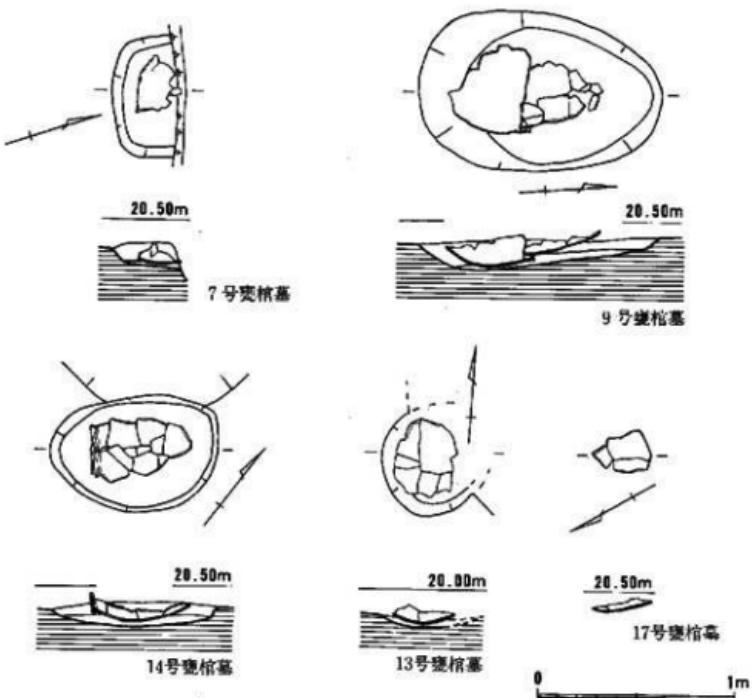


Fig.69 7・9・14・13・17号壺棺墓実測図(1/30)

を帯びる。外面にはハケメが残る。口縁下に三角突帯を1条巡らす。復原口径38.7cmを測る。器高は55cmほどであろうか。

7号壺棺墓 (Fig.69,70,PL.23)

10号棺の北側で検出。底部側を削平される。単棺である。主軸はN 162°-Wに取る。ほぼ水平埋置であろう。掘方はほぼ方形と思われ、幅0.6mを測る。

壺棺 壺である。口縁は内側の張出しがほとんどない逆L字状を呈する。肩部は丸みを帯びる。口縁下に三角突帯を1条巡らす。復原口径32cmを測る。

9号壺棺墓 (Fig.69,70)

8号棺の南側で検出した。上壺の口縁部を下壺に差し入れている。主軸はN 6°-Eを向く。ほぼ水平埋置であろう。掘方は長楕円形を呈し、長1.25m、幅0.8mを測る。

上壺 口縁が強く外傾する壺である。口縁下に三角突帯を1条巡らす。復原口径28.3cmを測る。
下壺 鍔先口縁の壺である。肩部は若干丸みを帯びる。口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面

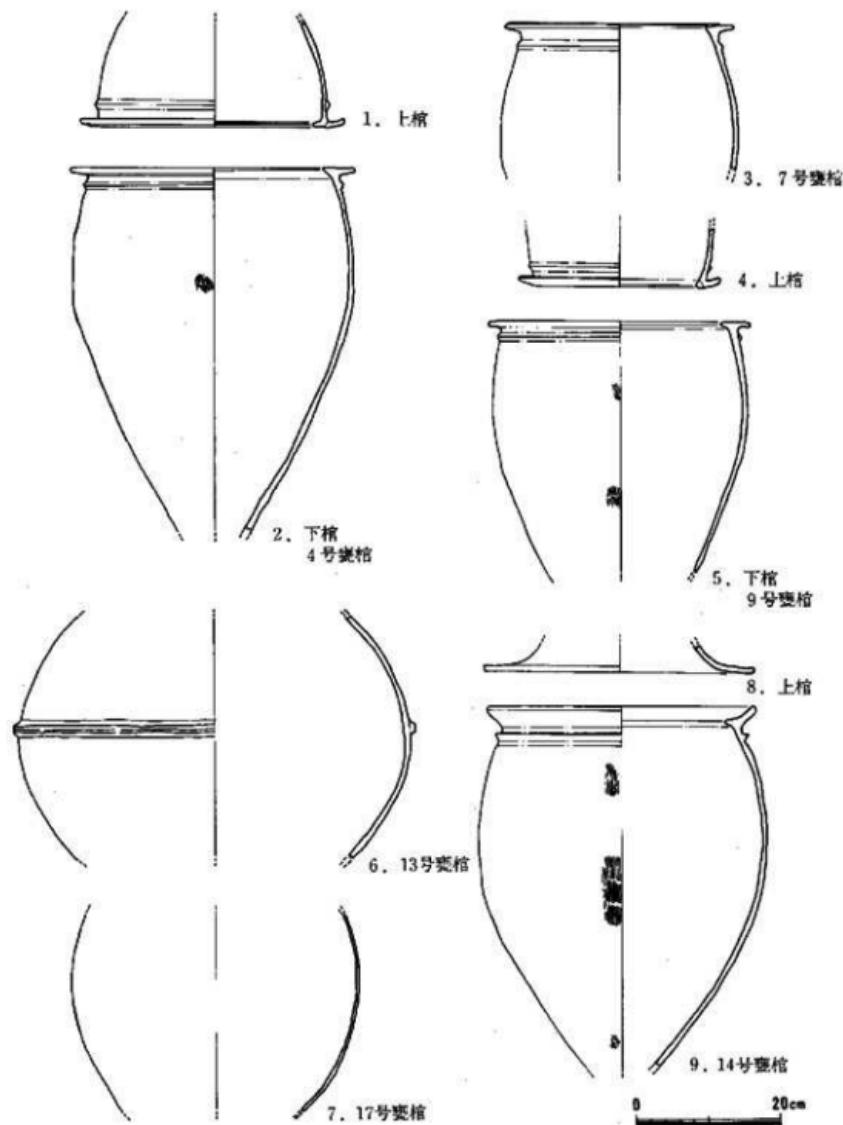


Fig.70 4·7·9·13·14·17号整检实测图(1/8)

にハケメが残る。復原口径36.6cmを測る。

13号甕棺墓 (Fig.69,70)

12号棺を切る。主軸はN-4°-Eで、ほぼ12号棺と直行する。単棺と思われる。掘方は円形もしろくは楕円形で、径50cm程に復原できる。

上甕 無頭蓋の胴部であろう。胴部中位に断面M字の突帯を巡らす。

14号甕棺墓 (Fig.69,70)

15号棺を切る。上甕の大部分を欠くが、合口の甕棺墓である。主軸はN-128°-Wで、15号棺にはほぼ直行する。掘方は上甕側を削平されているものと思われるが、ほぼ長椭円形に復原されよう。現長0.85m、幅0.6mを測る。

上甕 蓋形土器もしくは広口蓋の口縁部であろう。大きく広がる單口縁で、端部は平坦面をなす。復原口径37.4cmを測る。

下甕 内湾口縁を持つ甕である。内側にも張出しを持つ。口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面にはハケメが残る。復原口径37.4cm、器高は53cmほどになろう。

17号甕棺墓 (Fig.69,70)

AW群の南端で検出した。削平が著しく掘方の形状や大きさは不明である。主軸はN-152°-Wで、一応列に直行する方向を意識したものとみなしておく。

甕棺 瓢の胴部であろう。破片で形態がよくわからないが、かなり丸みを帯びる器形と思われる。

24号甕棺墓 (Fig.96,98,PL.24,63)

15号土壙の床面で検出した。主軸をN-71°-Eに向ける。埋置角は4°ではほぼ水平である。掘方は楕円形で、長0.85m、幅0.5mを測る。

上甕 瓢である。口縁は動先で、胴部はわずかに張る。突帯は巡らさない。外面はハケメが残る。口径25.4cm、底径7.3cm、器高29.7cmを測る。

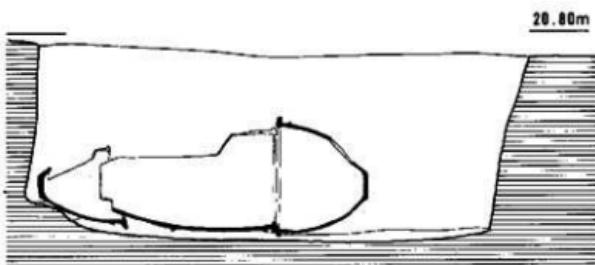
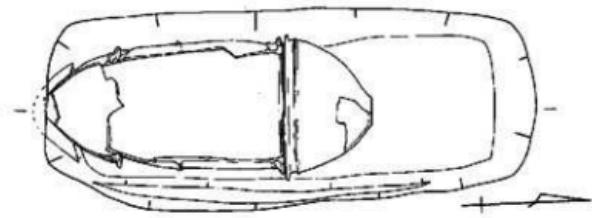
下甕 動先口縁の甕。嘴はほとんど張らない。口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面はハケメが残る。口径26cm、底径9.4cm、器高31.1cmを測る。

AW群の大形棺では口縁下の突帯を持たない5号棺が古相を呈する。また胴部径が口径を上回る10、11号棺はやや新相を呈している。また、3号棺はプロポーションから見ても、列に実行する埋葬法からみても、最新段階のものと判断できる。

3) BE群の甕棺墓

34号甕棺墓 (Fig.71,73,PL.25)

BE群の北端近くで検出。BE群は34号、37号、59号甕棺墓の北側で大きく削平を受けており、本来の基數などは不明である。ただ、甕棺墓の配列から見て、東側には大きく広がらないと思われる。34号甕棺墓は主軸をほぼ磁北に取る。ほぼ水平埋置である。37号甕棺墓に切られ



32号墓棺墓

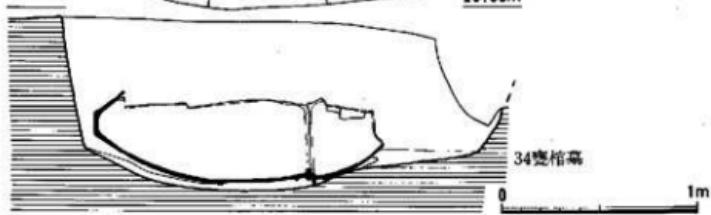
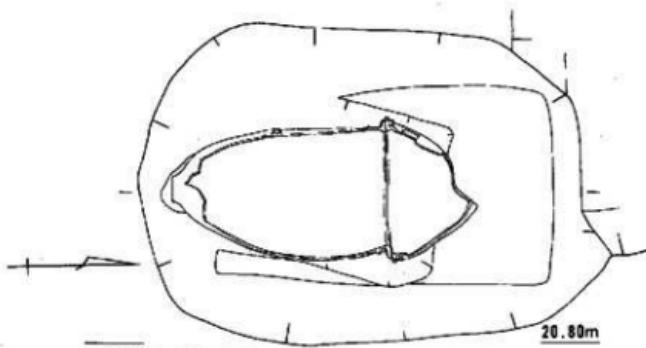


Fig.71 32·34号墓棺墓(1/30)

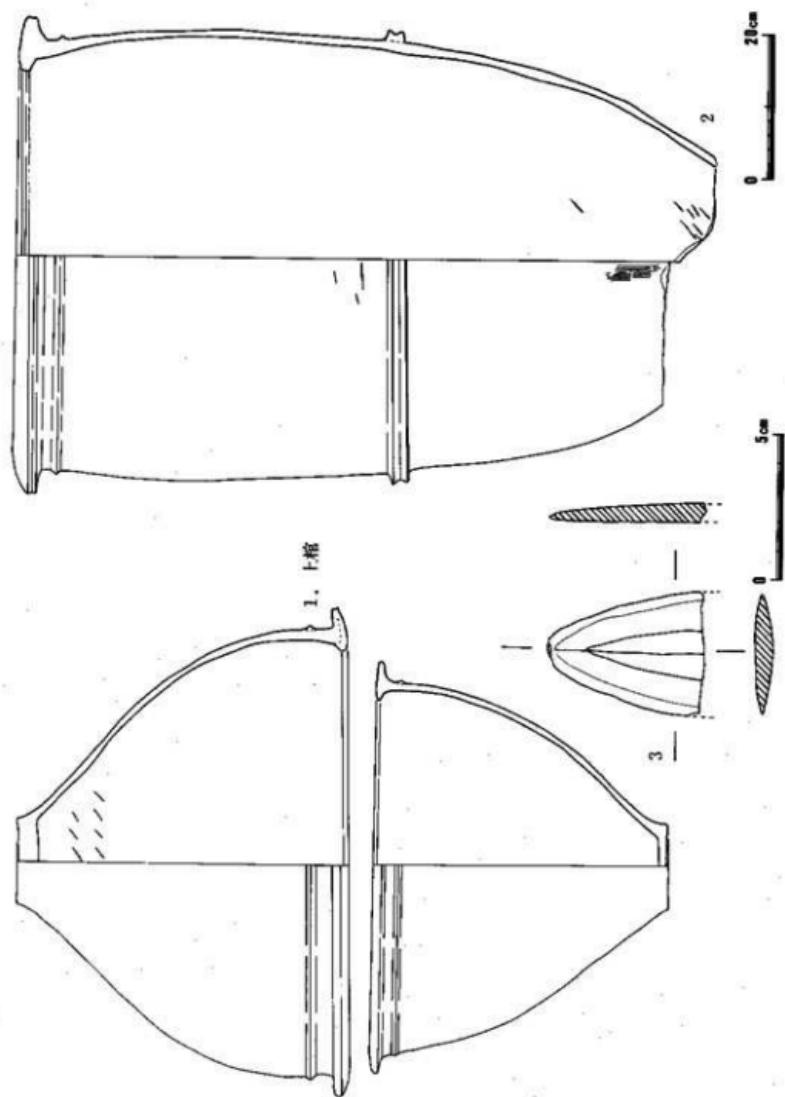


Fig. 72 32号遵・32号遵棺出土遺物測圖(1/8·1/2)

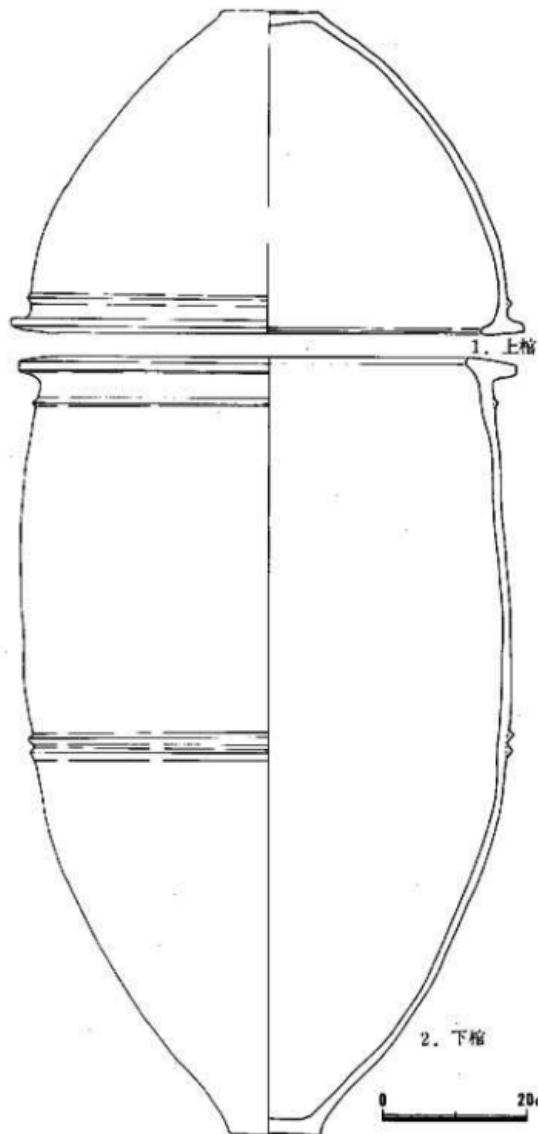


Fig. 73 34号墓実測図(1/8)

る。掘方はやや幅の広い長方形で、長2.4m、幅1.5mを測る。床はほぼ平坦で、甕棺の埋置場所に浅い凹みを掘って安定を測っている。壁は両端とも比較的直に立つ。

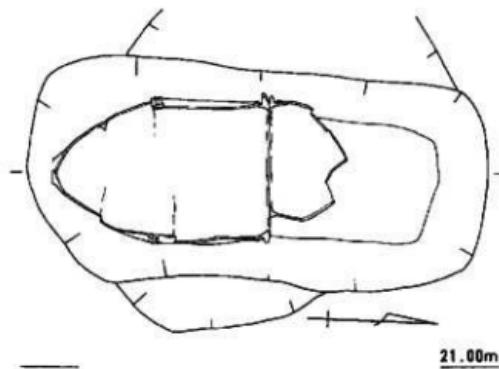
上甕 大形甕である。口縁は鋤先口縁で、口縁下に三角角突帯を1条巡らす。胴部は丸みを帯びており、底部からの立ち上がりも、あまり強く外反しない。底部はわずかに上底になる。口径70.7cm、底径13.6cm、器高44.1cmを測る。

下甕 大形甕である。鋤先口縁であるが内側への張出しは小さい。内外両端とも平坦面をなす。

口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。口径67.7cm、底径12.5cm、器高108.5cmを測る。

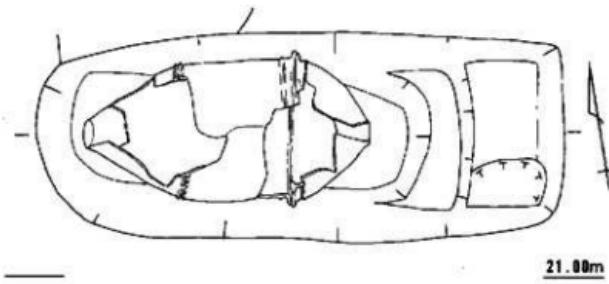
37号甕棺墓 (Fig.74,76, PL.25)

34号甕棺墓の北側で検出した。34号甕棺墓を切る。主軸はN-83°-Wを向く。34号棺とはほぼ直行する。埋置角は4°ではほぼ水平である。掘方は長方形で長2.6m、幅1.05mを測る。掘方は上甕側

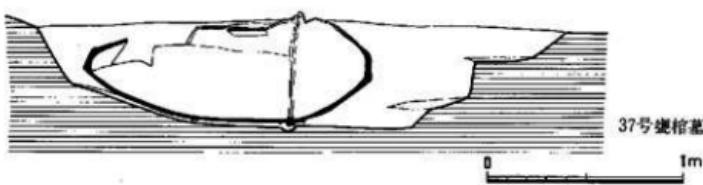


21.00m

35号墓棺墓



21.00m



37号墓棺墓

Fig. 74 35·37号墓棺墓实测图(1/30)

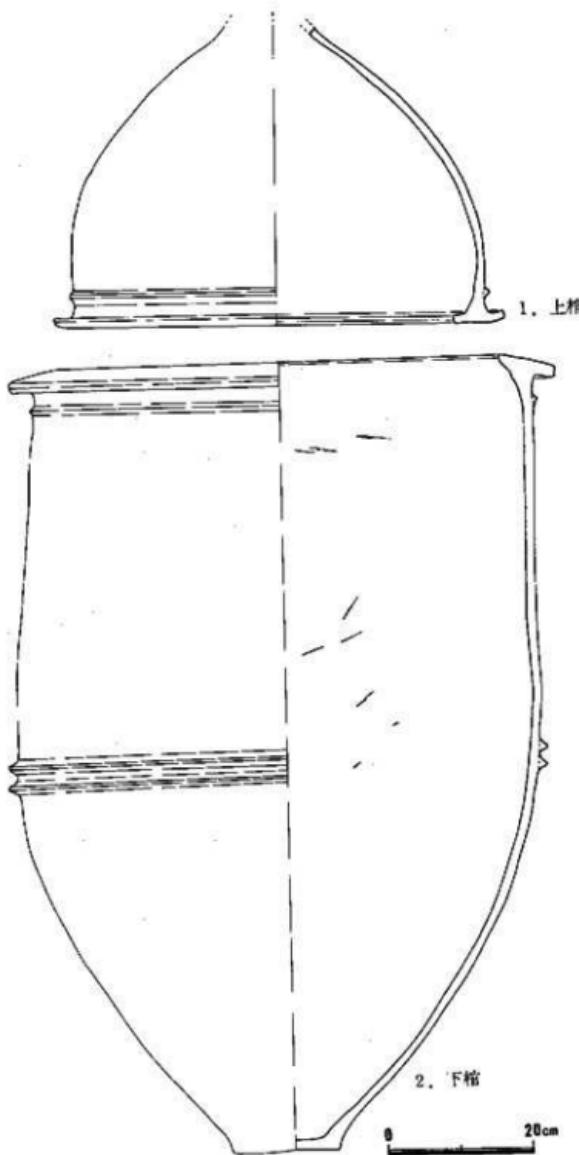


Fig. 75 35号墓棺内測図(1/8)

に2段の階段状の段を持つ。
上甕 人形鉢。口縁は鋤先
口縁で、外端は平坦面をな
す。口縁下に三角突帯を1
条巡らす。胴部はわずかに
丸みを持つが、かなり扁平
な感を受ける。口径75cm、
底径12cm、器高37.5cmを測
る。

**32号墓棺墓 (Fig.71, 72,
PL.26)**

34号墓棺墓の西側で検出
した。主軸はN 2°-Eを向
く。埋覆角はほぼ水平である。
掘方は長方形で、墓棺
の幅一杯の狭長なものであ
る。壁は直に近く、深い。
長2.5m、幅1mを測る。墓
棺は3個体からなり、下甕
は底部を欠いた大形甕と大
形鉢からなっている。覆土
内から石剣の鋒部片が出上
しており、人体に嵌入して
いたものと思われる。

上甕 鋤先口縁の大形鉢。
内側への張出しあは小さく、
内外とも端部に平坦面をな
す。胴部は張り丸みを帶び
る。口縁下に三角突帯を1
条巡らす。口径67.7cm、底
径12.2cm、器高45.1cmを測
る。

下甕1 鋤先口縁の大形甕。

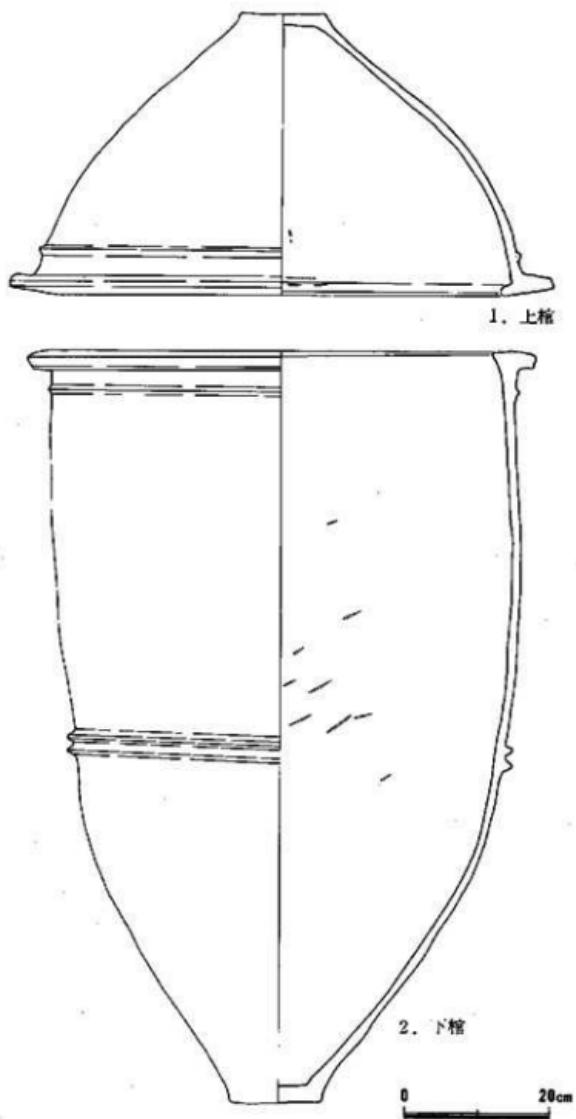


Fig. 76 37号墓棺実測図(1/8)

内外端とも平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位に断面M字の突帯を1条巡らす。外面に一部ハケメが残る。口径65cm、現器高97cmを測る。

下甕 2 鋸先口縁の大形体。口縁端は丸く收める。口縁下に三角突帯を1条巡らす。上甕に比べると小型である。口径56.7cm、底径11.4cm、器高40.5cmを測る。

35号墓棺墓 (Fig.74, 75, PL.26)

1/2ほどを搅乱される。主軸はほぼN-2°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長方形で、長2.35m、幅1.1mを測る。掘方壁は両端とも比較的直に立つ。

上甕 大形体である。口縁は鋸先口縁で、端部は内外とも平坦面をなす。ほぼ水平であるが、外端部が若干下がる。胴部は張り丸みを帯びる。口縁下に断面台形の突帯を1条巡らす。口径62.4cmを測る。器高は45cmほどであろう。

下甕 砲弾型の人形甕である。鋸先口縁で、外端部は平坦面をなす。口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突

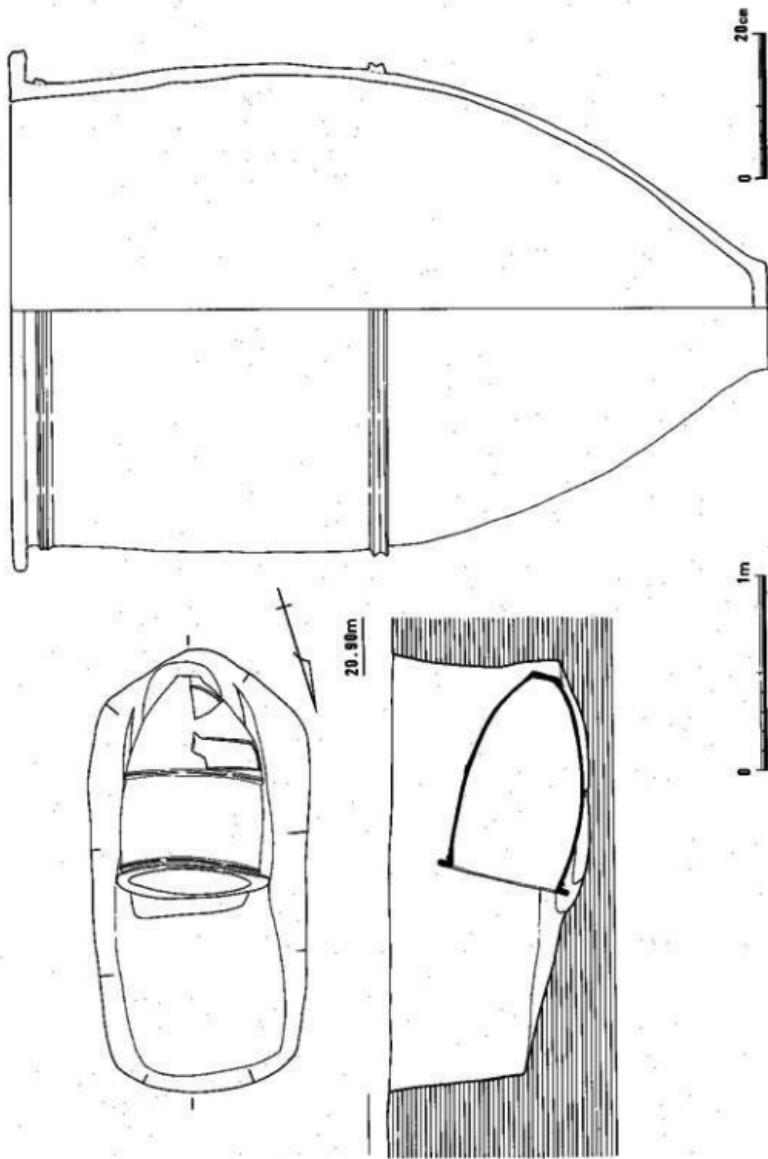


Fig.77 61号麦秆(1/30)·61号麦桔(1/8)麦秆图

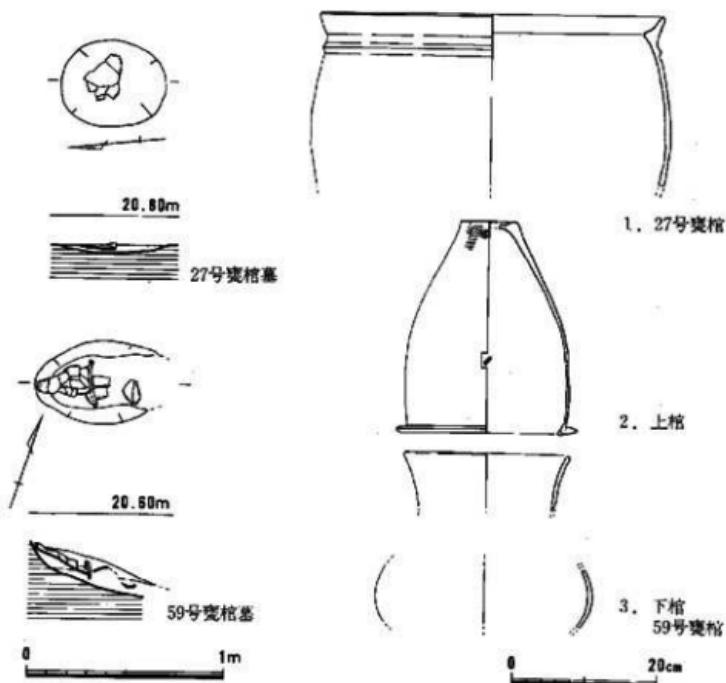


Fig. 78 27・59号甕棺墓実測図(1/30)・27・59号甕棺実測図(1/8)

帶を巡らす。口径73cm、底径14.3cm、器高110cmを測る。

61号甕棺墓 (Fig.77,PL.27)

B E群の南端で検出した。主軸はN-17°-Eを向く。埋置角は12°である。掘方はほぼ長方形で長2.3m、幅1.1mを測る。掘方型床面は平坦で、甕棺の部分を形態に合わせて掘り凹め、安定を図っている。掘方の壁は両端ともかなり直に立つ。

甕棺 大形甕である。口縁は逆L字状を呈する。端部は平坦面をなす。口縁下と、胴部中位に1条づつ断面M字の突帯を巡らす。口径70.8cm、底径14.5cm、器高105.3cmを測る。

27号甕棺墓 (Fig.78)

32号墓の東側で検出した小型棺である。遺存が極めて悪いが、列に平行する埋葬であろう。

甕棺 内済口縁の甕である。口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面にはハケメが残る。口径46.8cmに復原される。

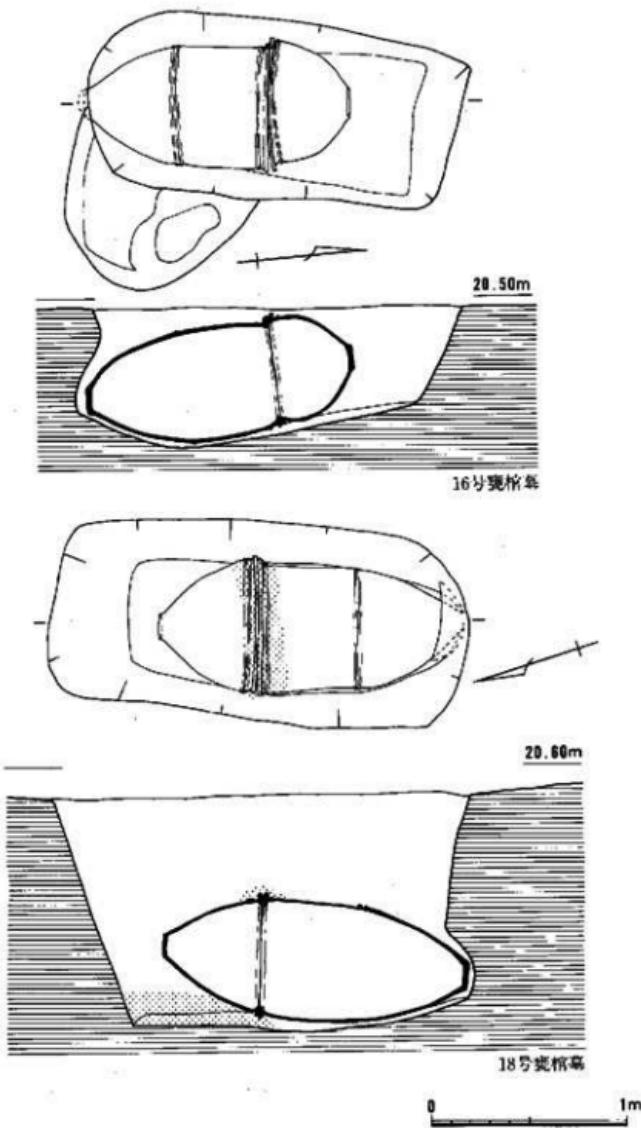


Fig. 79 16·18号麦格墓实测图(1/30)

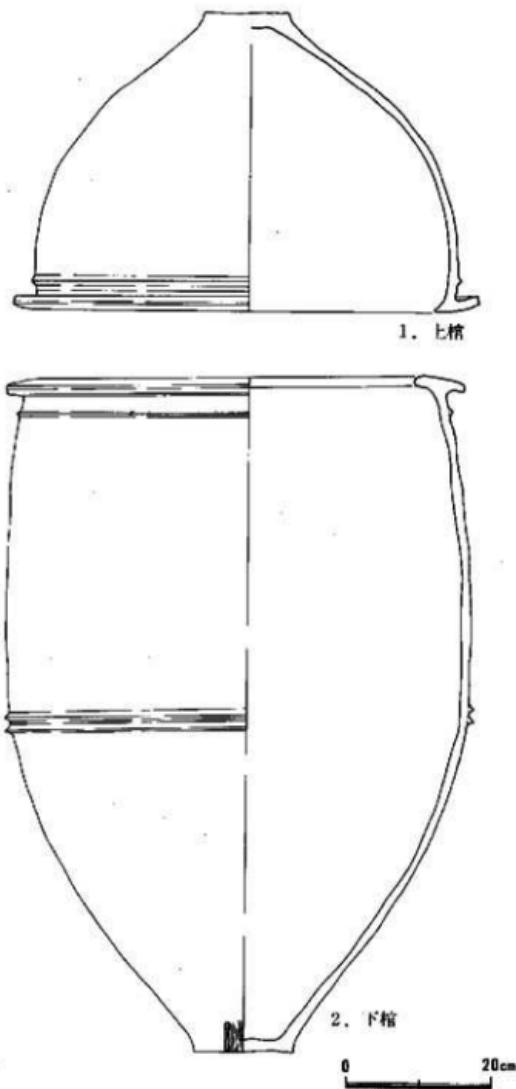


Fig. 80 16号壺棺実測図(1/8)

59号壺棺墓 (Fig.78)

37号墓の北側、削平された斜面に辛うじて遺存していた。壺と甕からなる合口壺棺墓である。傾斜から壺を下甕、甕を上甕としたが、逆の可能性もある。主軸をN-70°-Eに向け、列に直行する軸を意識していると思われる。埋置角は25°ほどであろう。残存する掘方は橢円形を呈する。

上甕 鋤先口縁の甕であるが内側への張出しあは小。口縁端はほぼ丸く收める。胴部はあまり張らない。胴部上位1/3ほどに、焼成後鋭利な工具で長方形の穿孔を施している。口径25.2cm、底径8cm、器高30cmを測る。
下甕 単口縁の広口壺であろう。口縁端は平坦面をなす。復原口径は25.2cmを測る。

B E群では大形棺同士の切り合いか有り、34号→37号の変遷が知られる。また器形からは61号棺に新相の要素が見られる。

4) BW群の甕棺墓

16号壺棺墓 (Fig.79, 80, PL. 27, 28)

BW群の北端近くで検出。主軸はN-6°-Eを向き、埋置角は9°である。掘方はほぼ長方形で、長2m、幅1mを測る。底部は壁を横に抉り込んで安定を

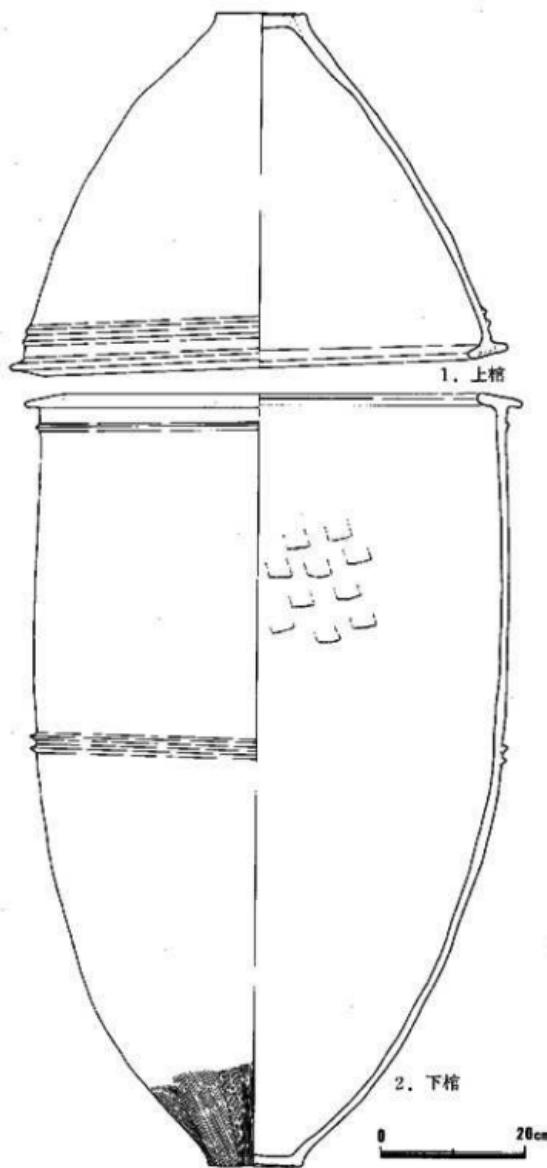


Fig. 81 18号墓槨実測図(1/8)

図っている。

上甕 大形鉢である。口縁は逆し字に近い鋤先口縁で、外端は平坦面をなし、胴部は張り丸みを帯びる。口縁下に三角突帯を1条巡らせる。口径65cm、底径11.5cm、器高50cmを測る。

下甕 鋤先口縁の大形甕である。口縁は外傾し、内外端とも平坦面をなす。口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。外底部付近にハケメが残る。口径62.2cm、底径11.5cm、器高93.8cmを測る。

18号墓槨 (Fig. 79, 81, PL. 28)

16号墓の西側で検出した。主軸はN-16°-Eを向く。埋置角は6°である。掘方はほぼ長方形で長2.2m、幅1mを測る。掘方の壁は両端ともほぼ直で、底部側は横に抉り込んで安定を図っている。槨棺は合口であるが、上側にのみ粘土の日張りが見られる。また上甕の下に粘土を敷いて、上甕の安定を図っている。16号と18号はほぼ同型同大で向きも同じであるが、18号墓の方が16号に比べてかなり深く埋置さ

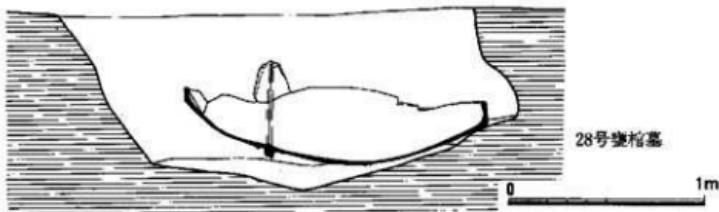
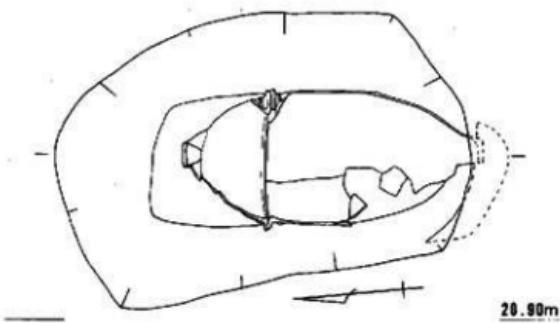
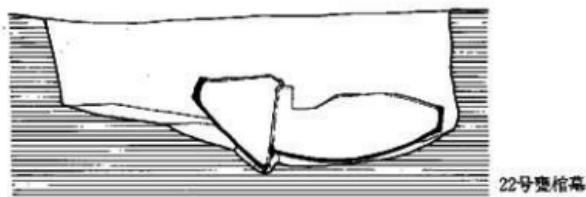
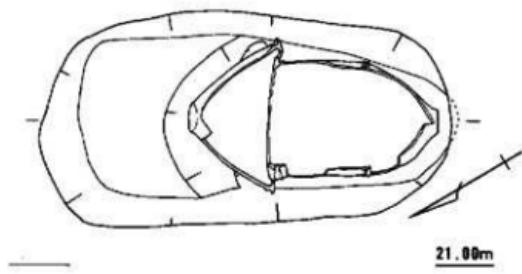


Fig. 82 22·28号墓基实测图(1/30)

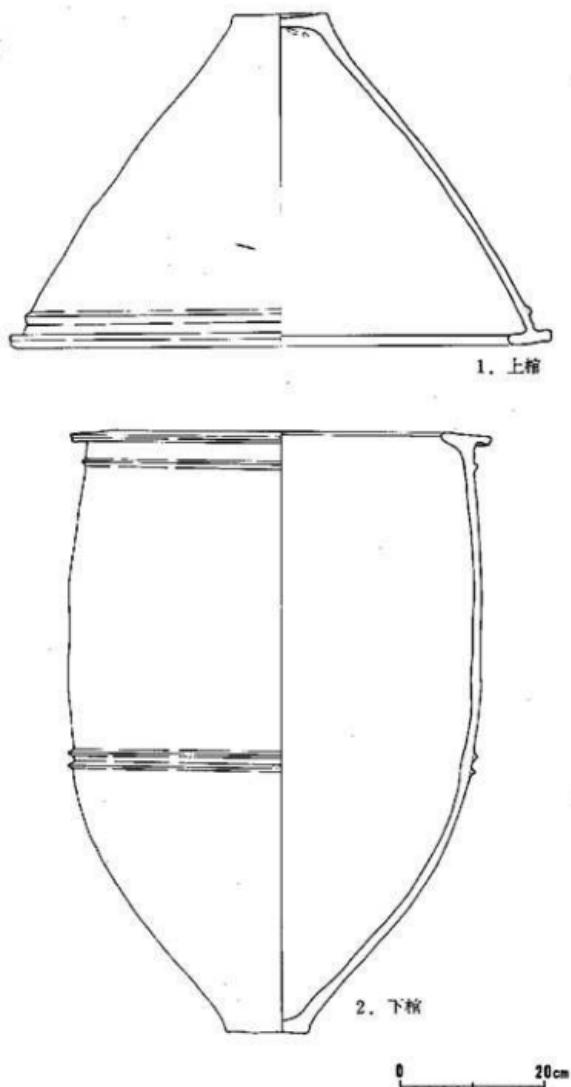


Fig.83 22号墓棺実測図(1/8)

れているのは注意される。
上甕 大形鉢である。口縁は鋤先口縁で内外に張り出す。口縁は若干外傾する。口縁下に2条の三角突帯を巡らす。胸部はあまり張らない。口径69cm、底径12.2cm、器高48cmを測る。

下甕 砲弾型の大形甕。胸部はほとんど張らない。口縁は鋤先状を呈し、内外に張り出し、外傾する。口縁下に1条、胸部中位に2条の三角突帯を巡らす。外底部付近にハケメが残る。口径67.7cm、底径12.8cm、器高107.3cmを測る。

22号墓棺蓋 (Fig.82, 83)

18号墓棺墓の南側で検出した。主軸はN-30°-Eを向く。埋置角は7°である。掘方は長方形に近い長楕円形を呈し、長2.1m、幅1.1mを測る。下甕に比して上甕の口径が大きいため上甕口縁の部分を溝状に掘り凹めている。

上甕 鋤先口縁の大形鉢。口縁はわずかに外傾する。胸部はほとんど張らず、直線的に底部に至る。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径75cm、底径12.8cm、器

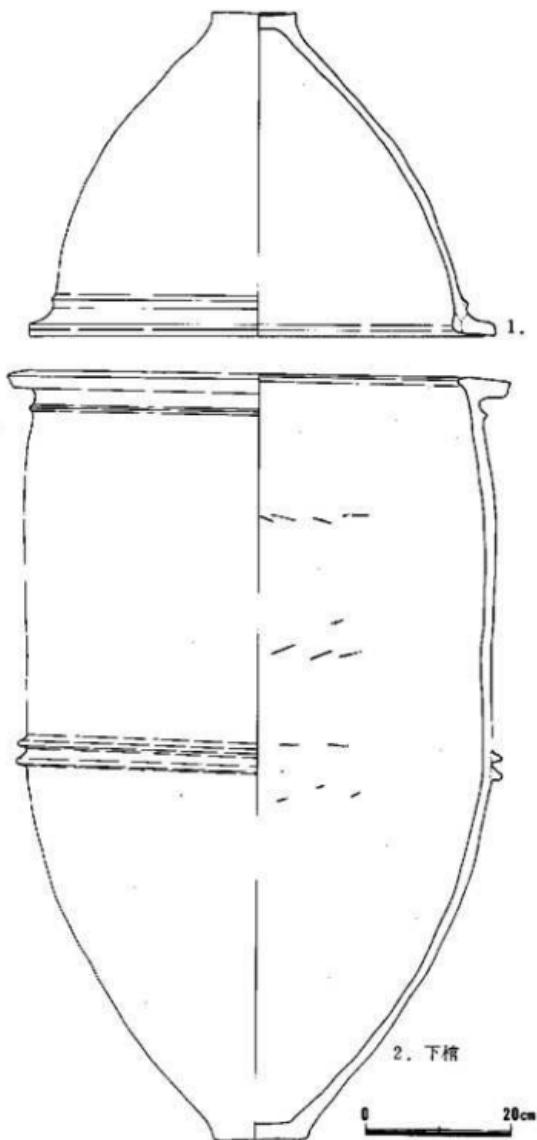


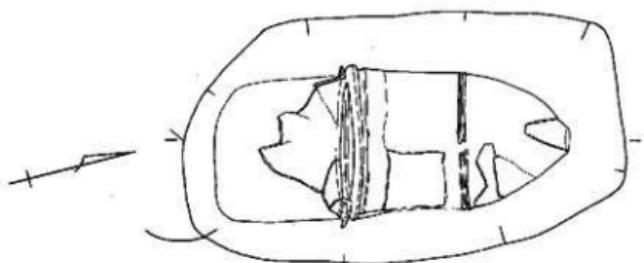
Fig. 84 28号壺棺実測図(1/8)

高45.5cmを測る。

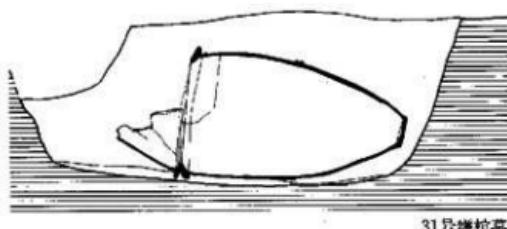
下壺 砲弾型の大形壺。口
縁は鋤先状で内外に張り出
す。三角突帯を口縁部下に
1条、胴部中位に2条巡ら
す。口径57cm、底径11cm、
器高97cmを測る。

28号壺棺墓 (Fig. 82, 84,
PL. 29)

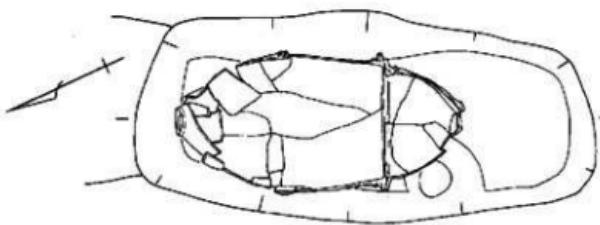
BW群のはば中央に位置
する。西列はそれ自体はば
2列に整然と壺棺墓が並ぶ
のであるが、この28号墓か
ら西に延びる墓と祭祀土壙
の一群がこの列を乱してい
る。主軸はほぼN-7°-Eを向
く。埋置角は5°ほどである。
掘方は楕円形で、長2.15m、
巾1.35mを測る。底部側は
横に抉り込んで安定を図る。
上壺 大形壺である。口縁
は逆し字口縁で、端部は平
坦面をなす。ほぼ水平であ
るが、わずかに内傾する。
口縁下に断面三角の突帯を
1条巡らす。口径65cm、底径
11.7cm、器高44cmを測る。
下壺 砲弾型の大形壺であ
る。内側への張出しが小さ
い鋤先口縁で、外端部は平
坦面をなす。口縁下に三角
突帯を1条、胴部中位に2条
の高い山形突帯を巡らす。



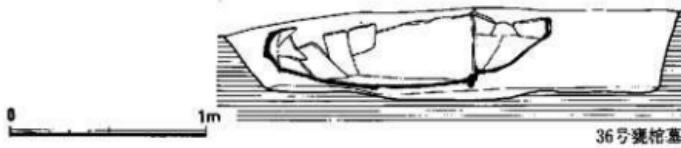
20.90m



31号墓



20.90m



36号墓

Fig. 85 31・36号墓実測図(1/30)

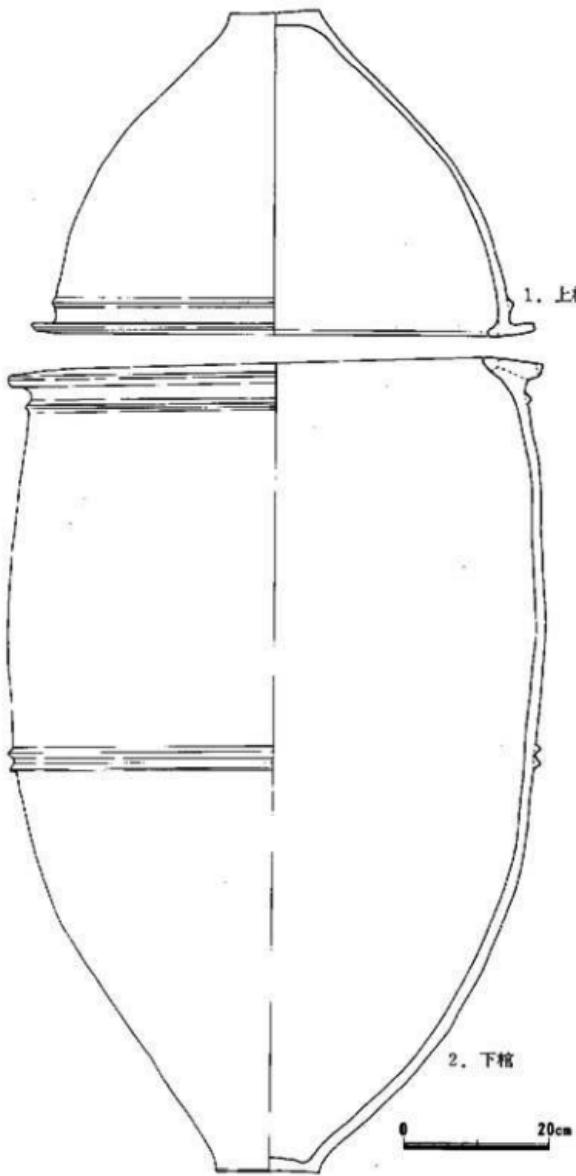


Fig. 86 31号櫛棺実測図(1/8)

口径67.6cm、底径12.8cm、器高107cmを測る。

31号櫛棺墓 (Fig.85, 86, PL.29)

22号墓の南側で検出した。主軸はN-157°-Wを向く。埋置角は6°である。掘方はほぼ長方形で長2.3m、幅1.3mを測る。掘方床面は平坦である。掘方の壁は両端とばかり直に立つ。

上蓋 大形鉢である。口縁は鋤先状で、内外端とも平坦面をなす。内側への張出しあは比較的小さい。口縁下に三角突帯を1条巡らせる。

下蓋 球弾型を呈する大形鉢である。腹部上半はわずかに丸みを持つが最大径は口径を超えない。口縁は厚い鋤先状を呈する。端部は平坦面をなす。口縁下に1条、胴部中位に2条三角突帯を巡らす。口径72.7cm、底径14cm、器高112cmを測る。

33号櫛棺墓 (Fig.88, PL.30)

28号墓の東側で検出した単棺の櫛棺墓である。主軸はN 3° Eを向く。埋置角はほぼ水平。掘方は長方形で

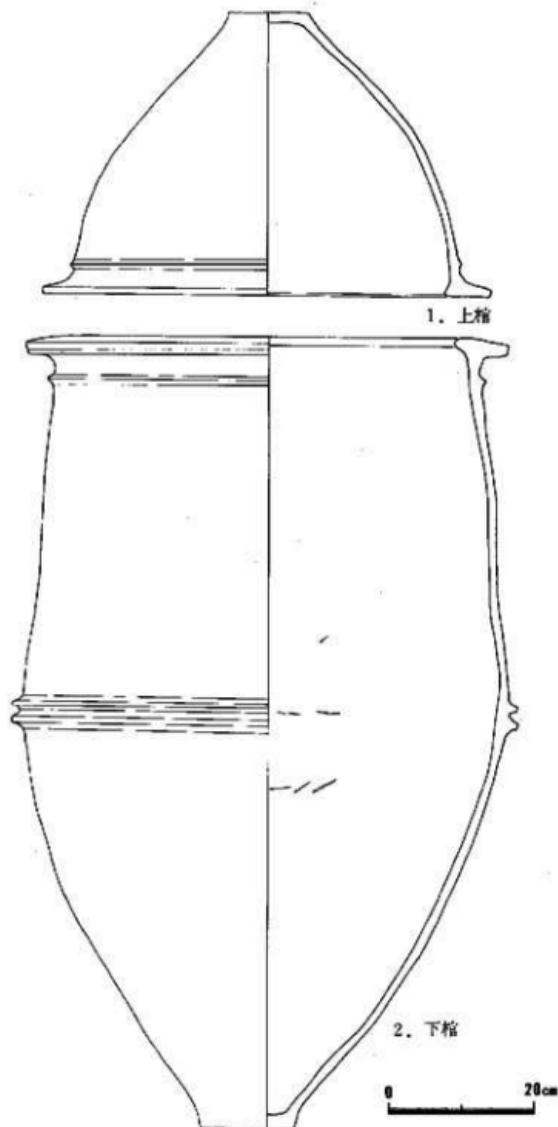


Fig. 87 36号墓棺実測図(1/8)

長2.1m、幅1mを測る。床面には斐棺の下に、一旦掘った地山土を再び埋め戻して敷いている。

斐棺 破壊型の大形甕である。口縁は内側の張出しが小さく、厚い鋤先口縁である。口縁部下に三角突帯を1条、胴部中位に山形突帯を2条巡らす。口径78cm、底径14.5cm、器高116cmを測る。

36号斐棺墓 (Fig. 85, 87, PL. 30)

西列の中央部から更に西にはなれた1群の中に属する。38号墓を切る。主軸はN-157°-Wに向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は狭長な長方形で長2.4m、幅1.1mを測る。

上甕 大形甕である。口縁は鋤先状で、内側への張出しありが小さい。口縁部はほぼ水平である。胴部は若干丸みを帯びる。口縁部下に三角突帯を1条巡らせる。口径62cm、底径11.1cm、器高38.5cmを測る。

下甕 破壊型を呈する大形甕である。最大径は突帯付近にありほぼ口縁と同じであるが丸みを帯びず直線的

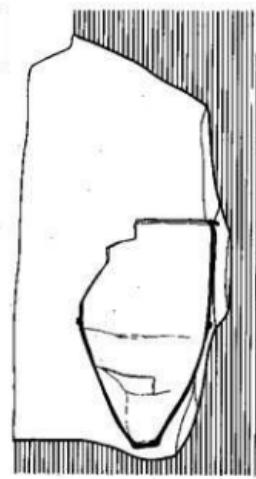
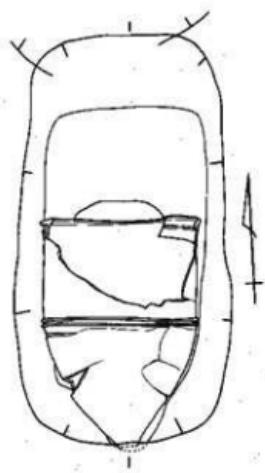
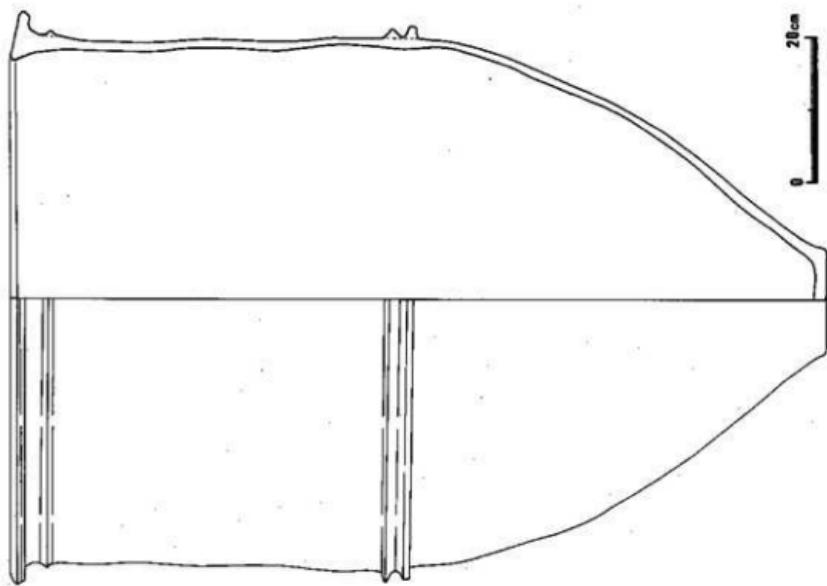
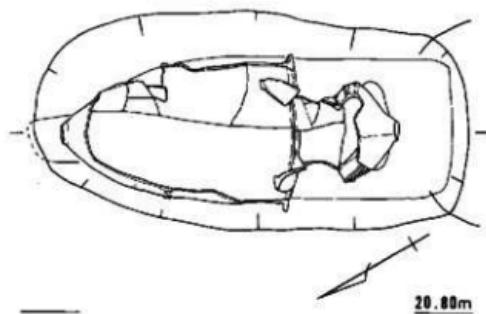
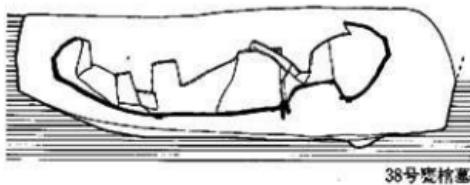


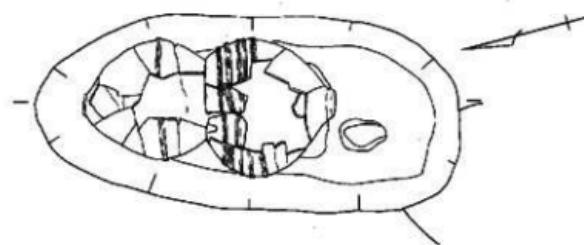
Fig. 88 33号墓(1/30)・33号墓(1/8)実測図



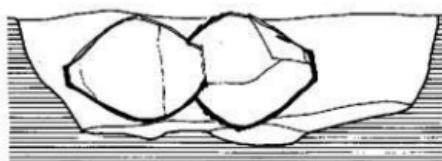
20.00m



38号墓椁室



21.00m



44号墓椁室

0 1m

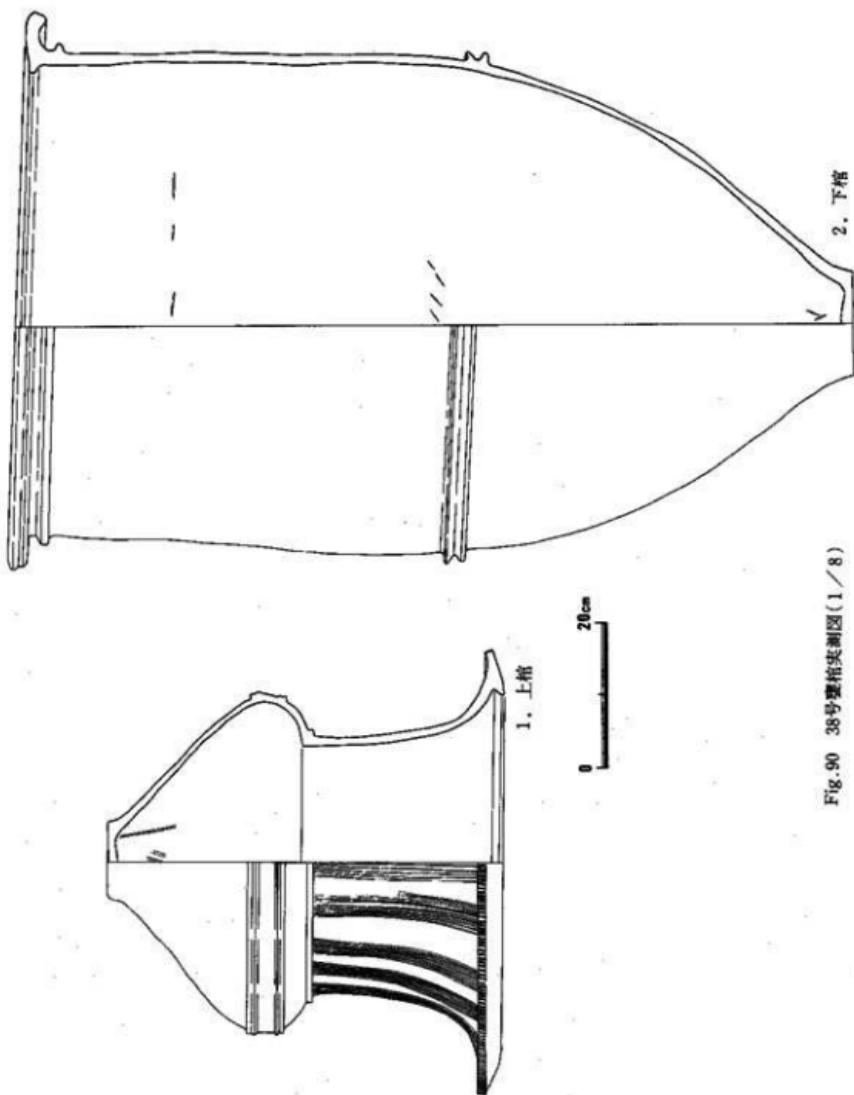
Fig. 89 38·44号墓椁室剖面图(1/30)

2. 下棺

Fig. 90 38号墓棺尖測圖(1/8)

1. 上棺

0 20cm



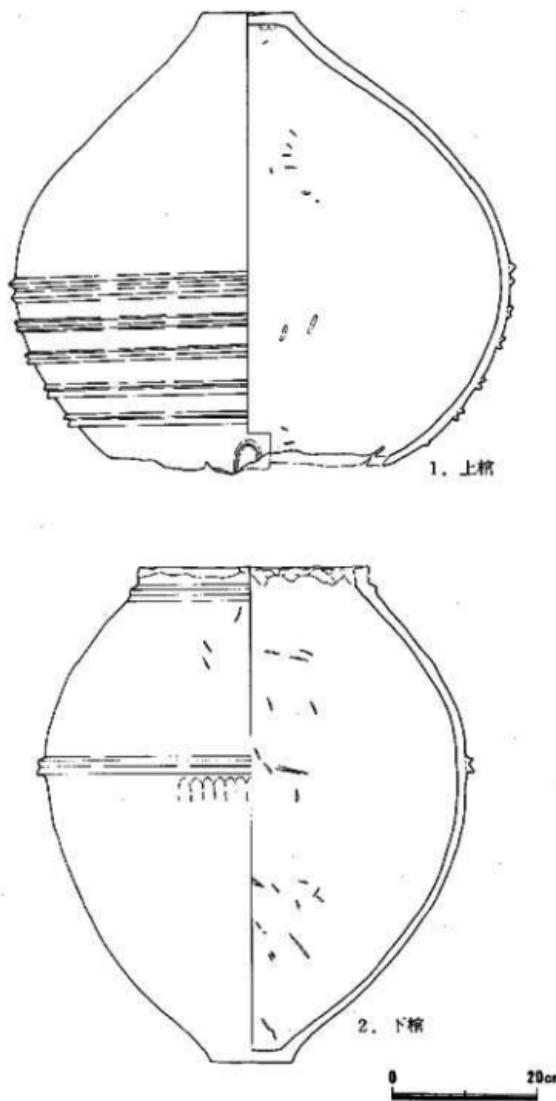


Fig.91 44号墓実測図(1/8)

である。口縁は鋸先状を呈する。外端部は平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位に山形突帯を2条巡らす。口径65cm、底径12.6cm、器高110.2cmを測る。

38号 墓 (Fig.89, 90, PL.31, 61)

36号墓の北側で、36号墓に切られる。主軸をN-152°-Wに向ける。埋置角は4°ほどである。掘方は上蓋側は長方形、下蓋側は楕円形を呈する。長2.25m、幅1.1mを測る。広口壺と大形甕からなる合口甕棺墓である。

上蓋 広口壺である。口縁部は鋸先状を呈し大きく外傾する。外端部には板小口による刻目を施す。頸部は直行気味に立ち上がり、口縁部近くで強く外反する。胴部は肩が強く張り、その最大径付近に断面M字の突帯を2条施す。頸部には縱方向の暗文を施す。口径62cm、底径10.3cm、器高53.9cmを測る。

下甕 砲弾型の大形甕である。口縁は内側への張出しが小さい鋸先状を呈する。内外端とも平坦面をなすが、外端部は強いヨコナデによって凹面状を呈する。口縁下に1条、胴部

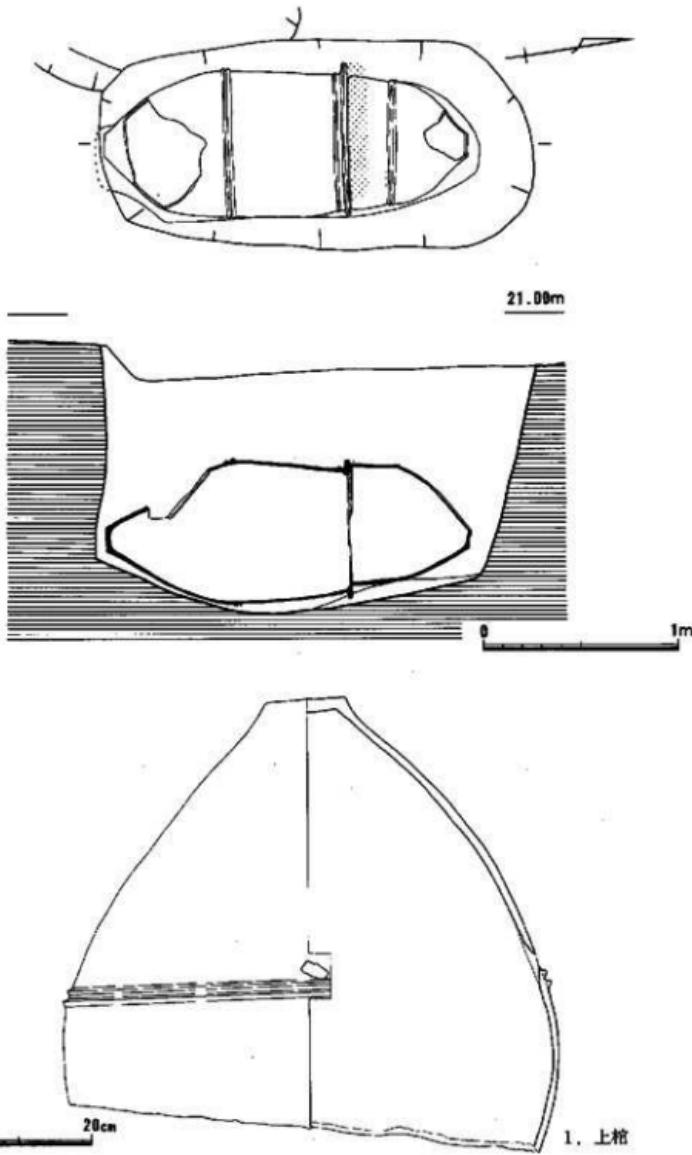


Fig. 92 46号墓椁室(1/30)·46号墓椁(1/8)实测图

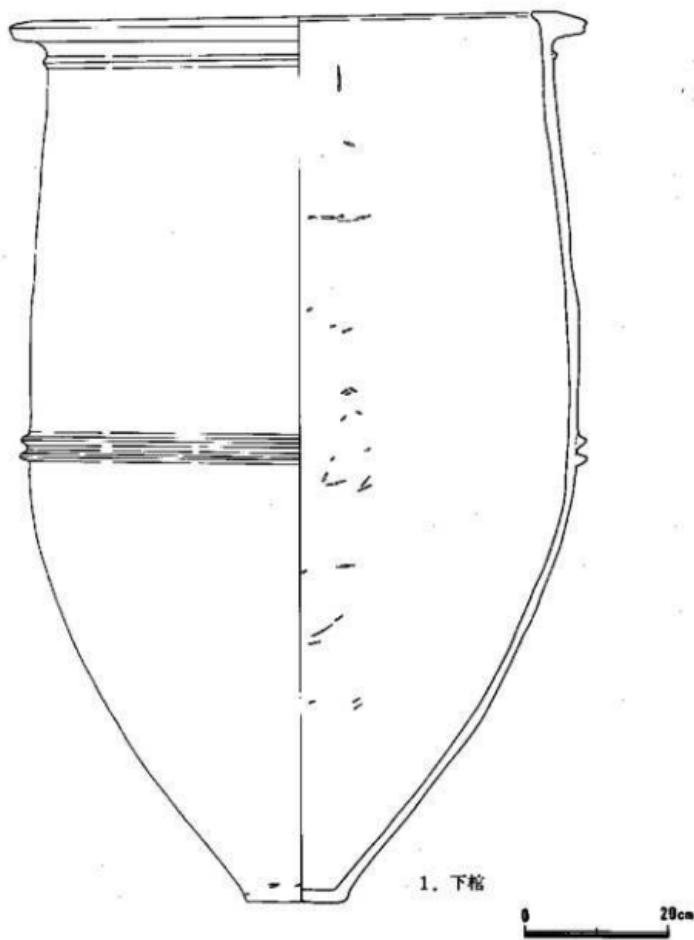


Fig. 93 46号壺棺実測図(1／8)

中位に2条やや低めの山形突帯を巡らす。口径75.7cm、底径12cm、器高117cmを測る。

44号壺棺墓 (Fig.89,91,PL.31)

47号墓を切る。主軸はN-165°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長楕円形を呈し長2.2m、幅1mを測る。床面は凹凸が多いが壺棺の形態を意識しているものと考えられる。

上蓋 壺の可能性もあるが、壺の口縁部を打ち欠いたものであろう。胴の張る器形で、最大径

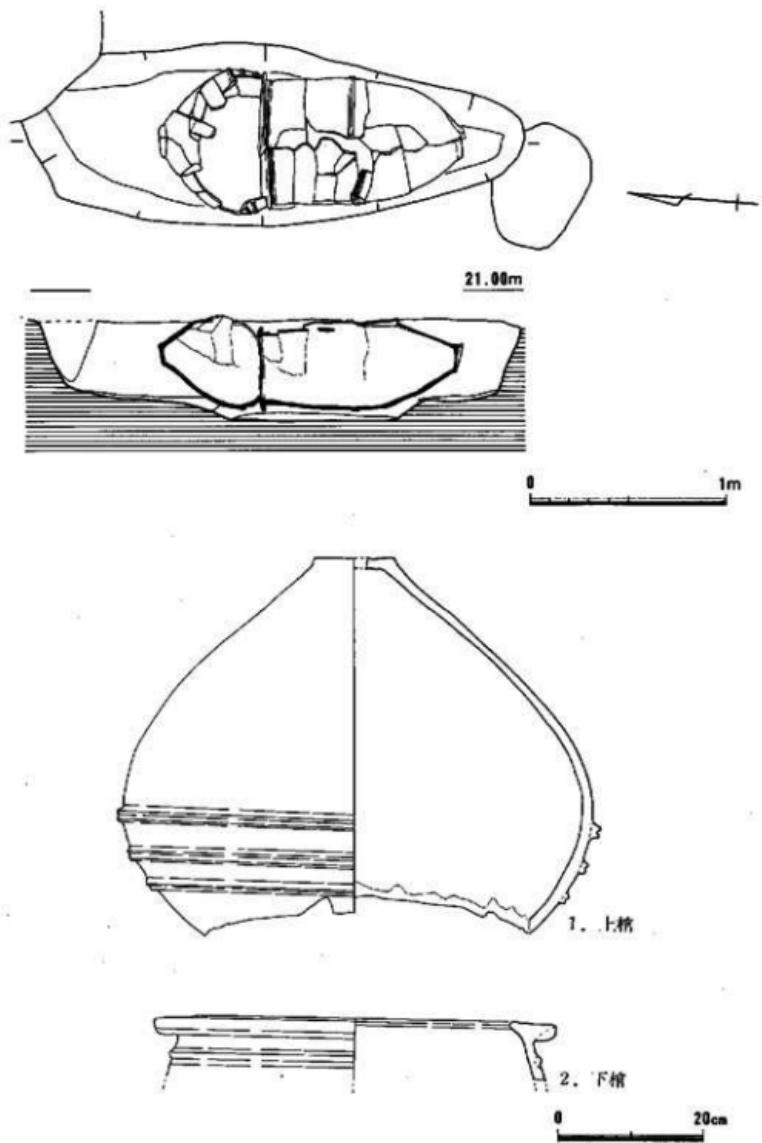


Fig. 94 47号墓(1/30)・47号墓(1/8)実測図

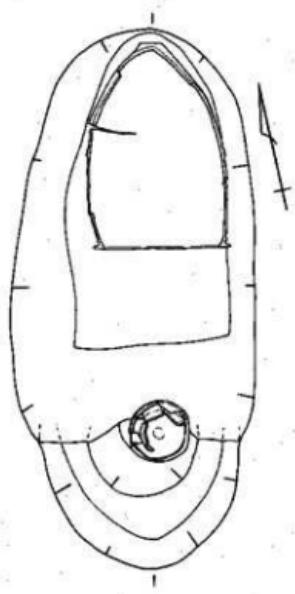
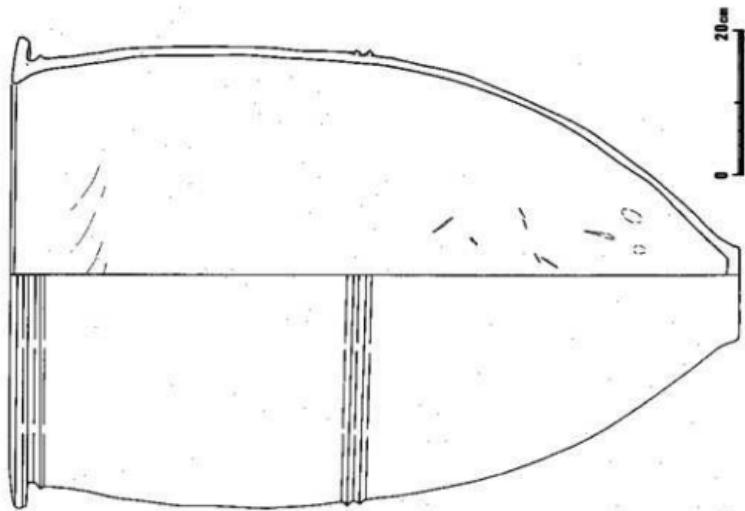


Fig. 95 50号棧橋(1/30)・50号棧橋(1/8)実測図

が胴部中位にある。この部分に三角突帯を2条巡らし、これから上半部にはほぼ等間隔でM字突帯を4条巡らす。更に口縁付け根と考えられる打ち欠き部付近にはU字形の文様を貼付している。打ち欠き部での径38cm、底径12.4cm、現器高63.5cmを測る。

下甕　甕の口縁部の張出し部を打ち欠いたものである。上端部が遺存しており、内傾する口縁部であったと思われる。口縁付け根に三角突帯を1条、胴部最大径部にM字突帯を1条巡らす。最大径は中位のやや上部にある。

46号甕棺墓 (Fig.92,93,PL.32)

44号墓の東側で検出。45号墓に切られる。主軸はN-10°Eを向く。埋置角はほぼ水平である。打ち欠き部での径30cm、底径11.2cm、器高68.5cmを測る。

掘方は長方形に近い長楕円形を呈する。長2.2m、幅1.1mを測る。掘方の壁は直に近く、深いが甕棺の大きさ一杯に造られており、窮屈な感がある。合口部は粘土で目張りを施し、下甕の上には地山埋め戻し土が被せられていた。

上甕　大形甕の突帯の上の接合部から打ち欠いたものである。突帯は三角突帯が2条巡っている。突帯直下に焼成後の穿孔が見られる。打ち欠き部での径64cm、底径10.8cm、器高59cmを測る。

下甕　砲弾型の大形甕である。口縁は鋤先状であるか、内側への張出しは小さく、外側は厚い。外端部は強いヨコナデにより凹面をなす。口縁部下に三角突帯1条、胴部中位に山形突帯を2条巡らす。口径80.6cm、底径13.5cm、器高123cmを測る。

47号甕棺墓 (Fig.94,PL.32)

44号墓の南側で検出。44号墓に切られる。主軸はN-3°Wを向く。ほぼ水平埋置である。掘方は溝状に近い狭長なもので、長2.6m、幅1mを測る。

上甕　44号棺上甕と類似した甕である。胴部最大径から上半部にM字突帯を3条巡らす。打ち欠き部での径45cm、底径10.8cm、現器高52cmを測る。

下甕　口縁のみしか見られない。移動中に紛れたものと思われる。後述する31号墓内と記された人形甕が器形、口径とも類似しており、これが47号下甕に当たる可能性が強い。

50号甕棺墓 (Fig.95,PL.33)

33号墓の南側で検出。主軸はN-168°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。南側の上位で壺を検出した。50号墓の上からは41、42号墓も検出しておらず、どの墓に伴うか疑問であるが、掘方が50号墓掘方に接続すると見るのが最も形状に無理がなく、またこの甕が50号墓の主軸上に乗ることから、50号墓に伴う可能性が高い。この部分まで含めた掘方の長2.8m、幅1.2mを測る。

甕棺　大形甕である。口縁は鋤先状であるが、内側への張出しはやや弱い。胴部は丸みを帯びる。口縁部下に1条、胴部中位に2条三角突帯を巡らす。口径63cm、底径13.1cm、器高101cmを測る。

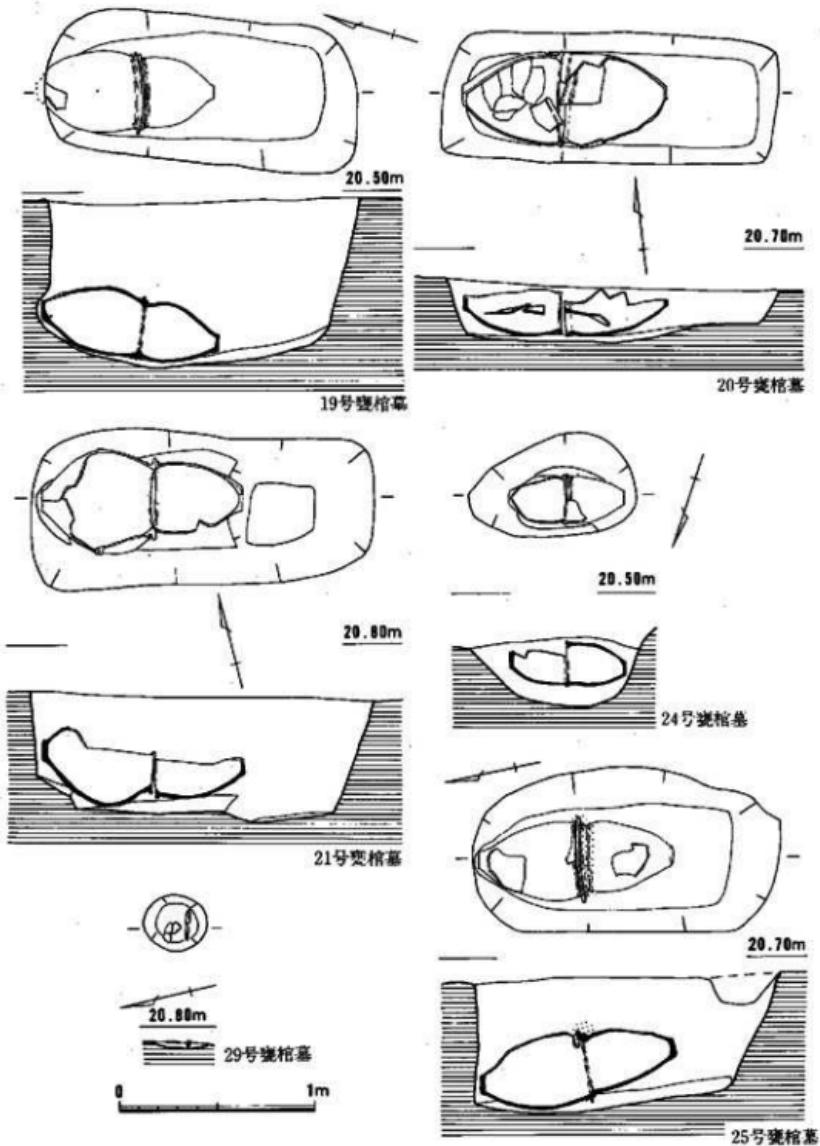
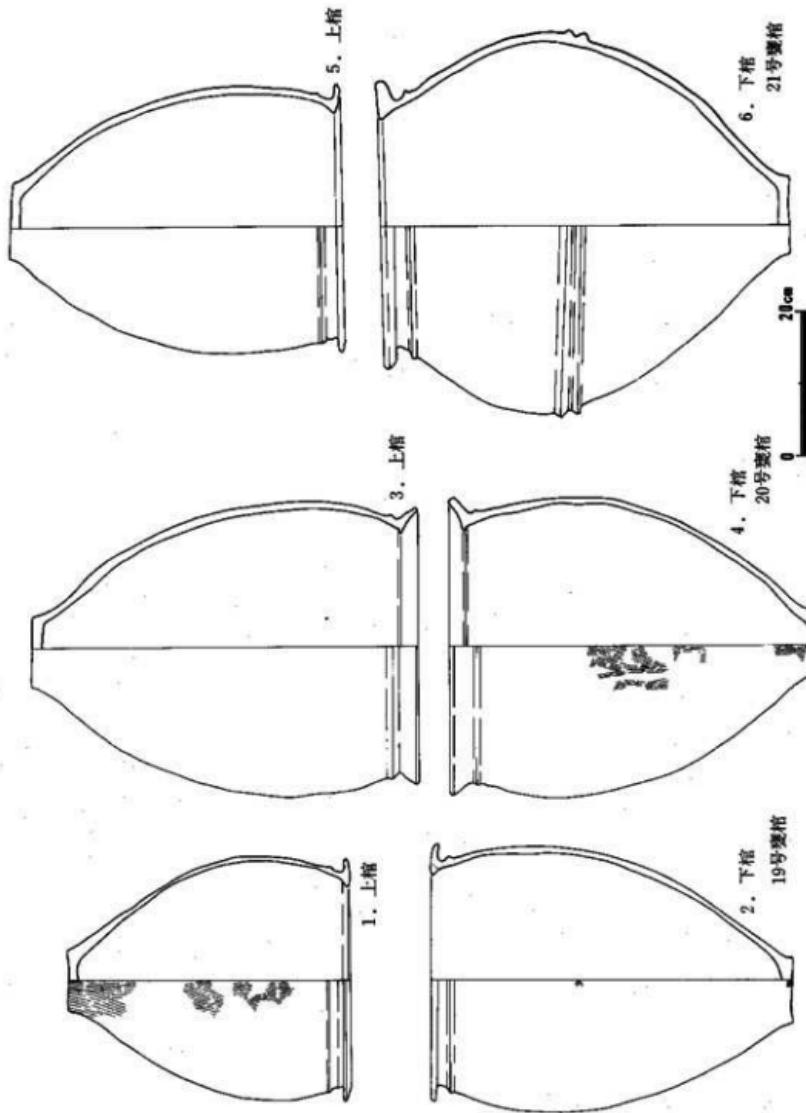


Fig. 96 19—21·24·25·29号墓实测图 (1 / 30)

Fig. 97 19~21号墓棺内测图 (1 / 8)



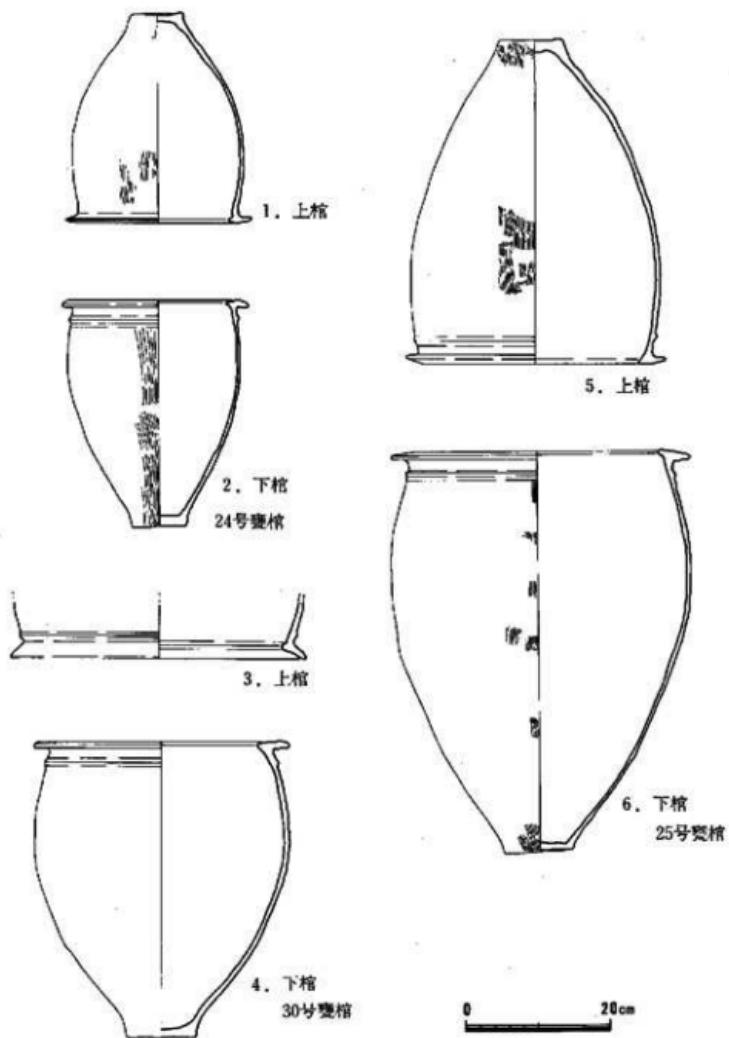


Fig. 98 24·25·30号靈棺實測圖(1/8)

掘方山土壙 広口壺である。口縁部を欠く。頸部の締まりは弱く、肩が強く張る。最大径部にM字突帯を1条巡らす。

19号壺棺墓 (Fig.96,97,PL.33)

次に小形棺について述べる。19号墓は16号墓の南側で検出した。斐同士からなる合口の小形棺墓である。主軸はN-13°-Wを向く。埋置角は-10°で上蓋がやや下がる。掘方は長方形で長1.6m、幅0.75mを測る。壁は直に立つ。

上蓋 鋏先口縁の壺である。口縁部はほぼ水平で外端でやや下がる。胴部はやや張り丸みを持つ。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径33cm、底径8.2cm、器高39.2cmを測る。

下蓋 上蓋よりやや大形の鋏先口縁の壺である。口縁部はほぼ水平である。胴部は張り丸みを持つ。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径35.5cm、底径9cm、器高50cmを測る。

20号壺棺墓 (Fig.96,97,PL.34)

19号墓の南側で検出した。斐同士からなる合口の小形棺墓である。主軸はN-84°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長方形で長1.8m、幅0.65mを測る。壁は直に立つ。

上蓋 内湾口縁の壺である。口縁部は内側にも小さく張り出す。口縁端部は平坦面をなす。胴部はやや張り丸みを持つ。口縁屈曲部直下に三角突帯を1条巡らす。外面にはハケメが見られる。口径37.1cm、底径9.6cm、器高53.5cmを測る。

下蓋 上蓋と同様の内湾口縁の壺である。口縁部は内側にも小さく張り出す。口縁端部は平坦面をなす。胴部はやや張り丸みを持つ。口縁屈曲部直下に三角突帯を1条巡らす。外面はハケメが残る。口径40.6cm、底径9cm、器高50.6cmを測る。

21号壺棺墓 (Fig.96,97,PL.34)

20号墓の南側で検出した。形態、大きさの異なる斐同士からなる合口の小形棺墓である。主軸はN-80°-Wを向く、20号墓とは平行する。埋置角はほぼ水平である。掘方は長方形で長1.75m、幅0.9mを測る。壁は直に立つ。床面は階段状になる。

上蓋 鋏先口縁の壺である。内側の張り出しは小さい。口縁端部は丸く收める。口縁は若干内傾する。胴部はわずかに張る。口縁下に三角突帯を1条巡らす。口径32.5cm、底径10.4cm、器高46.3cmを測る。

下蓋 脇部が強く張る壺である。口縁は内側にわずかに張り出す鋏先状を呈し、わずかに内傾する。脇部最大径は中位のやや上にあり、口径を大きく上回る。口縁直下に1条、脇部最大径に2条三角突帯を巡らす。口径38.7cm、底径10.8cm、器高56.8cmを測る。

25号壺棺墓 (Fig.96,98,PL.35)

21号墓の南側で検出した。斐同士からなる合口の小形棺墓である。64号墓に切られる。主軸はN-169°-Wを向く。埋置角は11°である。掘方はほぼ長方形で長1.6m、幅0.85mを測る。壁は直に近い。

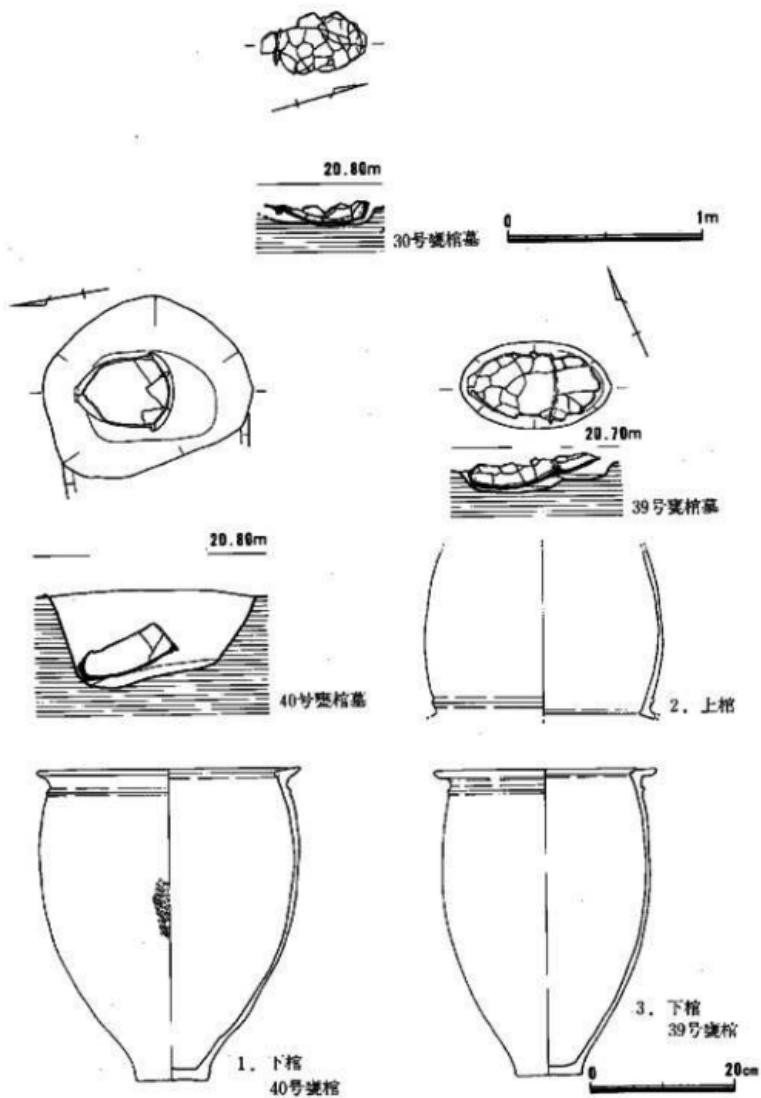


Fig. 99 30·39·40号墓棺基(1/30)·39·40号墓棺及测图(1/8)

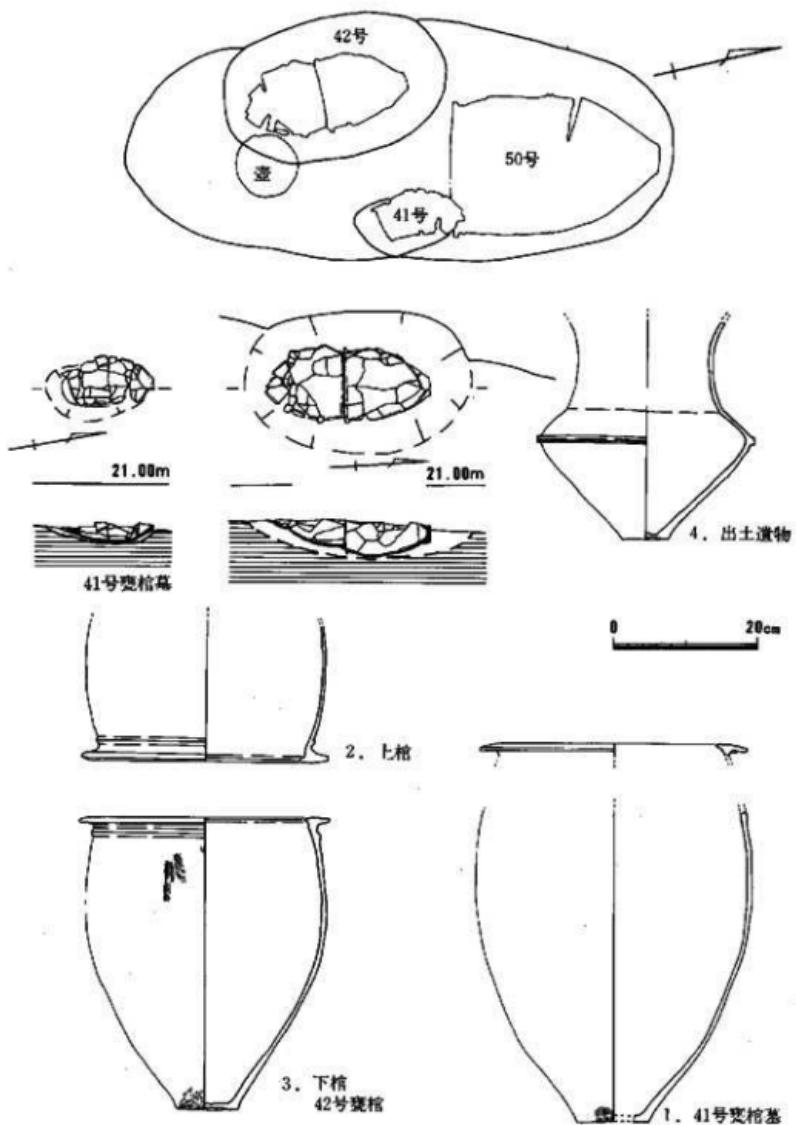


Fig.100 41·42号葬棺墓(1/30)·41·42号葬棺·50号葬棺墓出土遗物(1/8)实测图

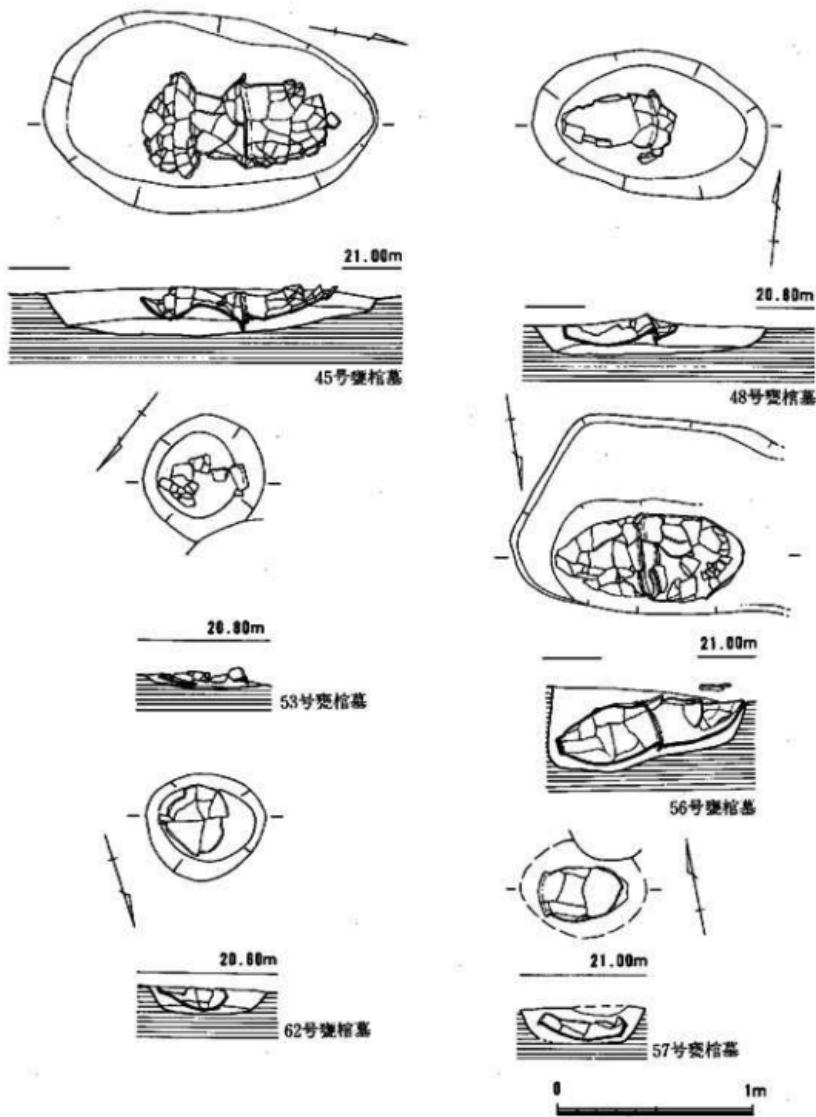


Fig. 101 45·48·53·56·57·62号壁棺基实测图(1/30)

上甕 鋸先口縁の甕である。口縁部わずかに外傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。胴部にはハケメがよく残り、ナデ消していないものと思われる。口径35.8cm、底径8.9cm、器高45cmを測る。

下甕 上甕よりやや大形の鋸先口縁の甕である。口縁部はわずかに外傾する。胴部は若干張り丸みを帯びる。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。外面にハケメが残る。口径41.1cm、底径9.7cm、器高55.8cmを測る。

29号甕棺墓 (Fig.96)

28号墓のすぐ東側で検出した。遺存が極めて悪い。破片は2個体分あるようで、合口の可能性もある。掘方は30cmほどの円形に遺存するのみである。出土甕棺は図化に耐えなかった。

30号甕棺墓 (Fig.98,99,PL.35)

63号墓を切る。上半部を大きく削平される。主軸はN-166°Wを向く。埋置角は20°程の傾斜を持つと思われる。掘方は63号墓の覆土上ということもあり、形態不明である。

上甕 内湾口縁の甕であるが湾曲は弱い。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口縁部のみの遺存である。口径41cm程に復原される。

下甕 鋸先口縁の甕である。口縁部はほぼ水平である。内側への張出しあり、口縁部下に三角突帯を1条巡らす。外面にハケメが残る。口径35.4cm、底径10cm、器高40.3cmを測る。

38号甕棺墓 (Fig.99,PL.36)

38号墓の北側で検出した。甕同士からなる合口の小形棺墓である。上半を大きく削平される。主軸はN-114°Wを向く。埋置角は24°である。掘方は楕円形に遺存し現長0.75m、幅0.45mを測る。上甕と下甕の境付近に段を持つ。

上甕 鋸先口縁の甕である。口縁部わずかに内傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。胴部にはやや張りが強い。口径34cm程に復原できよう。

下甕 鋸先口縁の甕である。口縁部はほぼ水平である。端部は丸く收める。胴部は若干張る。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径31cm、底径9.1cm、器高41.6cmを測る。

40号甕棺墓 (Fig.99,PL.36)

39号墓の北側で検出した。主軸はN-170°Wを向く。埋置角は43°である。下甕の中に別個体の破片が落ち込んでおり、上甕があった可能性が高い。掘方は楕円形で、長1.05m、幅0.9mを測る。

下甕 鋸先口縁の甕である。口縁部はわずかに内傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。胴部にはやや張りが強い。外面はハケメが残る。口径36.6cm、底径10cm、器高43.2cmを測る。

41号甕棺墓 (Fig.100,PL.37)

50号の東端で検出した。上半部を大きく削平される。主軸はN-171°Wを向く。埋置角はほぼ水平であろう。掘方は覆土上での検出であり、形態は不明である。

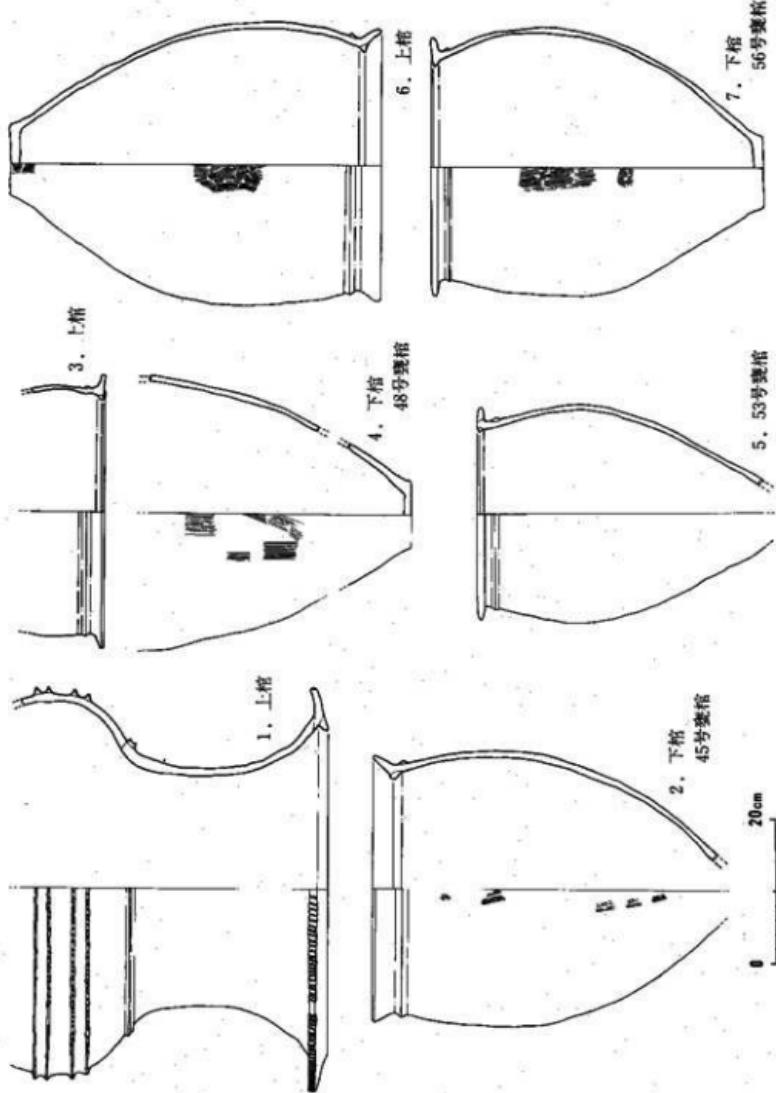


Fig.102 45·48·53·56号漆棺測圖(1／8)

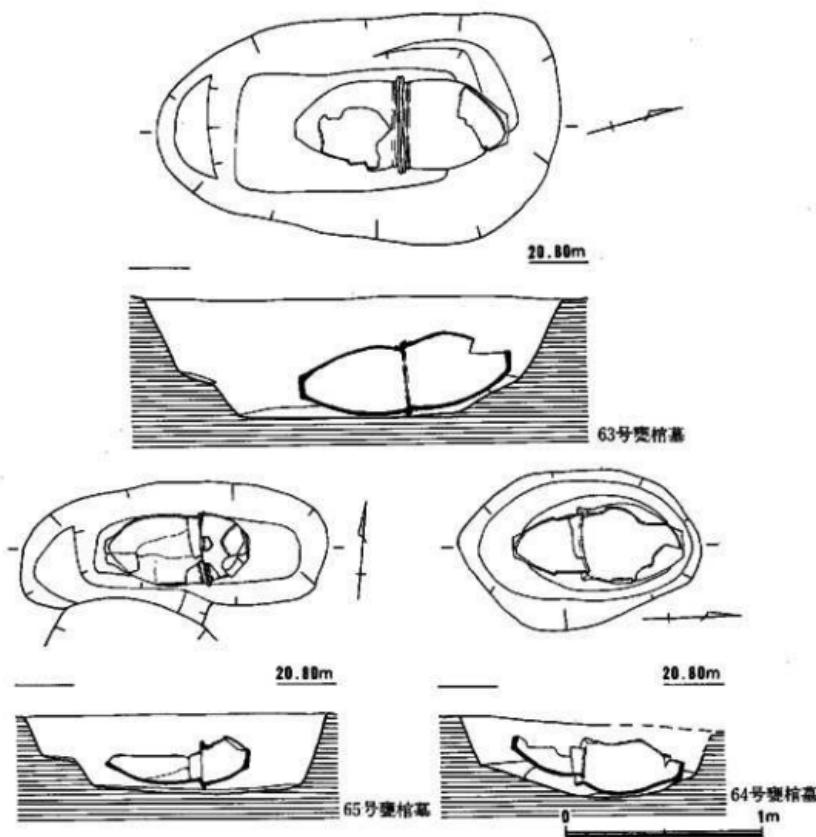


Fig.103 63~65号斐棺墓実測図(1/30)

斐棺 鋤先口縁の壺である。口縁部はほぼ水平で外端でわずかに下がる。端部は丸く收める。外底部付近にハケメが残る。底径10cmで、口径37cm、壺高52cm程に復原されよう。

42号斐棺墓 (Fig.100, PL.37)

50号墓の西端で検出した。主軸は南を向く。埋置角は11°である。上半部を削平される。斐同士の合口斐棺である。掘方は楕円形に遺存しており、長1.1mを測る。

上斐 鋤先口縁の壺である。口縁部はほぼ水平である。口縁下で緩やかに屈曲して肩部に至る。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径34cm程に復原され、下斐とはほぼ同大であろう。

下斐 鋤先口縁の壺である。口縁部はほぼ水平である。外面にハケメが残る。口縁部下に三角

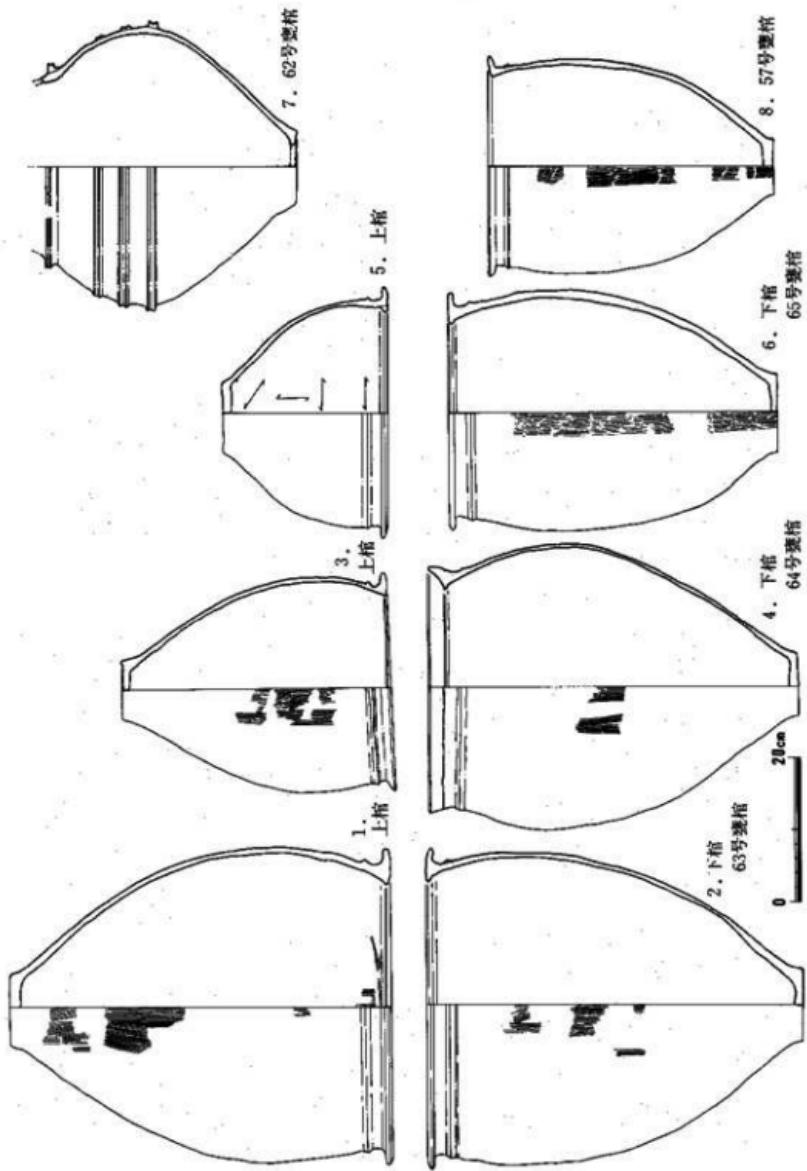


Fig.104 57~62~65号型棺实物图 (1 / 8)

尖帯を1条巡らす。口径33.9cm、底径8.5cm、器高40.7cmを測る。

45号甕棺墓 (Fig.101,102,PL.37)

46号墓を切る。主軸はN-179'-Eを向く。埋置角はほぼ水平であろう。上半部を削平される。甕と甕からなる合口甕棺である。掘方は楕円形に遺存しており、長1.7m、幅1mを測る。

上甕 鋤先口縁の広口甕である。口縁端は平坦面をなし刻目を施す。頭部はあまり締まらない。頸部付け根にM字突帯を1条、胴部上半に2条1单位の三角突帯を2列施す。復原口径55cmを測る。

下甕 内湾口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部付け根直下に三角突帯を1条巡らす。口径36.8cm、器高は52cmほどであろうか。

46号甕棺墓 (Fig.101,102,PL.38)

36号墓の南側で検出した。主軸はN-83'-Eを向く。埋置角は13°である。上半部を削平される。上甕を下甕に被せている。掘方は楕円形に遺存しており、長1.1m、幅0.75mを測る。

上甕 鋤先口縁の甕である。口縁部はやや内傾する。胴はあまり張らない。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径38cm程に復原される。

下甕 鋤先口縁の甕である。口縁部を粉失してしまったが、上甕と同様な鋤先口縁である。

53号甕棺墓 (Fig.101,102)

36号墓の西側で検出した。主軸はN-53'-Eを向く。埋置角はほぼ水平である。大きく削平される。単棺である。掘方は円形に遺存しており、現径0.6mを測る。

甕棺 鋤先口縁の甕である。口縁部は水平である。内側への張出しが小さい。胴は丸みを帯びる。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径29cm程に復原される。

58号甕棺墓 (Fig.101,102,PL.38)

BW区の南端にある東西に長い溝状土壤の床面で検出した。主軸はN-82°Wを向く。埋置角は22°である。甕同士の合口甕棺である。掘方は楕円形に遺存しており、長1m、幅0.6mを測る。

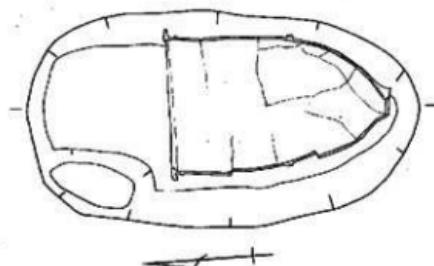
上甕 内湾口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径36.6cm、底径9.8cm、器高51.5cmを測る。

下甕 鋤先口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部はわずかに内傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径36.6cm、底径10.2cm、器高46.5cmを測る。

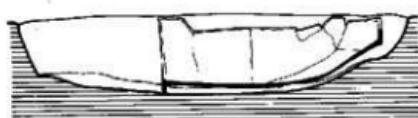
62号甕棺墓 (Fig.101,104)

40号墓の北側で検出。主軸はN-73'-Wを向く。上半部を削平される。

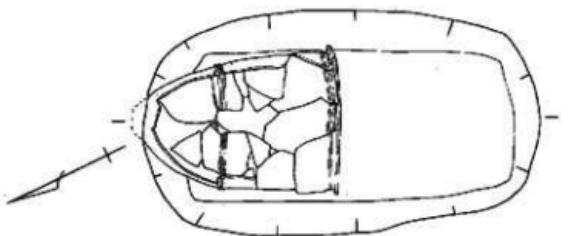
甕棺 口縁部を欠くが甕であろう。胴部が強く張り、中位やや上の最大径から上半部にかけてM字突帯を3条巡らす。口縁部付け根付近と思われる位置にコ字突帯を1条巡らせる。



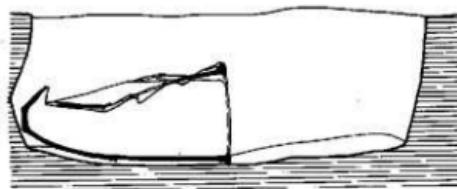
21.20m



51号墓



21.20m



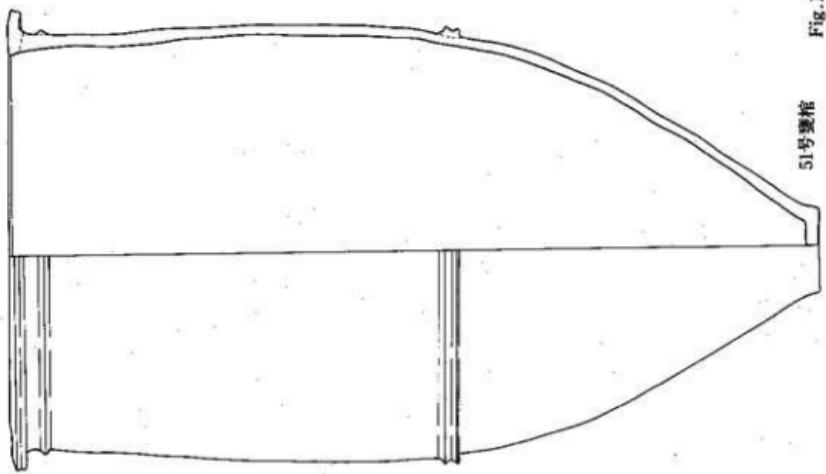
58号墓

1m

Fig.105 51·58号墓实测图(1/30)

Fig. 106 51 - 58号腰椎失测图(1 / 8)

51号腰椎



58号腰椎

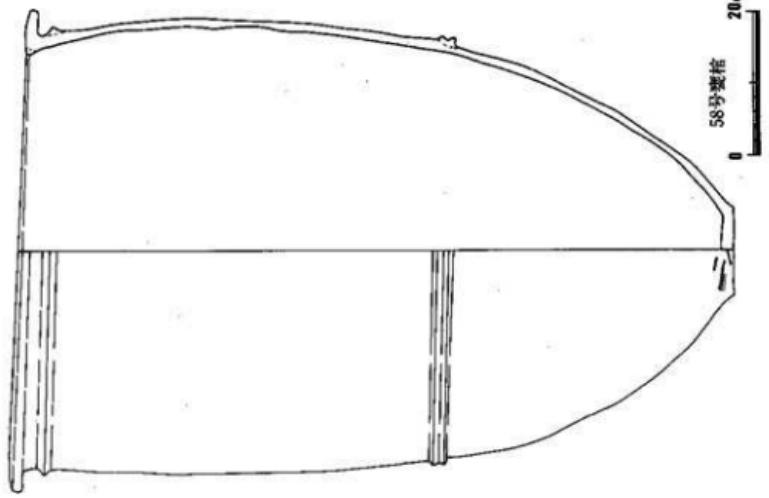
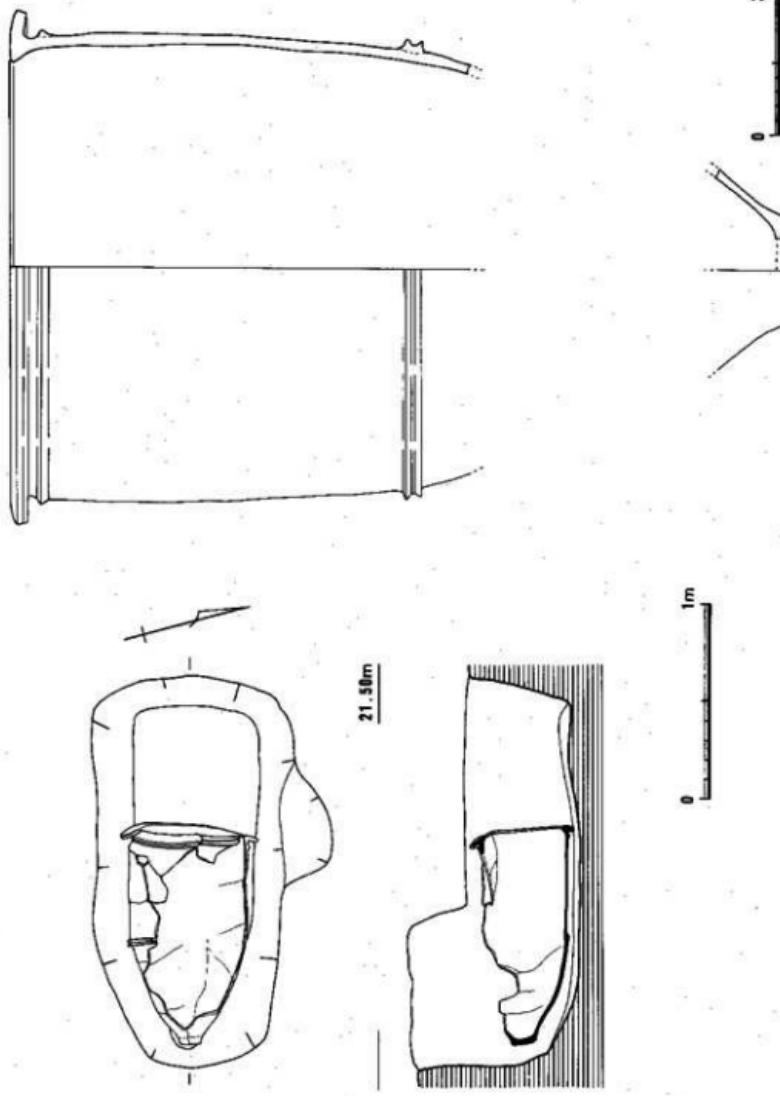


Fig. 107 60号棧橋(1/30)・60号櫓(1/8)実測図



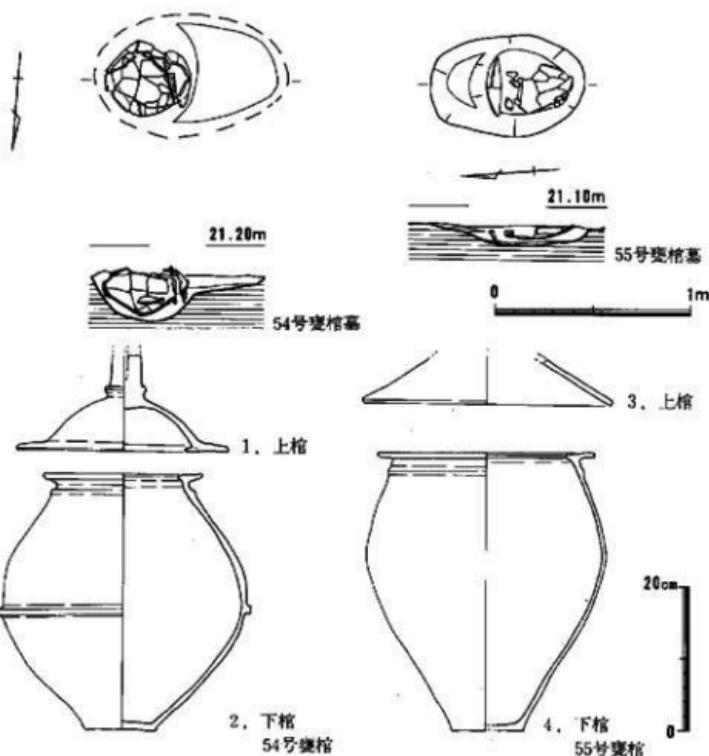


Fig.108 54・55号壺棺墓実測図(1/30)・54・55号甕棺(1/8)実測図

63号壺棺墓 (Fig.103, 104, PL.39)

4号土壙墓を切り30号壺棺墓に切られる。主軸はN-14°-Eを向く。埋設角は-7°である。甕同士の合口である。壠方は長楕円形であるが長方形を意識したのであろう。長2m、幅1.2mを測る。

上甕 鋤先口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部はほぼ水平である。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径43.2cm、底径9.7cm、器高53.1cmを測る。

下甕 鋤先口縁の甕である。外面にハケメが残る。上甕と同形同大である。口縁部はほぼ水平である。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径43cm、底径10cm、器高52.6cmを測る。

64号壺棺墓 (Fig.103, 104, PL.39, 62)

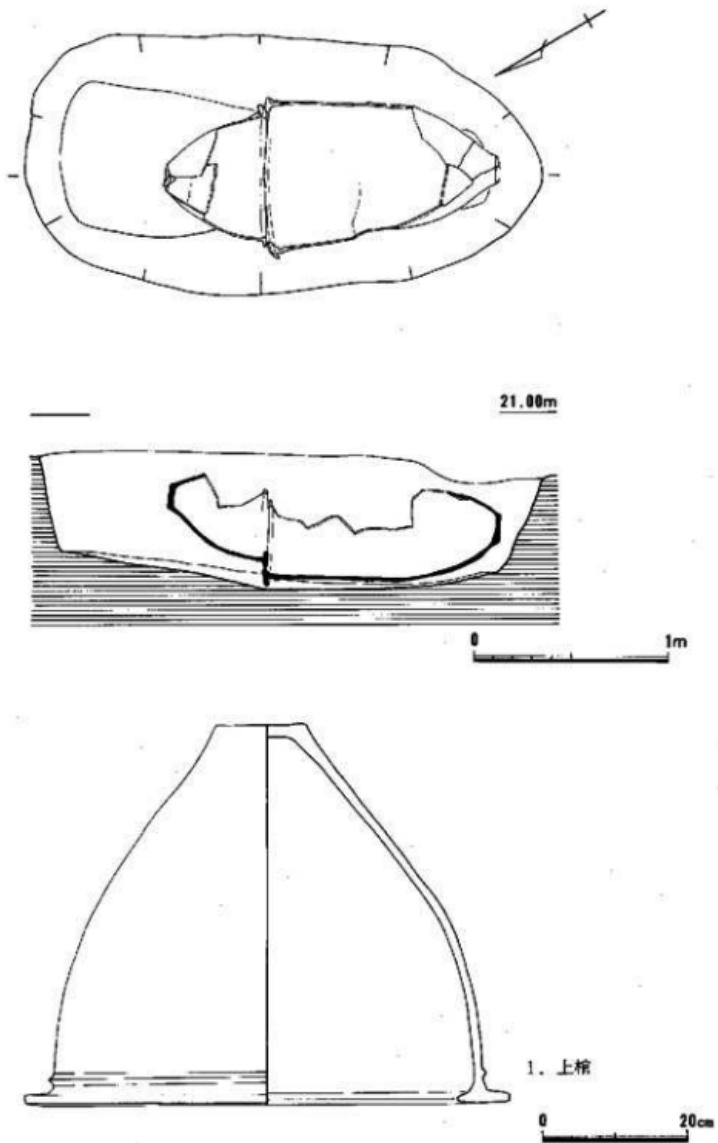


Fig. 109 49号墓椁室测图(1/30)·49号墓棺(1/8)测图

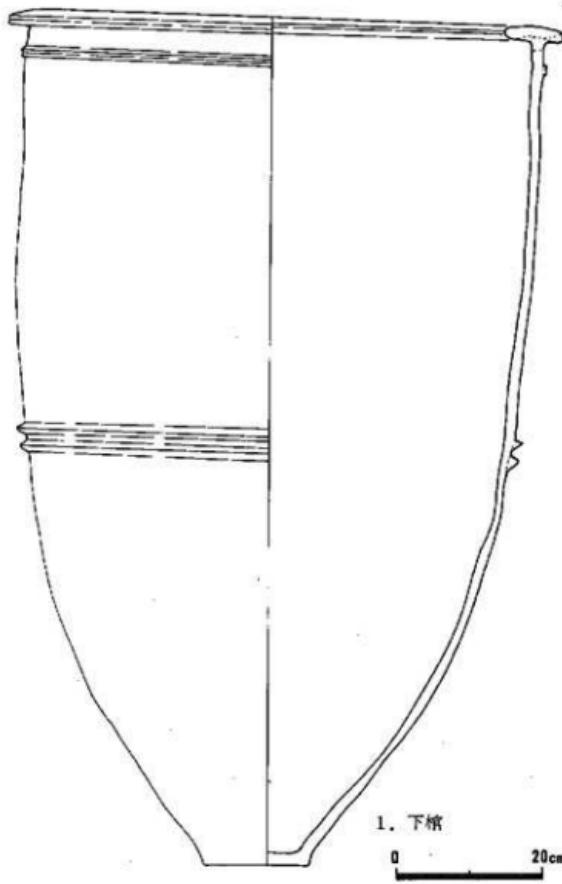


Fig.110 49号墓棺実測図(1/8)

25号墓を切る。主軸はN-178°-Wを向く。埋置角は10°である。上蓋を下蓋の中に差し入れる。掘方は長楕円形である。長1.3m、幅0.8mを測る。

上蓋 鋤先口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部はやや内傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径29.8cm、底径8cm、器高37.9cmを測る。

下蓋 内湾口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径33.8cm、底径9cm、器高51.9cmを測る。

65号墓 棺墓 (Fig.103, 104, PL.40)

33号墓に切られる。主軸はN-85°-Eを向く。ほぼ水平埋置である。掘方は長方形に近い長楕円形である。長1.5m、幅0.65mを測る。

19、20、21、25、63、65号の各小形墓は埋納位置も深く掘方も定型化しており、埋葬法は大型棺に劣らない。

上蓋 鉢である。外面にハケメが残る。口縁部は鋤先状を呈する。胸部は丸みを帯びる。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径35cm、底径9.8cm、器高22.9cmを測る。

下蓋 鋤先口縁の甕である。外面にハケメが残る。口縁はほぼ水平である。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径32.6cm、底径11cm、器高46cmを測る。

BW群では44号墓が新相の要素を持つ。

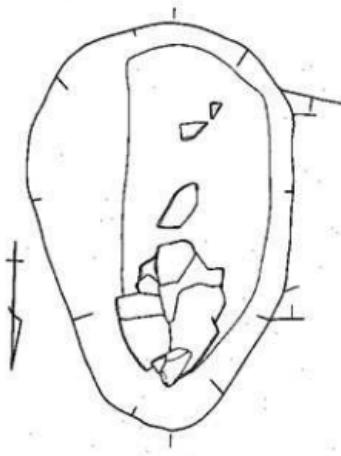
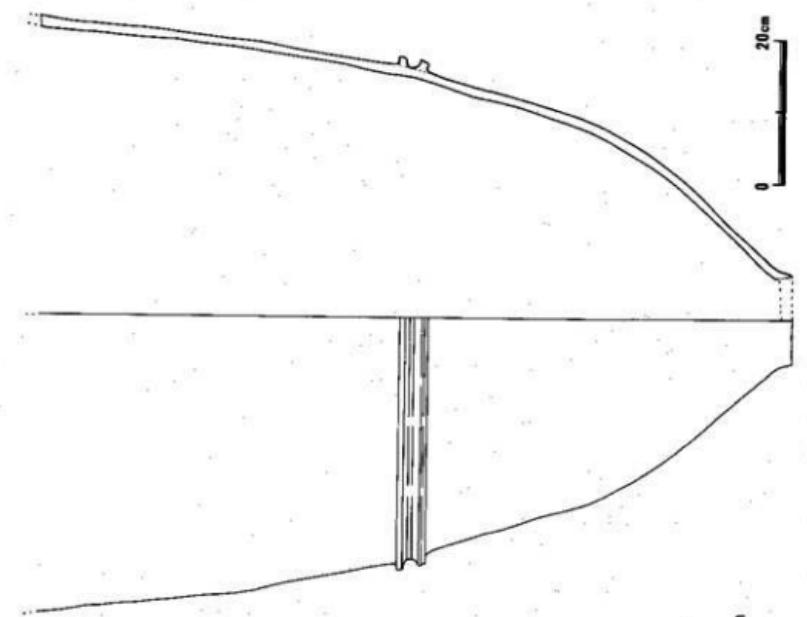


Fig. 111 52号棊基実測図(1/30)・52号棊柱(1/8)実測図

5) C E群の甕棺墓

51号甕棺墓 (Fig.105,106,PL.40)

C E群の北端近くで検出。C E群は調査区南端まで甕棺墓が延びており、南側へまだ延びる可能性はある。51号甕棺墓は単棺墓で主軸をN-4°-Eに取る。埋置角はほぼ水平である。掘方は長楕円形で、長2m、幅1.1mを測る。

甕棺 大形甕である。鋤先口縁であるが内側への張出しは小さい。外端部は平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位に1条のM字突帯を巡らす。口径63.3cm、底径11.7cm、器高101cmを測る。

58号甕棺墓 (Fig.105,106,PL.41)

51号甕棺墓の南側で検出した。主軸はN-155°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長方形で長2m、幅1.1mを測る。床はほぼ平坦である。

甕棺 大形甕である。鋤先口縁であるが内側への張出しは小さい。外端部は平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位より下がった位置に1条のM字突帯を巡らす。胴部はかなり丸みを持つ。口径66cm、底径12.2cm、器高100cmを測る。

60号甕棺墓 (Fig.107,PL.41)

調査区南端で検出した。単棺で54号墓に切られる。主軸はN-75°-Wを向く。埋置角はほぼ水平である。掘方は長方形で、長2m、幅1mを測る。

甕棺 大形甕である。遺存が極めて悪い。鋤先口縁であるが内側への張出しは小さい。外端部は平坦面をなす。口縁下に三角突帯を1条、胴部中位に1条のM字突帯を巡らす。口径70.4cm、底径14.6cmを測る、器高は110cm程度。

54号甕棺墓 (Fig.108,PL.63)

60号墓を切る。主軸はN 93° Wを向く。埋置角12°である。掘方は長楕円形で、長1m、幅0.65mを測る。

上甕 鋤先口縁の高環である。口縁部はほぼ水平である。脚柱部付け根に突帯を巡らす。口径29.2cmを測る。

下甕 脊の張る器形の小形甕である。鋤先口縁で、内側への張出しは小さい。口縁下に1条の三角突帯、胴部中位に1条のコ字突帯を巡らす。口径22.2cm、底径10cm、器高36cmを測る。

55号甕棺墓 (Fig.108)

58号墓の北側で検出した。主軸はN 7° Eを向く。上半部を大きく削平される。

上甕 蓋形上器であろう。直線的に延びる單口縁である。口径34.5cmほどに復原される。

下甕 鋤先口縁の甕である。口縁部はわずかに内傾する。胴部はかなり張る。口径29.7cm、底径10cm、器高39cmを測る。

6) CW群の甕棺墓

CW群は大形棺2基のみの検出である。52号墓の南側には甕棺墓が見られずCW群の墓域はここで終わるものと思われ、またCE群の現状での南限ともほぼ一致し、墓域自体もこの付近で終わる可能性もある。

49号甕棺墓 (Fig.109,110,PL.42)

CW群の北端で検出した。合口甕棺墓で主軸をN-26°Eに取る。埋置角は6°ではほぼ水平である。掘方は長楕円形で、長2.6m、幅1.3mを測る。上甕側の床面に地山土を埋め戻している。

上甕 鍋先口縁の大形甕である。口縁部はほぼ水平である。口縁部下に三角突帯を巡らす。口径67cm、底径12.5cm、器高53cmを測る。

下甕 砲弾型の大形甕である。鍋先口縁で、内外に大きく張り出す。外端部は平坦面をなす。口縁下にコ字突帯を1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。口径76cm、底径14.8cm、器高116cmを測る。

52号甕棺墓 (Fig.111)

CW群の南端で検出した。近代以降の擾乱で大きく削平されるが、単棺墓であろう。主軸はほぼ北を向くと思われる。掘方は長楕円形に遺存し、長2.1m、幅1.3mを測る。

甕棺 脊部のみの遺存であるが、砲弾型の大形甕である。胴部中位に2条のコ字突帯を巡らす。

(2) 土壙墓

上甕墓と考えられる遺構は6基検出した。いずれも副葬遺物などではなく時期は不明であるが、甕棺墓と切り合う例については皆甕棺墓に切られている。

1号土壙墓 (Fig.112,PL.42)

CW群で検出。主軸はほぼ南北を向く。2段掘りであるが2段目は西側壁に寄っている。ほぼ長方形で長2.3m、幅1mを測る。

2号土壙墓 (Fig.112,PL.43)

CW群で検出。主軸はN-4°Eを向く。ほぼ長方形で長2m、幅1mを測る。北側に小穴が見られる。段は見られない。

3号土壙墓 (Fig.113,PL.43)

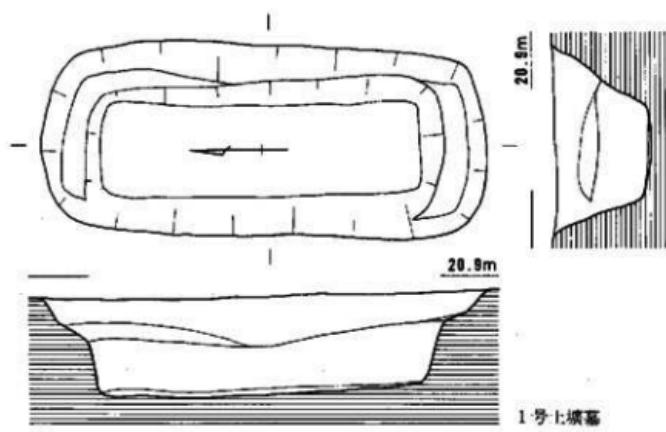
CW群で検出。主軸はN-13°Eを向く。ほぼ長方形で長1.8m、幅0.9mを測る。南側に地山を削り残した段状部を持ち、木棺墓の可能性もあるが、覆土上層からは確認できなかった。

4号土壙墓 (Fig.113,PL.44)

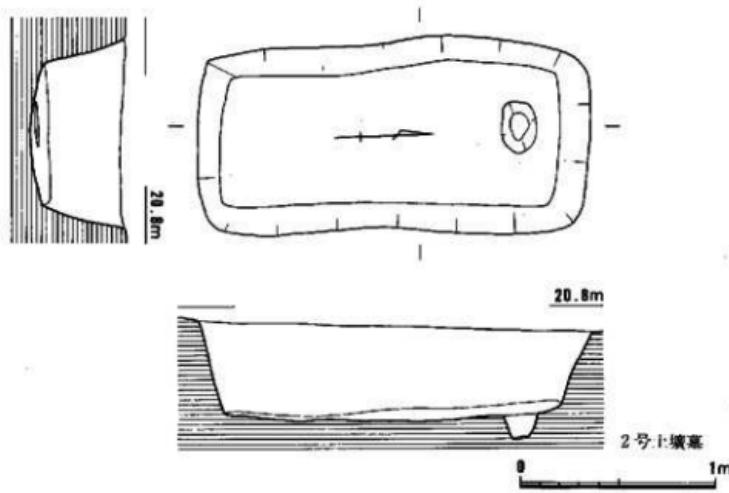
BW群で検出。主軸はN-4°Eを向く。やや崩れた長方形で長2.15m、幅0.9mを測る。63号甕棺墓に切られる。2段掘りの土壙墓で、2段目の幅は40cmほどである。

5号土壙墓 (Fig.114)

CW群で検出。主軸はN-15°Eを向く。やや崩れた長方形で長1.9m、幅1mを測る。床は中

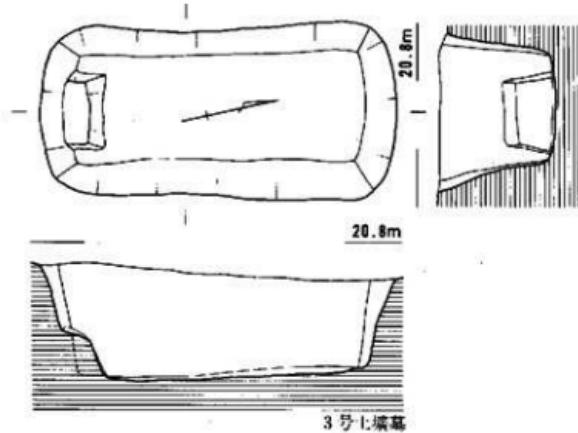


1号土塘墓

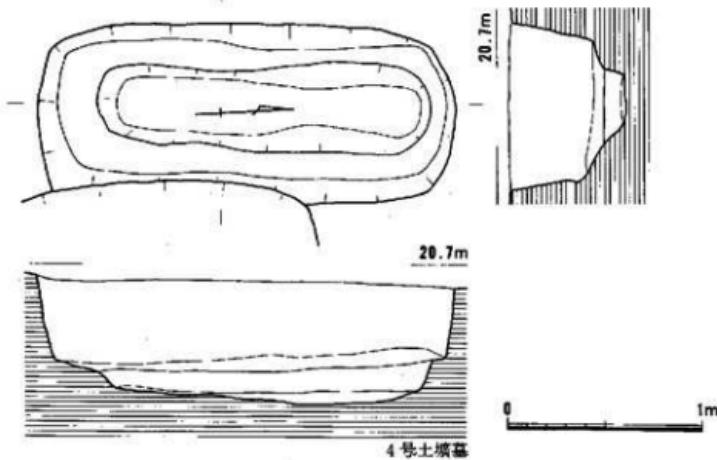


2号土塘墓

Fig.112 1·2号土壤墓实测图(1/30)

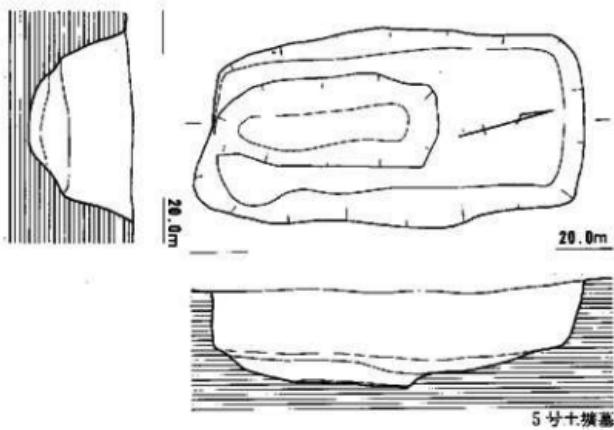


3号土墳墓



4号土墳墓

Fig. 113 3・4号土墳墓実測図(1/30)



5号土塘墓

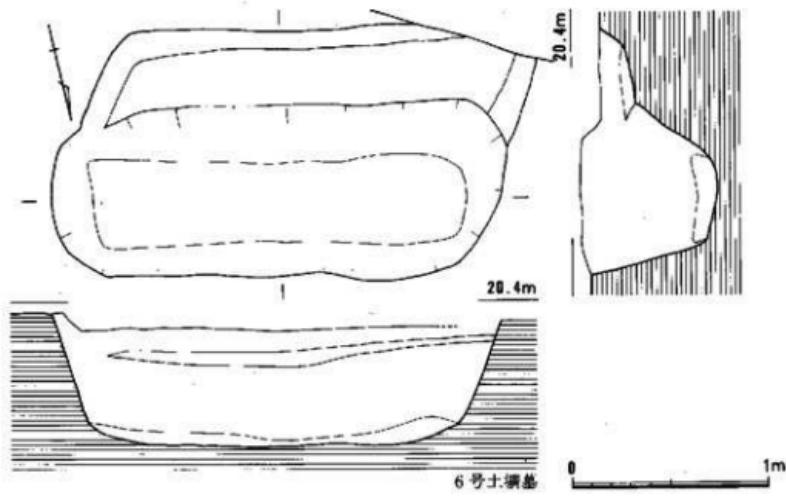


Fig.114 5·6号土塘墓实测图(1/30)

央に向かって緩やかに深くなり、両側に細長い窪みを持つ。甕棺墓の掘方と極めて類似しており甕棺墓群とのなんらかの関係が考えられよう。

6号土壙 (Fig.114)

BW群で検出。47号、57号甕棺墓に切られる。主軸はN-78°-Wを向く。やや崩れた長方形で長2.4m、幅1.4mを測る。2段掘りであるが、1段目が浅くまた北側に寄っていることから別造構の切り合いかなどの疑問の点もある。

(3) 土壙

最初に甕棺墓群に伴う祭祀土壙と考えられるもの、その他、甕棺墓群に関連すると考えられるものについて報告する。祭祀土器を供獻したと思われる上墳は12基程度を確認した。これらの土壙は概ね甕棺墓群の東西を限るような位置に配列されている。いずれも不定形の土壙に雖然と土器を投げ入れている状況である。しかし、出土した土器は復原しえない破片が相当数あるものの、復原しうる個体については、出土時から完形で投げ込まれているような状況を示し、故意に破碎したようなものではなく、また意識的に据え置いたような状況でもない。

2号土壙 (Fig.115,116,PL.45)

AW群で検出。12号甕棺墓を切る。南北に長い溝状の土壙である。土壙の大きさは長2.9m、幅0.9mを測る。南端で一段深くなるが、遺物の廃棄レベルはほぼ同じで、上段の床面近くである。遺物は高环、壺などが両側を中心に散漫に投棄されている。

出土遺物 Fig.116-1は広口壺口縁であろう。口縁部は直立気味に立ち上がり緩やかに外反する。端部はヨコナデにより四線状を呈する。内外とも器壁の遺存が悪いが丹塗の痕跡が見られ、丹塗研磨が施されていると思われる。復原口径22cmを測る。

2はほぼ完形の壺である。口縁は大きく外反する単口縁である。頸部と肩部、胸部との境は判然としない。頸部上位に沈線が1条巡る。底部は若干上底状を呈する。口径13cm、器高21cmを測る。外面および内面の頸部付近にまで丹塗が施される。この壺は器形が前期板付II式との類似を見せる。また頸部の沈線は前期壺に見られる段のルジメントと見なされる。しかし、いわゆる壺の越式壺とは器形が異なっており、別系統で前期壺の系統を引いた土器と考えられよう。

3は高环脚部である。裾部に向かって緩やかに広がる。脚柱部付け根に三角穴帯が1条巡る。外側は丹塗の後縦方向のミカキを施す。脚端部の径18.6cmを測る。

3号土壙 (Fig.117,116)

AW群で検出した。2号土壙の西側である。遺物の見られない時期不明の浅い4号土壙を切る。崩れた方形の平面形を呈し、長1m、幅0.8mほどを測る。遺物は床面近くから高环が1個体出土したのみである。

出土遺物 Fig.116-4、5は出土状況から見て同一個体であるが接合できなかった。4は高环脚部である。口縁部は鋤先口縁で体部はあまり張らず直線的である。復原口径20.6cmを測る。5

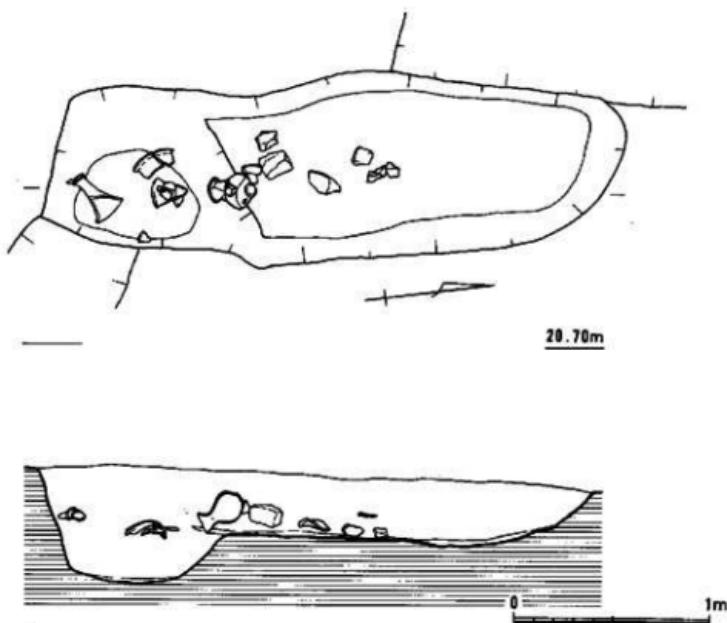


Fig.115 2号土壤実測図(1/30)

は脚部である。突帯などは見られない。円筒状の柱部から楕部付近で強く広がる。復原脚端部径16.1cmを測る。

5号土壤 (Fig.118,119,120,121)

AW群で検出した。10号土壤を切る。23号壺柏基の南側であるが23号墓との切り合いは不明である。楕円形に近い不定形の平面形を呈し、床面には凹凸が多い。長3.35m、最大幅1.6mを測る。遺物の出土状況は中央部やや東側の2個の壺形土器を中心には散漫に投棄されている。破片の多くは床面から浮いた位置にある。

出土遺物 Fig.119-1は壺口縁部片である。鋤先状を呈する。外端部は平坦面をなし、端部に縱方向の刻口を施す。復原口径45cmを測る。

2は広口壺である。口縁部は鋤先状で端部は平坦面をなし、縱方向の刻目を施す。頭部は直立気味からわざかに外傾しながら広がる。頭部付け根はあまり締まらない。比較的肩が張り、肩部と胴部中位にM字突帯をそれぞれ1条巡らす。口径26cm、器高53cmを測る。

Fig.120-5、6は同一個体であろう。比較的頭部の短い短頭壺である。口縁部は鋤先状を呈する。頭部はわずかにすぼまりつつ大きく外反し、頭部付け根に三角突帯を1条巡らす。胴部は最大径が胴部中位にあるなで肩の器形で胴部中位とその上にM字突帯を1条づつめぐらす。口径30cmを測る。

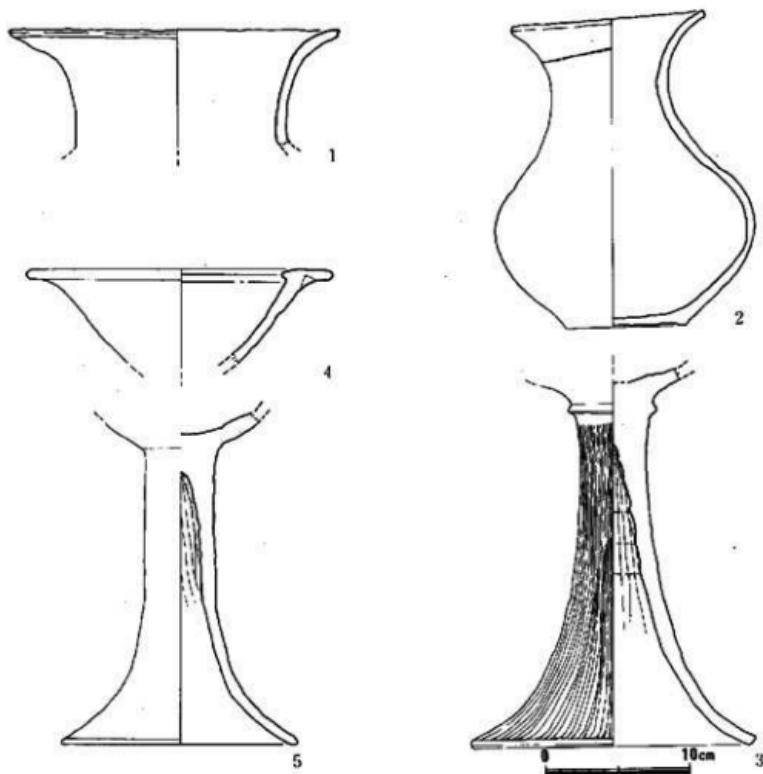


Fig.116 2・3号土壙出土遺物実測図(1/4)

7は広口壺もしくは5、6のような短頸壺の口縁部である。口縁部は鋤先状を呈し、外傾する。端部は平坦面をなす。頸部は直立気味から緩やかに外反し口縁部に至る。口径25cmを測る。

Fig.119-3、4、Fig.120-8、9、10は底部である。3は壺であろう。わずかに外反しつつ立ち上がる。復原底径8cmを測る。4も壺であろう。底径9cmを測る。8も壺と考えられる。底径が小さく不安定である。立ち上がりは大きく広がる。底径5cmを測る。9は立ち上がりがあまり広がらないが調整が丁寧であり壺かも知れない。底径9cmを測る。10は甕としてよいと思われるが、外面はナデ調整される。底径8cmを測る。

Fig.121 11は甕である。内傾する短い鋤先口縁を呈する。胸部は大きく張り、丸みを持つ。突帯などは施されない。復原口径57cmを測る。12も甕である。口縁部は鋤先口縁で、ほぼ水平で

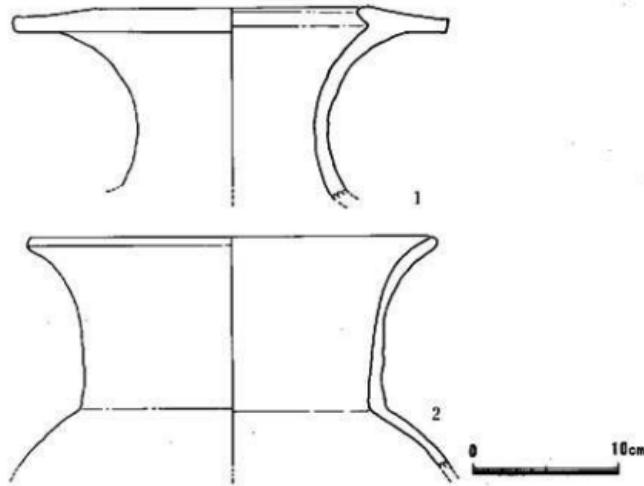
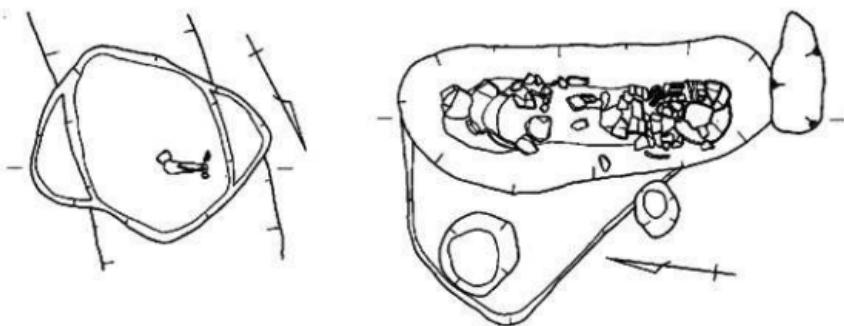


Fig.117 3·7号土壤尖测图(1/30·1/60)·7号上出土遗物尖测图(1/4)

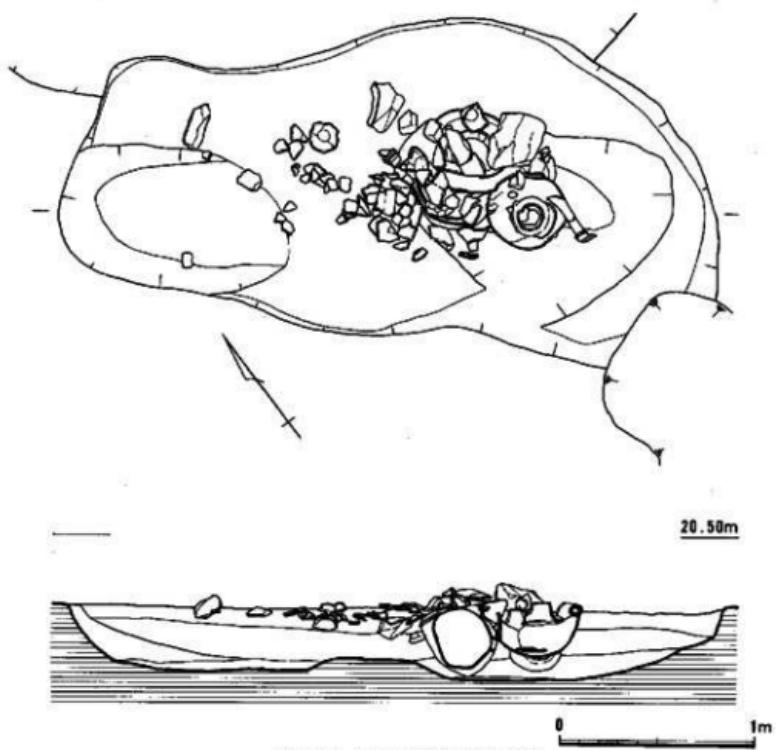


Fig. 118 5号土塚実測図(1/30)

ある。口縁外端部は平坦面をなし、内端部は丸く收める。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。胴部はやや丸みを帯びる。復原口径52cmを測る。

13、14、15は高環である。13は坏部である。口縁は鋤先状ではば水平である。上端部は丸みを持つ。坏部付け根に突帯は施さない。口径25cm、坏部の深さ7cmを測る。14は脚部である。脚端部へ向けて緩やかに広がるが脚袴はあまり大きく広がらない。脚端径15.4cmを測る。15は脚柱部である。細く長い脚柱部を持ち、脚袴付近で緩やかに広がる。脚部付け根にM字に近いコ字突帯を巡らす。

16は黒曜石製の石鎌である。覆土中から出土したもので混入の可能性もある。

7号土塚 (Fig. 117, PL. 45)

AW群で検出した。5号上塚の南側、14、15号甕棺墓の西側にあたる。土塚の形態は他の祭祀上塚に比べて比較的端正な長楕円形を呈する。長1.9m、幅0.7mを測る。遺物の出土状況は、南北両端付近に広口壺を1個づつ埋棄したような状況を示す。遺物は床面からかなり浮いてい

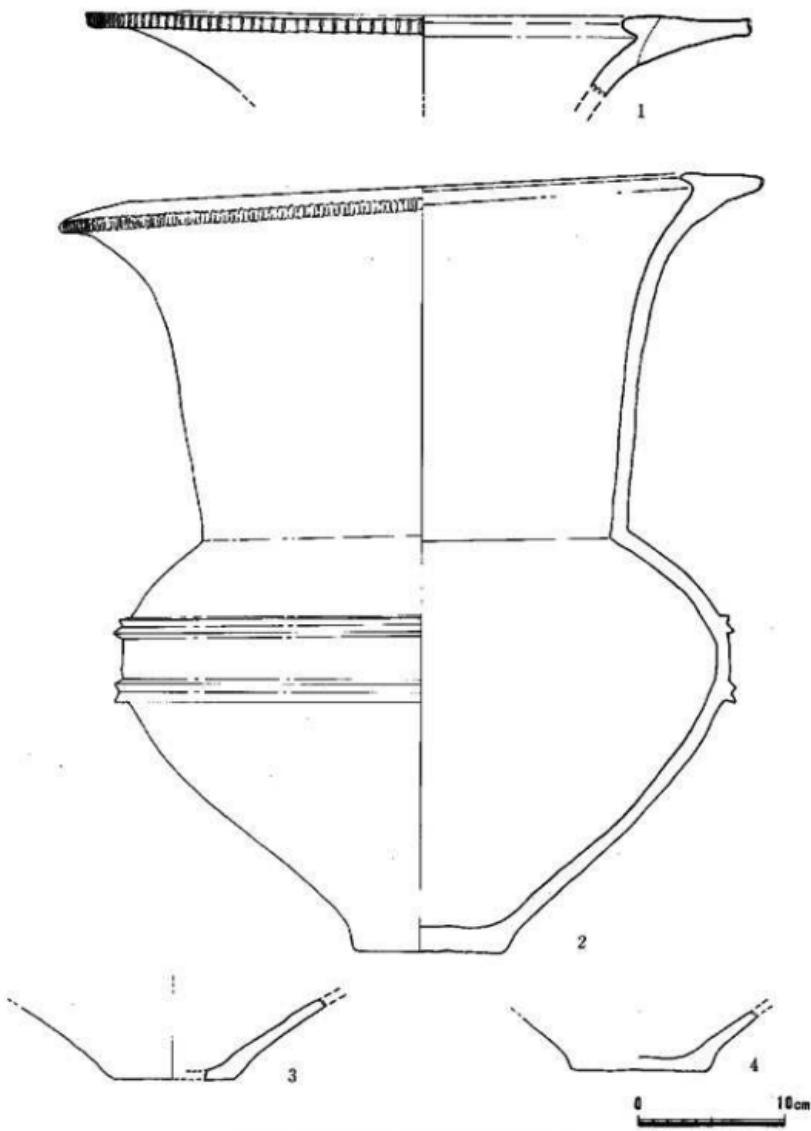


Fig. 119 5号土壤出土遺物実測図(1)(1 / 4)

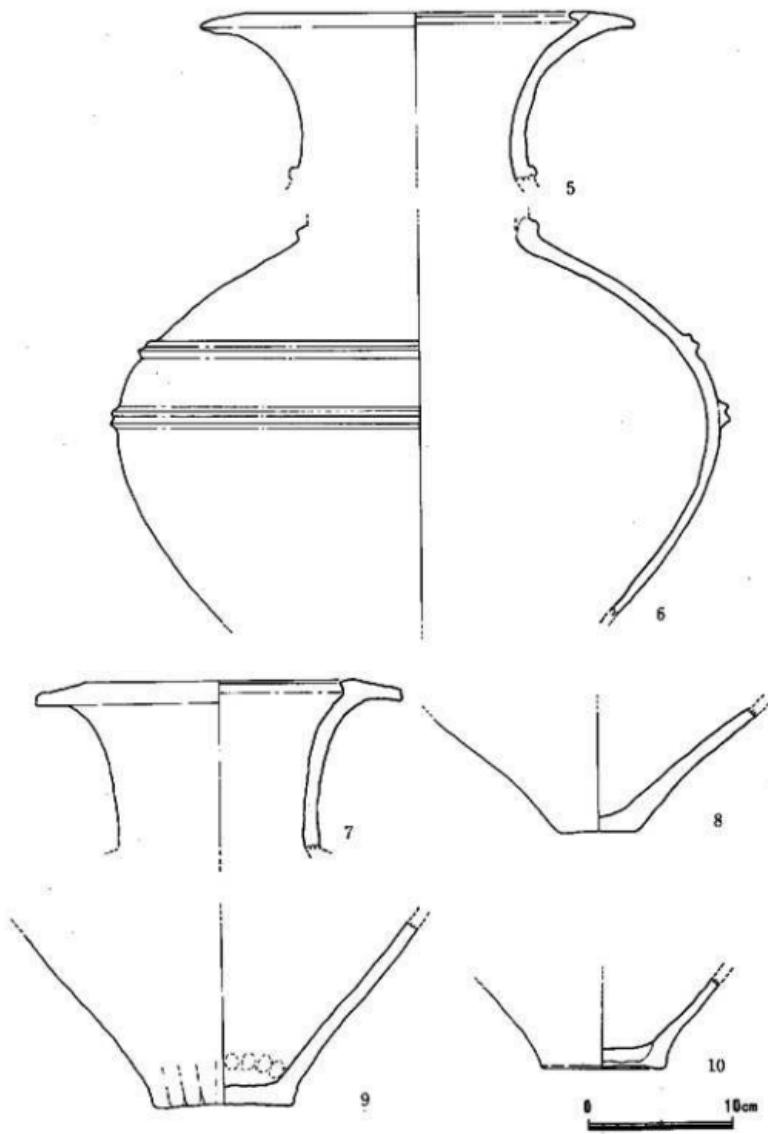


Fig. 120 5号土壤出土遺物実測図(2)(1/4)

る。本来完形であったものが削平によって壊されたような状況と考えられる。

出土遺物 1は短頸壺の頸部である。口縁部は鋸先状を呈し、外傾する。外端部は平坦面をなす。頸部は一旦すぼまりながら外反する。口径30cmを測る。2は広口壺の頸部である。頸部は直立気味に立ち上がり、付け根はあまり締まらない。口縁部付近で緩やかに外反する口縁部は単口縁である。外面から頸部中位にかけて丹塗の痕跡が見られ丹塗研磨が施されたものと思われる。口径28cmを測る。

10号土壙 (Fig.122)

AW群で検出した。5号土壙、23号甕棺墓に切られる。24号甕棺墓は床面で検出した。埋納の深さを見ても5号土壙が埋まりきらいうちに掘り込まれたものと考えられる。

10号土壙は、東西に長い長楕円形に近い不定形を呈する。長3.1m、幅1.5mを測る。床面中央に柱穴状の落ち込みが見られる。出土遺物は無い。

18号土壙 (Fig.123, 124)

BE群で検出した。32、34号甕棺墓の南側、35号甕棺墓の北側にあたる。形態は崩れた楕円形状の不定形で、長3.5m、幅1.7mほどを測る。遺物の出土状況は、中央部から東側にかけて、短頸壺1個、広口壺1個のはば2個体分の破片が散漫に散布している。床面からはやや浮いた状態である。

出土遺物 Fig.124-1は広口壺の肩部である。頸部の立ち上がりはわずかにすぼまるようである。肩は強く張り最大径は胴部のかなり上位にある。この位置にコ字突帯を1条巡らす。突帯端部は強いヨコナデによって凹面をなしている。外面は丹塗と思われる。胴部最大径は30cmを測る。

2は魁頭壺である。口縁部は鋸先口縁で、内側への張出しあは小さく、上方にわずかに突起するのみである。口縁部はやや外傾する。端部は平坦面をなす。頸部は一旦すぼまりつつ外反し、頸部最小径は頸部中位にある。肩はなく肩で胴部最大径は胴部中位にある。胴部は紡錘車形を呈する。胴部中位から上の頸部付け根にかけて、突帯を巡らす。突帯はすべて断面M字状のもので、頸部付け根に1条、胴部最大径に1条、その間を4等分した2/4および3/4の位置に各1条、計4条巡らす。口径27cm、胴部最大径42cmを測る。

8号土壙 (Fig.125, 127)

BW群で検出した。BW群の北端に位置し、16、18号甕棺墓の西側にあたる。9号土壙を切る。形態は崩れた楕円形を呈する。他の祭祀土壙に比べてかなり深さがある。床面には凹みが見られる。長2.5m、幅2mを測る。遺物の出土状況は現況での最上位付近に破片が散漫に散布する。器種は高环が多いようである。

出土遺物 Fig.127-1は高环部である。口縁部は鋸先口縁である。内端部がわずかに上方へ立ち上がる。端部は内外とも丸く取める。体部は丸みを帯びる。口縁部付近はヨコナデを施す。

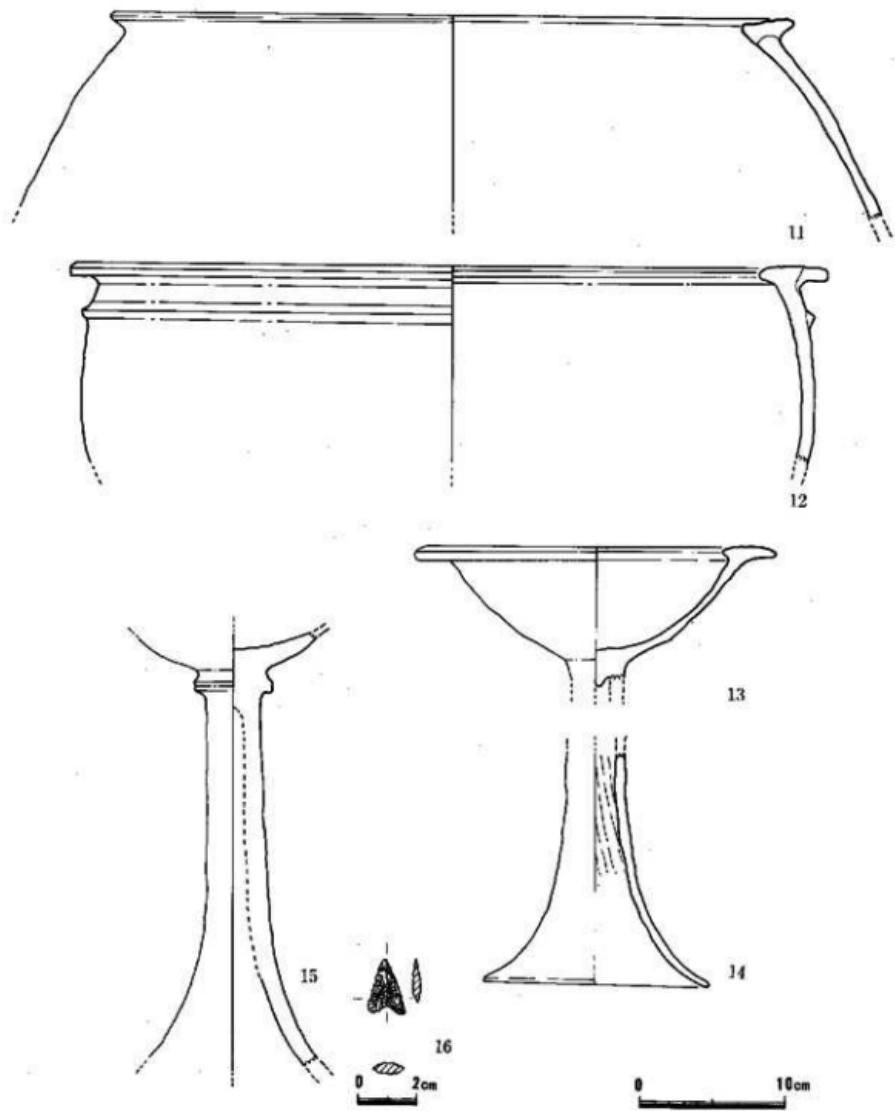


Fig. 121 5号土壤出土遺物実測図(3)(1/4・1/2)

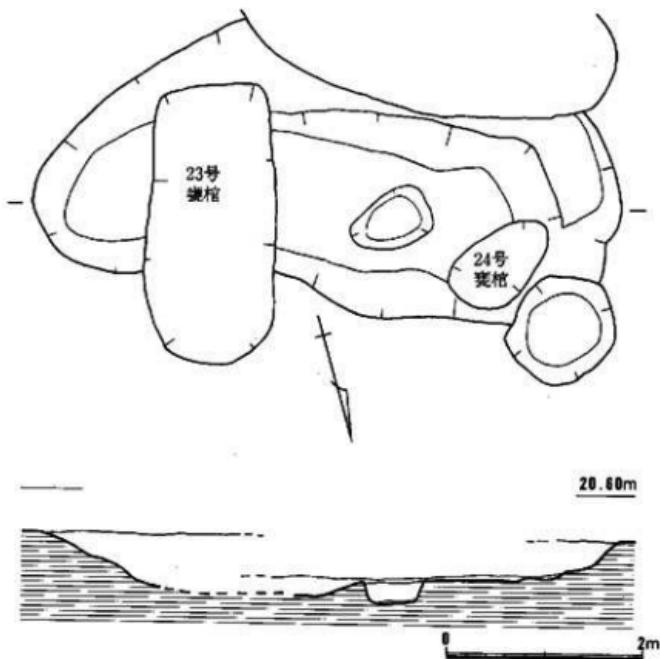


Fig.122 10号土塙実測図(1/60)

復原口徑23.2cmを測る。2も高環環部である。口縁部は鋸先口縁で、ほぼ水平である。外端部は丸く收め、内端部は断面三角に造る。体部はあまり張らず、直線的である。復原口徑24.4cmを測る。3は高環脚部である。脚柱部は緩やかに広がり脚端部に至る。脚端部はあまり広がらず、やや不安定な感がある。外面はミガキを施す。内面には絞り痕が見られる。脚端部径15cm、脚高20cmを測る。4は底径4cmほどの小形の底部で、立ち上がりから見て小形甕の底部であろう。

8号土塙 (Fig.126, 127)

BW群で検出した。8号土塙に切られる。19号甕棺墓の西側にあたる。形態は長楕円形を短軸で半載したような平面形を呈する。8号土塙ほどではないが、比較的深さがある。床はほぼ平坦である。長2.5m、幅1.7mほどを測る。遺物は北東隅に投棄された石の周囲に集中して出土した。遺物には壺、甕などが見られる。

出土遺物 Fig.127-5は短頸壺である。頸部は一旦わずかにすばまりつつ立ち上がり、口縁部で大きく外反する。頸部の最小径は頸部中位の若干下にある。口縁部は短口縁で端部は丸く收める。頸部付け根に三角突帯を1条巡らす。肩は強く張り、胴部最大径は胴部中位のやや上にあ

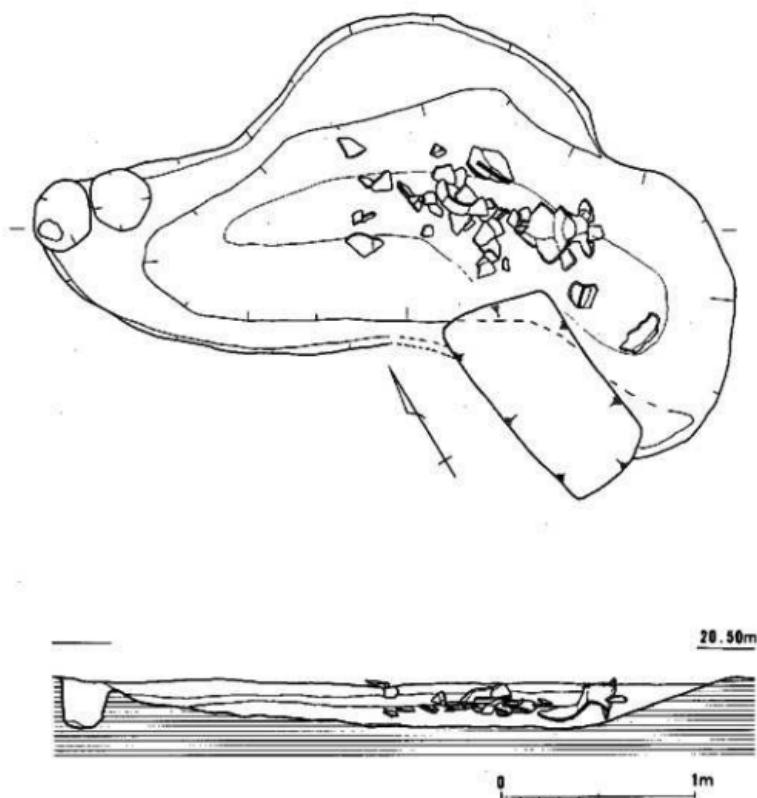


Fig. 123 18号土壤実測図(1/30)

る。底部は平底で剖部に比して厚い。口径20cm、底径8cm、器高31cmを測る。

この壺は形態的には中期初頭のいわゆる城の越式壺との類似点が多いと考えられる。もちろん共伴した甕から見て、また甕棺墓群の消長から見て中期初頭までさかのばらせることは困難であるから、城の越式壺を祖型とする短頸壺の1種と考えなくてはなるまい。城の越式壺からの系譜としては口縁部が朝顔型に広がる広口壺がよく知られているが、この型式組列とは別の組列をなすものであろう。ここで、5号土壤出土のFig.120-5、6の壺や、18号土壤出土のFig.124-2のような壺と比べて見ると、単口縁と鋤先口縁の違いはあるが、器高に比べて短い頸部、付け根から一旦すばまりつつ広がる頸部の形状、口径に比べて大きく張る胴部、また頸部付け根の突帯など共通点が多い。城の越式壺から9号土壤例を経てこの短頸壺に至る系列が同じ城の越式壺を祖型としつついわゆる朝顔口縁の広口壺とは異なる1系列をなすものであろう。た

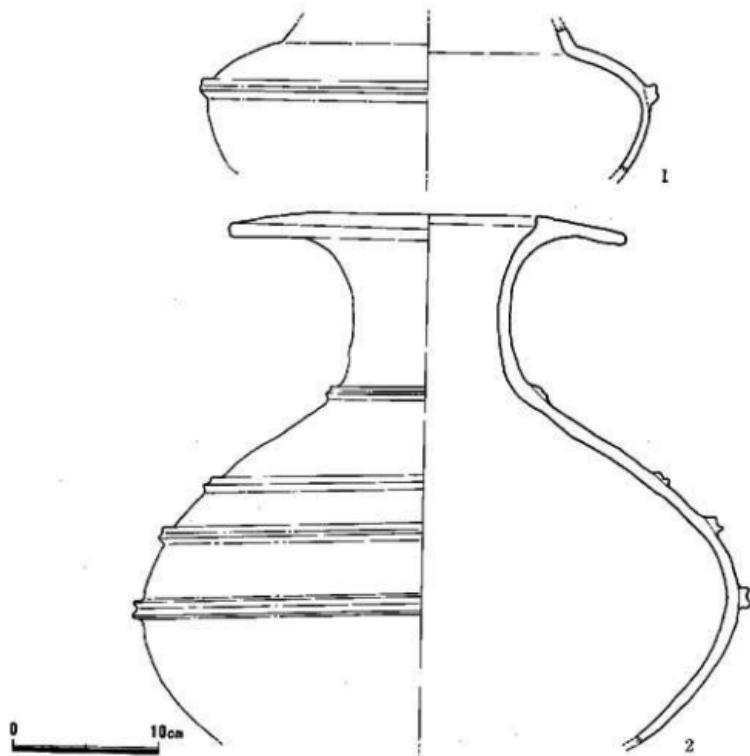


Fig. 124 18号土壙出土遺物実測図(1/4)

だ、糸島地方で特徴的に多く見られる壺形土器のうちで、これとよく似た鋤先口縁の短頸壺であるが、なで肩で、頸部と胴部の境が判然としない壺形土器との系譜関係については、まだ検討しておらず、ここでは置くことにする。

6は壺である。口縁部は鋤先状を呈し、内側への張出しあは小さい。ほぼ水平で、内外とも端部は丸く收める。口縁部直下に三角突帯を1条巡らせる。胴部はわずかに丸みを帯びる。復原口径34cmを測る。7は底部である。立ち上がりから見て壺ではないかと思われる。内外面とも器壁があれて調整がよくわからない。底部は厚い平底で、わずかに上底気味になる。底径9.4cmを測る。

12号土壙 (Fig.128)

BW群で検出した。28号甕棺墓の北側にある。形態はやや崩れた長方形で、長1.5m、幅0.8mほどを測る。現状での深さは55cmほどである。主軸はN-35°-E程度であろう。床は平坦で南端

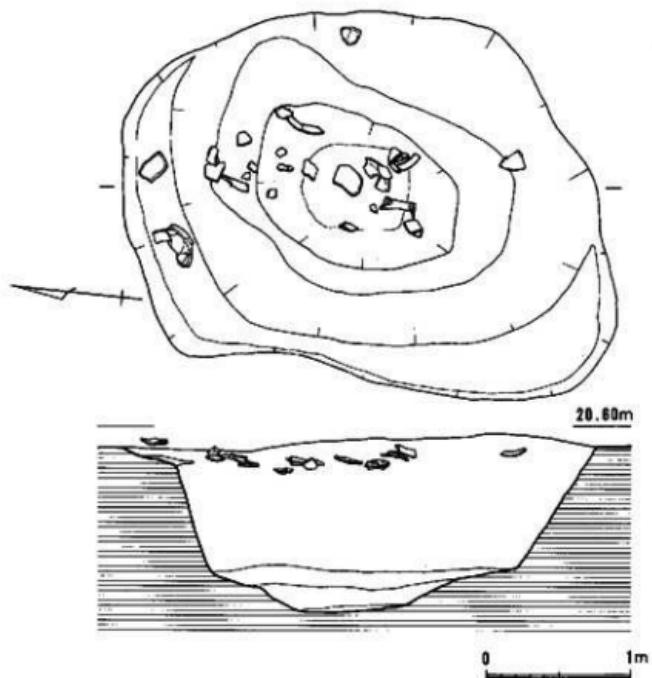


Fig.125 8号土壙実測図(1/40)

に掘り込みを持つ。壁は比較的直に立つ。この土壙は祭祀土壙とは考えられない。形態の特徴からは、まず床面に掘り込みを持つということからは、いわゆる足下掘り込み上塽墓と考えられないこともないが、この掘り込みは、調査時の不注意で覆土など詳しく観察しておらず、木の根痕等の擾乱の疑いがある。むしろ、北側壁の横方向の抉り込みを重視して、斎棺墓側方の形態を意識した土壙と考えることも可能である。いずれにしても墓に関連する土壙であることは間違いないだろう。出土遺物は見られなかった。

13号土壙 (Fig.128)

BW群で検出した。16号祭祀土壙、25号祭祀土壙を切る。出土遺物もなく厳密には祭祀土壙かどうか不明で、斎棺墓に関連するかどうかかも不明であるが、28号斎棺墓から西へ延びる斎棺墓、祭祀土壙列内にあることから、一応ここで報告する。形態は細長い長椭円形で、長1.8m、幅0.6mを測る。

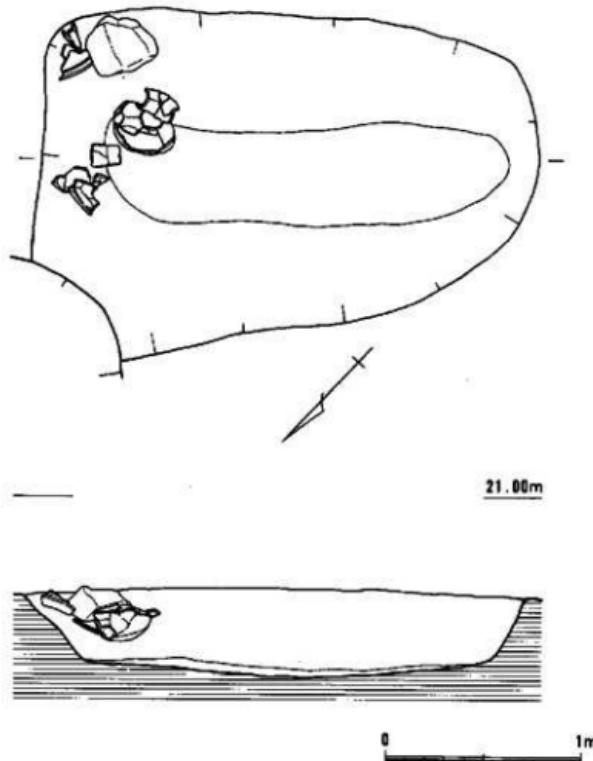


Fig.126 9号土壤実測図(1/30)

16号土壤 (Fig.128,129)

BW群で検出した。25号土壤を切り、13号土壤に切られる。形態は椭円形に近い不定形である。長1.5m、幅0.8から1mほどであろう。浅い土壤であるが、遺物は床面から若干浮いて出土している。遺物は土壤の中央付近に集中して出土した。

出土遺物 Fig.129-1は高環坏部である。口縁部は鋤先状を呈し、ほぼ水平で、外端部でわずかに下がる。外端部は平坦面をなし、内端部は薄く尖らせる。体部は若干丸みを持つ。内面に部分的に丹塗の痕跡が見られ、外面にも施されていたものと考えられる。口径28cmを測る。2は上底状を呈する変形土器の底部である。底部は踏張り気味に若干広がり、厚い。端部は平坦である。底径7cmを測る。形態的には中崩初頭に特徴的に見られる城の越式變形土器に類似するが、高環の形態はそこまでさかのほるものではなく、また出土状況から見るとともに混入とは考えられない。むしろ弥生時代中期の中九州から西九州にかけて見られるいわゆる「黒髮式」

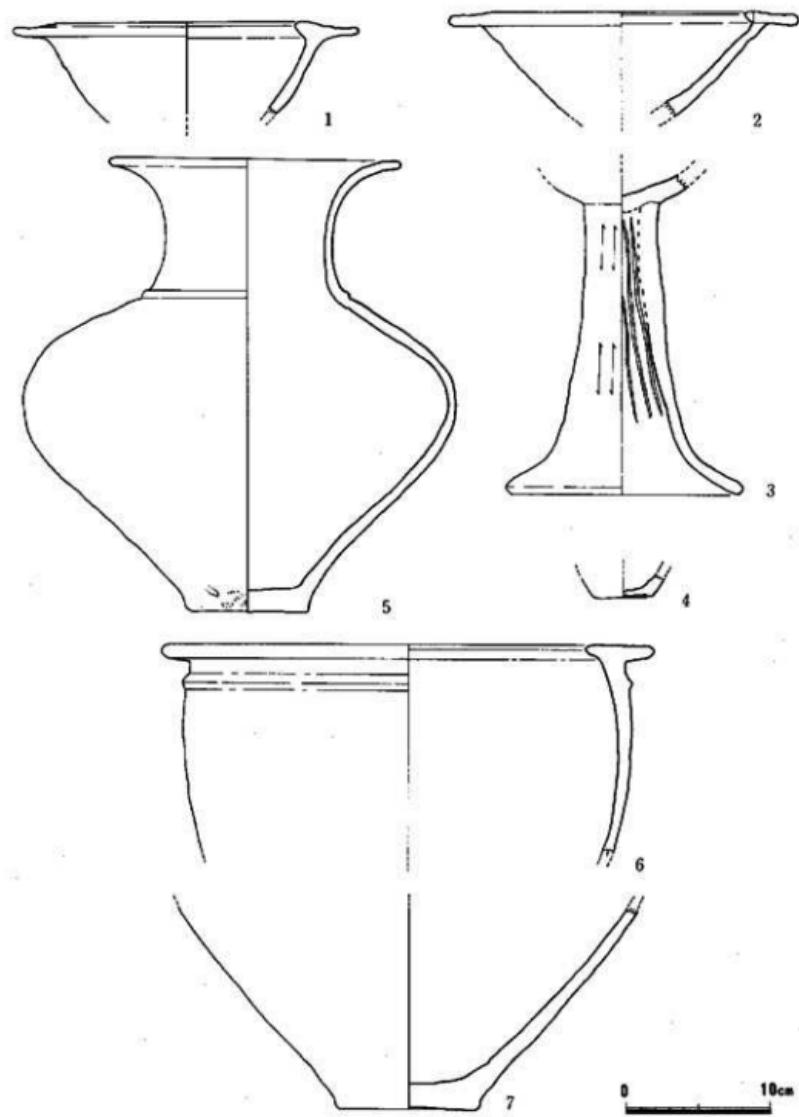


Fig.127 8·9号土壤出土遺物実測図(1/4)

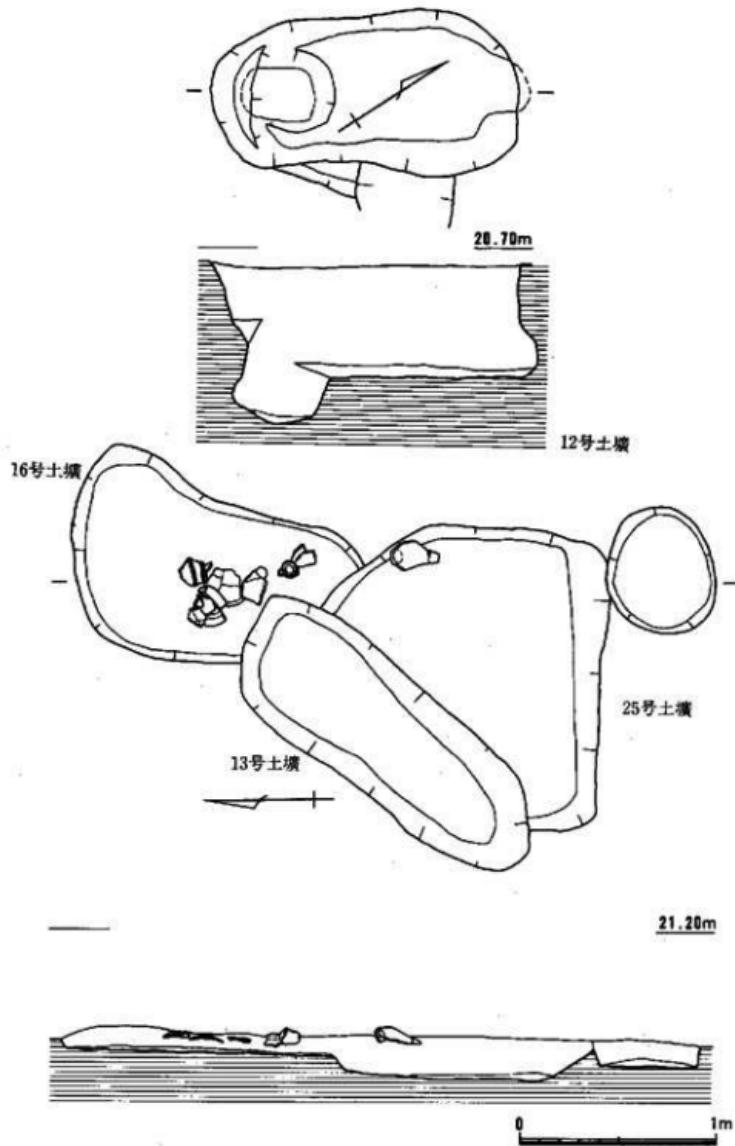


Fig.128 12・13・16・25号土壤実測図 (1 / 30)

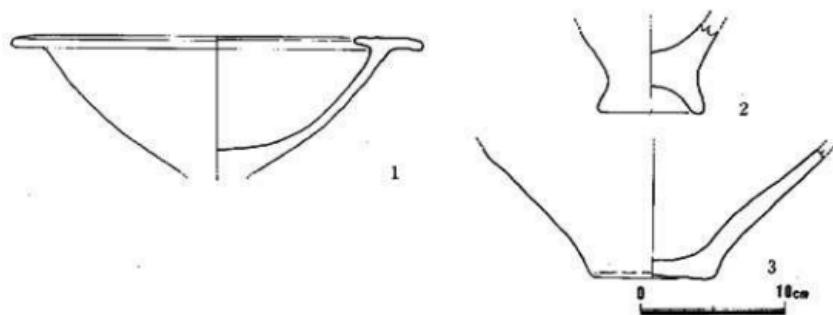


Fig.129 16・25号土壤出土遺物実測図(1/4)

系の變形土器と考えた方が妥当であるかもしれない。

25号土壤 (Fig.128,129)

BW群で検出した。16号土壤、13号土壤を切られる。形態は桔円半裁形に近い形に復原できる。16号土壤より若干深いが、遺物は床面からは浮いており、16号上端と同じレベルから出土している。出土遺物は西端で壺底部が出土したのみである。

出土遺物 Fig.129-3は底部で、壺と考えられる。立ち上がりは若干外反し、底部はわずかに上底状を呈する。外面は底部近くまでナデが施されている。底径8cmを測る。

17号土壤 (Fig.130,PL.46)

BW群で検出した。50号豪棺墓、45号～46号豪棺墓などの西側、38号、36号豪棺墓などの東側に南北に延びる。形態は溝状を呈する。長6.9m、幅1.6～1.15mほどを測る。遺物は南端部付近に集中するが、量は少ない。壺、高环などが見られる。床面からは若干浮いて出土している。

出土遺物 Fig.130-1、2は同一個体ではないかと思われる。頸部はあまり締まらない。立ち上がりは一旦わずかにすばりつつ大きく外反するようである。肩が強く張り、胸部最大径は胸部上位にくる。外面および内面の一部に丹塗のあとが見られ、外面および、頸部から胸部最大径付近の内面にかけて丹塗が施されたものであろう。胸部最大径33cmを測る。2は底部である。やや上底気味の底部から胸部が大きく広がる。外面には丹塗が見られる。底部のやや上に焼成後の穿孔が見られる。底径7cmを測る。1、2が同一個体とすると、胸部高22cm～23cm程度に復原できる。

3、4、5も同一個体の可能性がある。3は壊部である。口縁端を欠く。鋤先口縁で、やや外傾するようである。体部はあまり張らずやや浅めである。口径25cmほどに復原できよう。内面に丹塗のあとが見られるが、本来は外面にも施されたものと思われる。4は脚柱部である。

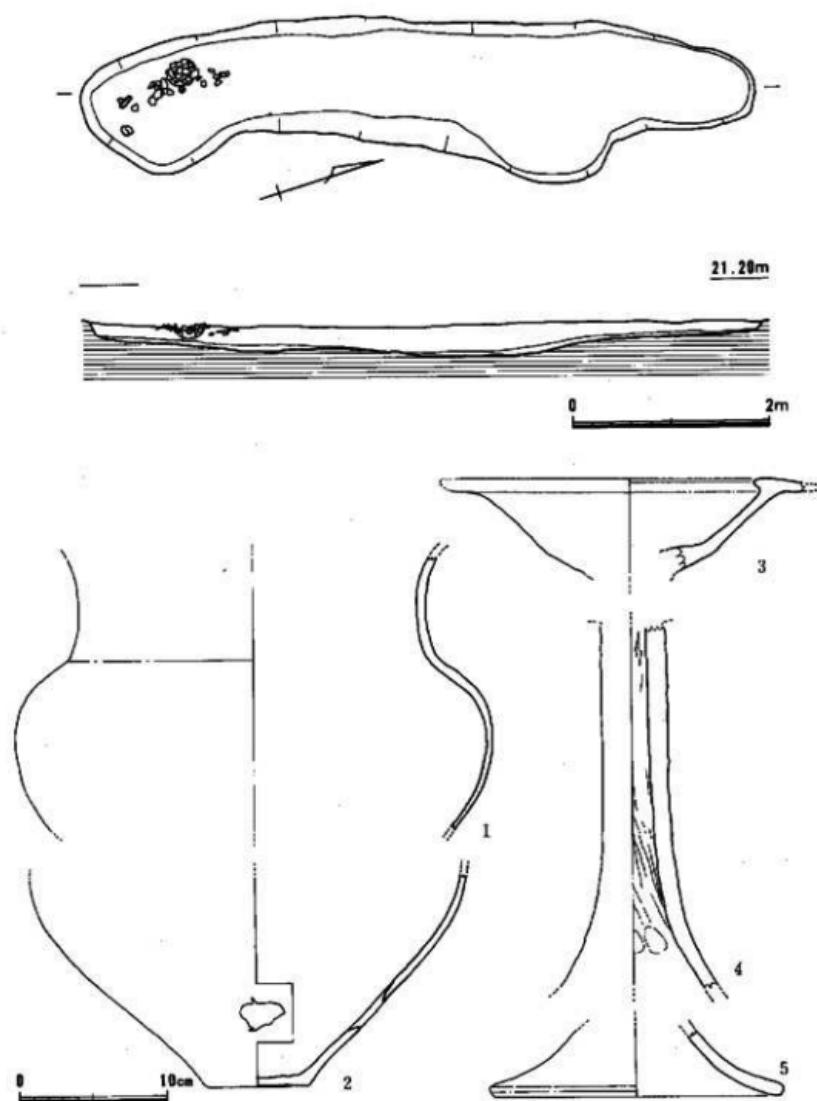


Fig. 130 17号土壤(1/60)・17号土壤出土遺物(1/4)実測図

高い円筒部を持ち、裾部付近で緩やかに広がる。内面には絞りあとが見られる。脚柱部付け根付近の径4.5cmを測る。5は脚部である。4と同一個体とすれば脚高に比して脚端径が小さく、不安定な感がある。脚端部は平坦面をなす。外面に丹塗が見られる。脚端部径20cmを測る。3、4、5を同一個体とした場合の器高は35cmほどに復原できる。

20号土壙 (Fig.131)

BW群で検出した。40号斐棺墓の北側にある。形態は橢円形に近い不定形で長1.3m、幅0.9mほどを測る。13号土壙と同様出土遺物等は見られない。畿内には他の祭祀土壙と同様に考えてよいかどうかは不明である。

21号土壙 (Fig.131, 132)

BW群で検出した。40号斐棺墓の西側、23号土壙の北側にある。形態は崩れた長方形を呈する。長1.1m、幅0.8mほどを測る。床面は東側に向かって深くなる。遺物は覆土全般にわたって出土し、土壙の大きさの割に量が多い。甕、高坏が多い。

出土遺物 Fig.132-2はやや小形の甕である。口縁部のみの破片であるが、胴部は若干張るようである。内側にはほとんど張り出さない鋸先口縁で、口縁はほぼ水平である。復原口径10cmを測る。外面は丹塗である。3は甕である。口縁部は薄く、外側に大きく張り出す鋸先口縁である。外端部は平坦面をなし、縦方向の刻目を施す。内端部は丸く收める。胴部は丸みを持ち、最大径が口径を上回る。口縁部下に1条、胴部最大径付近に1条、断面M字突帯を巡らす。外面には丹塗を施す。復原口径31cmを測る。4も甕である。鋸先口縁ではほぼ水平である。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。胴部はあまり張らず、残存部では底部へのすばまりが見られず、やや長胴の感がある。復原口径27cmを測る。5は甕底部である。下半部に断面M字の突帯を1条巡らす。底部はわずかに上底状を呈する。底径7cmを測る。外面には丹塗を施す。丹塗を施すことや、断面M字突帯を巡らす点から、3の甕と同一個体とも考えられるが、やや径が異なるようである。

8~12は高坏である。脚部ばかりで、坏部は無い。8は円筒状の脚柱部から大きく広がる裾部を持つ。脚端部は平坦面を持つ。外面は丹塗を施す。脚端部径19cmを測る。9は脚部部である。端部は少し厚くなり、甘い平坦面をなす。脚端部径20cmである。外面は丹塗である。10は8と同様な脚部であろう。端部は平坦面をなし、強いヨコナデにより凹面に近い。外面は丹塗で、縦方向のミガキを施す。脚端部径20cmを測る。11は9と同じような脚部である。端部は甘い平坦面をなし、端部付近でやや厚くなる。脚端部径23cmを測る。12は小片で、單口縁の広口或口縁部の可能性もあるが、内外面とも器壁が荒れて調整も不明であり確証がない。21号土壙からは甕は他に出土していないことから一応高坏としておく。口縁部は平坦面をなし、強いヨコナデを施す。

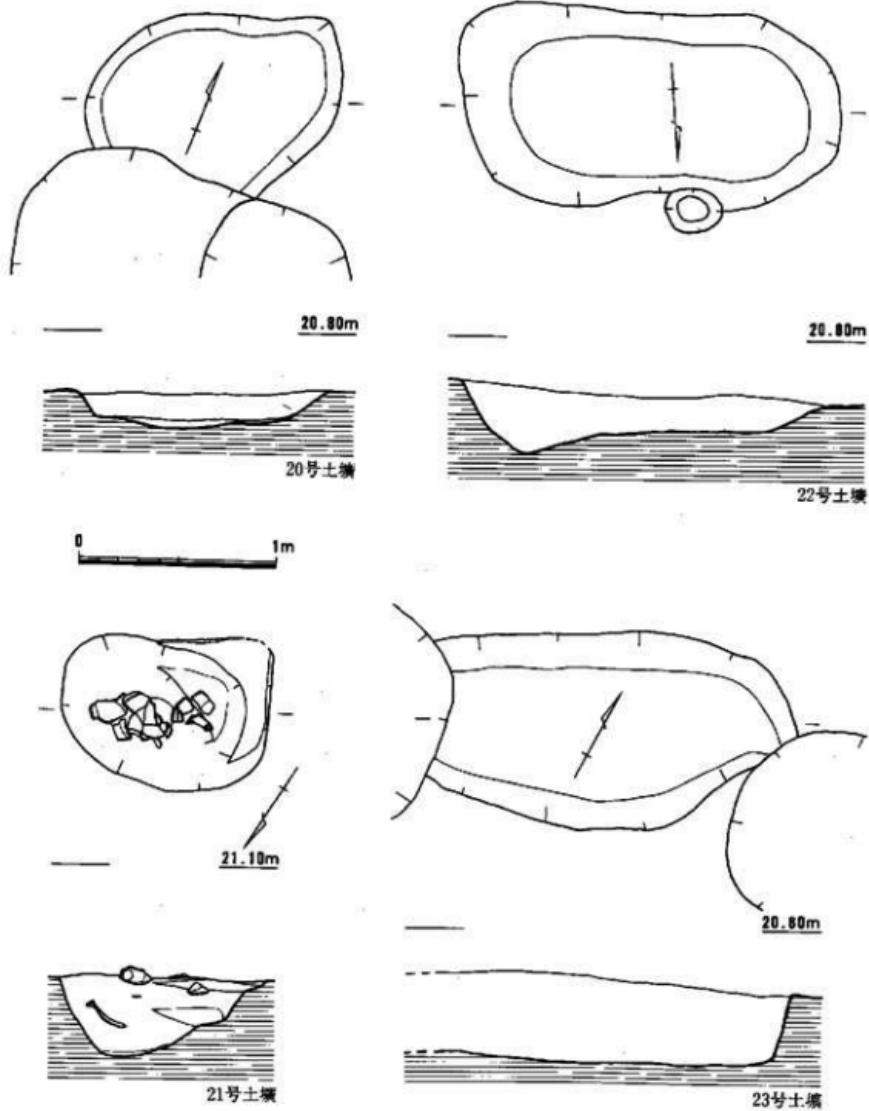


Fig. 131 20~23号土壤実測図(1/30)

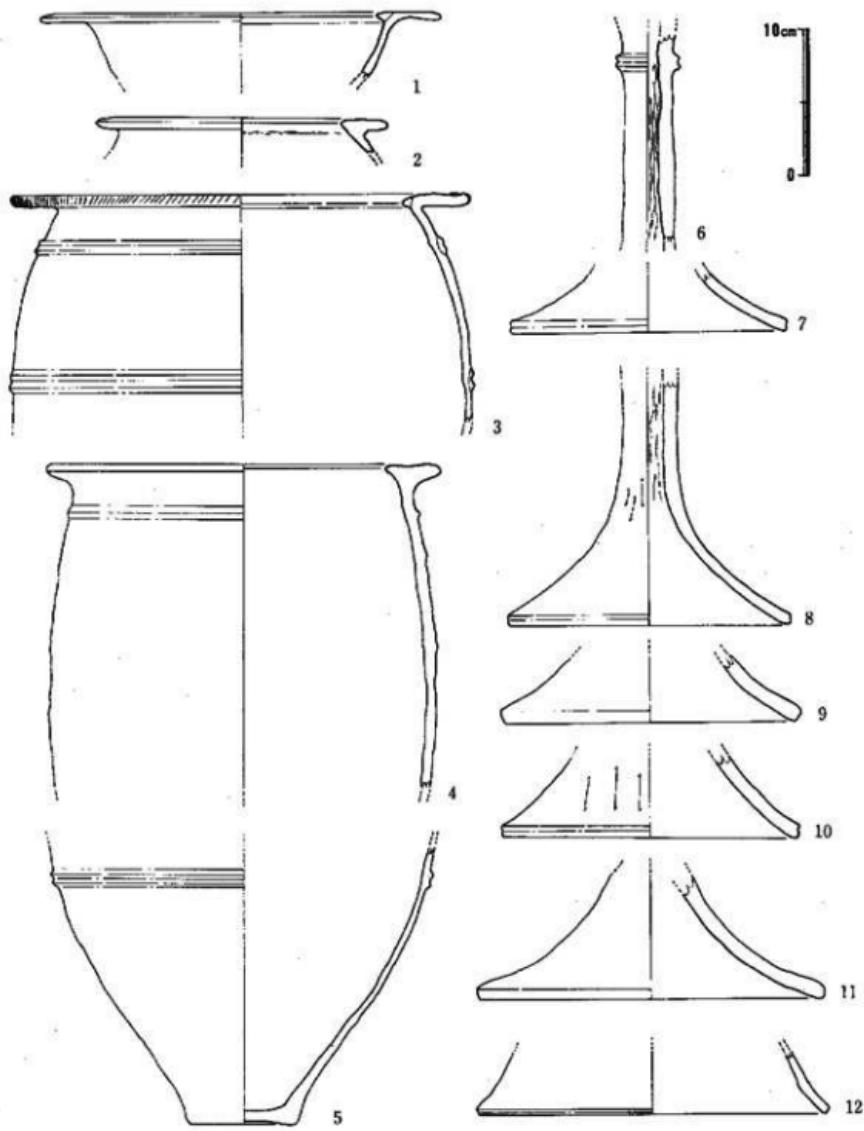


Fig.132 21~23号土壤出土遺物実測図(1/4)

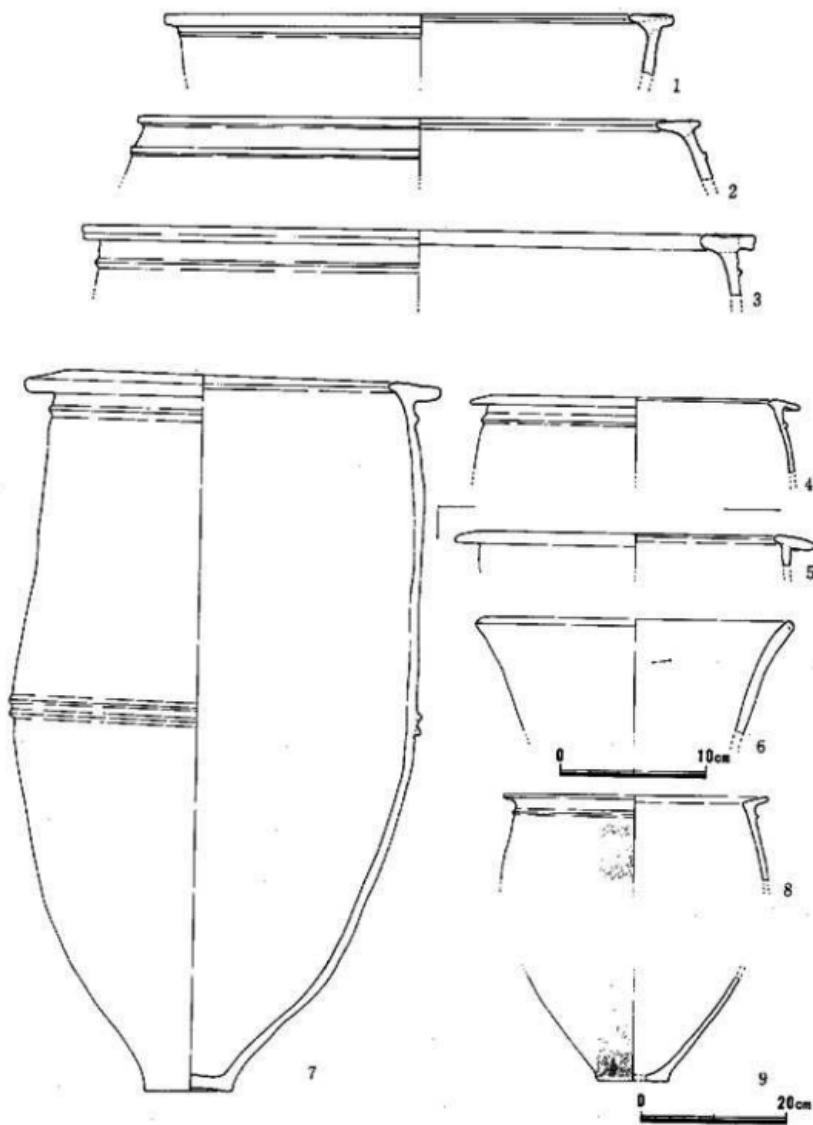


Fig. 133 瓷棺墓内混入遺物実測図(1)(1/8・1/4)

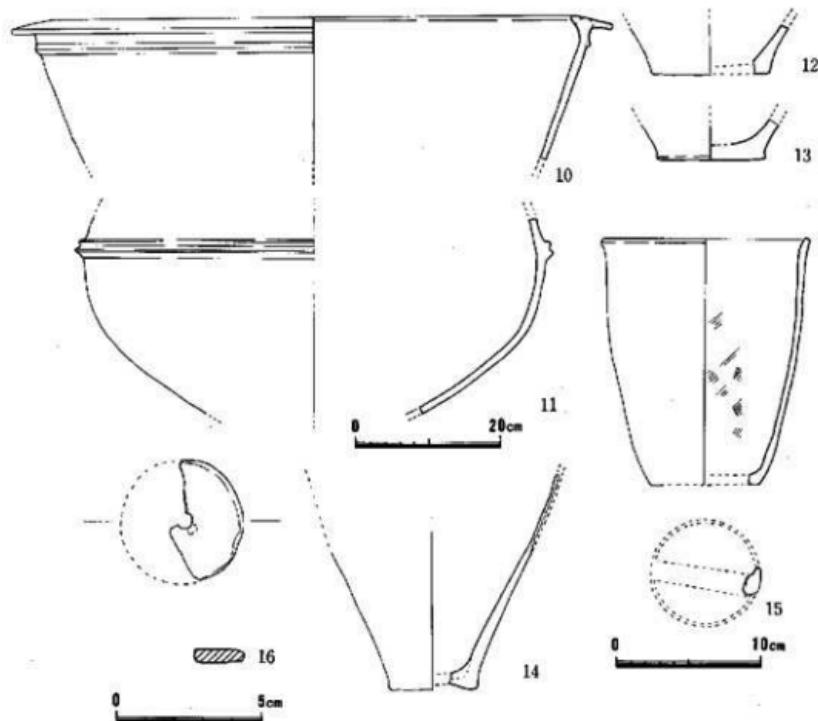


Fig.134 銅棺墓内埋人(2)・擾乱出土遺物実測図(1/8・1/4・1/2)

22号土壤 (Fig.131, 132)

BW群の東端で検出した。23号土壤を切る。形態は長椭円形を呈する。東側に向かって若干深くなる。長2m、幅1mほどを測る。遺物は覆土内から少量が散漫に出土した。

出土遺物 Fig.132-1は高坏坏部である。口縁部は薄い鋸先口縁である。外側に大きく張り出す。外端部は丸く取め、内端部は薄く尖らせる。体部は丸みを持つ。復原口径27cmを測る。内面に丹塗が残り、内外面とも丹塗が施されたものと思われる。

23号土壤 (Fig.131, 132)

BW群の東端で検出した。40号銅棺墓の西側にあたる。形態は長椭円形を呈する。長2m、幅1mほどを測る。遺物は覆土内から散漫に出土したが、量は少ない。

出土遺物 Fig.132-6、7は同一個体かもしれない。6は脚柱部である。長い円筒部を持つ。付け根からやや下がった位置に断面M字突帯を1条巡らす。内面に絞り痕が見られる。外面には

丹塗を施す。径3.5cmを測る。7は裾部である。端部に向かって大きく広がる。端部は平坦面をなし、ヨコナデにより四面気味になる。外面には丹塗を施す。脚端部径19cmを測る。

13号、20号、22号、23号等は、他の祭祀土壙と異なり、遺物の出土状況などもあいまいで、祭祀土壙とするには躊躇もある。しかし周間に21号、16号、25号などもあり、また甕棺墓も分布することからやはり関連する遺構と考えた方がよかろう。

この他に甕棺墓覆土などに混入していた遺物のうち特徴的なものをFig.133に掲げた。

1は鉢であろう。口縁は鋤先状を呈し、ほぼ水平である。端部は平坦面をなす。2は胴部の張る甕である。口縁は鋤先状を呈し、内側へ強く張り出す。外端部は平坦面をなす。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。3も甕である。鋤先口縁で、ほぼ水平である。外端部は平坦面をなし、内端部は丸く收める。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。4は甕である。口縁は鋤先状を呈し、やや外傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らせる。Fig.134-12、13は甕底部である。以上は26号甕棺墓覆土内出土である。

5は鋤先口縁の甕である。口縁部は若干外傾する。6は広口甕の口縁であろう。單口縁で、端部には平坦面を持つ。外面ともミガキが施されている。Fig.134-14は甕底部である。以上は37号甕棺墓覆土内出土である。

8、9は44号甕棺墓覆土内出土の甕で、同一個体であろうか。口縁は逆L字に近い鋤先口縁でやや内傾する。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。底部は平底である。外面にはハケメを施す。

7は人形甕で、31号甕棺墓内との注記があったが、覆土内出土というのは不自然であり、取上げ時に混乱したものと思われる。砲弾型胴部を持つ。口縁部は鋤先状で、やや外傾する。口縁下に1条、胴部中位に2条の三角突帯を巡らす。先述したように47号甕棺の下甕ではないかと思われる。

Fig.134-10は大形鉢である。外傾する鋤先口縁を持つ。口縁部下に三角突帯を1条巡らせる。47号甕棺墓内出土。11は壺の下半部であろう。最大径のやや上にM字突帯を1条巡らす。35号甕棺墓内出土。15は1号甕棺墓内出土の壺である。わずかに外反する單口縁である。底部は半円形の2孔をあける。古墳時代後期のものであろう。16は近現代の攪乱から出土した滑石製の筋鍾車である。

(4) 壁穴住居跡

1号住居跡 (Fig.135, PL.47)

E-16区で検出する。西側1/4を段落ちによって削平される。北東辺4.0m、南東長4.9mの長方形を呈する。北東部に幅1.1m、高さ20cm程度の地山削りだしのベット状遺構が存在する。また住居中央に炉跡を有し、1.05m×0.95mの長方形の浅い堀込みの中央で焼土が検出されている。主柱穴は不明瞭である。

出土遺物 (Fig.136, PL.64-68)

1、2は大型の二重口縁壺である。1は口径33.5cm、残存高21cmを測る。口縁部は強く外反し、体部と頸部の境に断面台形の突帯を有する。器面の剥落が進んでいるが、頸部外面には縱刷毛が残る。2は口縁部が欠失している。頸部は強く外反し、体部との境に断面M字形の突帯を有する。焼成はややあくまで器面は磨滅するが、体外面には縱方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目が残る。3、4、5は壺の底部である、3の色調・焼成は1に似る。底部はほぼ丸底に仕上げる。底部内面に丸底に仕上げるために形押しを行った様な痕跡が残る。4は底径7cmを測り、丸みを帯びた底部を有する。5はとがり気味の底部をもつ。残存高6.2cmを測る。胎土には径2mm程の石英砂粒を含んでいる。6は器台である。外面には縱刷毛を施し、内面には縦

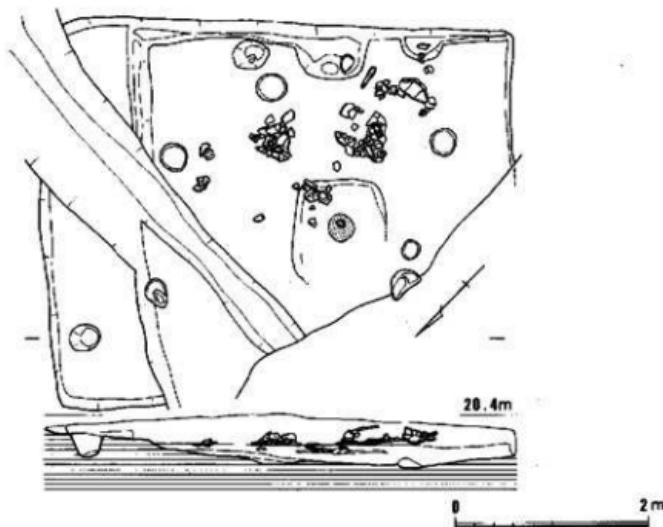


Fig. 135 1号住居跡実測図 (1 / 60)

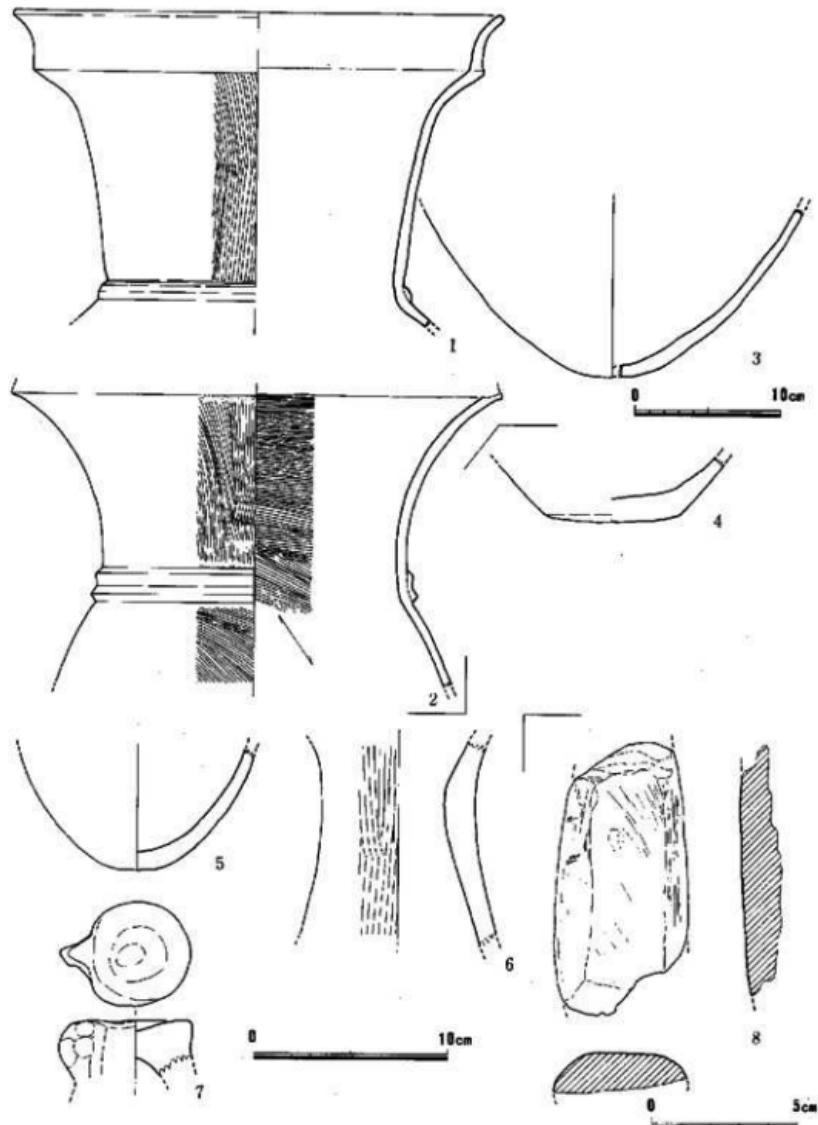


Fig.136 1号住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)

方向の指ナデによる調査を行う。7は支脚である。上面径6cmを測り、片側につまみ出しで成形した突出部を有する。8は滑石製の石製品である。

2号住居跡 (Fig.137, PL.47)

C、D-9区で検出する。西半を段落ちによって削平される。東辺5.9m、南辺残存長3.6mの長方形を呈する。壁沿いに幅20cm~50cm、深さ15cm程度の壁溝が巡っている。本来は四周するものであろう。また住居中央部から北西部にむかって幅50cm、深さ15cmの深い溝を検出した。主柱穴は不明である。出土遺物には土師器甕、碗、高环、須恵器蓋環等が出土している。古墳時代後期に属するものであろう。

出土遺物 (Fig.138, PL.64)

1~4は上師器、5~7は須恵器である。1、2は甕である。1は口縁部は丸く納め、頸部から体部は明瞭な変換点を持たずなだらかに移行する。口縁部内面には体部との接合痕が観察される。復元口径は16cmを測る。2は口縁端部をややつまみ上げ気味に納める。須恵器の甕の口縁部の成形方法の影響を受けているものか。1と同様内面に明瞭な接合痕を持つ。復元口径19.4cmを測る。3は高环の脚部である。短脚で脚据部は内湾する。据部径11.4cm、残存高6.5cm

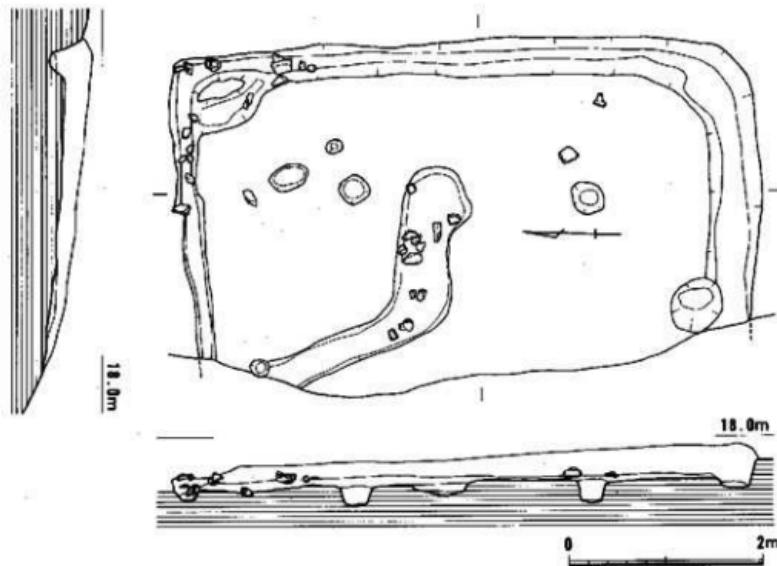


Fig.137 2号住居跡実測図 (1/60)

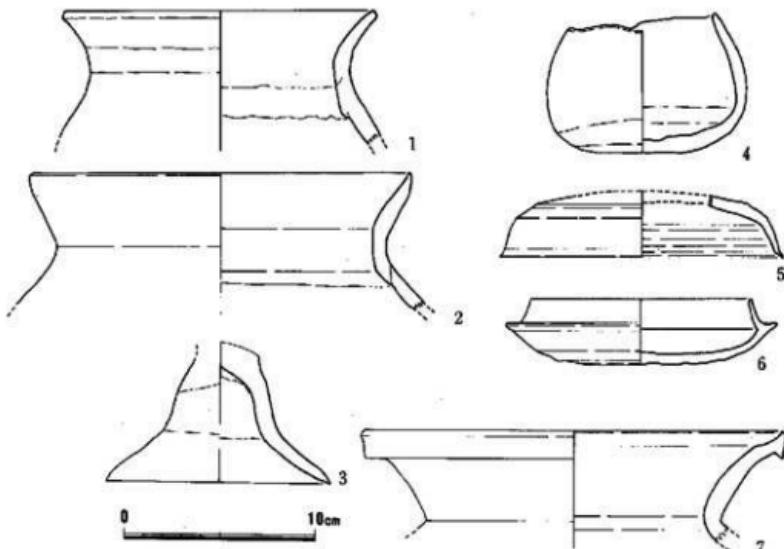


Fig.138 2号住居跡出土土器実測図(1／3)

を測る。4は完形の椀である。口縁部は内湾し、胴部最大径が中央部にある。口径7.4cm、器高7.1cm、胴部最大径10.2cmを測る。土師器はいずれも石英砂粒を割合多く含み、焼成はやや軟質である。5は壺蓋である。口縁部内面に段を有す。休外面上半2/3は回転のヘラケズリ、その他は内面まで回転のナデを施す。復元口径14.4cm、残存高3.1cmを測る。6は壺身である。復元口径11.2cmを測る。外底面の1/2まで回転ヘラケズリ、その他は回転ナデによる。内底面には最後に指ナデを施す。7は甕の口縁部である。端部は上部をつまみあげ、下部を垂下させて断面三角形に作る。復元口径は21.6cmを測る。

3号住居跡 (Fig. 139, PL.47-48)

D、E-9区で検出する。西側を段落ちによって削半され、住居の大半が失われる。東辺残存長5.2m、北辺残存長0.7mを測る。壁沿いに幅30cm、深さ5cm~10cm程度の壁溝が巡っている。本来は四周するものであろう。残存部がほとんど無く、主柱穴等の施設は検出していない。3号住居は4号住居・5号住居と方位を同一にしており、検出状況より5号住居から4号住居を経て3号住居に至る建てかえが想定できる。3号住居からは出土遺物は少なく図示し得るものはない。4号住居との関係より、古墳時代後期に属するものであろう。

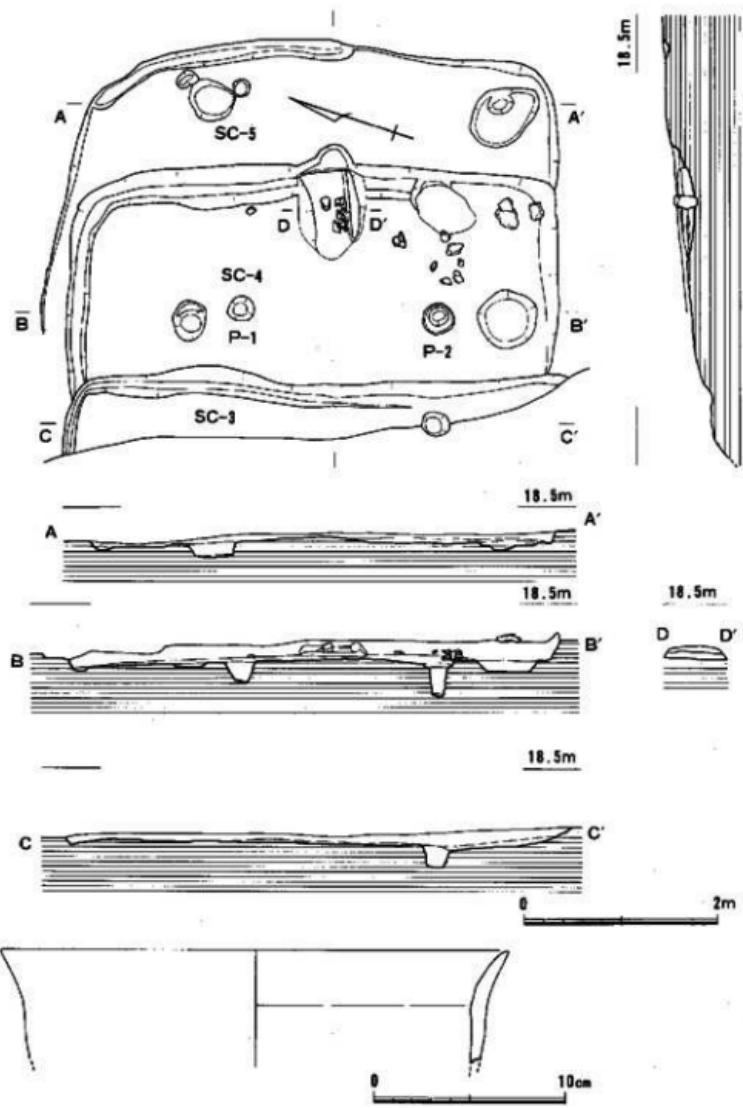


Fig. 139 3~5号住居跡(1/60)・4号住居跡出土土器実測図(1/3)

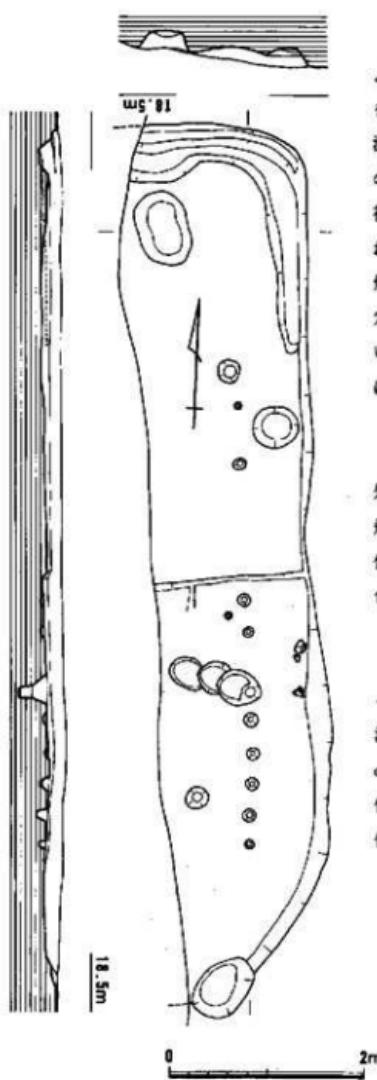


Fig. 140 6号住居跡(1/60)・6号住居跡出土土器実測図(1/3)

4号住居跡 (Fig. 139, PL.47-48)

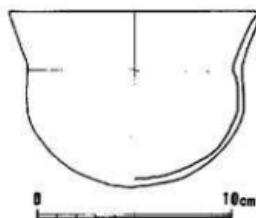
D、E-9区で検出する。西側を3号住居跡によって切られる。東辺長4.9m、北辺残存長2.2mを測る。北側と東側の半分の壁沿いに幅30cm、深さ5cm~10cm程度の壁溝が巡っている。東壁の中央に竈が造り付けられている。全長1.2m、袖部幅0.7mを測る。燃焼部分には支柱が据えられている。また壁は半円形にカットされており煙出しの役割を果たしている。P1、P2が支柱穴と考えられる。図示し得た遺物はほとんど無いが土師器甕等が出土している。古墳時代後期に属するものであろう。

出土遺物 (Fig. 139)

甕若しくは瓶の口縁部である。口縁部は若干外反する。復元口径26cm、残存高5.5cmを測る。焼成はやや甘く、調整は詳細は不明であるが、体部内面は横方向にヘラケズリを行う。淡黄褐色を呈し、胎上には石英の微砂粒を含む。

5号住居跡 (Fig. 139, PL.47-48)

D、E-9区で検出する。西側を4号住居跡によって切られる。東辺長4.7m、北辺残存長2.7mを測る。東側の半分の壁沿いに幅30cm、深さ2cm~4cm、長さ2.8mで壁溝が検出された。切り合い関係から5号住居→4号住居→3号住居の先後関係が捉えられる。住居に伴う施設については他



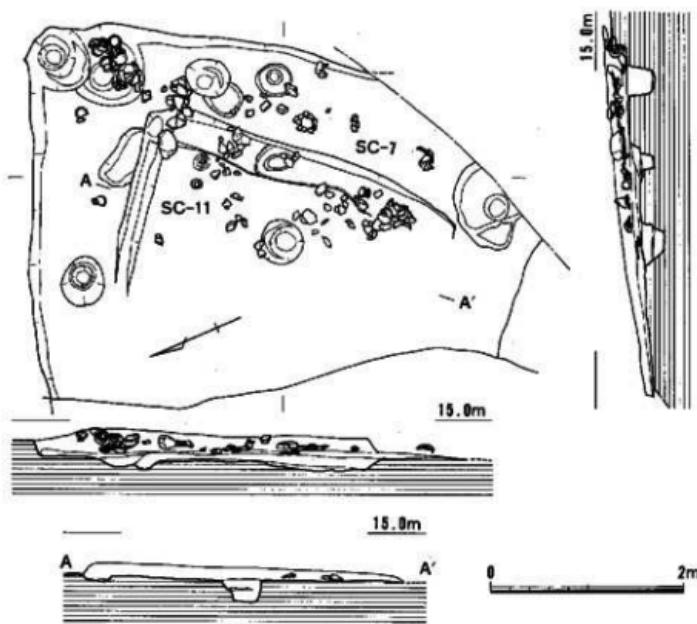


Fig.141 7・11号住居跡実測図(1/60)

他に検出されなかった。

6号住居跡 (Fig. 140, PL.47)

E-10区で検出する。西側を段落ちによって切られる。東辺長8.85m、北辺残存長1.9mを測る。東北部コーナーの壁沿いに幅50cm、深さ5cm~10cmの壁溝が検出された。住居中央に5cm程の段落ちを有する。南半部には径10cm、深さ5cmの小ピットが列状に並んでおり、コーナーも変換が不明瞭である。住居の規模・施設等を他の住居と比較すると、北半部のみが住居として機能していた可能性も考えられる。出土遺物は少量であるが土師器が出土している。

出土遺物 (Fig. 140, PL.64)

小型の壺である。口縁部は直立しやや外方にのびる。復元口径12.8cm、器高9.1cmを測る。焼成は良好であるが調整の詳細は不明である。暗赤褐色を呈し、胎土には石英の微砂粒を若干含む。器壁は薄く3mm程度である。

7号住居跡 (Fig. 141・142, PL.49)

F-14区で検出する。西側を段落ちおよび11号住居跡によって切られ、南側を調査区外に伸ば

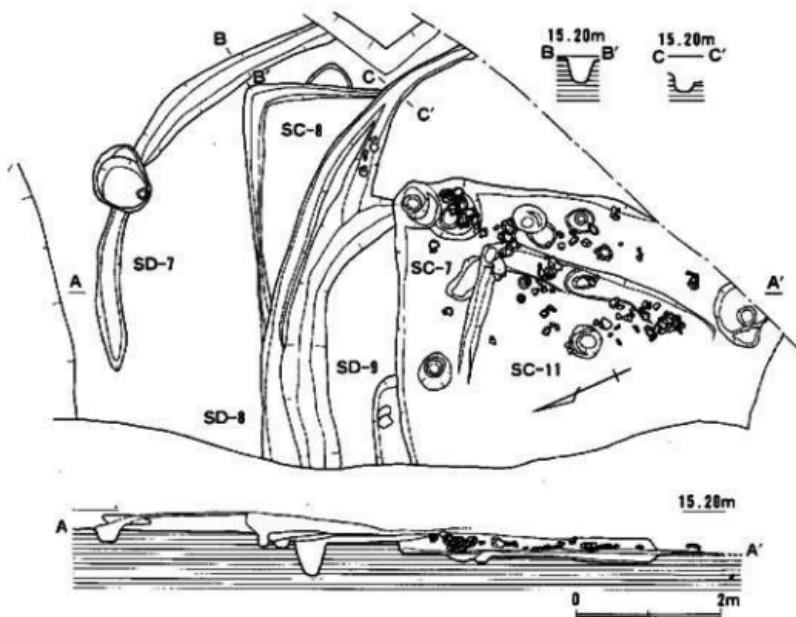


Fig.142 7・8・11号住居跡・7～9号溝実測図(1/80)

す。東辺残長3.5m、北辺残存長3.85mを測る。東北コーナー部より須恵器壙蓋・高壙がまとまって出土している。また検出状況から7号住居跡は8号溝で囲まれている状況が観取される。機能としては他との区画の他、住居が斜面に位置するため上部からの水に対しての排水機能等が考えられる。同様の関係は本報告の8号住居と7号溝、11号住居と9号溝や昨年度報告の飯氏遺跡I-B区検出の9・14号住居が周囲を溝によって囲まれている例などにも見られる。8号溝は幅18cm、深さ15cmを測る。

出土遺物 (Fig. 143・144, PL.4-64-65-66)

1～16及び17～19は土師器、20～27は須恵器である。

1～9は甕である。1は復元口径23cmを測る。体部はほぼ直立し、口縁部は緩く外反する。赤褐色を呈し、器面の剥落が進んでいるが、体部内面には横方向のヘラケズリ痕が明瞭に残る。2は復元口径17cmを測る。体部は緩く湾曲し、口縁部は直立気味に短く伸びる。体部内面にはヘラケズリ痕が一部に残る。6は2と同じく口縁部が直立気味に短く伸びる甕である。復元口径13cmを測る。3～5、7～9はいずれも同じタイプの甕である。いずれも肩が張らず、口縁部は明瞭な棱を持たずに外方に開く。体部内面は口縁部との境までヘラケズリを施し明瞭な棱

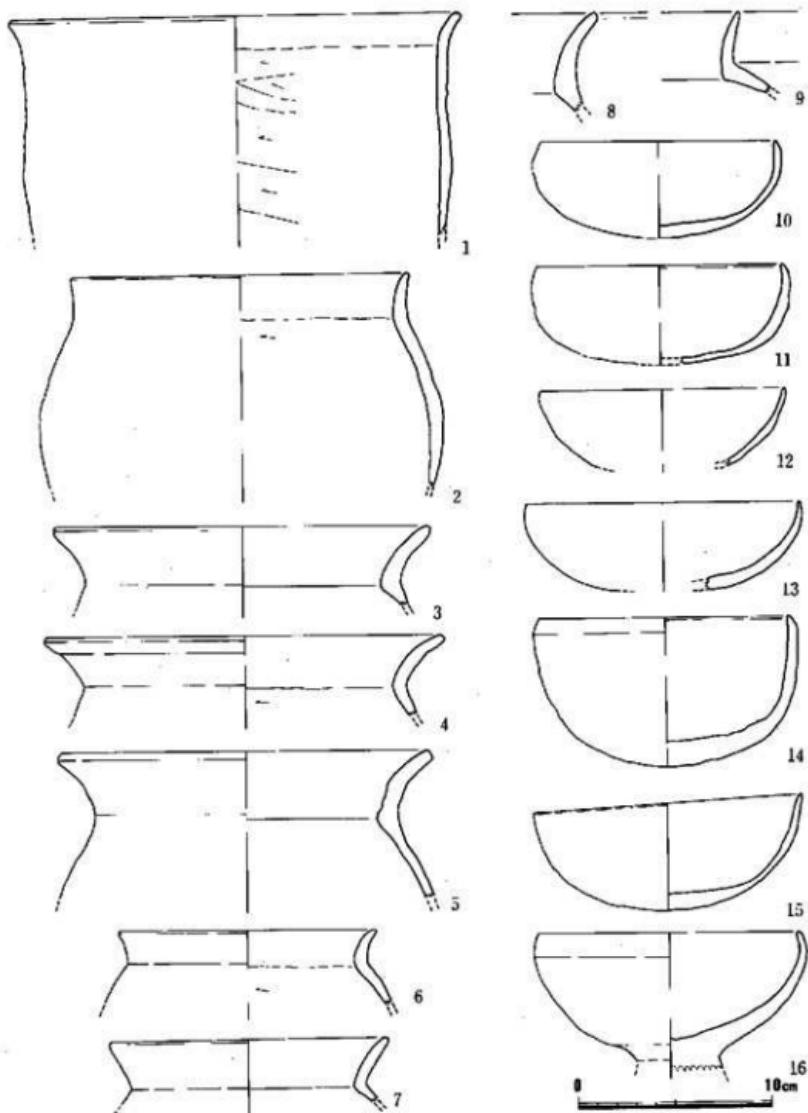


Fig. 143 7号住居跡出土土器実測図(1 / 3)

を有する。焼成はやや甘く、淡桃色を呈す。10~15は椀である。体部は球形を呈し、口縁端部は若干内湾して納める。口径12cm~14cm、器高は5cm~7.5cmを測る。外面の調整は不明瞭であるが、内面には指ナデの痕跡が残る。胎土は概ね良好であるが、焼成はやや甘い。16は高坏の坏部である。坏部は完形品で、脚部との接合部まで残る。口径13.2cm、残存高7cmを測る。口縁部は内湾し、端部は丸く納める。胎土には石英砂粒を若干混入する。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。17は高坏の脚部である。復元底径は8cmを測る。短脚で3方に台形の透しがヘラ状工具により穿たれている。脚端部は玉縁状仕上げ、沈線を1条施す。焼成は甘く、淡桃色を呈す。形態的には25~27の須恵器高坏と同様であり胎上にも差は見出せないが、焼成の他に脚部器壁の厚みの違いが認められる点や口縁端部の玉縁の作りが須恵器のものに比べて劣る点などから土師器として報告する。18は小型の壺である。口縁部を欠失する。胴部最大径は中央部に位置し、12cmを測る。器壁は厚く底部では1.8cmにもなる。胎土には径1mm程の石英砂粒を混入する。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。19は円筒形の支脚である。中空でラッパ状に裾が広がる。復元上面径7cm、底径12cmを測る。胎土には径1~2mmの石英砂粒を含み、赤褐色を呈している。内面に一部しづら痕を残す。

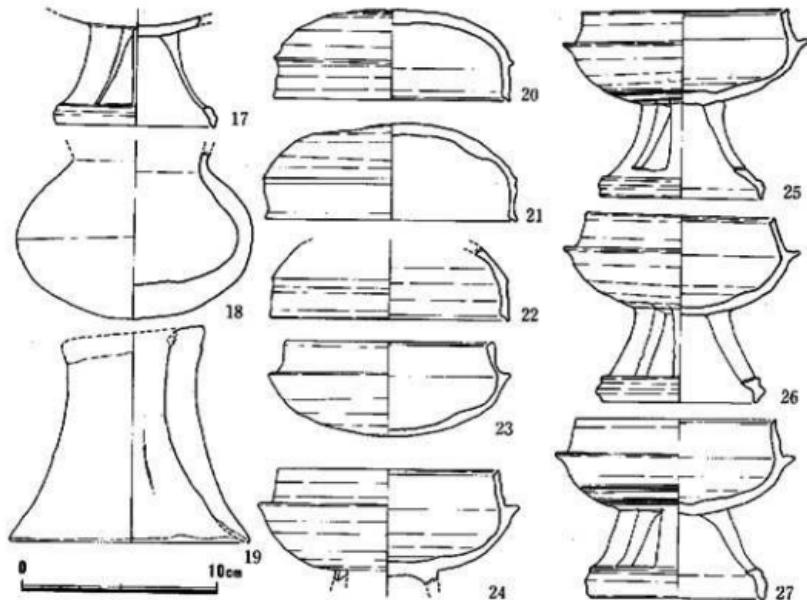


Fig.144 7号住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

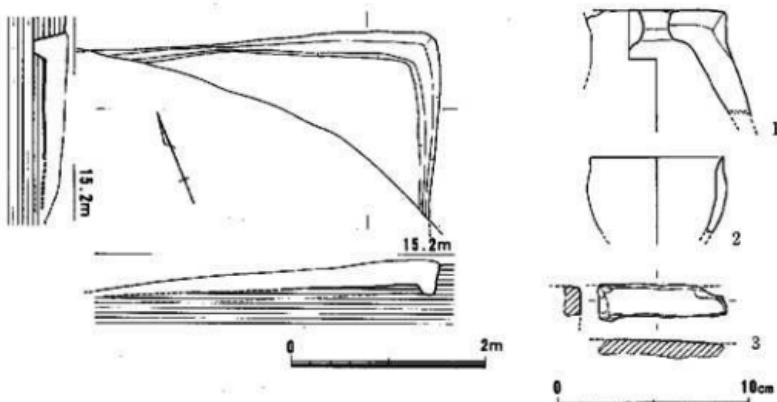


Fig.145 8号住居跡(1/60)・8号住居跡出土遺物実測図(1/3)

20~22は壺蓋である。20、21は完形品である。いずれも口縁部と体部の境に鋭い突帯を有し、口唇部内面には沈線が施される。また天井部外面の回転ヘラケズリは境近く、全体の4/5まで行われる。20は口径12cm、器高4.6cmを測る。21は口径12.8cm、器高5cmを測り、突帯が他のものに比べて鈍化し、その下に沈線を有するようになる。22は1/4程の破片であるが外面全体に自然釉がかかる。23は壺身である。口径10.6cm、受け部径12.2cm、器高4.9cmを測る。丸みを帯びた外底面には回転ヘラケズリが3/4まで施される。また口縁部は直立に近く、口唇部外面がやや肥厚し上方に伸び、内面には沈線を有する。24~27は高壺である。24は脚部が欠失しているが、いずれも短脚で3方に透しを持ち、裾部は玉縁状を呈している。また壺部はやや内傾気味であるが口唇部内面には沈線を有する。25、27には壺部外底面にカキ目を施している。壺部口径は9.6cm~11.2cm、器高9.3cm~9.6cmを測る。胎土は精良で灰白色を呈する。

8号住居跡 (Fig. 142・145, PL.56)

F-14区で検出する。東北コーナー部のみ残存しているのみである。8号溝によって直接切れられ、これ以南も7、11号住居跡によって切られており住居の全容は不明瞭である。東辺残長1.9m、北辺残長3.5mを測る。主柱穴などの施設は検出されなかったが深さ10cmを測る壁溝が伴っていた。8号住居跡は7号溝によって囲まれており、他と区画されている。7号溝は幅30cm深さ25cmを測る。出土遺物は僅少である。

出土遺物 (Fig. 145)

1は沓形器台である。傾斜する受け面の一端につまみ出して成形した小さな突起を持ち、受け面の中央には円孔を有する。受け面径6.5cm、円孔1.5cmを測る。2は小型壺である。口縁部直下で緩くくぼみ、端部は断面三角形に納める。復元口径6.8cm、残存高4cmを測る。胎土には

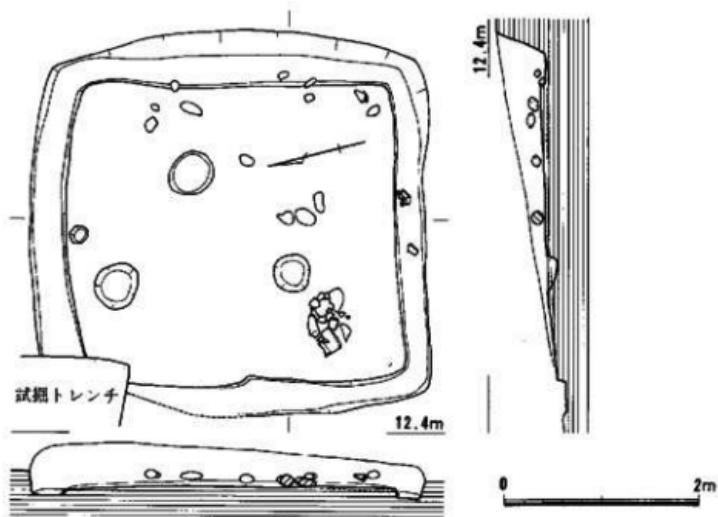


Fig.146 9号住居跡実測図(1/60)

石英・雲母を若干含む。焼成は良好で暗赤褐色を呈する。3は粘板岩質の砥石である。1面に擦痕が残る。残りの面は剥落しており、砥石の一部が節理したものであろう。

9号住居跡 (Fig. 146, PL.50)

西に延びる丘陵裾部あたりD-14区に位置する。北東の隅を試掘トレンチで消失するがほぼ隅丸方形の平面形で壁に沿って周溝を巡らす古墳時代後期の堅穴住居跡である。傾斜面にあるため全体に住居跡の残りは良くないが東壁は残りが良く0.45mを測るが西壁は周溝のみを遺存するに過ぎない。主軸を傾斜面に平行なN-14°-Eにとり、その規模は南北4.05m、東西3.96m。周溝は幅20~30cm、深さ10cm前後でその床面はほぼ平坦である。床面はほぼ平らであるが主柱穴は認められない。東壁はなだらかな傾斜を示す。遺物は少なく南西隅から甕、南東隅から須恵器壺蓋等が出土している。

出土遺物 (Fig. 147, PL.68)

1~3は土師器である。1は口縁部から胴部にかけての甕の破片である。胴部はヘラ削りを行い、頸部との境に稜をもつ。頸部から口縁部にかけて内外面とも摩耗が著しく調整不明。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡褐色を呈する。2は小型の甕で口縁部が短く外反する。3は高环の破片で、脚部から環部にかけて遺存する。円筒形の脚部、丸味をもつ環底部から体部中位で外反する。4、5は須恵器の壺蓋である。4は天井部を欠失するが口縁径16.2cmを測

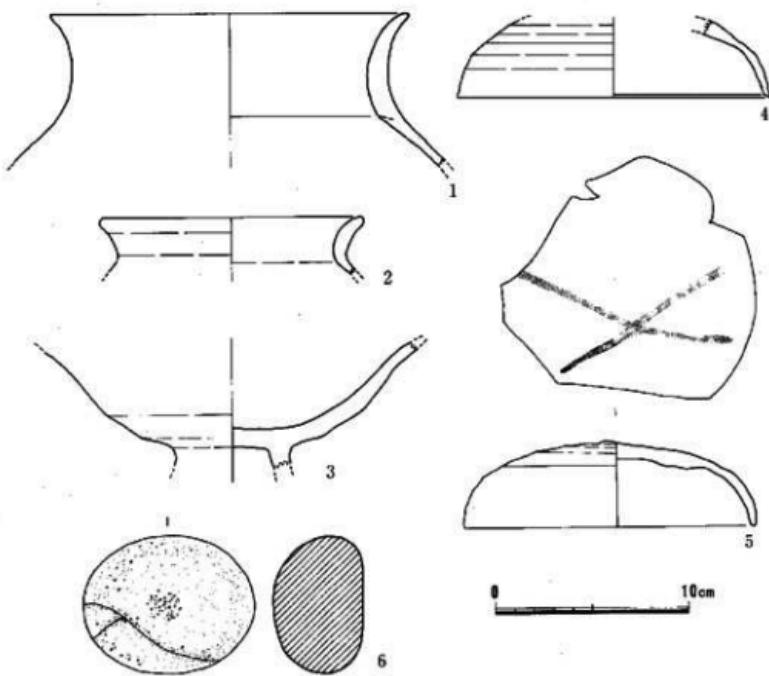


Fig.147 9号住居跡出土遺物実測図(1／3)

り端部に段を有する。5は1/2ほどの遺存で復元口径14.5cm、器高4.4cmを測る。口縁端部は丸く取まり丸い天井部に「×」の窓印と思われる変色部が認められる。胎土には砂粒を少し含み焼成良好で淡灰色を呈する。6は砂岩製の磨石である。橢円形で上面はまるく、下面是平坦で表面は滑らかである。

10号住居跡 (Fig. 148, PL.50)

9号住居跡の南11m、E-15区に位置する。丘陵斜面に築造され、上部を削平されているため遺存状態は悪く東端部を残すに過ぎない。東壁は比較的残りが良く0.30mを測り周壁の内側には周溝が巡るが西側は明らかではないが全周するものであろう。主軸を傾斜面に平行ではば南北にとり、その規模は南北5.23m、東西の残存長2.05mを測る。周溝は幅20~30cm、深さ5cm前後でその内側に周溝に沿う状態で弧を溝が認められ、建替えが成されたものであろう。床面はほぼ平らであるが主柱穴は認められない。東壁はなだらかな傾斜を示す。遺物は少なく南端のピットから1、北端から5、6、9が出土している。

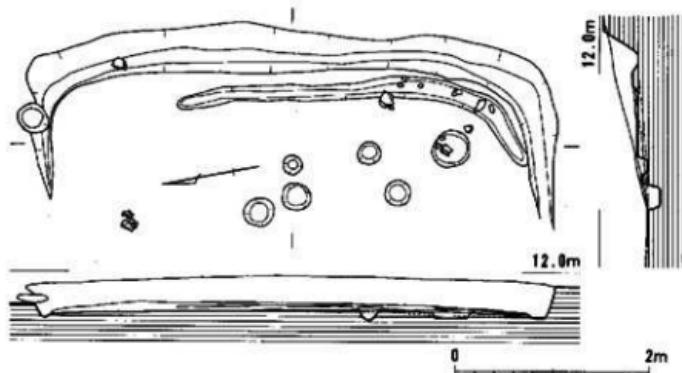


Fig. 148 10号住居跡実測図(1/60)

出土遺物 (Fig. 149-1~10・13, PL.66・68)

1、2は弥生式土器の甕である。1は胴部から口縁にかけての破片で口縁端部が肥厚する。胎土には少量の砂粒をふくみ黄褐色を呈し、摩耗が著しく調整は不明。3は小型の甕、5、6、7は高環の破片である。いずれも器表面の剥離が著しく調整は不明。5、6は坏部中位で外反し端部を丸く收めている。4は脚付きの椀であろう。丸い底部から内湾して口縁部に至る。外面に僅かながら縦方向の刷毛目が残る。10は丸底気味の肥厚する底部の鉢である。

11号住居跡 (Fig. 141, 142)

F-14区で検出する。7号住居跡の床面を検出した段階で検出された。北壁の一部と東壁のみ残存している。北辺長2.05m、東辺長3.4mを測る。主柱穴などの施設は検出されなかつたが深さ10cm程度を測る壁溝が全体に伴っていた。11号住居跡に伴う溝として9号溝が考えられる。9号溝は幅40cm深さ40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。11号住居跡・9号溝はその大部分を7号住居に切られているため出土遺物は非常に少なく時期的には不明な点が多い。

出土遺物 (Fig. 149-11・12・14~16)

12、14は、椀の口縁部である。12は復元口径11cm、残存高4.5cmを測る。14は小片で口径等は不明である。いずれも体部は緩く内湾し、頭部で反転屈曲し口縁部はやや外反しながら伸びる。胎土には径1mm程度の石英砂粒を含んでいる。焼成は良好である。11は弥生時代中期に属する甕の底部である。外底面は平坦で、内底面に煤が付着している。底径7.6cm、残存高2.6cmを測る。胎土には径1~2mmの石英砂粒を多く含む。焼成は良好である。15、16は9号溝の出土で、いずれも土師器高环である。15は筒部と坏部の接合部が残存している。摩耗が進み、調整等は不明瞭である。胎土は精良で赤色土粒を割合多く含む。16は筒部である。脚に向かってやや外方に直線的に開きながら伸びる。外面には縦方向のヘラケズリが痕跡的に残る。

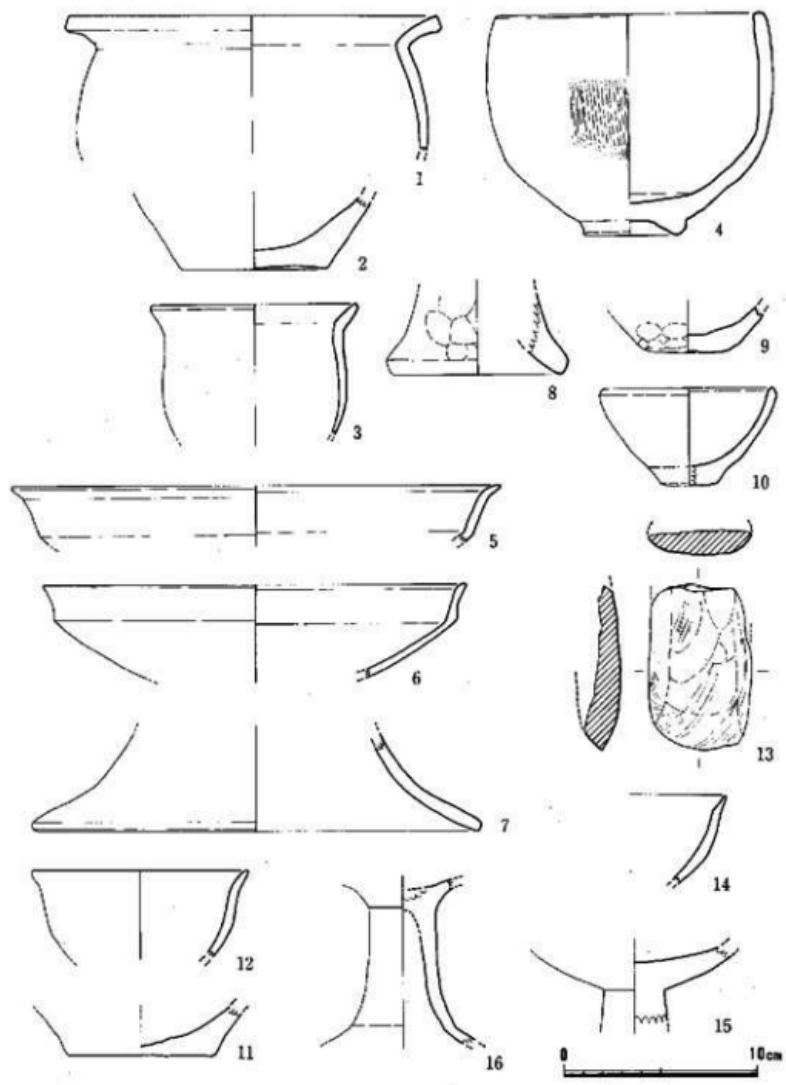


Fig. 149 10·11号住居跡・9号溝出土遺物実測図(1/3)

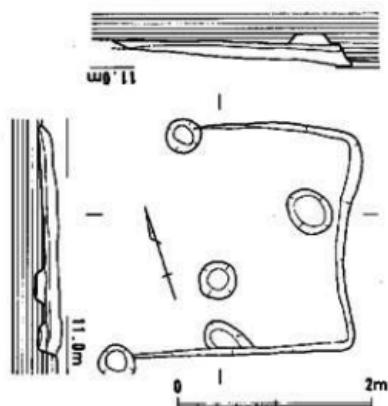


Fig. 150 12号住居跡実測図(1/60)

12号住居跡 (Fig. 150)

E-19区、調査区の南西端で検出した隅丸長方形の住居跡である。上部を削平されているため遺存状態は良好ではなく壁高は5~10cmを測るに過ぎず、西壁は消失している。主軸は傾斜面に直交しW-18°-Nにとり、その規模は南北2.25m、東西の残存長2.30mを測る。なお周溝は認められない。床面はほぼ平らであるが支柱穴と考えられるピットは認められない。東壁は少し湾曲している。遺物はほとんどが実測出来ない小破片で時期は不明である。

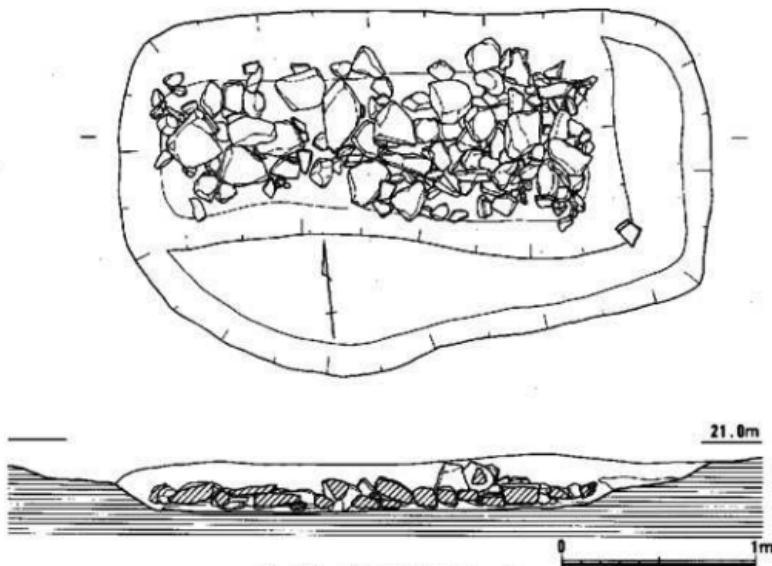


Fig. 151 24号土壤実測図(1/30)

(5) 上塙

24号土塙 (Fig. 151)

G-16区で検出する。長辺3m、短辺1.8mを測る略長方形の上塙である。南側と東側に幅30cm~50cm、高さ10cm程度の段状の高まりを有する。底面には全体に人頭大の花崗岩の自然礫を敷いている。また礫を除去した後の底面は平坦である。染付磁器等が出土しており、近世に属するものと考えられる。

26号土塙 (Fig. 152)

C-13区で検出した隅丸長方形の土塙である。東壁は0.15m程の高さを測るが西壁はほとんど遺存していない。規模は最大部で長辺2.1m、短辺0.55m、深さ0.21mを測る。床面はほぼ平坦、壁面はゆるやかな傾斜を示す。出土遺物は少なく床面近くから土師器の皿が1点だけ出土している。

出土遺物 (Fig. 154-1)

1は土師器の小皿である。口径10.7cm、器高2.4cmを測る。全体に摩滅が著しく調整は明らかではないが、底部には丸みがありヘラ切りと思われ、板状圧痕も微かに認められる。

27号土塙 (Fig. 152, PL.51)

A-13区、調査区の北西端から検出した不整形の上塙で西側を14号溝に切られている。南北1.2m、東西の現存長1.25m、深さ0.58mを測る。覆土は赤褐色の粘質土で鉄滓を少量含んでいる。床面はほぼ平らで壁面はゆるやかな傾斜を示す。

出土遺物 (Fig. 154-2, PL.66)

2は土師器の小皿である。口径12.4cm、器高2.9cmを測る。全体に摩滅が著しく調整は不明である。底部は糸切りで板状圧痕が認められる。

28号土塙 (Fig. 153)

D-15区で検出した不整形の浅い土塙である。北西から南西にかけて畑地造成により大きく削平を受け、全体の形状は明らかではない。東側に数cmの浅い段が認められ住居跡の残存部とも思われるが一応ここでは土塙として取り扱う。削平のため現状では扇形を呈し東西4.45m、南北4.82m、深さ0.10mを測る。中央部には土器が集中して出土するが床面よりも約10cmほど浮いた状態での検出である。ピットも幾つか検出来たがこの土塙に伴うか明らかではないが小角礫を根石状に置くものがあるがそれに対応するものは認められない。

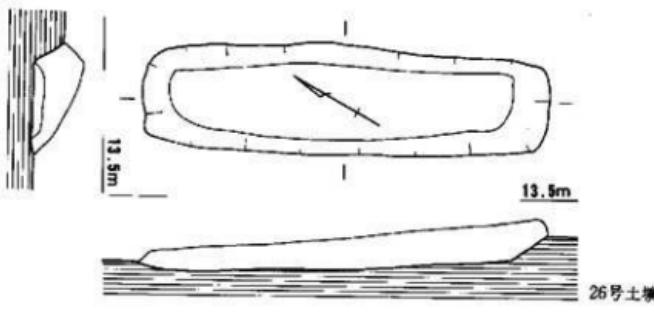
出土遺物 (Fig. 154-3~12・155, PL.66-68)

3は甕の口縁部で内面の胴部との境に稜をもつ。4は長胴から頸部がゆるやかにすぼまり口縁部が外反して端部を丸く取める甕で、胴部外面に荒い縱方向の刷毛目がある。5は比較的大きな破片である。丸味を持つ胴部で口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は器表面が摩耗しており調整不明。11~16は甕である。7、8、13、15は底部破片である。8、13の底部は丸味をもつ。

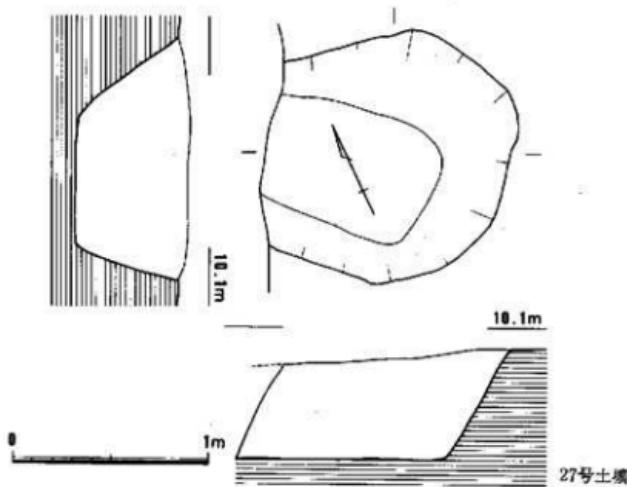
11・14は袋状口縁の壺で口縁部と頸部との境の外面に棱を持つ。11には内外面とも赤色顔料が塗られている。17は器台である。上縁径10.0cm、器高11.0cmを測る小型品である。外面は縱方向の刷毛目調整、内面はナデ調整で下縁部に指跡が残る。19は断面が扁平な磨製石斧で刃部を欠損する。全面に敲打痕が残る。20は分胴型の滑石製石錐である。基底部は丸味をもち横断面は楕円形を呈する。

29号土壙 (Fig. 156)

D-18区で検出した不整形の浅い土壙である。二段に掘り込まれており外側の規模は東西1.97



26号土壙



27号土壙

Fig.152 26・27号土壙実測図 (1/30)

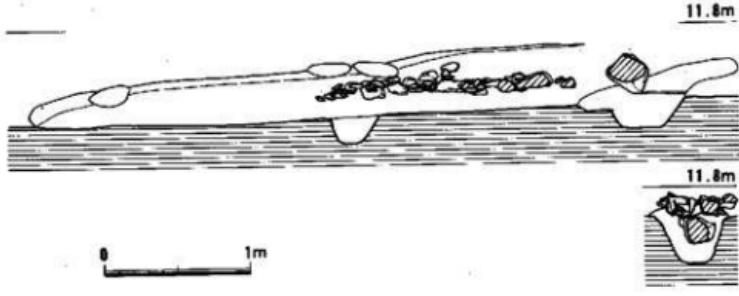
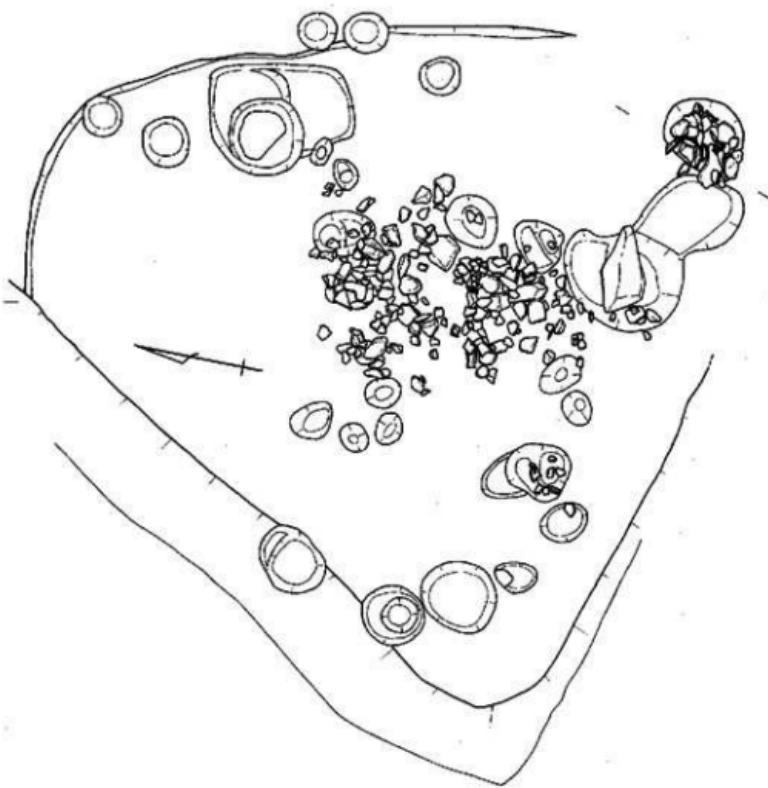


Fig. 153 28号工場実測図(1/40)

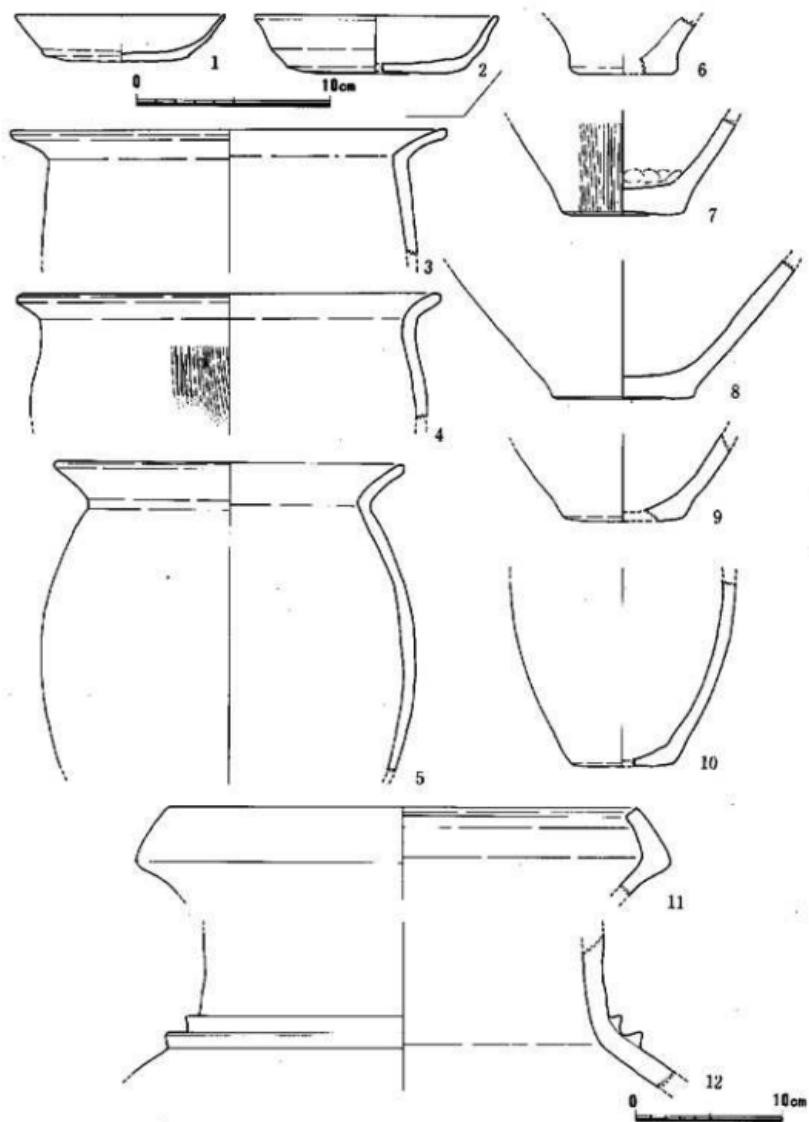


Fig. 154 26~28号土壤出土遺物実測図(1/3・1/4)

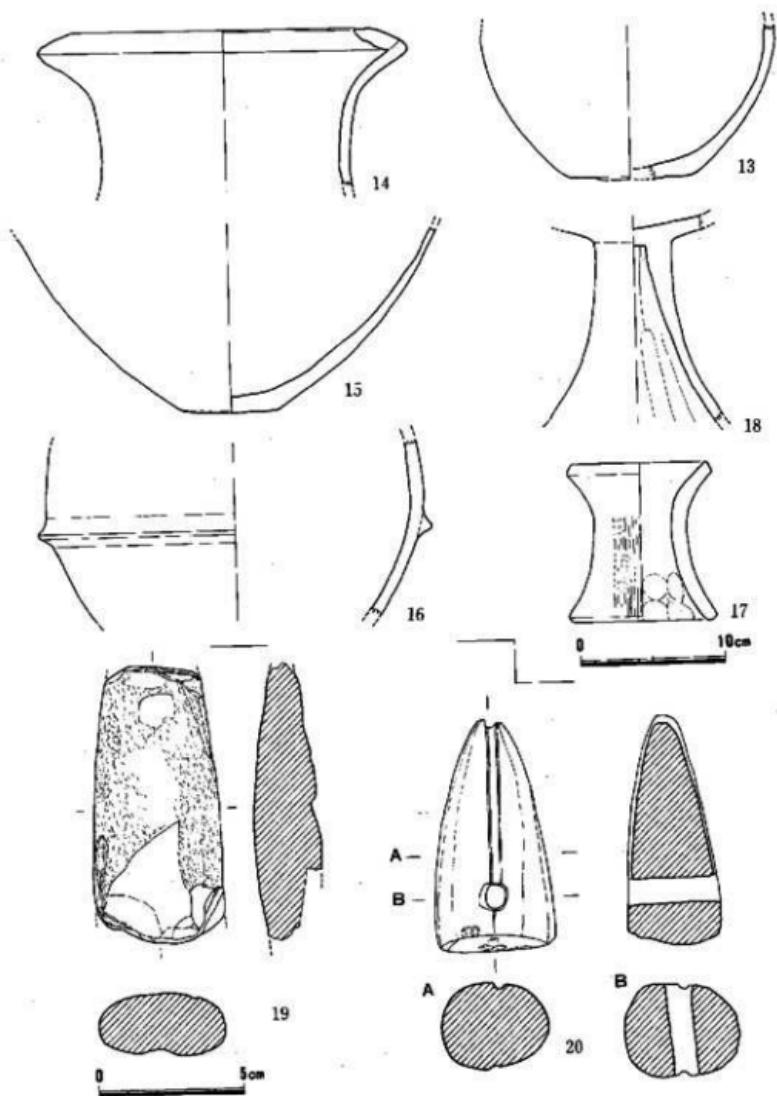


Fig.155 28号土壤出土遺物実測図(1/4・1/2)

m、南北2.52m、深さ0.20mを測り、その北よりの位置に不整形の浅い皿状のピットを掘り込み、その規模は東西1.05m、南北1.46m、深さ0.20mを測る。

出土遺物 (Fig. 158-1~3)

1は土師器の高台付坏である。底部から高台部の破片で断面三角形の貼付高台である。器表面が摩耗して調整は不明。2、3は須恵器の坏である。

30号土壤 (Fig. 157, PL.51)

E-17区で検出した不整形の土壤である。規模は東西1.1m、南北2.6m、深さ0.42mを測り、断面がU字状を呈し、中央部が一段深くなる。遺物は床面より浮いた状態で出土している。

出土遺物 (Fig. 158-4, PL.66)

甕の腹部から底部にかけての破片である。底部は上げ底で底径6.4cm、残存器高15.8cmを測る。胎上には砂粒を多く含み焼成良好で外面は明橙色を呈し、内面は黒褐色で底部に炭化物様の物質が付着している。

32号土壤 (Fig. 157)

E-20区で検出した東西に細長い不整形の土壤である。規模は東西1.95m、南北0.82m、深さ0.55mを測り、断面は逆台形を呈し、床面は平坦になる。土壤検出面及びその下層から角礫が多く

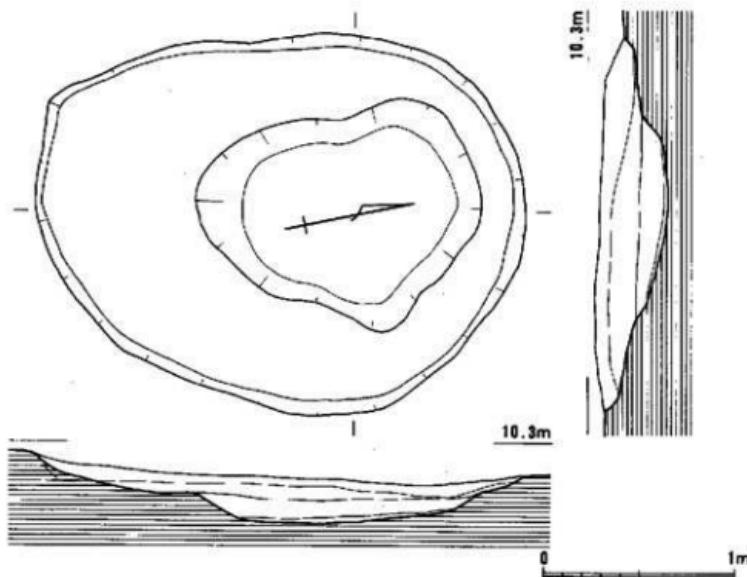


Fig. 156 29号土壤実測図(1/30)

く出土しその中に数点の土器が混入している。

出土遺物 (Fig. 158-5)

弥生式土器の甕底部である。胎上には砂粒を多く含み焼成良好であるが、全体に摩耗が著しいため調査は不明。

37号土塗 (Fig. 157)

A-17区で検出した土壤で、西側を畑地造成による削平で欠損するが、本来隅丸長方形を呈するであろう。規模は幅2.0m、長さ1.2m以上、深さ0.63mを測り、断面は逆台形を呈し、床面は

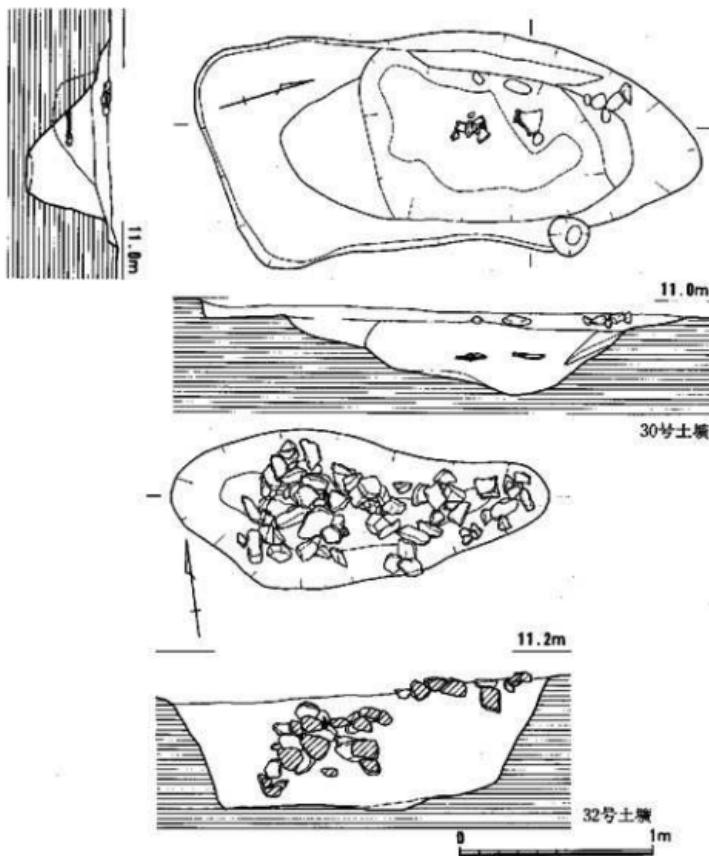


Fig. 157 30・32号土壤実測図(1/30)

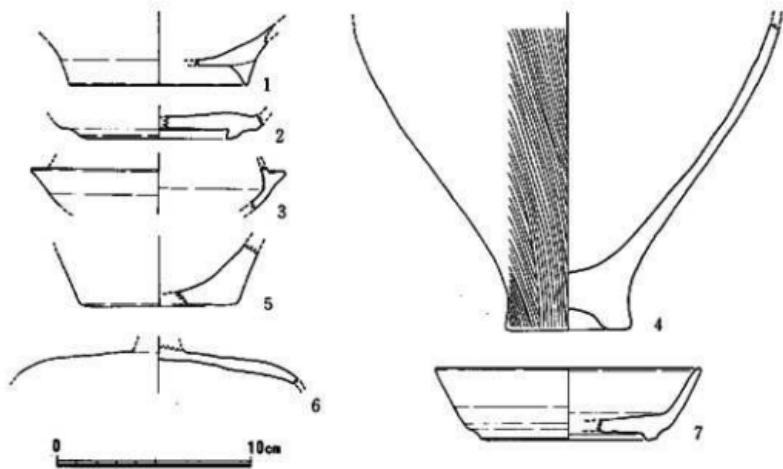


Fig. 158 29・30・32・37号土壤出土土器実測図(1/3)

平坦になる。

出土遺物 (Fig. 158-6・7)

いずれも須恵器である。7は低い高台付壺で復元口径13.4cm、器高3.7cmを測る。高台は低く安定し、ハの字状に開く。体部は横ナデ、底部はヘラ切りの後高台を貼付けている。

(5) 挖立柱建物

1号掘立柱建物 (Fig.160)

G-5区で検出する。梁行3間・桁行3間で、実長はそれぞれ320cm・350cmを測る。東・南側の2方向で主柱穴が確認されず北側でも軸が通っていないなど、掘立柱建物としては不確定な要素が多いがここでは建物として報告する。柱掘り方は30cm、深さ20cmを測る。

2号掘立柱建物 (Fig.160)

F-5区で検出する。上段検出の掘立柱建物のなかで唯一主軸をやや南側に取るものである。梁行1間・桁行2間で、柱間実長はそれぞれ270cm・290cmを測る。北側で中央の主柱穴が確認されておらず、掘立柱建物としては不確定である。柱掘り方は50~60cmと大きいが、深さは10~20cmと浅いものである。

3号掘立柱建物 (Fig.160)

F-6区で検出する。梁行1間・桁行2間で、実長はそれぞれ210cm・270cmを測る。柱掘り方

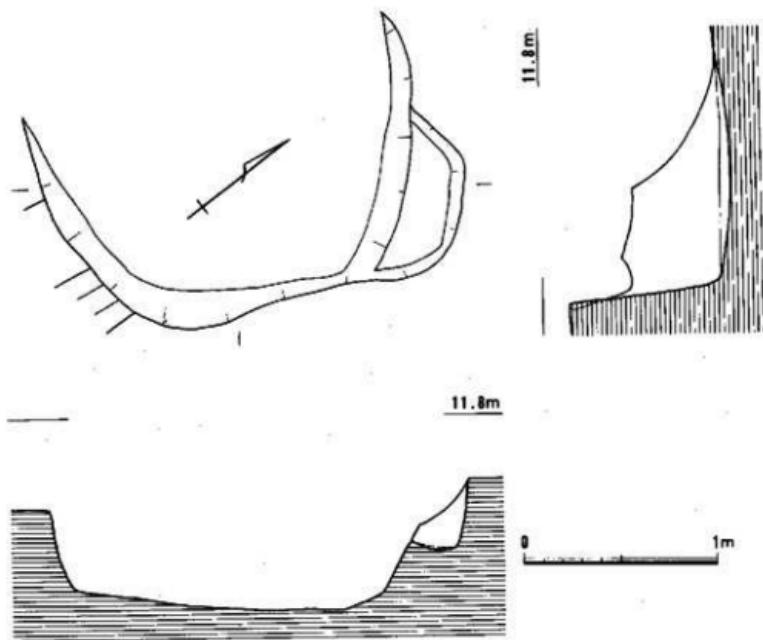


Fig.159 37号上塙実測図(1/30)

は60cmで柱底20cmを測る。

4号掘立柱建物 (Fig.160, PL.52)

F-6区で検出する。梁行1間・桁行1間の掘立柱建物である。柱掘り方径は60cm~70cmを測る。

5号掘立柱建物 (Fig.160, PL.52)

F-6区で検出する。梁行1間・桁行1間で、実長はそれぞれ240cm・260cmを測る。柱掘り方径は70cm~90cmで柱底径は30cmを測る。

出土遺物 (Fig.163-1, 2)

1は1/2程の底部破片である。外底面は緩く膨らんでおり、復元底径4.2cm、残存高2.8cmを測る。胎土には1mm以下の石英砂粒を含み、色調は褐色を呈す。調整は磨滅のため不明であるが、焼成は良好である。2は甕の口縁部である。復元口径11cm、残存高5cmを測る。胎土には1mm程度の石英砂粒および雲母を含み、色調は赤褐色を呈す。調整は磨滅のため不明であり、

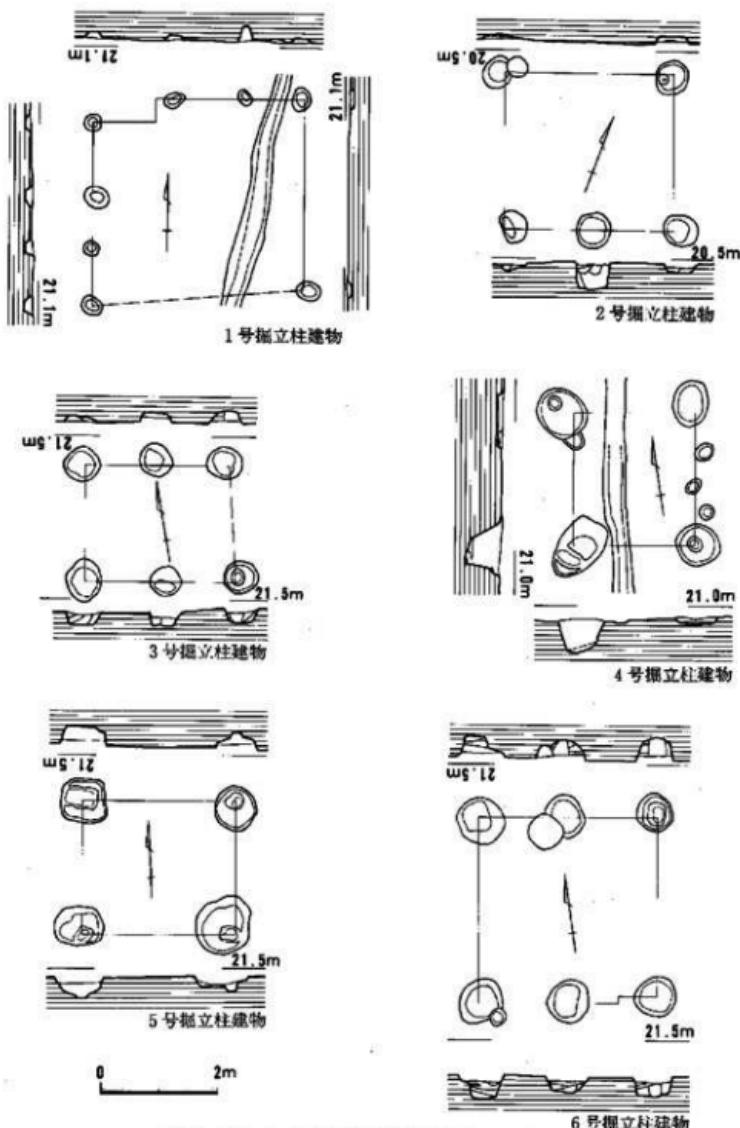


Fig. 160 1~6号掘立柱建物実測図 (1 / 100)

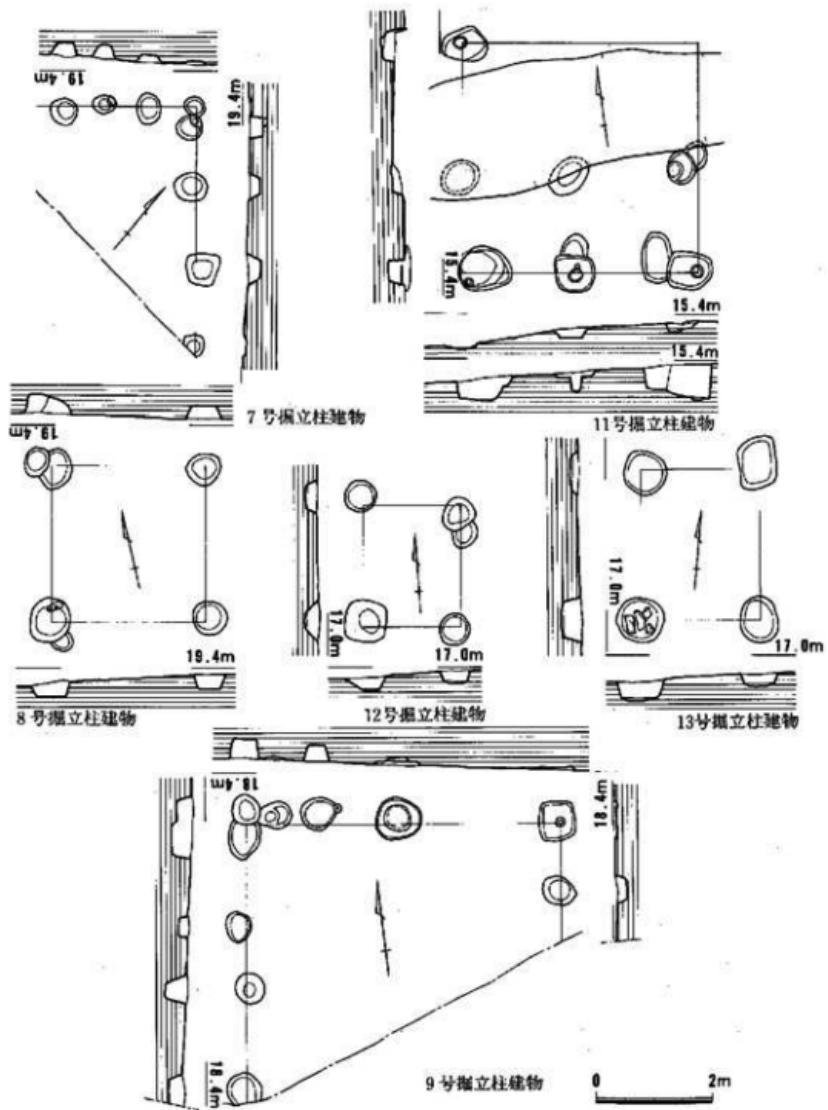


Fig. 161 7~9・11~13号掘立柱建物実測図 (1/100)

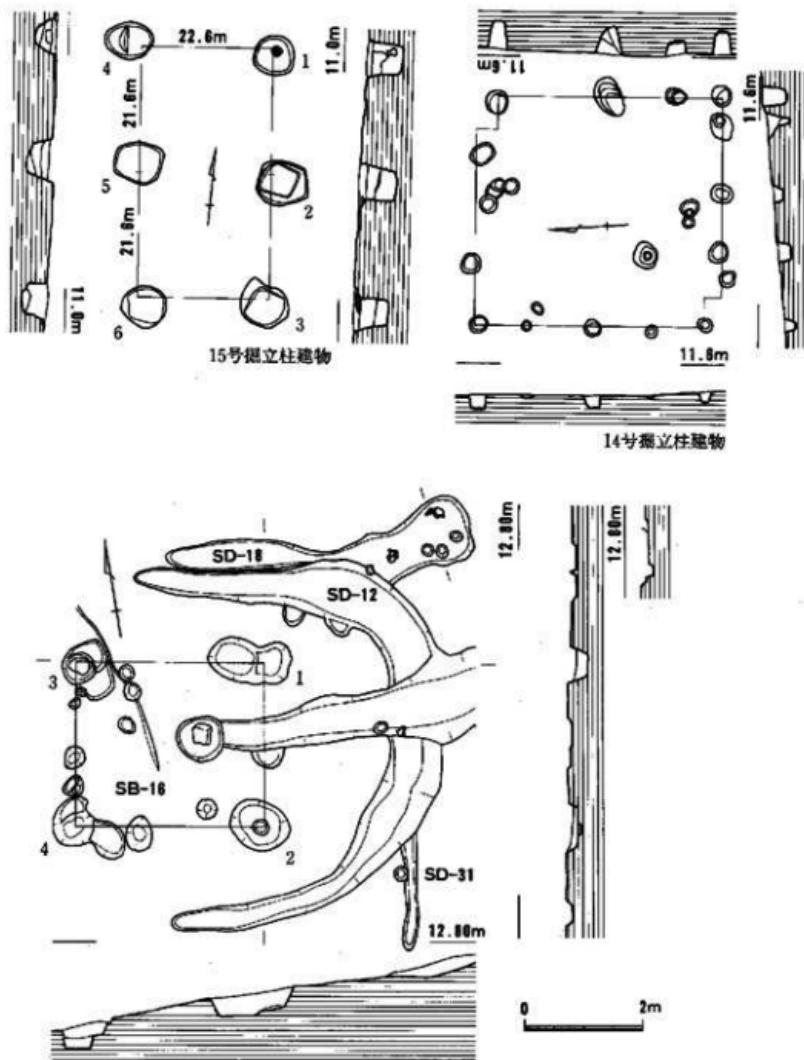


Fig.162 14~16号掘立柱建物・12・18・31号溝実測図(1/100)

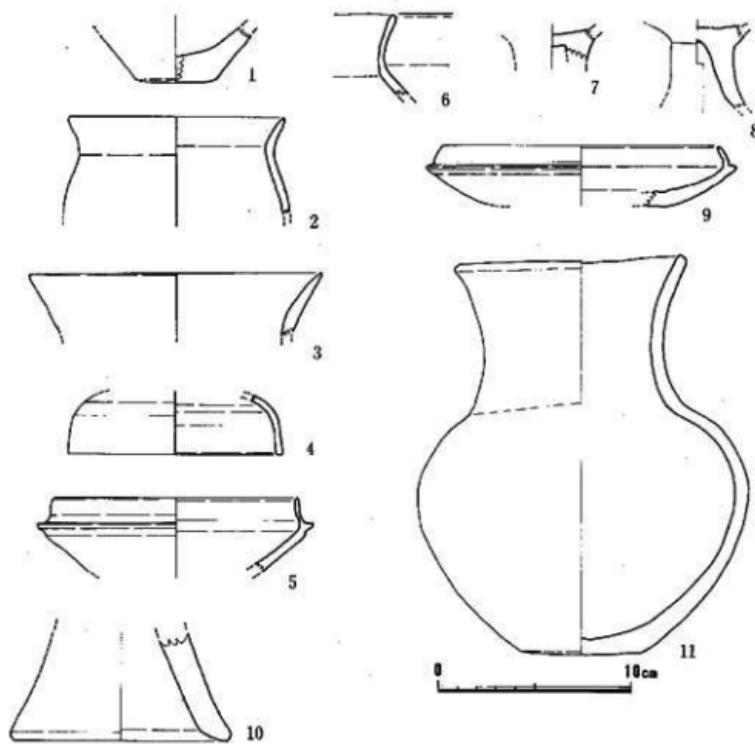


Fig.163 振立柱建物出土土器尖測図(1／3)

焼成はやや軟質である。

6号振立柱建物 (Fig.160)

F-6区で検出する。梁行1間・桁行2間で、実長はそれぞれ320cm・310cmを測る。柱振り方径は70cm程度である。柱痕跡は土層断面より3個について確認されており径は30cm程度を測る。

7号振立柱建物 (Fig.161)

F-6区で検出する。梁行3間・桁行3間以上で南側を調査区外に伸ばす。実長は梁行240cm、桁行は検出している所まで430cmを測る。主軸は北西方向にとっており他の振立柱建物とは大きく異なっている。柱振り方径は30~50cm程度を測る。

8号掘立柱建物 (Fig.161)

F-6区で検出する。梁行1間・桁行1間で実長はいずれも270cmを測る。柱掘り方径は60cm、深さ30cm程度を測る。

出土遺物 (Fig.163-3~5)

3は土師器甕の口縁部である。小片であるが復元口径は15cm程を測る。外方に直線的に伸び、端部はすばりながら納める。胎土は精良で焼成も良好である。4,5は須恵器の蓋坏である。4は蓋である。復元口径11cmを測り、口縁端部は平坦に作る。胎土は精良で灰白色を呈す。5は坏身である。

復元口径は12.4cmを測り、蓋受けは小さく返りは内傾する。残存部はすべて回転ヘラケズリにより成形される。胎土は精良で灰白色を呈す。

9号掘立柱建物 (Fig.161)

F-10区で検出する。梁行2間・桁行2間以上で、南半は調査区外に伸びる。実長は梁行540cm、桁行は検出しているところで480cmを測る。柱掘り方径は60cm程度を測る。主軸を南北にとり斜面に並行に作られている。

11号掘立柱建物 (Fig.161, PL.53-56)

F-13,14区で検出する。2間×2間の純柱建物である。実長はいずれも420cmを測る。北側は6号溝に切られ、南側では7号溝を切る。

12号掘立柱建物 (Fig.161)

F-11区で検出する。梁行1間・桁行1間で、実長はそれぞれ170cm・210cmを測る。柱掘り方径は50cm、深さ30cm程度を測る。13号掘立柱建物と並列するが主軸は若干異なる。本掘立柱建物は予備調査時にも柱穴は検出されており、今回は掘立柱建物として認定した。

13号掘立柱建物 (Fig.161)

E・F-11区で検出する。梁行1間・桁行1間で、実長はそれぞれ210cm・260cmを測る。柱掘り方径は70cm、深さ40cm程度を測る。12号掘立柱建物を一回り大きくした規模である。13号掘立柱建物は昭和46年に行われた路線決定のための予備調査時に検出されており、飯氏鏡原遺跡として報告されている。なお同時に報告されていたもう1棟は検出できなかった。

14号掘立柱建物 (Fig.162, PL.53)

E-16区で検出した梁行4間・桁行4間の建物である。柱の通りは直線的に並ぶが柱間の距離にはかなり不規則となる。梁行396cm、桁行421cmを測り傾斜面に平行で、ほぼ南北方向の建物

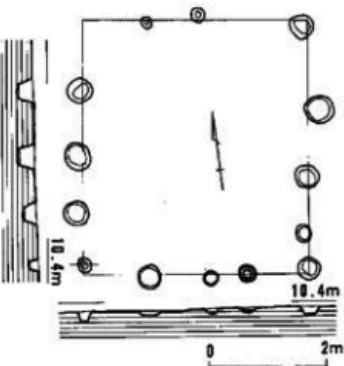


Fig.164 17号掘立柱建物実測図(1/100)

である。

15号据立柱建物 (Fig.162, PL.54)

D-16区で検出した梁行1間・桁行2間の建物である。柱間距離は梁間226cm、桁間216cm、を測る。柱穴の掘り方は平面形が比較的大きく、 0.7×0.8 m、深さ0.6mを測るものもあり堅牢な建物であったことを窺わせる。柱痕跡は平面及び土層断面でも確認することが出来なかった。SP 1から壺が完形のまま出土しており、人為的に埋置されたもので地鎮等の祭祀に伴うと考えられる。この壺はピットの南東部で、床面より約10cm上から検出され、底部を下にし、少し口縁部を斜めに傾斜させての出土である。

出土遺物 (Fig.163-10・11, PL.54-66)

弥生後期の土器が2点出土している。10はSP 5出土の器台脚部破片。2の壺は完形品で口径11.8cm、器高21cm、胴部最大径17cmを測る。丸底気味の底部から球形の胴部となり頸部がすばり外反して口縁部となる。口縁部は内外面とも横なで、胴部外面は研磨状のヘラナデを行う。

16号据立柱建物 (Fig.162)

D-15区で検出した梁行1間・桁行1間の倉庫と考えられる建物である。柱間距離は梁間286cm、桁間310cmを測る。北から東、南側を「コ」の字状に巡る溝があり、出土土器の時期もほぼ一致することからこの建物に伴うものであろう。柱穴の掘り方は楕円形で二段に掘り込んでいたり柱部を掘り窪めているのも見受けられる。深さは0.30cm前後であるが、傾斜面に立地するため東側と西側では底面にかなりな高低差がある。遺物は実測可能なものはないが古墳時代後半と考えられる。

17号据立柱建物 (Fig.164)

C-17区で検出した梁行4間・桁行4間の建物である。柱の通りは直線的に並ぶが柱間の距離はかなり不規則となり、さらには西北隅の柱穴は認められない。梁行388cm、桁行435cmを測り傾斜面に平行で、主軸は南北より少し東に振れる。柱の掘り方は大きいもので径50cm、小さいのは15cmほどである。深さも浅く大きな削平を受けているものであろう。遺物は実測可能なものはないが須恵器の壺などもあり16号据立柱建物と同時期と考えられる。

(6) 井戸

1号井戸

G-4区で検出した現代まで使用された素掘りの井戸である。中から針金やトタンなどの遺物が出土したので平面形のみ確認して下までは掘り下げていない。二段に掘り込まれ外側の平面形は隅丸長方形でその北よりの所に直径1mの井筒部をもつ。

2号井戸 (Fig.165, PL.55)

E-20区、27号溝と重複して確認した井戸である。石組の井戸であるが上部の大部分は失われ

基底部の一部のみの遺存である。掘り方は二段に掘り込まれ石組部が0.95m、井筒部は径0.65mの円形で、深さは各々0.18、0.36mを測る。石組は東側と西側に一辺が10から20cmの角礫を用いて築いているが、一~二段が保存するのみである。その中央部には40cm弱の井筒部が認められるが木質部が若干遺存するのみで桶、あるいは曲げ物であるか明らかではない。石組と一緒に土師器の瓶把手や布目瓦などが出土している。

出土遺物 (Fig.166)

1は土師器の高台付坏である。2、3は滑石製石鍋の破片である。外面には縱方向の壓痕が明瞭に残り、内面は平滑で研磨がなされている。4は平瓦で内面に布目、外面に縄目が残る。

3号井戸 (Fig.165, PL.55)

E-19区で確認した素掘りの井戸である。平面形は略円形で径1.1m、深さ1.44mを測る。壁面はだらかに傾斜をするが西は涌水による崩落のためが大きく抉れている。出土遺物は少なく須恵器甕、格子目の叩きのある土師器の破片等が実測可能なものはない。

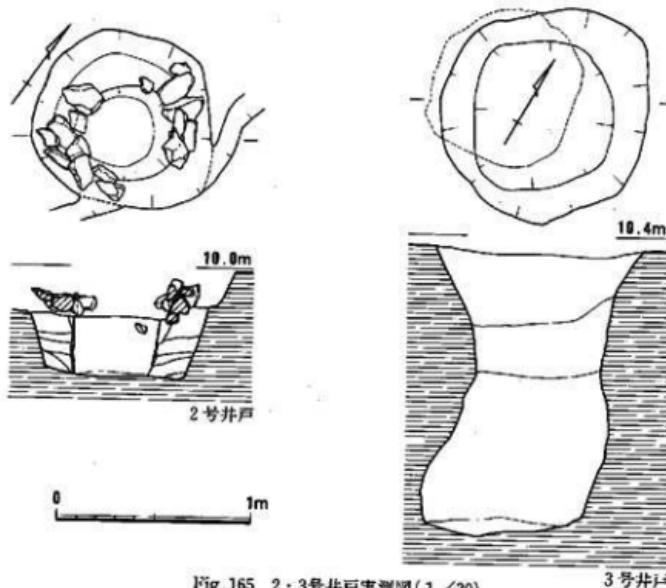


Fig.165 2・3号井戸実測図 (1/30)

3号井戸

(7) 溝状造構

6号溝 (Fig.168, PL.56)

F-13区で検出する。調査区内で長さ11m、最大幅2.8m、深さ60cmを測る。11号掘立柱建物を切る形で掘削されている。断面形は広がるV字形を呈する。出土遺物は少量で、土師器壺、須恵器蓋環・甕等の破片が出土しており、古墳時代後期に属するものと考えられる。

出土遺物 (Fig.169-1~3)

1~3は須恵器である。1は壺蓋であり、天井部のみ残存している。外面の1/2程度まで回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデによる。また天井部内面はその後指ナデを施す。胎土には石英砂粒が若干入る。灰白色を呈し、焼成は良好である。2は甕の頸部である。頸部は細くすぼまり、ほぼ直角に反転し上方に伸びる。復元頸部径は5.6cmを測る。3は並もしくは甕の胴部破片である。中央に2条の沈線を施し、その間に櫛状工具による斜めの刺突文を施す。

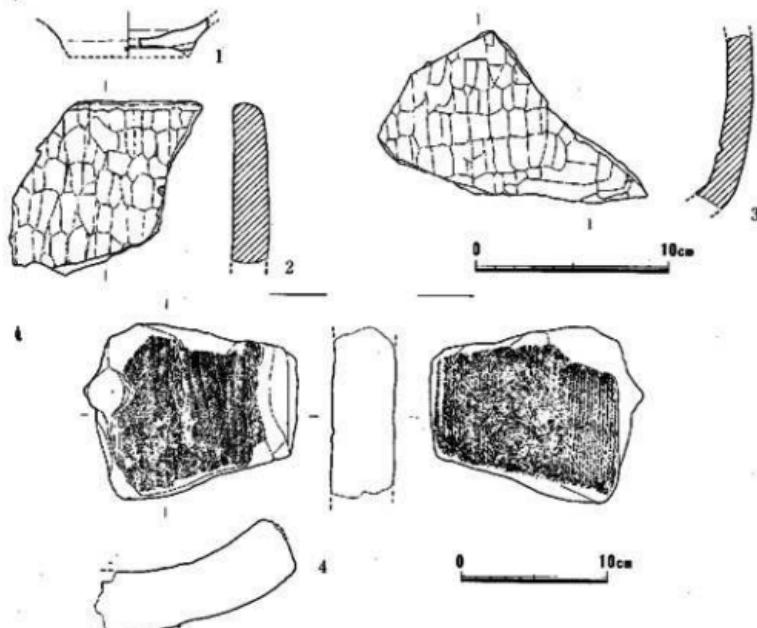


Fig.166 2・3号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)

胸部最大径はおよそ8.1cmを測る。

13号溝 (Fig.167)

B-15~C-16区にかけてほぼ南北に走る溝である。幅0.3m、深さ0.15m、長さ24mを測る断面U字状の小さな溝である。ほぼ直線的に伸びる北側で西方へゆるやかに湾曲する。

出土遺物 (Fig.170-13~21)

13~19は須恵器である。13は壺の蓋で口縁部から天井部にかけての破片である。14、15は高台付の壺と壺、17~19は壺の破片である。16の頸部には円線の下に波状の横描文を巡らす。また内外面に自然輪が見られる。20、21は布目瓦である。

14号溝 (Fig.167, PL.57)

A-13、14、15区にかけて北東から南西に走る溝で両端は調査区外へ伸びる。また西側では二本に分岐している。幅1.5m前後、深さ0.4~0.50m、長さ20mを測る。覆土は砂層で覆われ洪水により一時的に埋没したと思われる。そのため断面形も部分により異なりU字状になったりV字状、あるいは逆台形を呈する溝である。

出土遺物 (Fig.170-22~24)

出土遺物は少なく図示出来たのはいずれも須恵器で高台付の壺の破片である。高台は低く断面「コ」の字で外に開く安定したものである。

15号溝 (Fig.167, PL.57)

A-14、15、16区にかけて北東から南西に直線的に走る溝で、両端は調査区外へ伸びる。幅0.5m前後、深さ0.25m、現存長5.2mを測る。

出土遺物 (Fig.171-25~29)

25~27は弥生式土器である。25は袋状口縁の壺で外面に緩やかな稜をもつ。26は脚付の鉢で復元口径13.5cm、器高12.6cmを計る。脚は大きく開き、壺の口縁下ですばり端部は緩く外反する。器表面は剥離し調整は不明。28、29は須恵器の壺蓋で端部の内側に段を持つ。

27号溝 (Fig.168)

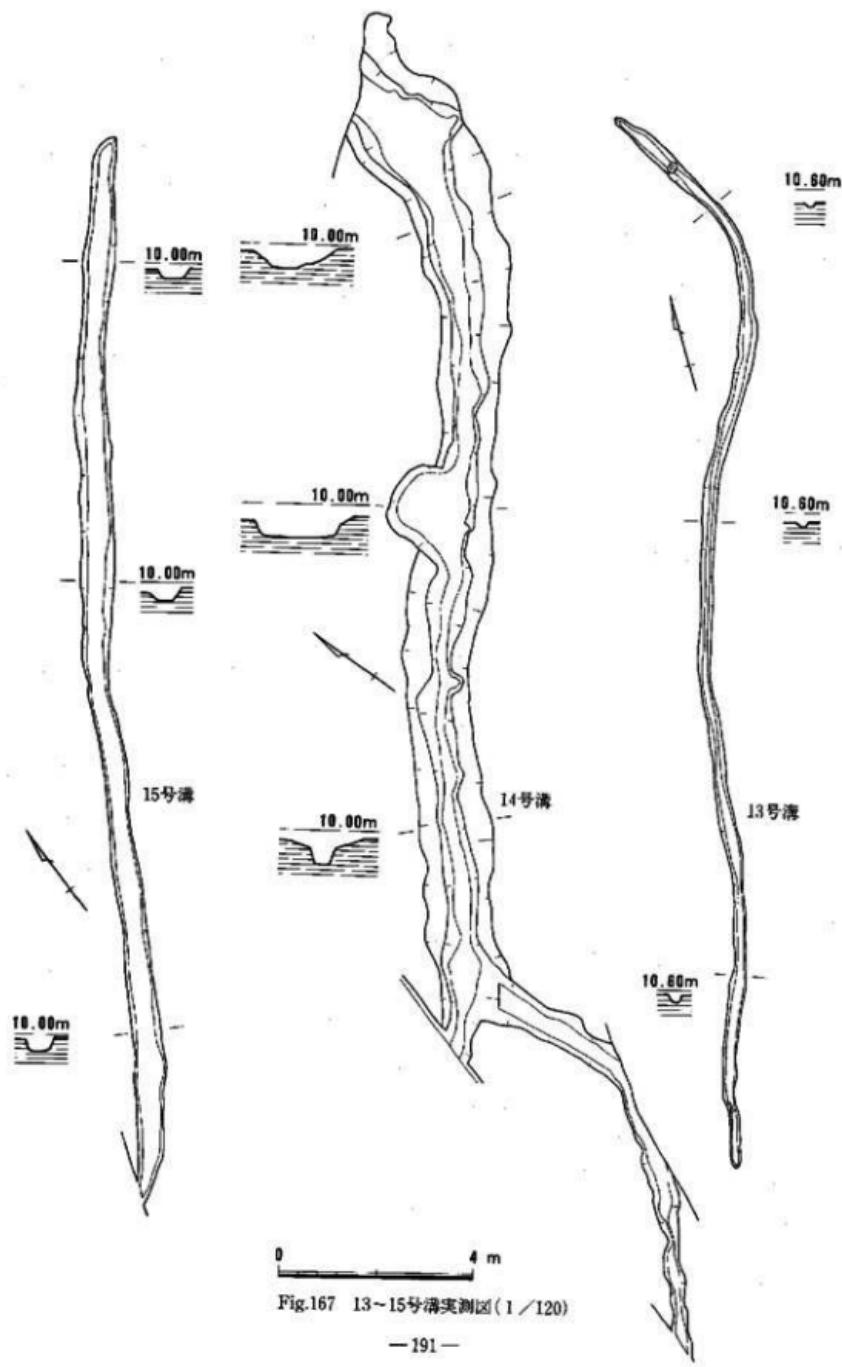
E-20区、調査区の南西端に位置する弧状を描く溝状遺構である。東から西へ傾斜する緩やかな斜面に位置する。最大幅1.35m前後、深さ0.10~0.25m、長さ7.3mを測り、断面皿状を呈する浅い溝である。覆土は淡褐色ないし茶褐色を呈する

出土遺物 (Fig. 171-32~36)

32~35は須恵器である。32は高台付壺、33は壺蓋、35は壺身である。36は砲弾型の土製品である。土質質で器表面は赤褐色内部は灰褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好である。摩耗のため明らかではないが滑らかで丁寧な調整が窺われる。

28号溝 (Fig. 168)

E-20~F-23区にかけて南北に延びる溝である。27号溝と同様に傾斜面に平行に走り弧状を



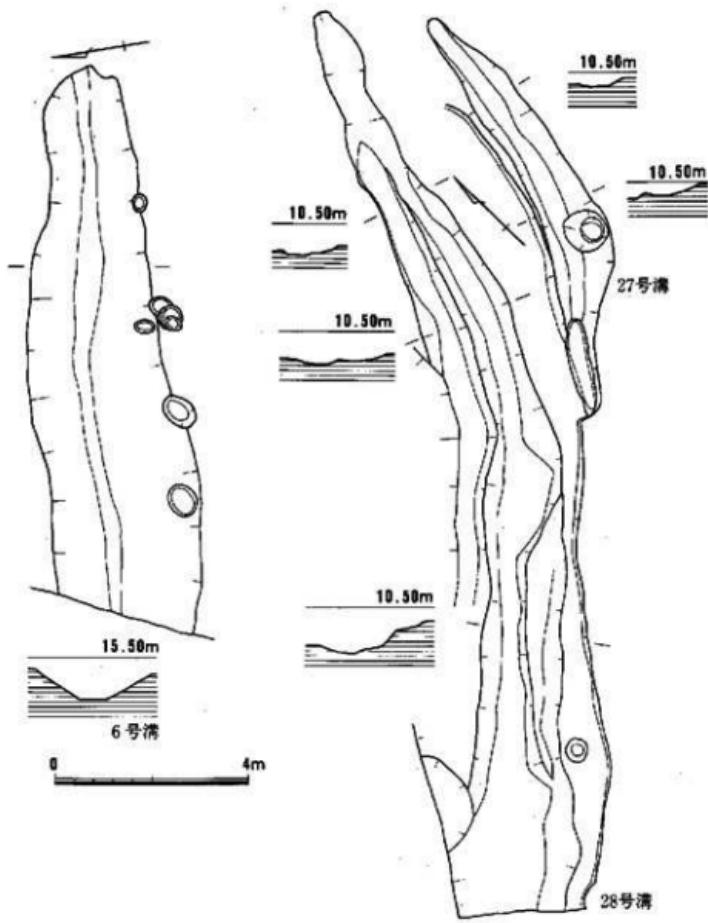


Fig.168 6・27・28号溝実測図(1/120)

描き一連のものと考えられる。最大幅2.1m前後、深さ0.10m、長さ19mを測り、断面皿状を示す浅い溝である。覆土は淡褐色ないし茶褐色を呈する。

出土遺物 (Fig. 172-37~42)

37は土師器の高环の脚部、38から42は須恵器である。

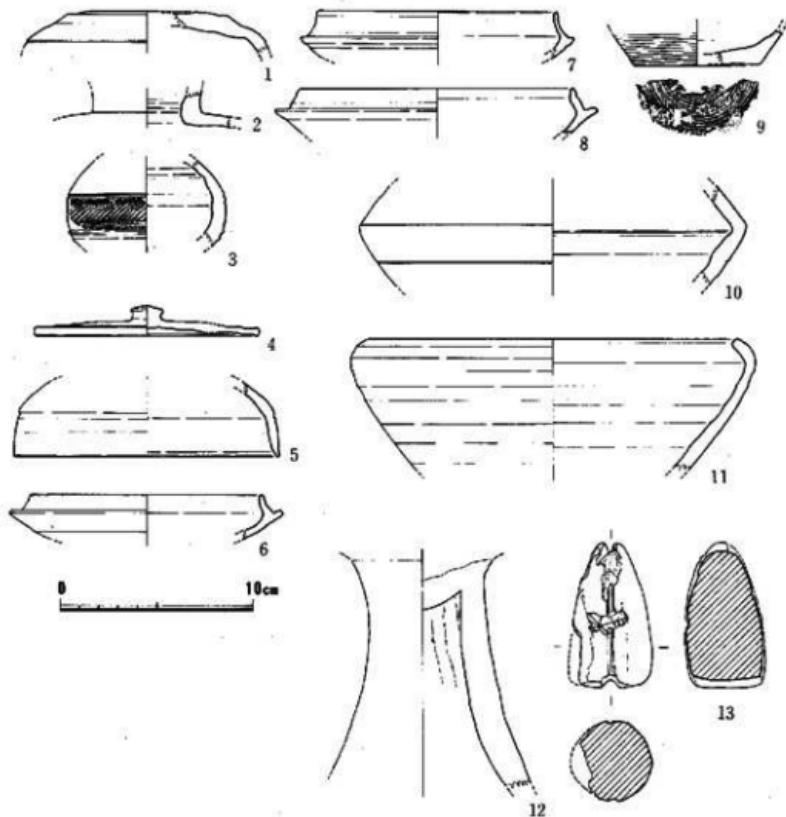


Fig.169 6・11号溝出土遺物実測図(1／3)

(8) その他の遺構

1号不明遺構

E-16区、1号住居跡の南側で検出する。直径25cm深さ20cmの土壇に、蓋付きの小型甕が埋置されていた。近世に属する胞衣甕であろう。

出土遺物 (Fig. 173, PL.67)

1、2は埋置されていた蓋付き甕である。蓋外面には青色の右巻き文が施される。釉調はやや灰色を帯びた白色を呈する。

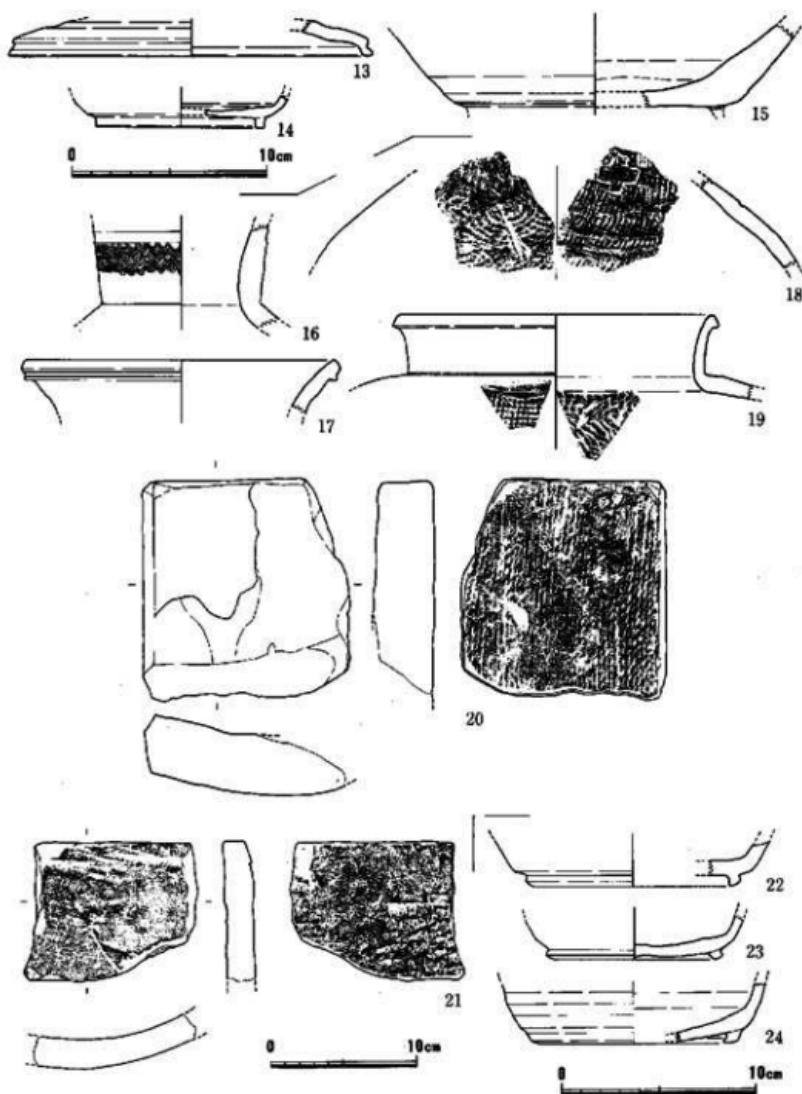


Fig.170 13~15号溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

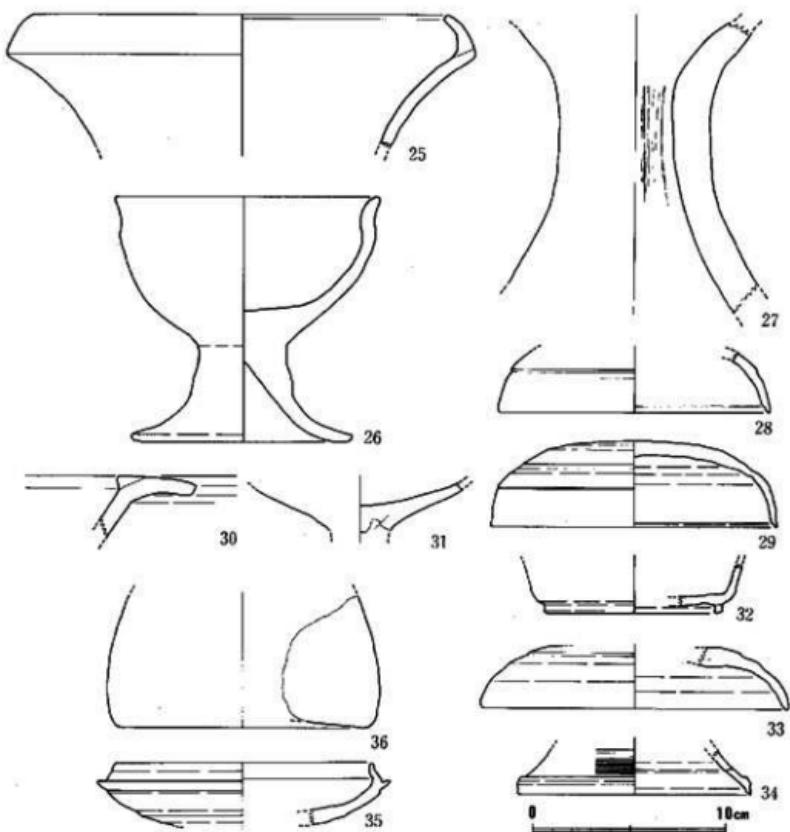


Fig. 171 18・23・27号出土土器実測図(1/3)

(9) ピット出土の遺物 (Fig. 174~176, PL. 67~68)

住居跡や掘立柱建物等に伴うピットの他に単独のピットからも各時代の遺物が出土しているのでその概略を記す。

1~9、15~18は弥生式土器で、中期前半から終末までの上器がある。1から6は甌、7、8は鉢、15~18は器台である。10~14、24~26は土師器、19~23は須恵器である。27は管状土錐の基部、28は磨製石斧の刃部である。

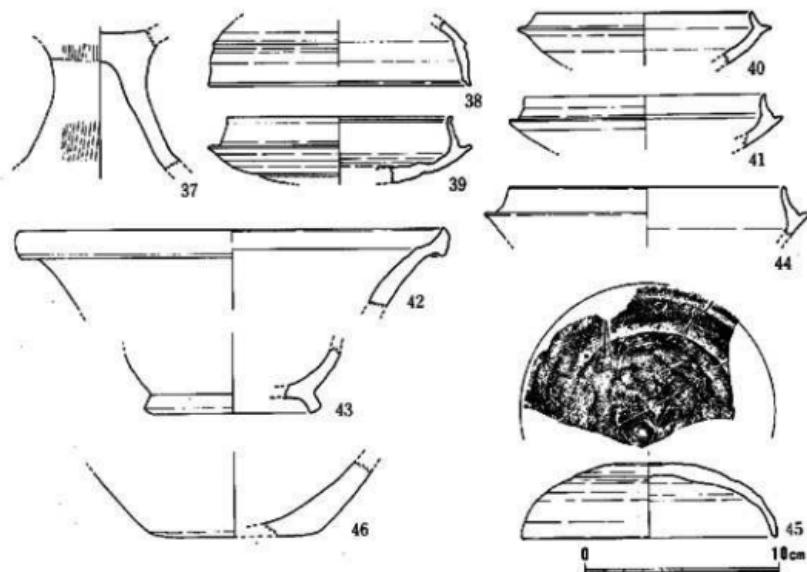


Fig. 172 28・29・31号溝出土土器実測図(1/3)

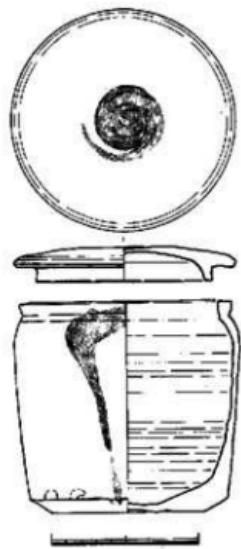


Fig. 173 SX-1出土遺物実測図(1/4)

(10) 打製石器 (Fig. 177-178, PL.68)

出土資料35点のうち、石器を以下に報告する。先土器時代、縄文時代に属するものとできる資料である。1は細刃器用石核から剥ぎ取られた剥片で、石核打面への加撃により、剥離作業面の部分全体が剥ぎ取られている。石材は黒曜石である。本資料からする限り、石核は、角錐状を呈する。2・3は細刃器である。ともに上下部を、折れにより欠く。

4・5は、刃器状剥片の縁部に、調整の加えられた石器で、石材はいずれも黒曜石である。4は端部の両側縁に極状剥離痕が観察される。その部分にはさらに、直交する方向の連続した剥離が加えられる。5は両側縁に連続する小剥離痕が加えられ、不整な凹凸をもつ縁部を形成している。7・8は継長の剥片両側縁に連続あるいは、断続する小剥離痕の観察される石器である。素材側縁の

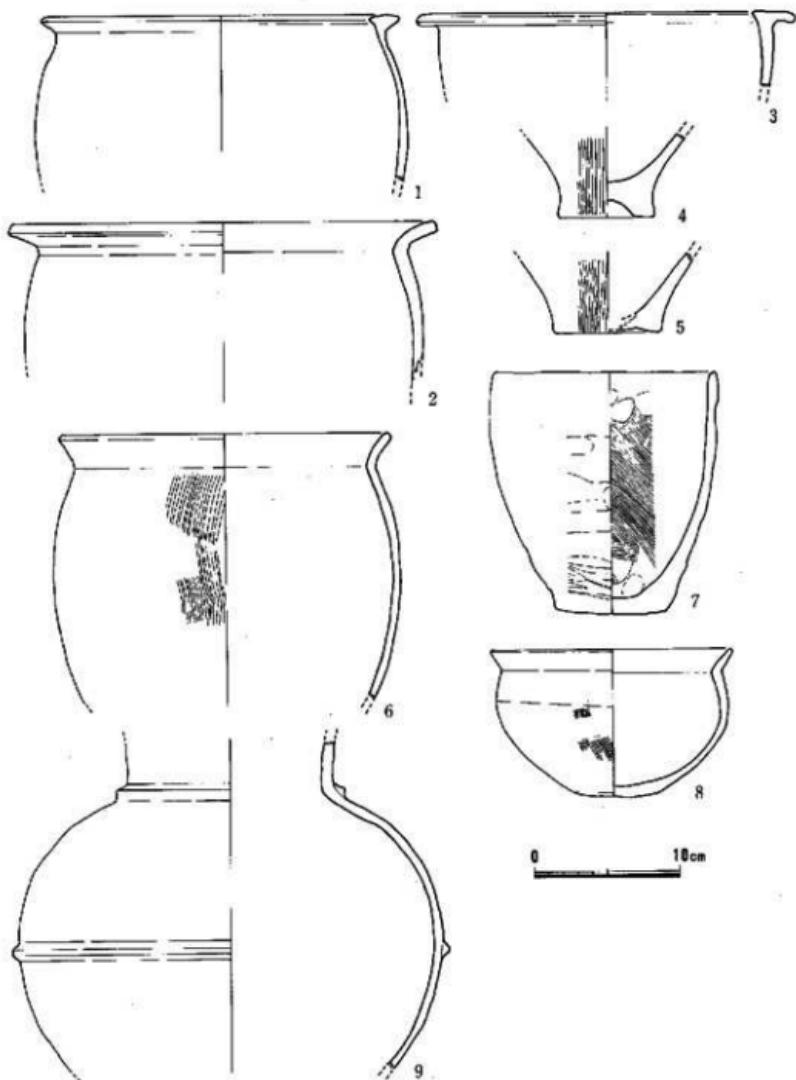


Fig.174 ピット出土遺物実測図(1)(1/4)

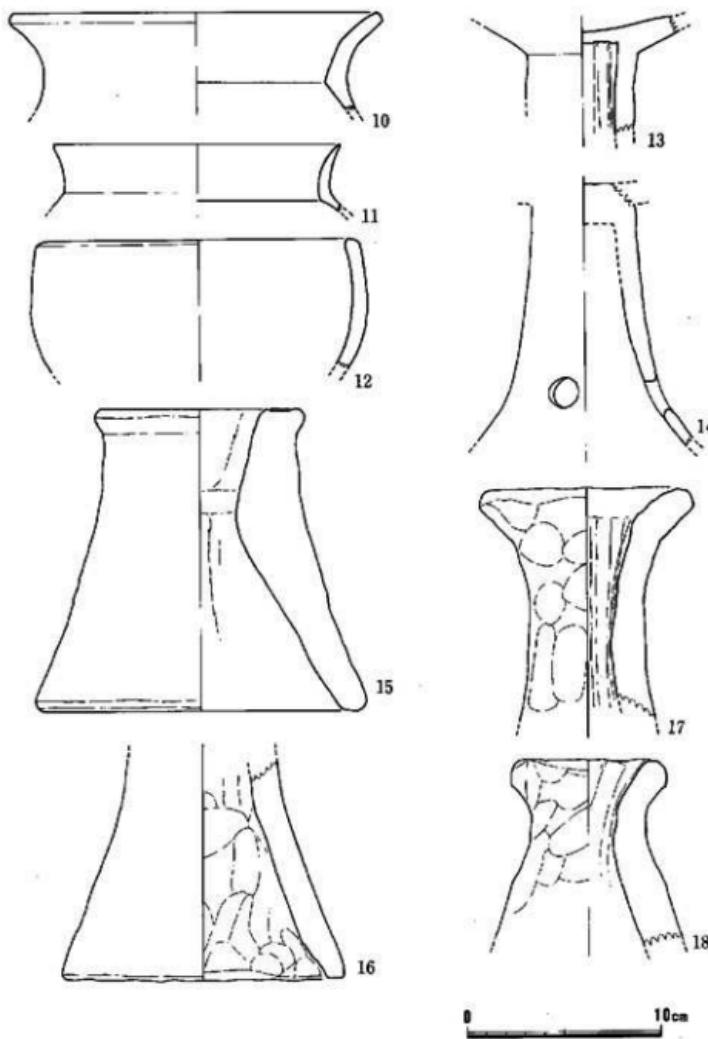


Fig.175 ピット出土遺物実測図(2)(1／3)

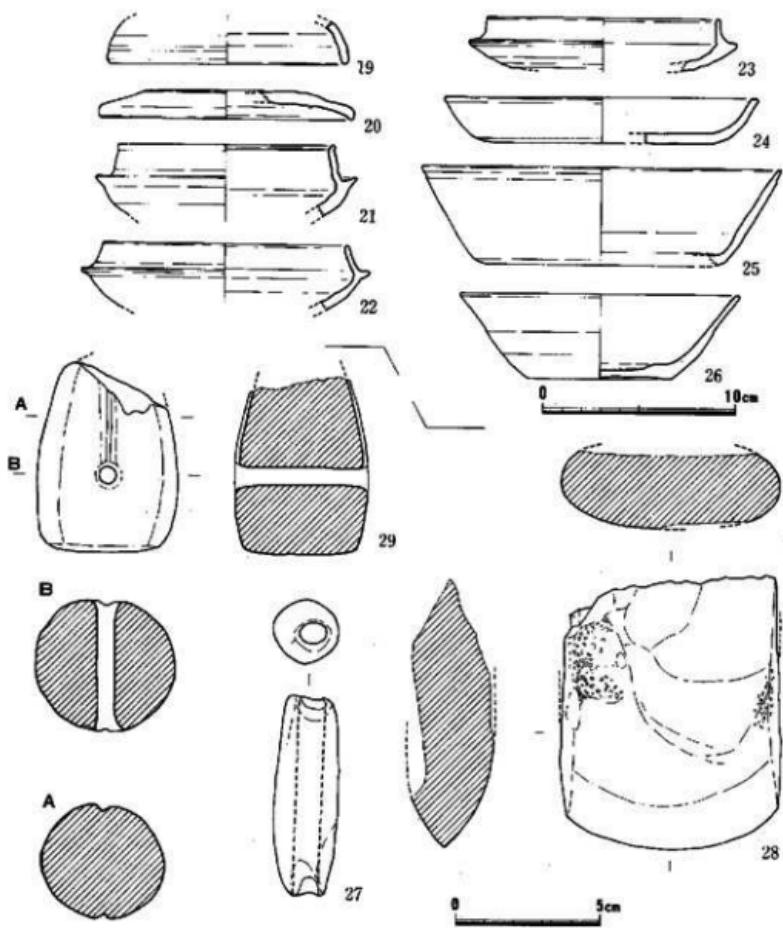


Fig. 176 ピット出土遺物実測図(3)(1/3・1/2)

形状は変更されていない。

6は両面加工の槍先形尖頭器状の石器である。安山岩を使用する。上下両端部を欠いて、両側辺は平行する。断面は薄く、菱形である。

9～12・14は、石鎌である。いずれも無茎凹基の石鎌で、石材は、すべて黒曜石である。9

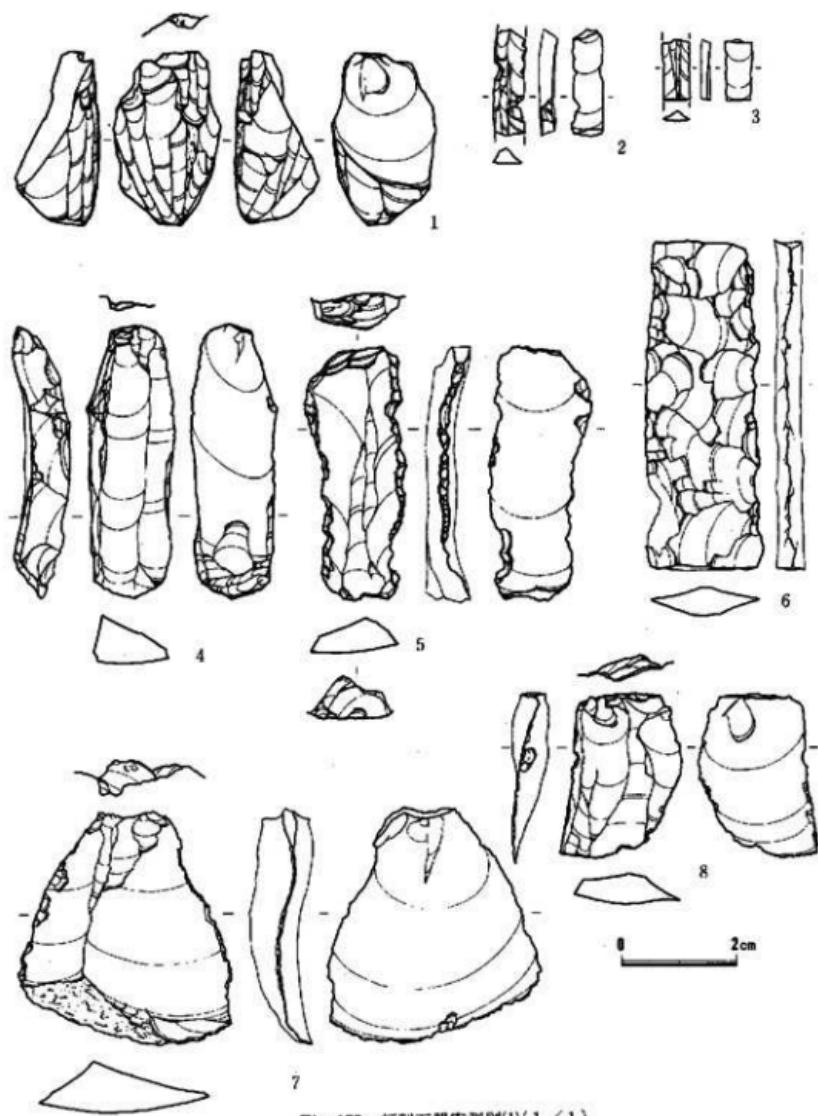


Fig. 177 打製石器實測圖(1)(1 / 1)

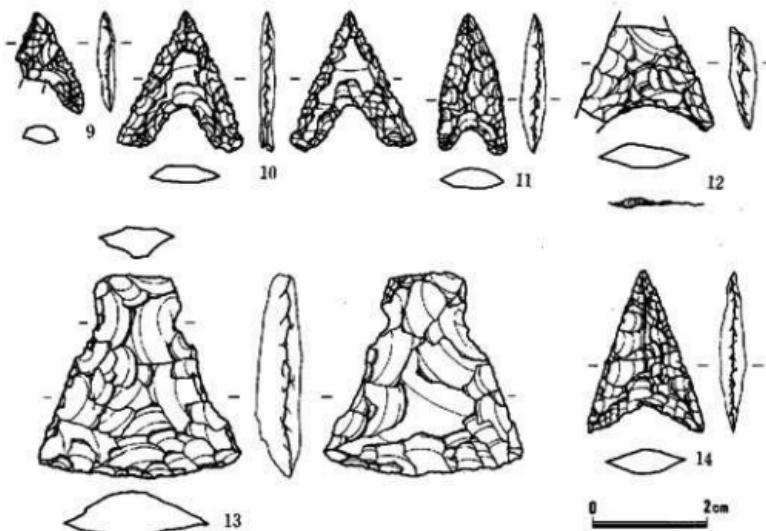


Fig. 178 打製石器実測図(2)(1/1)

の左側縁は、他と異なり急斜な剥離により形成されている。12の基部縁辺には研磨が加えられて1面を成している。

13は、石匙である。安山岩製で、抜み部分を大きな剥離によってつくり出している。

IV. まとめ

飯氏遺跡3次調査II区、III区では旧石器時代から近世にわたる多種多量の遺構、遺物が発見された。その提起する問題は極めて多岐にわたり、そのすべてについてまとめを行うのは紙数、時間の関係からも不可能なので、この報告書を叩き台として、今後の研究に資することを期待したい。ここではII区、III区で豊富に出土した弥生時代埋葬関係遺構の、更にごく一部について若干のまとめを行いたい。

弥生時代前期末～中期前半の甕棺について (Fig.179)

一 城の越式甕棺を巡って

飯氏遺跡II区では前期末から中期初頭の甕棺が多く出土し、その形態変遷を追うことができた。甕棺の報告の項で用いた1類から4類の分類は、概ね時間的な形態変化を反映しているものと考えられる。ここで繰返しになるが、簡単に各類の特徴について述べておく。

1類：まだ壺の形態に近く、最大径が胴部のかなり下位にあり、底から口縁部に向かって若干すぼまりつつ伸びる。口縁部は大きく緩く外反する。16号、2号上下、20号下などが例に挙げられる。

2類：いわゆる典型的な金海式甕棺である。口縁部に向かって緩くすぼまり、口縁部は大きく緩く外反する。端部上面に広く厚い枯度帯を貼付する。端部上下両端に刻印を施す。6号、14号などが典型例で、9号上も2類である。

3類：すぼまりはほとんど見られず、口縁部直下で強く外反する。口縁部は2類に比べて内側への張出しが大きくなる。端部の刻印を持たないものが出現する。4類との違いは、胴部上半が、わずかに外反気味のカーブを持つところにある。9号下、11号下などが例に挙げられる。

4類：胴部は壺の形態を呈し、口縁は鋤先状になる。胴部突帯を持つものが現れる。26号上下、3号上下などが例に挙げられる。

先後関係について、上下をなす甕棺のセットで検討してみると、20号上は2類と思われ、下甕の1類とセットをなす。2類は9号、11号で3類とセットをなす。4類は4類同上のセットしか見られないが、形態的に3類に後続することはほぼ誤りない。したがって1類から4類への変遷はほぼ検証されたと考えられる。

Fig.179に示したように、また甕棺の項で図示したように2類はいわゆる金海式甕棺で、調査区では上下合わせて15個体出土しているが、形態的に極めて安定している。いわば定型化の進んだ甕棺といえよう。これは他の遺跡でも同様な傾向を示すと考えられる。突帯文期以来の甕棺墓制の一つの到達点であるが、正確にいえば「壺」形棺の到達点であり、最盛期といえよう。これが、3類にいたると様相が変化する。3類は胴部形態が壺に近くなるが、胴部中位から外反気味に立ち上がるところに古い要素が見られる。4類は形態的にはほとんど壺である。この3

類、4類には極めて多種類の形態があり、2類の各要素の残存状況も様々である。口縁の刻目を残すもの、胸部の沈線を残すもの、また新しい要素である胸部突帯も、持つものと持たないものがある。このような状況は、形態的に極めて不安定であり、定型化していないことを示している。この背景は後述し、まず形態の変遷を先に簡単に見ておく。この多様な形態の中から、Fig.179に系統を示したような1系列が残り、汲田式が成立すると考えられる。5類とした壺棺^{注1}はかつて橋口達也氏によって中期初頭KIIa式とされたもので、汲田式の前段階に位置付けられ、また形態的には4類の後に位置付けられる。このような形態変遷を追うことにより、定型化した2類金海式壺棺が、多様な形態変化を起こしながら解体し、再びその中からある1系列が淘汰され、汲田式として定型化していくことが読み取れるのである。

この変化の背景にあるものは何であろうか。先に壺棺の分類の項で述べたとおり、現象面から見れば、「壺」形棺から「甕」形棺への転換として捉えることができる。また先に金海式壺棺は突帯文期以来の「壺」形棺の到達点であると述べたが、言い替えれば「壺」形という範型内で埋葬用の大形土器を製作するには、限界に達していたと思われる。例えば頭部のすばまりは小さいほど、死体の入棺や、棺内での棺の安定には益が多いと思われる。また胸部の突帯の有無が、たとえ近距離の移動でも労力に大きく関わってくることは、経験的に感じられた方も多いおられることであろう。無論、こうした些少事のみが原因とは思われないが、前期壺棺から中期壺棺の変化が、「壺」形から「甕」形への転換であるということは、強調しておくべき視点であろう。

この変化を起こした「甕」の諸要素は何から導入されたかを考えれば、鋤先状の口縁部形態、胸部突帯などは、刻目突帯文系のいわゆる亀の甲系甕、もしくはそれから発展した城の越式甕と思われる。つまり、日常土器としても普通に使用される器種から諸属性を導入し、埋葬用土器の製作を新たに盛行させたと考えることができる。このことは、前期弥生時代人が「壺」にたいして持っていた象徴性を変容させ、土器棺葬に前代とは若干異なる思想が持ち込まれているとも考えができるのではないか。

従来いわゆる城の越式壺棺については、その出土量の少なさから、型式としては存在するが1時期としては設定できず、金海式とともに1時期をなすという説や、時期的にも短いといわれてきており、これにたいして橋口達也氏は、出土量が少ないので、該期にはまだ土壙墓、木棺墓が主流をなしているため、城の越式壺棺期も1時期をなすものとして、類例を多く挙げて強調している。挙げられた壺棺は糸島とは地域の異なる物が多く、型式認定には慎重でなければならないが、概ね本報告でいう5類に当たるものである。5類は形態的には「甕」形化がかなり進んでいるが、この時期にいたっても量的には少ないという現象も、先学が指摘した時点からあまり変化は無からうと思われる。橋口氏はその理由を土壙墓、木棺墓の残存に求めているが、別の理由は無いであろうか。まだ類例を網羅的に点検するには至っていないのである

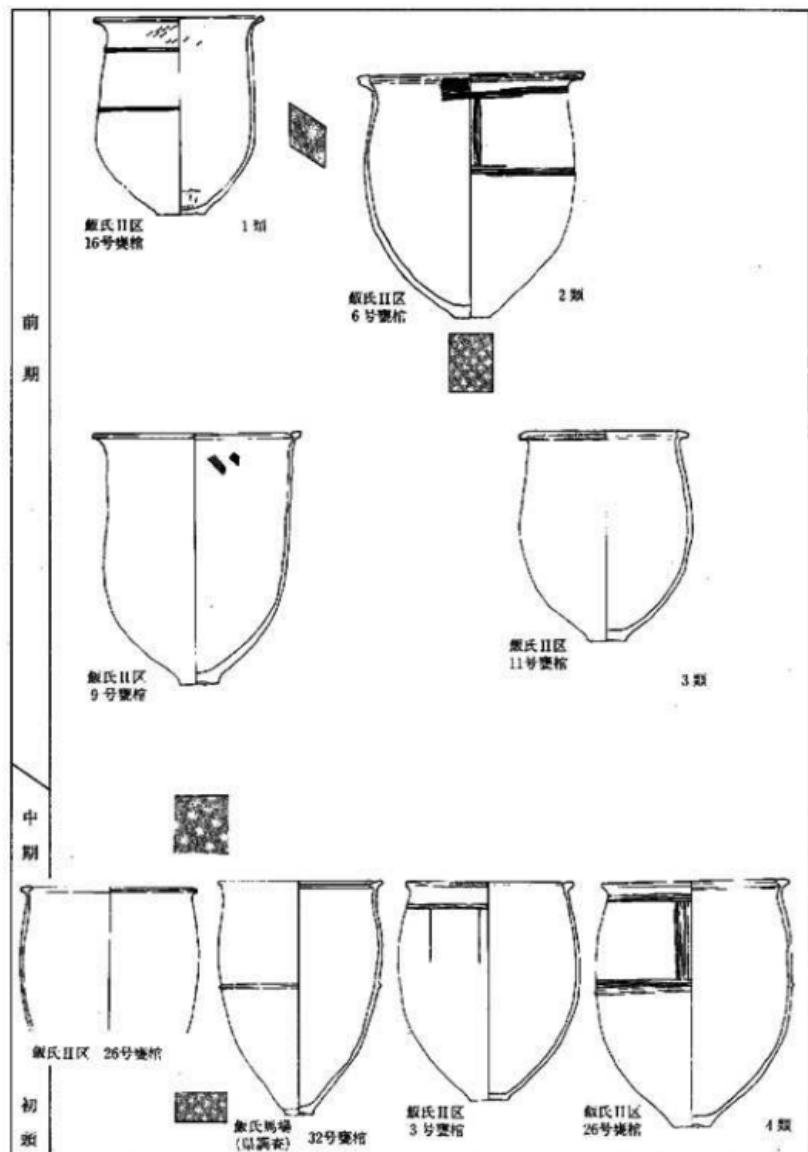
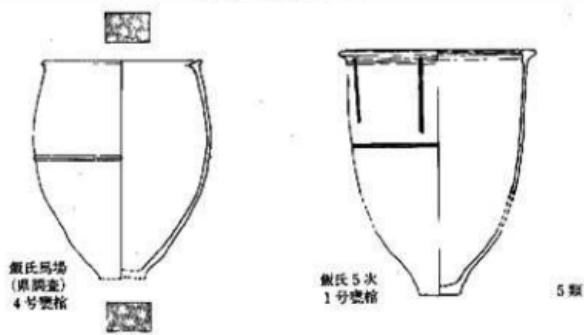


Fig.179 糸島における甕棺の

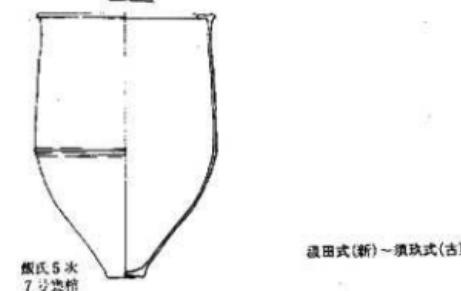
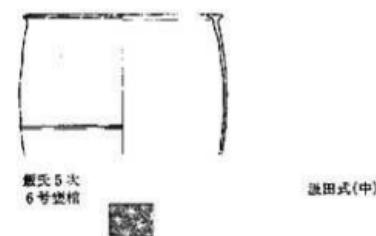
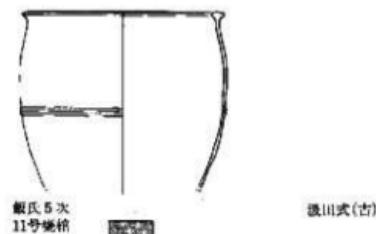
中期初頭



中期

前半

中期中頃



変遷(前期末～中期前半)(1/20)

が、橋口氏も述べるようにK Ic式（金海式）とk IIa式（城の越式）がセットをなす例があり、その内の1例である有田遺跡出土の銅戈副葬甕棺の上甕は5類と考えられる。したがって、金海式は5類の段階までは残ると考えられるのである。このことから、甕棺墓地によっては汲田式導入の直前まで金海式が使用されていた可能性が指摘できるのではないか。

すなち、金海式→城の越式→汲田式という変遷は、甕棺墓使用地域で一様に並行して起こったではなく、いずれかの地域で「壺」形棺である金海式を解体して「甕」形棺である汲田式を成立させ、その周辺の地域はこの「甕」形棺を再び受容するという形で甕棺墓社会が変遷していく可能性も考えられる。その際に「壺」に対する執着の度合いが城の越式甕棺の量の多少に大きく関わってくるのではないか。この仮説については周辺地域の甕棺墓の検討を行なった後に、別稿を期したい。

後期の甕棺

—後漢鏡の流入を巡って—

飯氏遺跡の発掘成果のひとつに、雲雷文内行花紋鏡が甕棺墓から出土したことがあげられる。調査直後から尖年代論をはじめ各種の論考に「調査者教示」ということで用いられてきたが、調査者自身が編年的位置を明確に決めかねている頃から使われており、若干の混乱も起こしてしまったと思われる。その責は調査者が負うべきであり、この7号甕棺の編年位置を明らかにしておくことは報告の際の責務であろう。以下に考察を加えてみたい。甕棺は図示したとおりであり、あまり類例の無いものである。後期の甕棺は橋口達也氏によってKIV式、KV式に大別されている。まず糸島地方に特有の甕棺墓とされているKV式と比較して見よう。KV式はKVaからKVfに細別されるが、その最古であるKVa式に属する神在遺跡3号甕棺と比べると、神在例は突帯が2段で下段の突帯の位置も低い。また突帯も低い。これらの特徴から、飯氏7号例が先行するとと思われる。ではKIV式とはどうであろうか。後漢鏡である獸帶鏡を開葬していた三津永田遺跡104号甕棺墓(KIVc式)と比べると、三津例は突帯が頭部付け根にも周り、また底部もわずかに上底状を呈し、104号甕棺の方が飯氏7号例より古い要素を持っているようである。しかし佐賀平野のこうした甕棺は中期甕棺からそのまま系譜を追える、いわば甕棺墓葬の残存として理解されるのに対し、糸島の後期甕棺は中期甕棺とは一線を画した別系統の甕棺と考えられるので、形態だけを根拠に新古を決めるのには慎重であらねばなるまい。

近年糸島地方では甕棺墓の調査も進み、直接比較する資料にも恵まれるようになった。前原市東太田遺跡1号甕棺はその例で、高三瀬式新段階（後期前半）の甕を伴うという。該例は底部がまだ安定した平底で突帯の位置も飯氏7号例より高く、シャープで飯氏7号より先行すると考えられる。また平原5号墓の周溝出土の甕棺は壺形土器であるが、高三瀬式古～新段階の高环を上甕とする。壺の方はほぼ東太田5号や、飯氏7号と共に通する特徴を持つとの教示を得た。これらの諸例との比較から、飯氏7号甕棺はKVa式を確実にさかのぼり、後期前半をや

や下がる下大限式古段階（後期中頃）に位置付けられよう。このように考えると、三津永田104号墓とほぼ同時期になる可能性が高い。

先に糸島の後期墓群は中期とは別系統であると述べたが、糸島地方では、確かに中期後半立岩期にいたると三雲南小路1号、2号墓群の副葬遺物に見られる華麗さとは裏腹に、墓群自体の盛期は既に過ぎており、一時的な断絶が見られる時期である。今回調査のIII区の墓群をみても、確実に立岩期に下がる成人棺は3号、44号を挙げうる程度で、該期には墓群の造営が衰退している。この現象は糸島平野全体に見られることがある。その後後期前半にわずかに復活し、後半から終末に再び盛行するようになるが、これらの墓群は中期とは別系統の後期系墓群と称すべきものである。

次に流入期の後漢鏡が出土した重要な遺跡のいくつかについて見ておきたいと思う。方格規矩四神鏡をはじめ、巴型銅器、有鉤銅鏡などを副葬した佐賀県唐津市桜馬場遺跡の墓群は後期初頭とされ、桜馬場式墓群の標識とされているが、この墓群については発見者である龍溪顯亮氏のスケッチが残るのみである。この図は現実には存在しない形態を示しており、型式認定は不可能で、様々に解釈されてきた。橋口氏はKIVa式の特徴は備えているとし、また柳田康雄氏は突帯が脇部のかなりが「下がった位置にあることから、「後期前半—中頃」に位置付けられる」とした。^{註6}また最近では高橋徹氏が、「後期前半も過ぎた中ごろ」としている。^{註7}いずれにしても我々が「桜馬場式」として認識している形態であるとの保証は無い。同じく方格規矩四神鏡と巴型銅器が出土した前原市井原館溝遺跡は、墓群であることは間違いないようであるが、形態に関する情報は全くない。ただ先述したような糸島の墓群のあり方からみて、後期糸島墓であることは明らかであろうから、飯氏7号墓群を大きくさかのばることは考えにくい。また多量の方格規矩四神鏡と4面の大形彷彿鏡などを副葬していた前原市平原1号墓は、飯氏7号墓群と同型式の雲雷文内行花紋鏡も副葬しており、飯氏7号墓群をさかのばることは無いと思われる。これらの諸例から考えると、流入期の後漢鏡の内、方格規矩四神鏡の上限が決まらないが、ほぼ飯氏7号墓群の示す「後期中頃」という時期がひとつつの副葬の画期となっていると考えられる。

從来の研究では方格規矩四神鏡は中国での出現時期も、日本への渡来時期も雲雷文内行花紋鏡に先行しており、出現順に矛盾無く渡来してきたと考えられ、弥生時代の実年代論の大きな根拠となってきた。しかし最近の立木修氏等の研究によると、雲雷文内行花紋鏡も紀元前後に中國で鑄造されはじめ、方格規矩四神鏡とかなりの部分で併行するという。立木氏はこのことを述べた論考のなかで、日本側では、雲雷文内行花紋鏡が後れて伝來したとされており、ただ飯氏7号墓群の時期によっては結論が変わってくる可能性があると述べられている。本項で検討してきたことにより、方格規矩四神鏡も、雲雷文内行花紋鏡もほぼ同時期に流入し、同時期に副葬されている可能性が高いことを仮説として提示しておきたい。その検証は、方格規矩四

神鏡を副葬した豪棺墓が確実な例として調査されたときになされるであろう。

註1 橋口達也「豪棺の編年的研究」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告31 1979

2. 註1文献

3. 岡村秀典「中国鏡による弥生時代実年代論」考古学ジャーナル325 1990

田崎博之「弥生時代の漢鏡」「社会科」学論集 愛媛大学 1993

高橋徹「鏡について」菅生台地と周辺の遺跡 竹田市教育委員会 1992

種田淳介「1990年の動向 弥生時代西日本」考古学ジャーナル333 1991 など

4. 註1文献

5. この項については第35回埋蔵文化財研究会「壇人と鏡」発表要旨集に未公表資料も含めて各豪棺を図示している。参照されたい。なお掲載を許していただいた前原市教育委員会に感謝する次第である。

6. 註1文献

7. 柳田康雄「3、4世紀の土器と鏡」森貞次郎先生吉稀記念古文化論集 1982

8. 註3高橋文献

9. 立木修「雲雷文帶連弧文鏡考」季刊考古学 1993

また岡村秀典氏からも内行花紋鏡が王莽代までさかのぼるとの教示を得た。

なおこの項を書くに当たり、甲元真之氏、岡村秀典氏、橋口達也氏、田崎博之氏、九坂研究会九州世話人会、関西世話人会の方々をはじめ多数の方々のご教示を得た。末尾ながら感謝申し上げる次第である。

図 版



III区全景

PL. 2



(1) II区全景



(2) 28号麦棺



(1) 7号墓棺



(2) 7号墓棺出土鏡



(1) III区墓棺群



(2) 7号住居跡出土須恵器



(1) II区調査区全景（東より）



(2) II区調査区全景（北より）



(1) II区調査区全景



(2) II区16号墳古墓（南より）



(1) II区18号甕棺墓（北より）



(2) II区18号甕棺墓（南より）



(1) II区20号甕棺墓（東より）



(2) II区20号甕棺墓（南より）



(1) II区6号妻棺墓（東より）



(2) II区21号妻棺墓（南より）



(1) II区24号甕棺墓（西より）



(2) II区28号甕棺墓



(1) II区17号甕棺墓（西より）



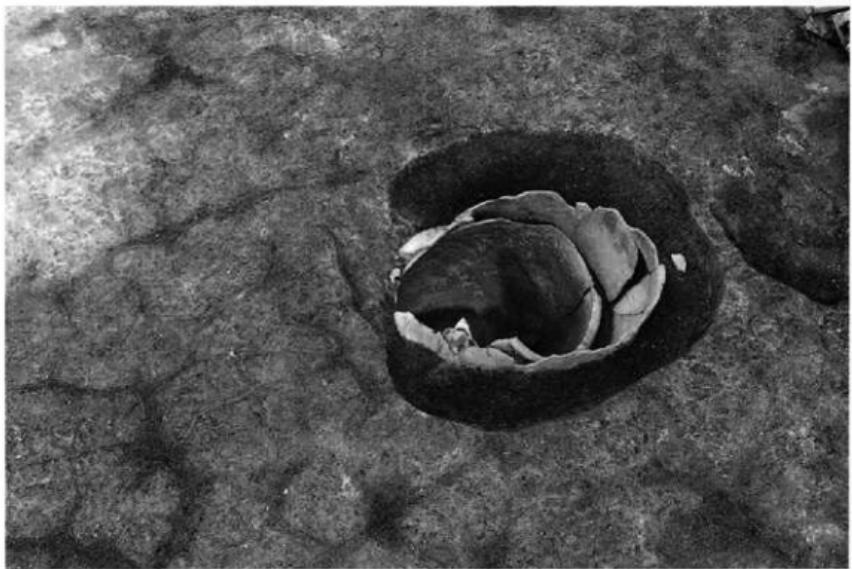
(2) II区25号甕棺墓（西より）



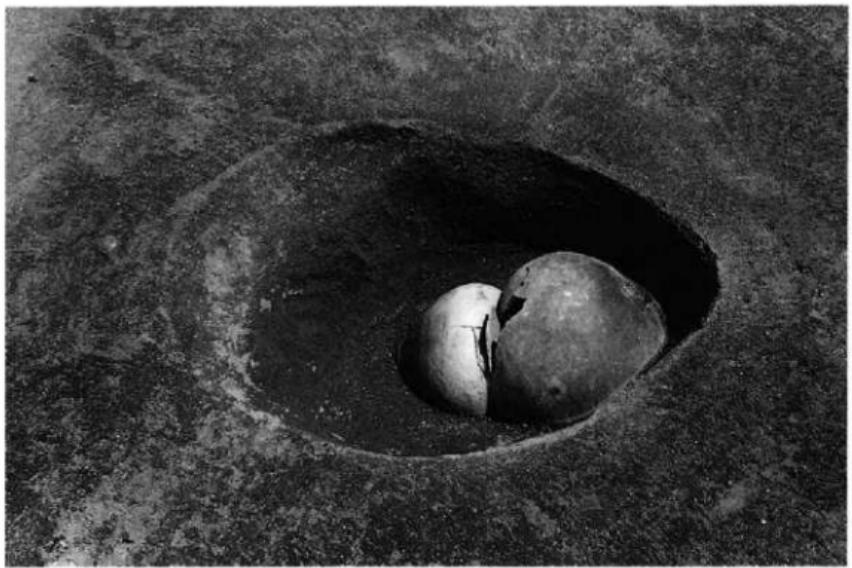
(1) II区19号甕棺墓（西より）



(2) II区26号甕棺墓（西より）



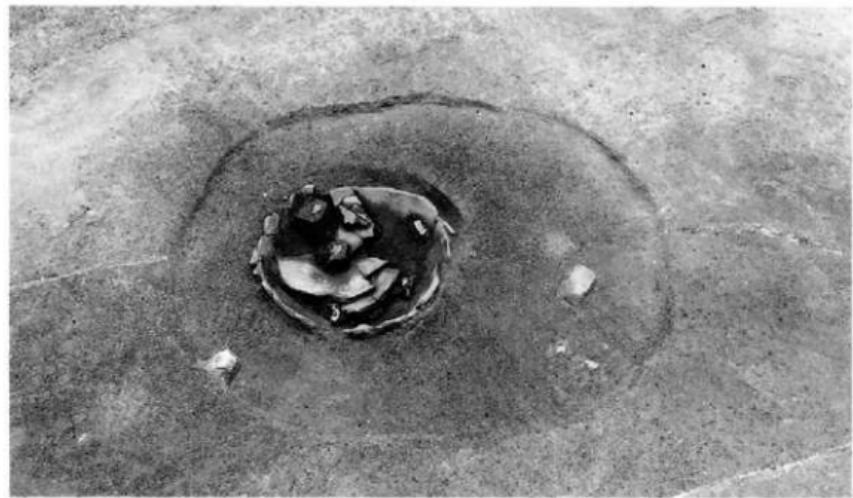
(1) II区3号甕棺墓（西より）



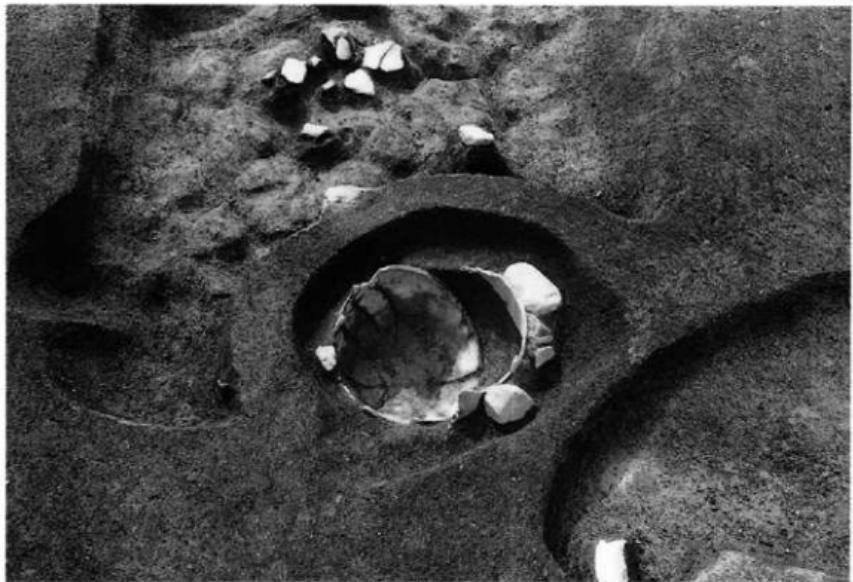
(2) II区29号甕棺墓



(1) II区7号甕棺墓鏡出土状況（南より）



(2) II区7号甕棺墓（北より）



(1) II区8号甕棺墓（東より）



(2) II区10号甕棺墓（東より）



(1) II区27号甕棺墓



(2) II区2号土壤



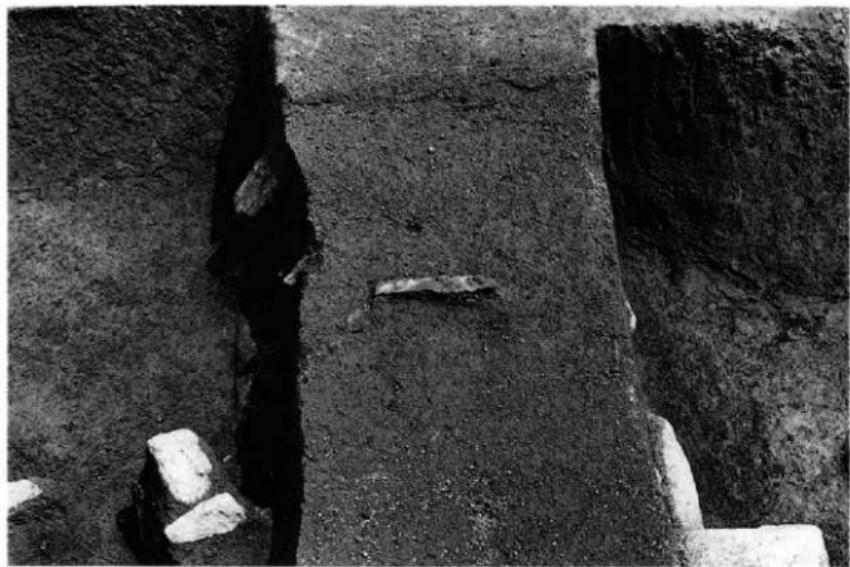
II区15号土壤



II区16号土壤



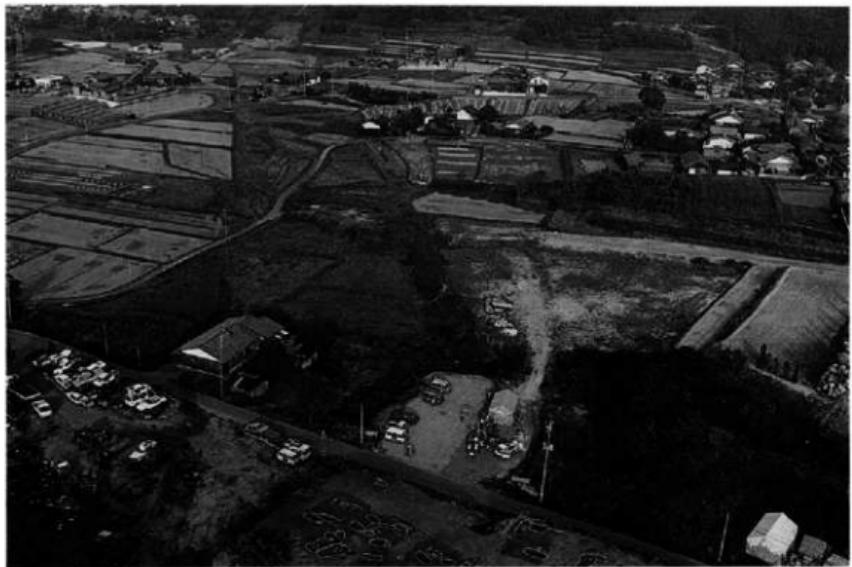
(1) II区19号土塙（北より）



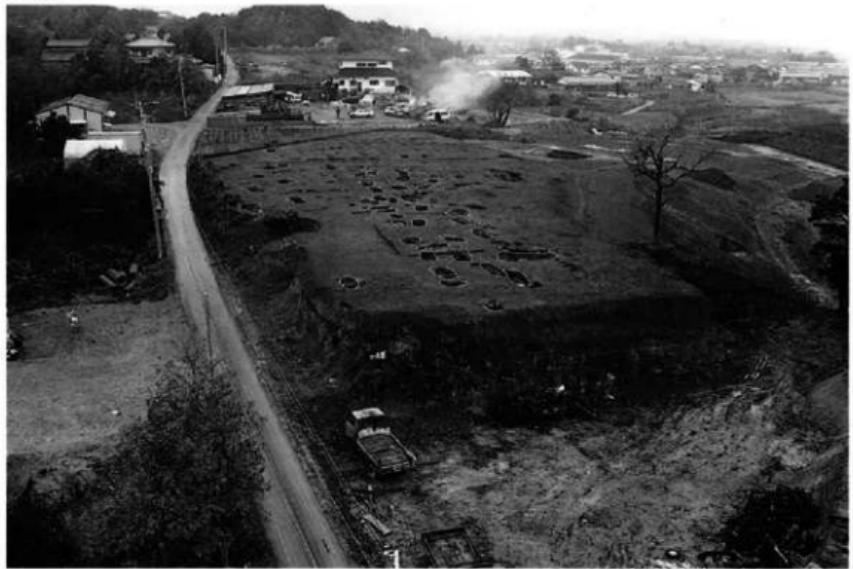
(2) II区19号土塙鉄刺出土状況



(1) II区2号溝（西より）



(2) III区飯氏遺跡群遠景（西より）



(1) III区甕棺列全景（北より）



(2) III区1号甕棺墓（西より）



(1) III区26号甕棺墓（西より）



(2) III区2号甕棺墓（東より）



(1) III区3号甕棺墓（北より）



(2) III区4・5号甕棺墓（東より）



(1) III区6・7・8号甕棺墓（東より）



(2) III区11号甕棺墓（東より）



(1) III区15号甕棺墓（西より）



(2) III区23・24号甕棺墓（西より）



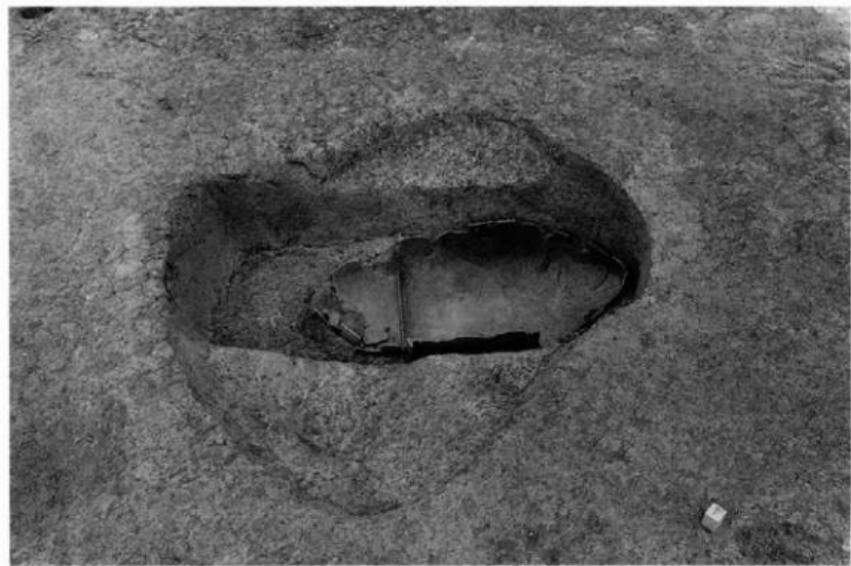
(1) III区34号甕棺墓（西より）



(2) III区37号甕棺墓（南より）



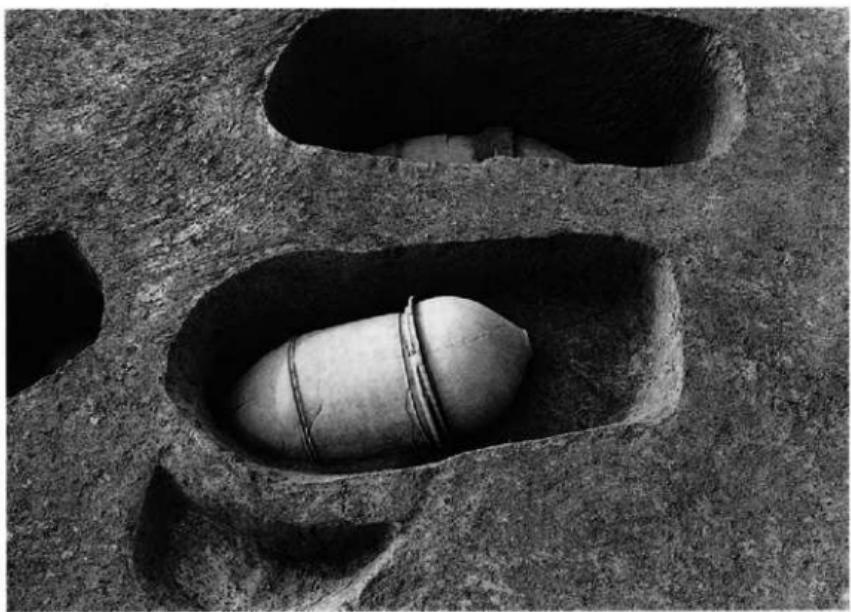
(1) III区32号妻棺墓（西より）



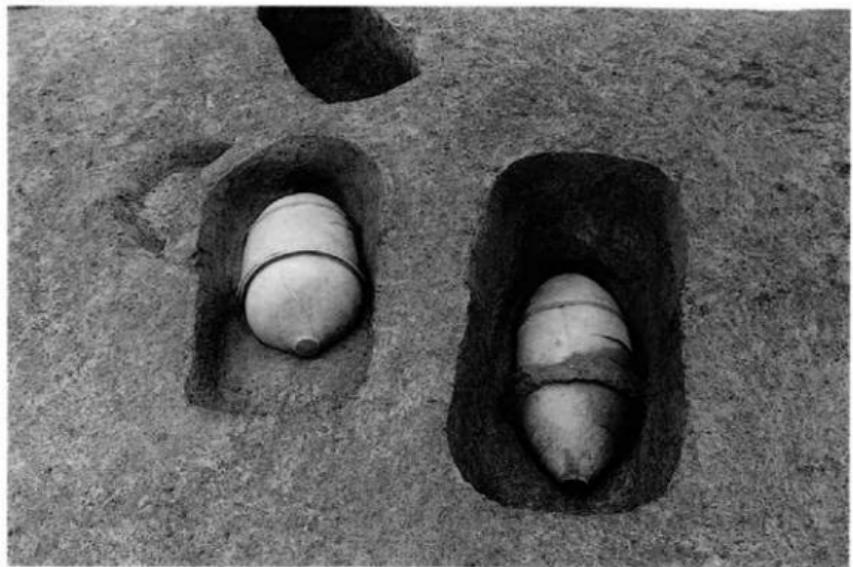
(2) III区35号妻棺墓（西より）



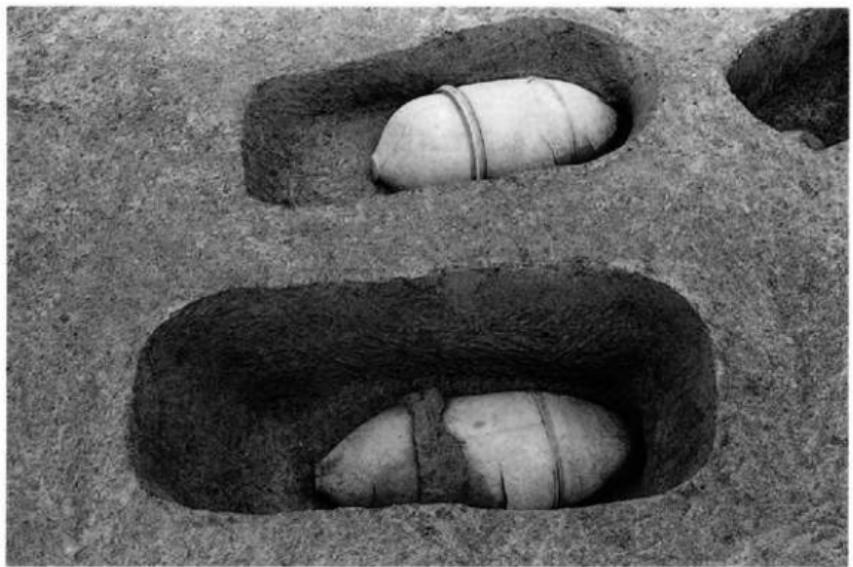
(1) III区61号甕棺墓（西より）



(2) III区16号甕棺墓（東より）



(1) III区16・18号甕棺墓（北より）



(2) III区18号甕棺墓（西より）



(1) III区28号甕棺墓（東より）



(2) III区31号甕棺墓（西より）



(1) III区33号甕棺墓（東より）



(2) III区36号甕棺墓（西より）



(1) III区38号甕棺墓（西より）



(2) III区44号甕棺墓（西より）



(1) III区46号甕棺墓（東より）



(2) III区47号甕棺墓（西より）



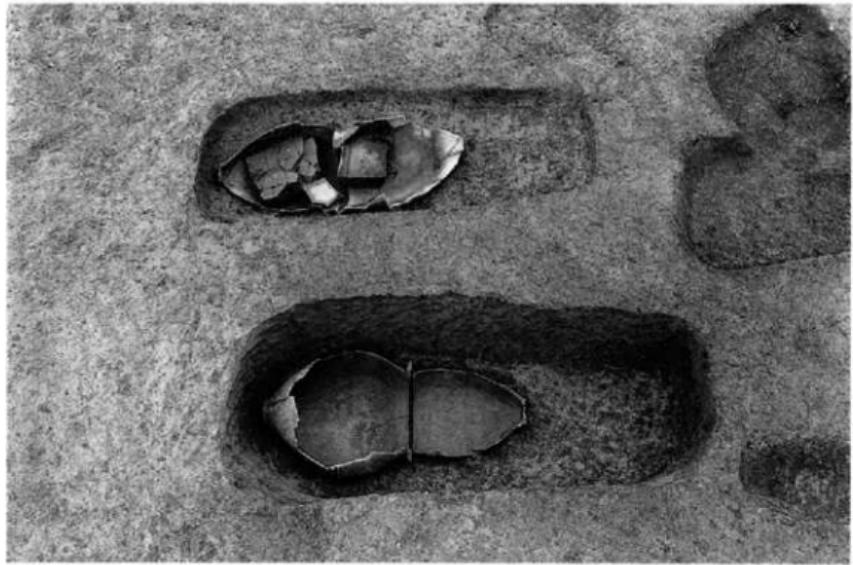
(1) III区50号甕棺墓（東より）



(2) III区19号甕棺墓（東より）



(1) III区20号覆棺墓（北より）



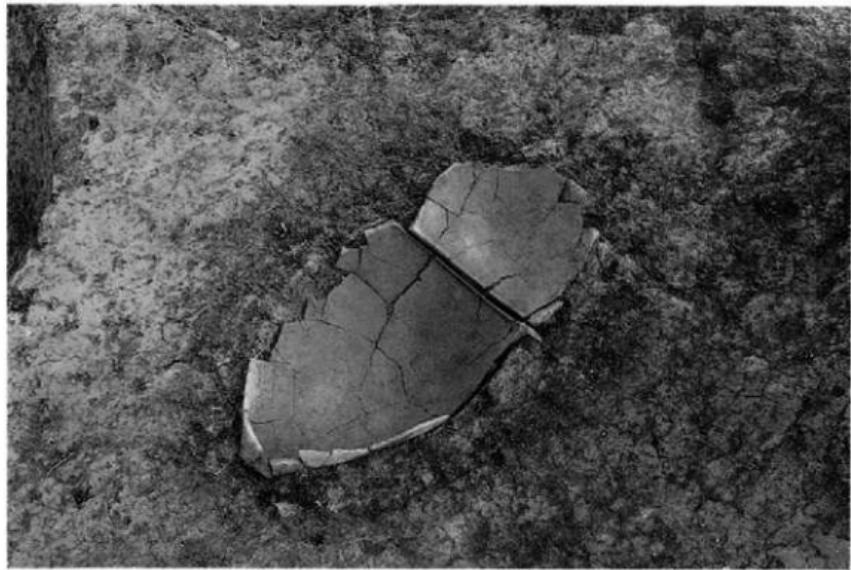
(2) III区21号覆棺墓（南より）



(1) III区25号斐棺墓（東より）



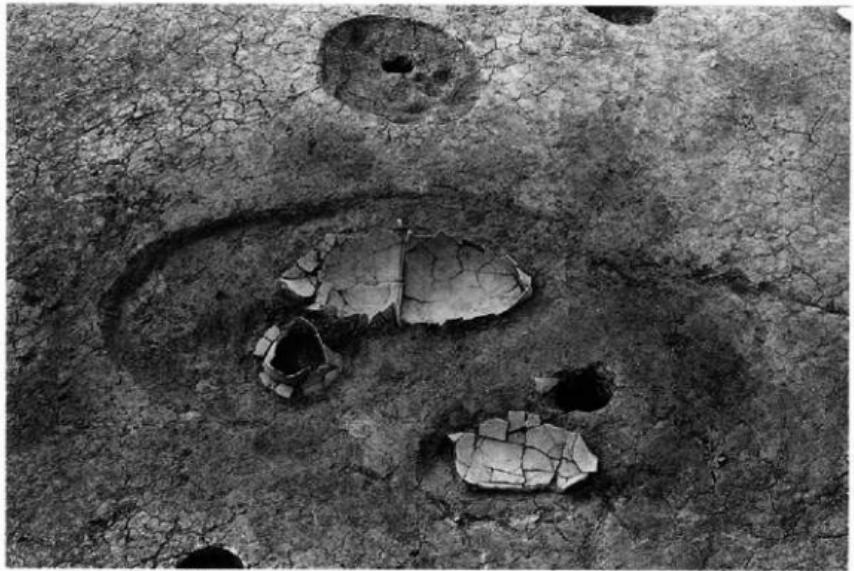
(2) III区30号斐棺墓（東より）



(1) III区39号覆棺墓（東より）



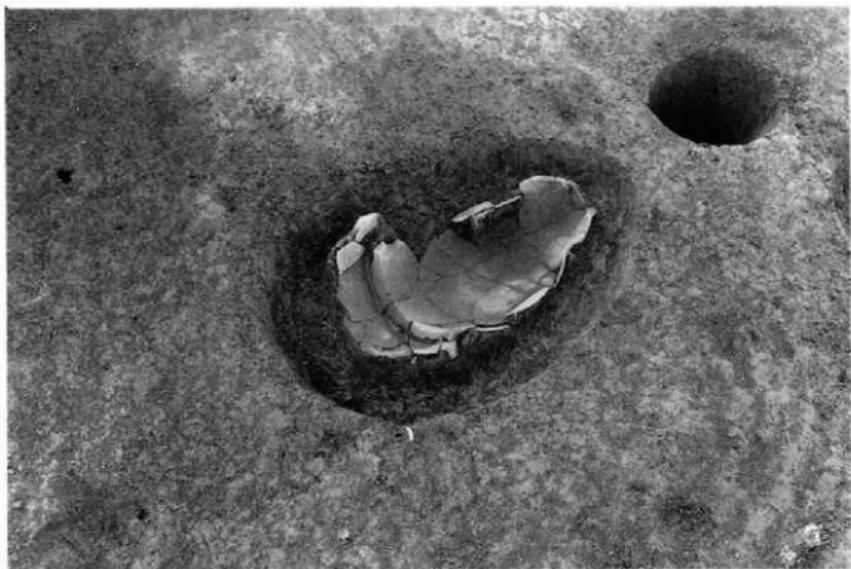
(2) III区40号覆棺墓（東より）



(1) III区41・42号甕棺墓（東より）



(2) III区45号甕棺墓（東より）



(1) III区48号墓（東より）



(2) III区56号墓（南より）



(1) III区63号甕棺墓（東より）



(2) III区64号甕棺墓



(1) III区65号壺棺墓（南より）



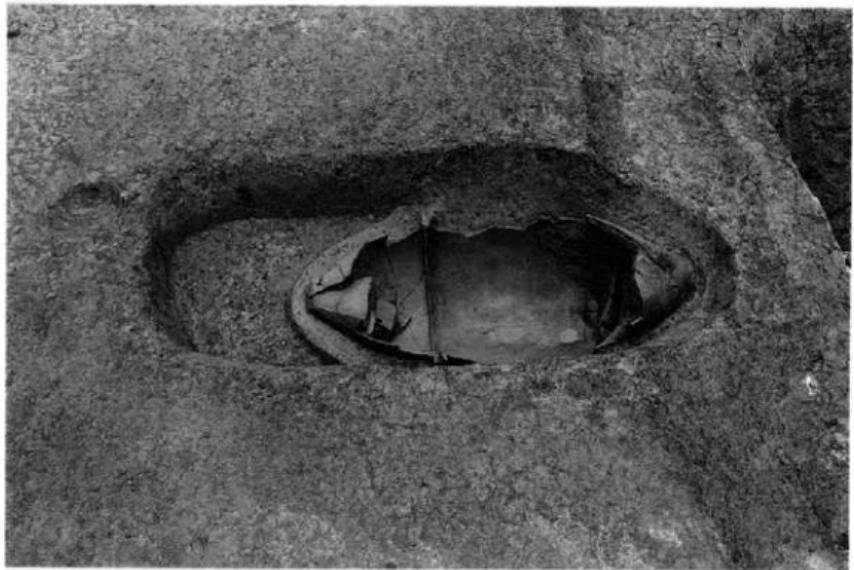
(2) III区51号壺棺墓（西より）



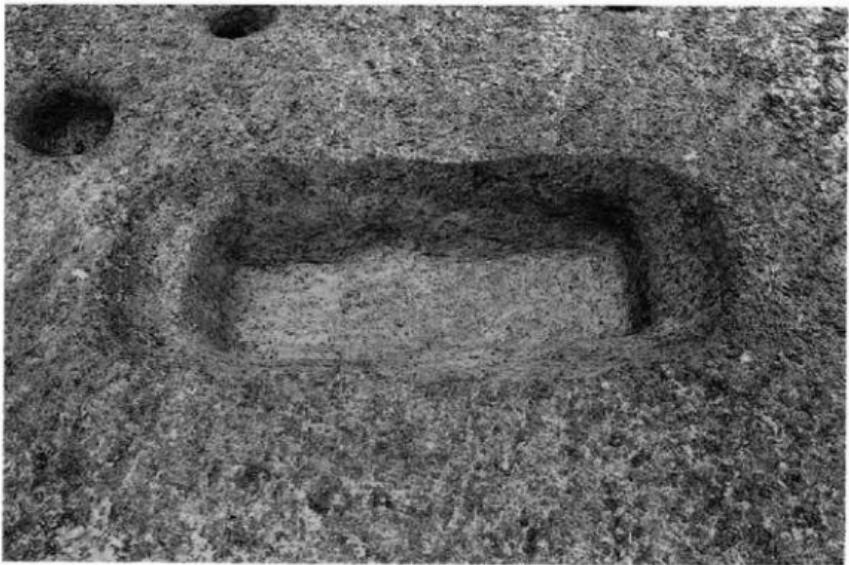
(1) III区58号窯棺墓（西より）



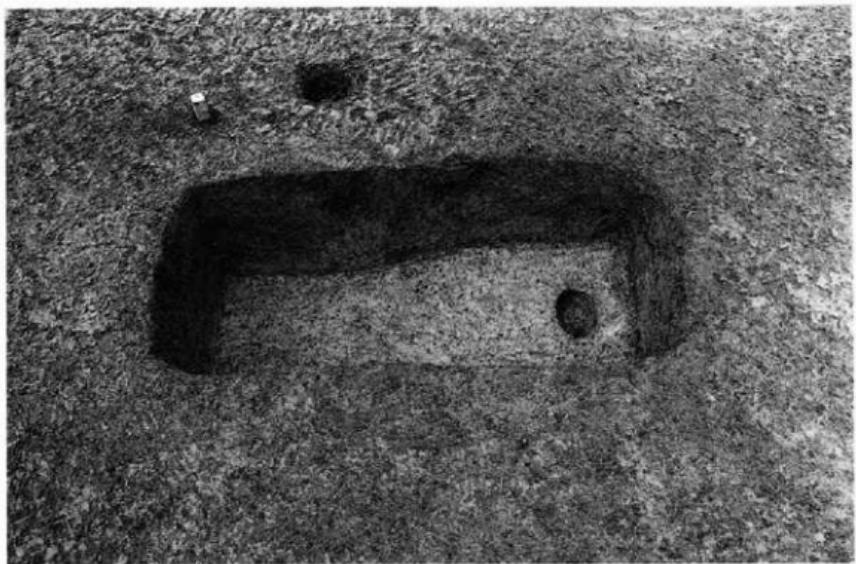
(2) III区60号窯棺墓



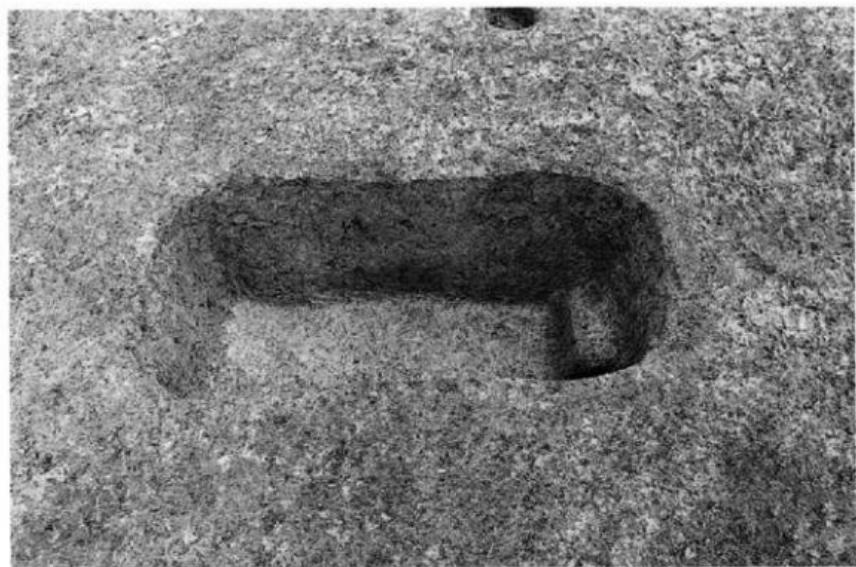
(1) III区49号覆棺墓（西より）



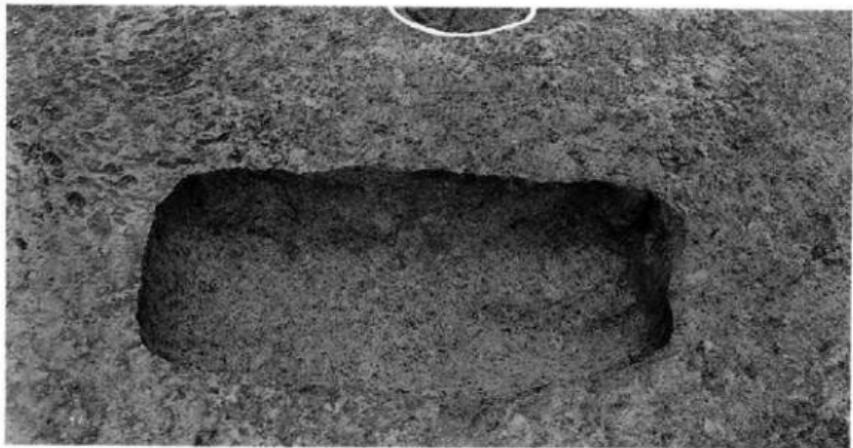
(2) III区1号土塚墓



(1) III区 2号土壤墓



(2) III区 3号土壤墓 (西より)



(1) III区4号土壙墓



(2) III区祭祀遺構列（北より）



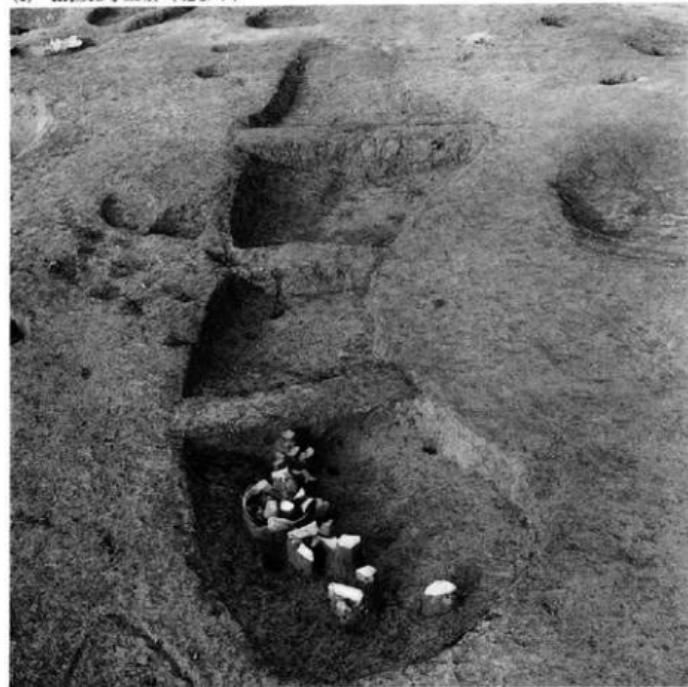
(1) III区1・2号土壤（西より）



(2) III区7号土壤



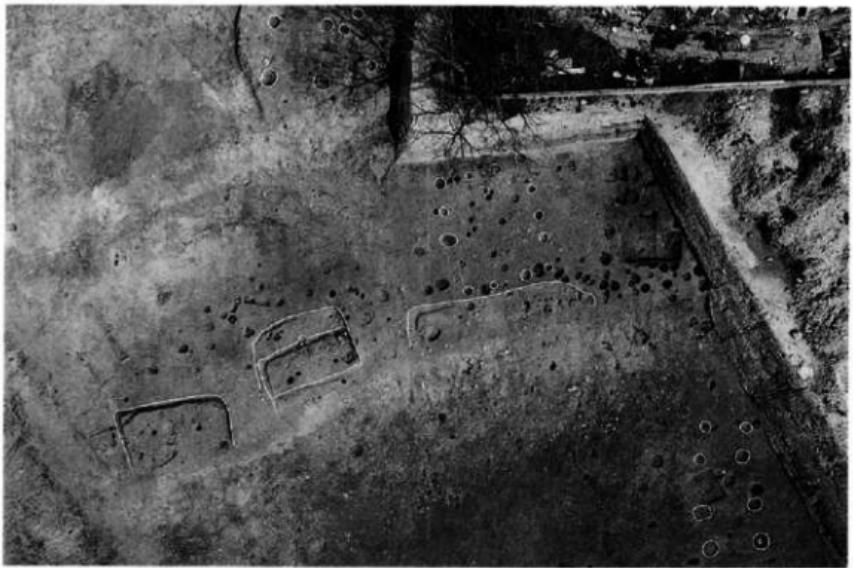
(1) III区18号土壤（北より）



(2) III区17号土壤（南より）



(1) III区 1号住居跡（西より）



(2) III区 2～6号住居跡



(1) III区3号住居路（西より）



(2) III区4・5号住居路（西より）



(1) III区 7号住居跡（西より）



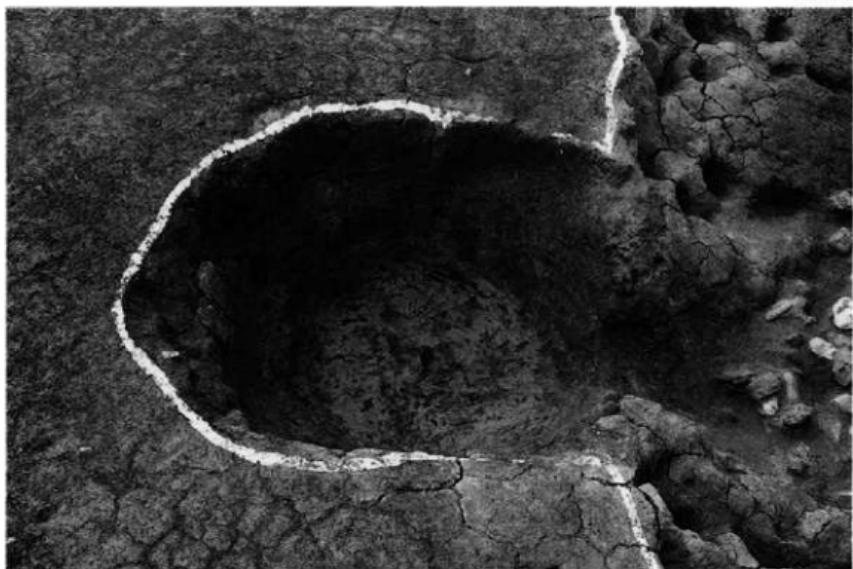
(2) III区 7号住居跡遺物出土状況



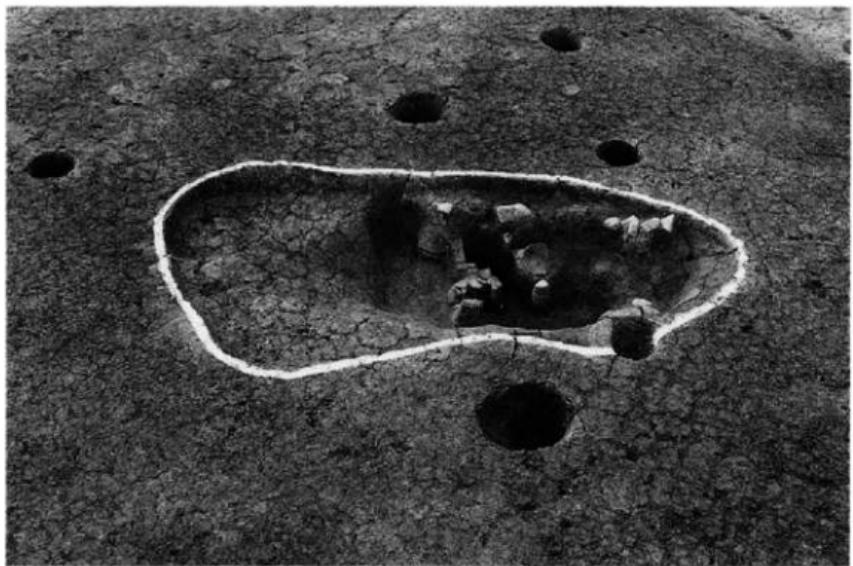
(1) III区9号住居跡（西より）



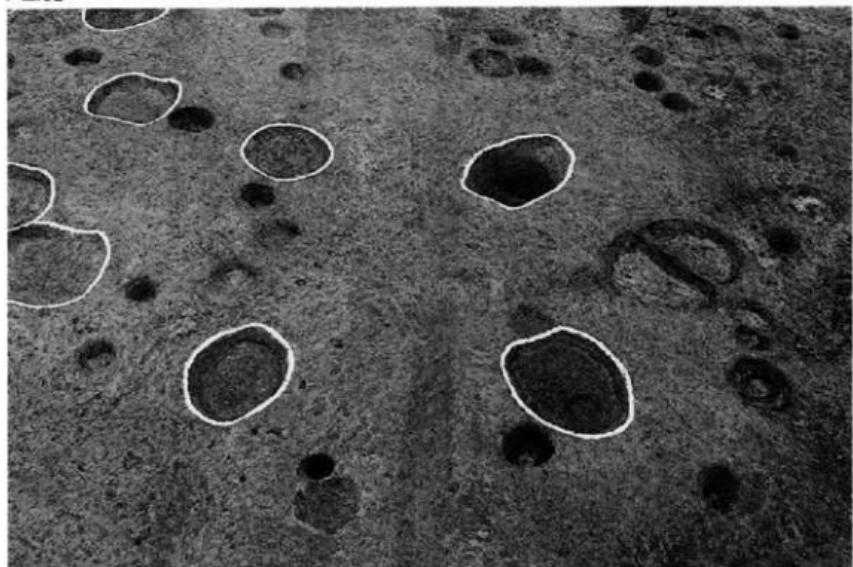
(2) III区10号住居跡（西より）



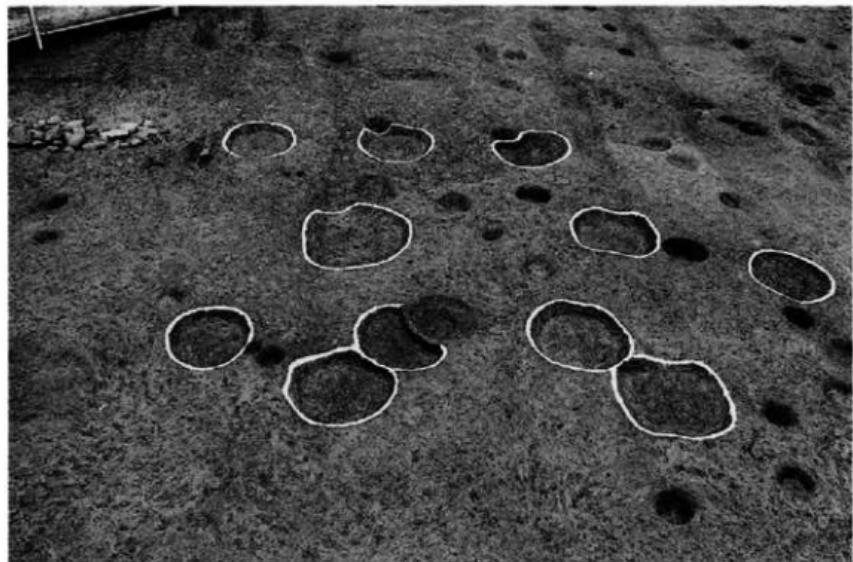
(1) III区27号土壤（東より）



(2) III区30号土壤（東より）



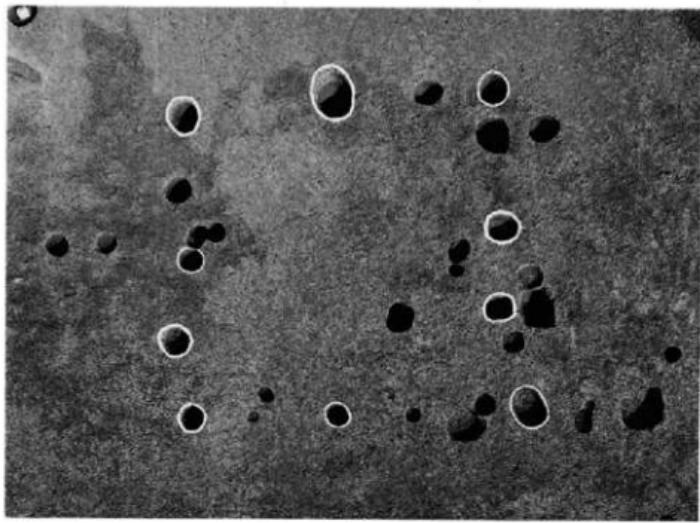
(1) III区 4号掘立柱建物（北より）



(2) III区 5号掘立柱建物



(1) III区11号据立柱建物（西より）



(2) III区14号据立柱建物



(1) III区15号掘立柱建物



(2) III区15号掘立柱建物ピット出土遺物



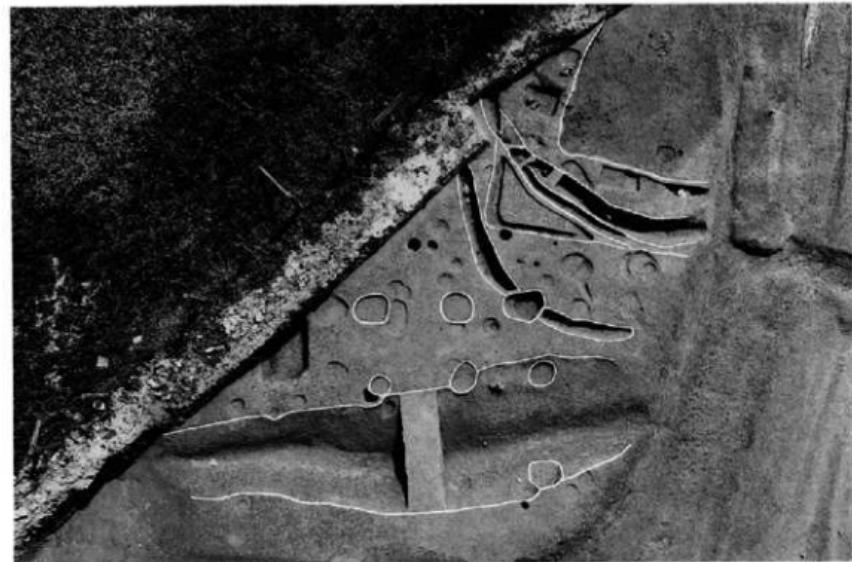
(1) III区 2号井戸（北より）



(2) III区 3号井戸（北より）



(1) III区8・9号溝（北より）



(2) III区7・8号住居跡, 6～9号溝, 11号掘立柱建物



(1) III区 9・10号住居跡, 28号土壤, 12号溝



(2) III区14・15号溝 (東より)



6-2

(1) 20号甕棺下甕



16-1

(3) 28号甕棺上甕



3-1

(2) 16号甕棺



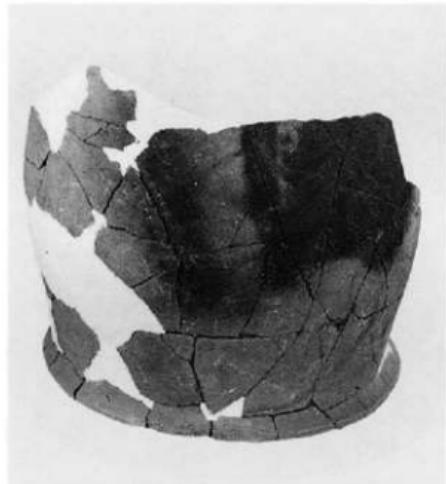
16-2

(4) 28号甕棺下甕



22-2

(1) 11号甕棺下甕



23-1

(2) 26号甕棺上甕



20-2

(3) 9号甕棺下甕



23-2

(4) 26号甕棺下甕



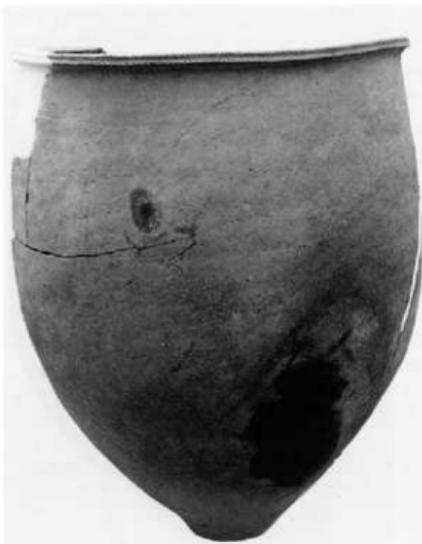
25-1

(1) 3号甕棺上甕



31-2

(2) 7号甕棺下甕



25-2

(3) 3号甕棺



31-3

(4) 27号甕棺下甕



(1) 2号甕棺



(2) 38号甕棺



(3) 8号甕棺上甕



(4) 38号甕棺下甕



58-1

(1) 5号甕棺上甕



104-3

(3) 64号甕棺上甕



58-2

(2) 5号甕棺下甕



104-4

(4) 64号甕棺下甕



(1)

24号
甕棺上
甕



(2)

24号
甕棺下
甕



(3) 57号甕棺



(4) 54号甕棺上
甕



(5) 54号甕棺下
甕



1 … 1号住居跡 2 … 6号住居跡 3 · 4 · 7 ~ 9 … 7号住居跡

5 · 6 … 2号住居跡



1 ~ 7 … 7号住居跡



1 · 2 · 7 号住居跡 3 · 10号住居跡 4 · 27号土壤 5 · 37号土壤
6 · 28号土壤 7 · 30号土壤 8 · 15号掘立柱建物



169-1

1



172-45

2



171-26

3



171-29

5



171-7

6



174-8

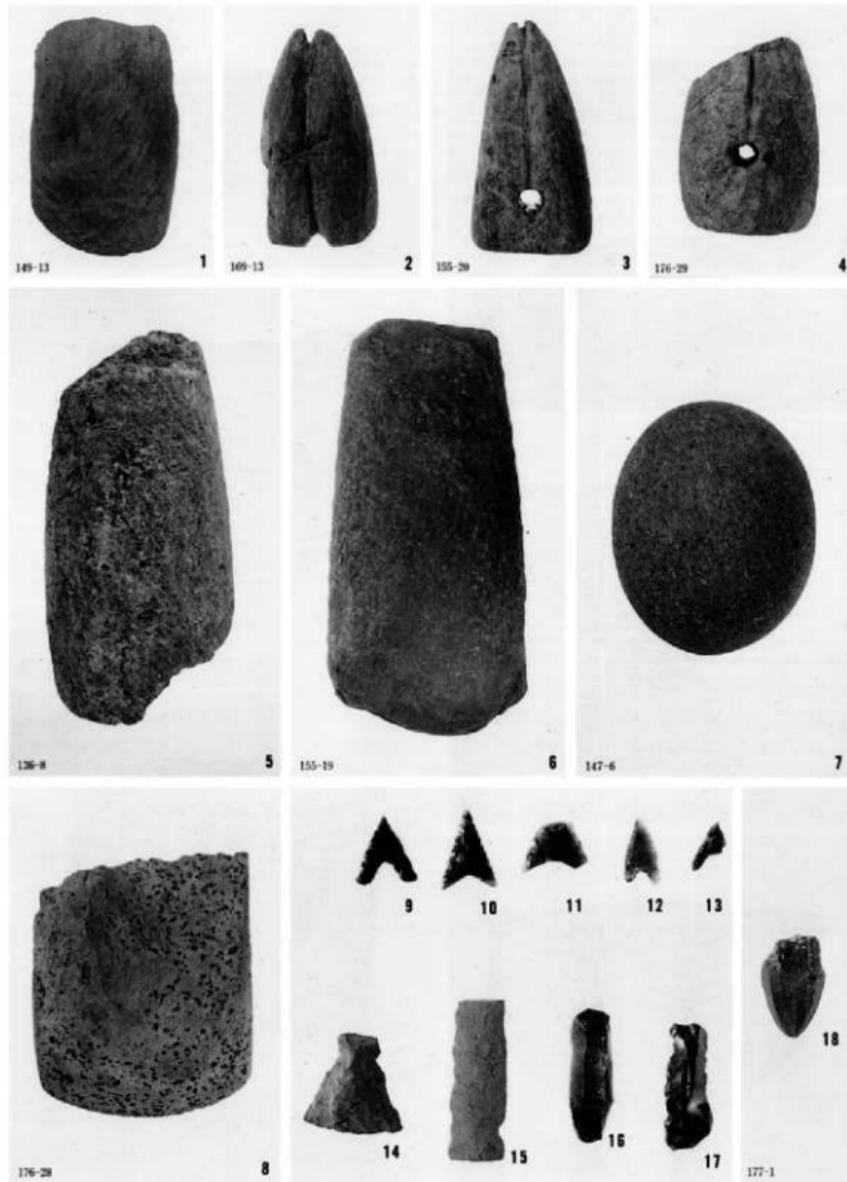
4



173

7

1 … 11号溝 2 … 29号溝 3・5 … 18号溝 4・6 … ピット 7 … SX-1



1…10号住居跡 2…11号溝 3…28号土壤 4・8・14…ピット 5…1号住居跡

6…28号土壤 7…9号住居跡 9…包含層 10・15…遺構検出面 11…遺構面

12…包含層上面 13…27号溝 16…11号溝 17…検出面 18…表土

飯氏遺跡群 5 次調査

本文目次

発掘調査に至るまで	211
遺構と遺物	211
まとめ	229

挿図目次

Fig. 1 倭氏遺跡群 5 次調査区位置図 (縮尺 1/4,000)	212
Fig. 2 5 次調査出土焼棺配置図 (縮尺 1/300)	213
Fig. 3 5 次調査 1・2 号焼棺墓実測図 (1/20)	216
Fig. 4 3・4・5 号焼棺墓実測図 (1/20)	217
Fig. 5 6・7・8 号焼棺墓実測図 (1/20)	218
Fig. 6 9・10 号焼棺墓実測図 (1/20)	219
Fig. 7 11・12 号焼棺墓実測図 (1/20)	220
Fig. 8 1・2 号焼棺実測図 (1/10)	221
Fig. 9 3・4・5 号焼棺実測図 (1/10)	222
Fig. 10 6・7 号焼棺実測図 (1/10)	223
Fig. 11 9・10 号焼棺実測図 (1/10)	224
Fig. 12 11・12 号焼棺実測図 (1/10)	225
Fig. 13 石剣切先実測図 (2/3)	215
Fig. 14 北部九州における弥生土器の様相	230

例 言

本項は福岡市教育委員会が1992年度に実施した倭氏遺跡第5次調査の報告である。本編は調査担当者が編集した。調査によって得られた資料は、福岡市埋蔵文化財センターに本収蔵の予定である。

遺跡略号 I I J - 5 調査番号 9260 調査地 福岡市西区倭氏字上松689-1.690.691、字坂本692.694-1.694-2.695.696-1.696-2.697、字久保田255-4地内 分布地図番号 121:B-2 開発面積8480.93m² 調査面積約2,000m² 調査期間1993年2月15日～1993年2月20日

飯氏遺跡 5次調査

発掘調査に至るまで

5次調査地点は高祖山から西側に派生する低丘陵上に位置する。丘陵頂部の標高は、およそ40mであり、周囲との比高差は約15mである。今回甕棺の分布が確認された丘陵から南西3kmに三雲南小路遺跡を望む。

1993年2月、埋蔵文化財課に造成中、甕棺が見つかったとの知らせが入った。現地では幼稚園の付属施設として自然観察園の工事が行なわれていた。踏査したところ弥生中期の甕棺墓数基が確認されたため、急速発掘調査を実施することになった。発掘調査は、93年2月15日に着手、資料整理は平成五年度である。

調査の組織と構成

調査委託 学校法人 法林学園

笠 泰信

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 同第一係長 飛高憲雄 主任文化財主事 横山邦雄
調査担当 横山邦雄 堀山洋 常松幹雄（整理）

調査補助 古川千賀子（福岡大学大学院生）

調査整理参加者 有村洋一郎 池田由美 衛藤美奈子 加藤成一 坂田美佐子 柴田タツ子
柴田常人 副田博記 曽田洋志 土谷貴志 土斐崎孝子 德安勉 烏井原良治
中村昭市 平野義雄 藤野真紀 船越恒人 堀ウメ子 堀本哉四郎 松井フユ子
松元恵美 松本藤子 門司弘子 百武義隆 保田清隆 吉川順岳

なお調査にあたって小林義彦氏、整理では松村道博氏の協力を得た。

遺構と遺物

今回の調査で明らかになった遺構は、甕棺墓12基である。発見順に番号をつけたが8号甕棺は、遺構とするには不明瞭である。遺構検出は丘陵の形状に沿って、東西70m、幅30mの範囲で行なった。旧況は果樹園だったそうで、丘陵西端の1号甕棺、5号甕棺と9号甕棺とのあいだで40m以上にわたって甕棺墓が見られなかつたのは果樹園の整地に伴う削平がなされたためであろう。駄目おしの際、丘陵の南縁部で10号甕棺墓、12号甕棺墓が検出されたが、これらは立地条件から削平を免れたもので、本来は丘陵頂部から先端部まで同様に分布していたと推定される。



Fig. 1 箕氏遺跡群 5次調査区位置図 (縮尺1/4,000)

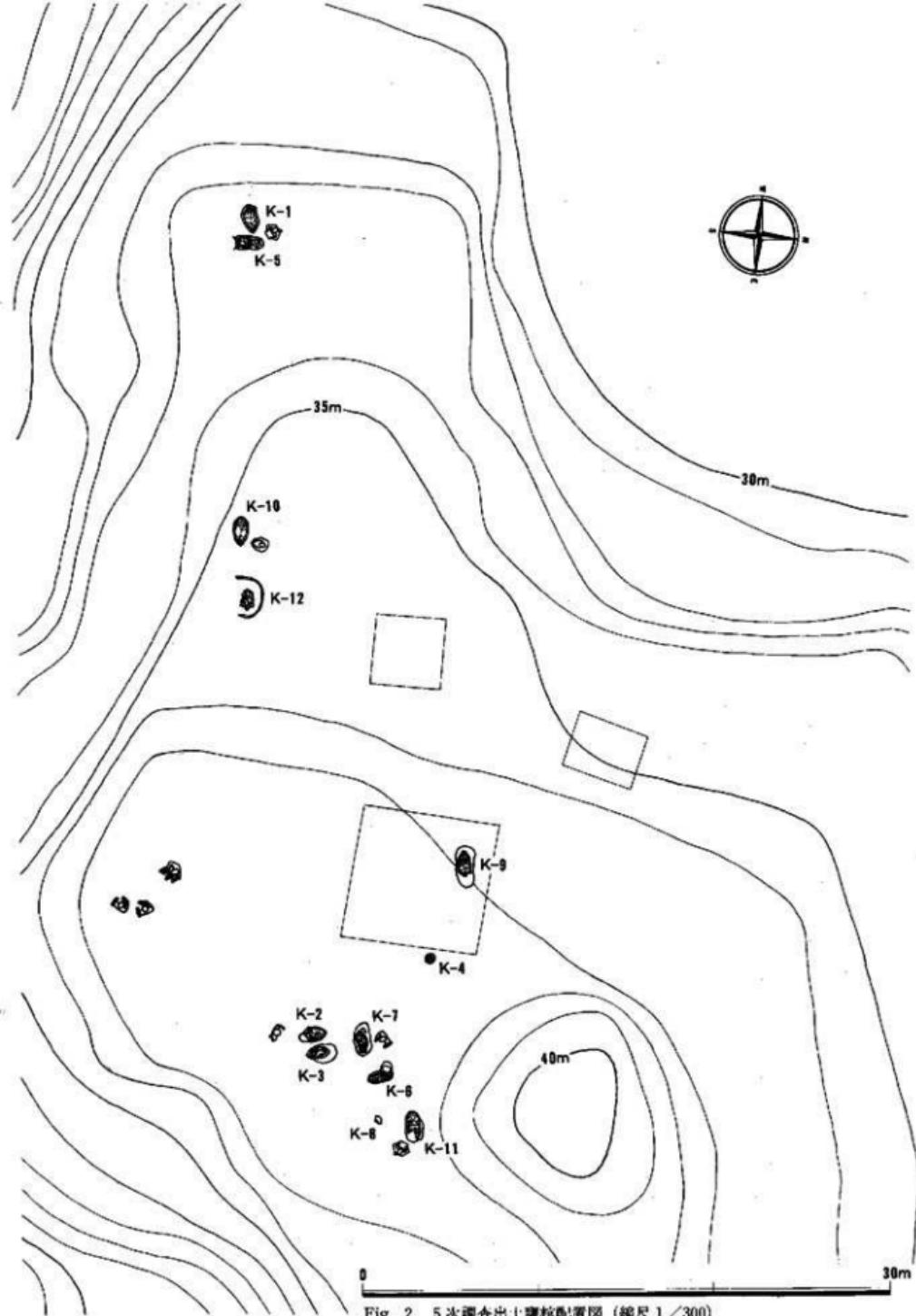


Fig. 2 5次調査出上棲植配置図 (縮尺 1 / 300)

1号窓棺墓 丘陵の最西端で検出された。東西方向を向き、西側に開口する。上半部は削平を受けている。上窓には鉢形土器、下窓は菱形土器をもちいている。

2号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。南北方向を向き南側に開口する。上半部は削平され、上窓底部付近は擾乱を受けている。上窓には鉢形土器、下窓は菱形土器をもちいている。接合部には黒灰色の粘土が充てられている。遺構の断面から判断すると墓壙を掘り、さらに接合部の突出する個所を掘り下げたと考えられる。遺体がこの地で棺に入れられたかどうかは不明である。

3号窓棺墓 丘陵の頂部で、2号窓棺墓に東接して検出された。東西方向を向くが2号窓棺墓と開口部は入れ違いになっている。上半部は削平を受けている。上窓、下窓とともに菱形土器をもちいている。

4号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。東西方向を向き、東側に開口する。上半部は削平を受けている。下窓は口縁部を打ち欠いた菱形土器を使っている。上窓は発掘時は状況が不明であった。上器洗いの段階で壇内に転落した鉢形土器があったので、上窓の有力候補とする。

5号窓棺墓 丘陵の西端で検出された。南北方向を向き、北側に開口する。ともに菱形土器をもちいている。上半部は削平され、下窓の底部付近は擾乱を受けている。下窓の中央部で石剣が切先を西南に向けた状態で出土した。

6号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。南北方向を向き、上窓、下窓ともに菱形土器をもちいている。上窓、下窓の区別が難しい。ここでは便宜的に北側を上窓、南側を下窓とする。上半部は削平され、下窓の西側付近は擾乱を受けている。上窓の口縁部で石剣が切先を東北に向けた状態で出土した。

7号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。東西方向を向き東側に開口する。上半部は削平を受けている。上窓、下窓ともに菱形土器をもちいている。

8号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。本来成人用の窓棺墓が位置していた可能性があるが現況は擾乱および削平のため復元できない。

9号窓棺墓 丘陵頂部のやや北寄りで検出された。東西方向を向き、東側に開口する。上半部は削平を受けている。上窓には鉢形土器、下窓は菱形土器をもちいている。

10号窓棺墓 丘陵頂部よりやや西寄りで検出された。東西方向を向き、西側に開口する。上半部は削平を受けている。上窓には菱形土器、下窓は菱形土器をもちいている。

11号窓棺墓 丘陵の頂部で検出された。東西方向を向き、西側に開口する。上半部は削平を受けている。上窓、下窓ともに菱形土器をもちいている。

12号窓棺墓 丘陵の頂部よりやや西寄りで検出された。東西方向を向き東側に開口する。上半部は削平され、上窓付近は擾乱を受けている。上窓には鉢形土器、下窓は菱形土器をもちいている。墓壙の掘方は不明瞭で図示したのは便宜的なものである。

番号	合口型式	埋置方位	埋置角度	挿図・図版番号
1号甕棺墓	接口式	N-77°-E	ほぼ水平	Fig.3、PL.70
2号甕棺墓	呑口式	N-14°-W	-2°	Fig.3、PL.70
3号甕棺墓	接口式	N-22°-W	18°	Fig.4、PL.71
4号甕棺墓	接口式	N-97°-E	70°	Fig.4、PL.73
5号甕棺墓	接口式	N-6°-W	4°	Fig.4、PL.73
6号甕棺墓	接口式	N-20°-W	ほぼ水平	Fig.5、PL.73
7号甕棺墓	接口式	N-66°-E	28°	Fig.5、PL.73
8号甕棺墓		欠番		Fig.5、PL.73
9号甕棺墓	接口式	N-78°-E	12°	Fig.6、PL.74
10号甕棺墓	接口式	N-91°-W	-2°	Fig.6、PL.74
11号甕棺墓	接口式	N-87°-E	3°	Fig.7、PL.75
12号甕棺墓	接口式	N-87°-E	不明	Fig.7、PL.75

飯氏遺跡5次調査出土甕棺墓一覧

棺内出土の遺物

石剣先端（5号甕棺）下甕の棺底から出土した。切損現存長6.5cm、身幅は広い部分で3.2cmを測る。表面に研磨痕が観察できる。硬くて緻密な剥離型に富む石材（ホルンフェルス？）を用いている。

石剣先端（6号甕棺）接口部に近い甕の棺底から出土したが埋置角度は殆どなく、どちらか頭位とも決めかねる。切損現存長1.5cm、身幅は広い部分で1.7cmを測る。先端部を欠き、磨滅しているため頭は不明瞭である。石材不明。

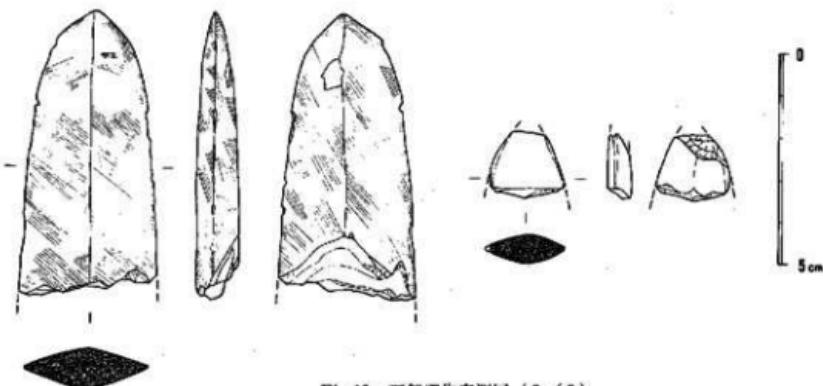


Fig.13 石剣切先実測図（2／3）

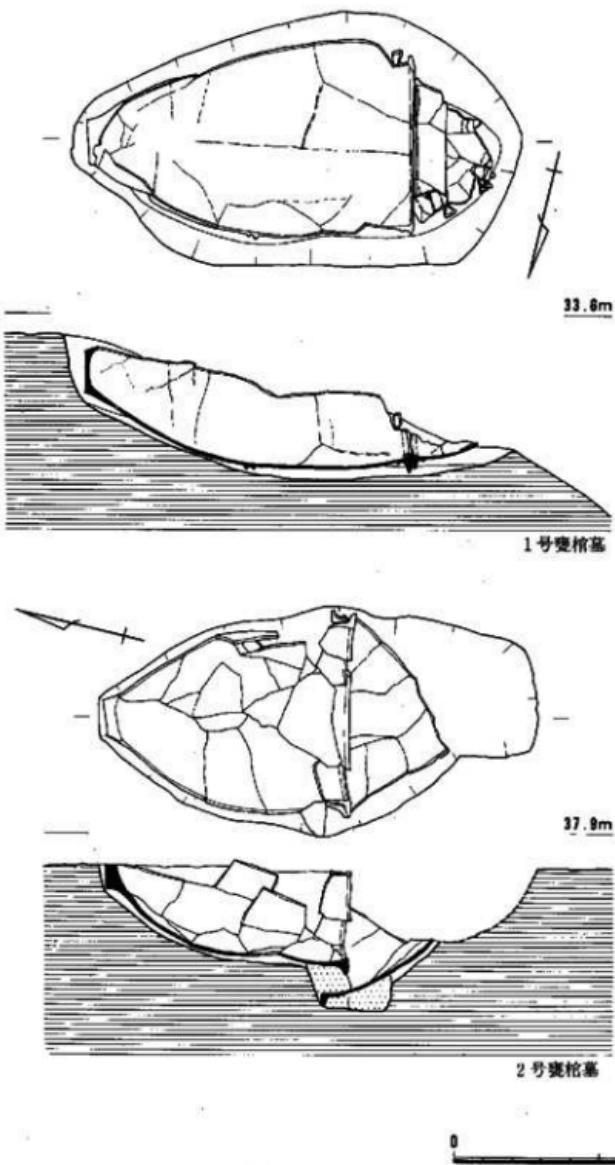


Fig. 3 5次調査 1・2号墳棺墓実測図 (1/20)

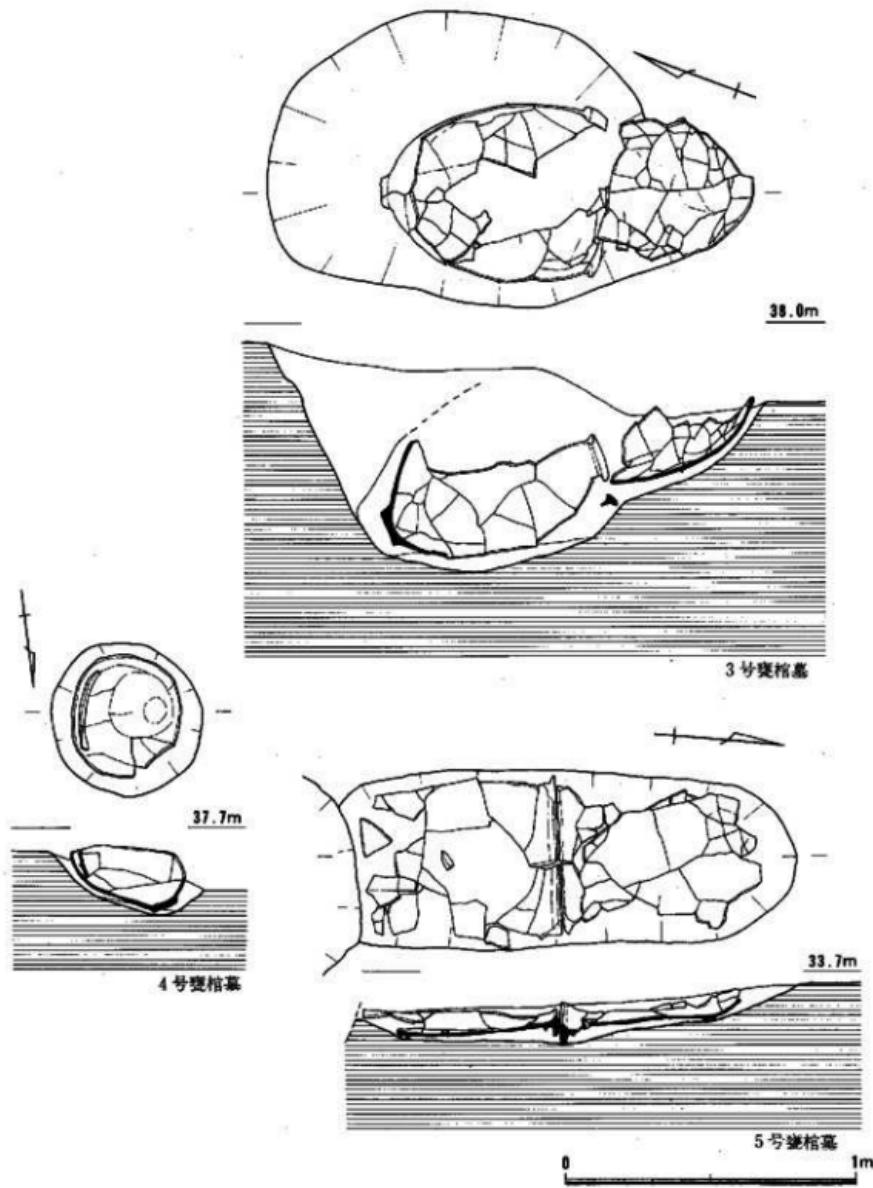


Fig. 4 3·4·5号葬棺墓実測図 (1/20)

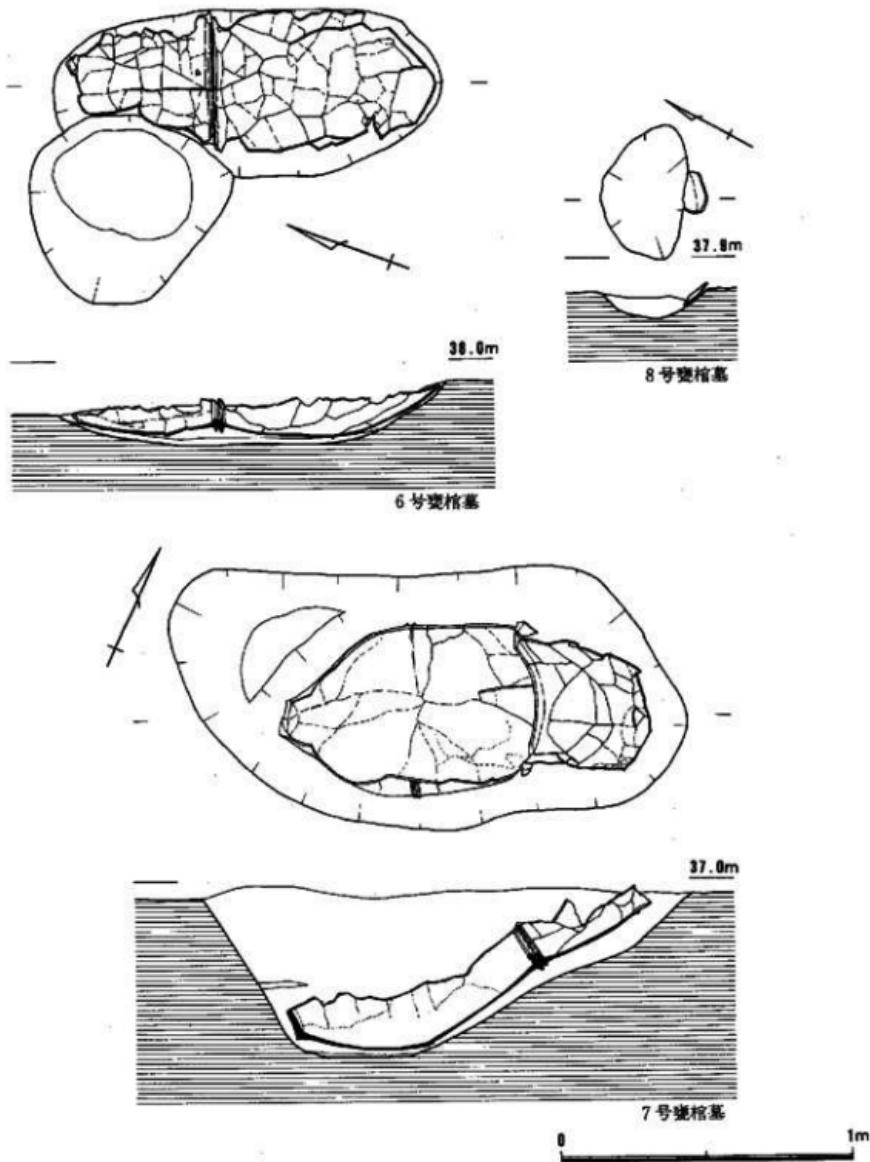
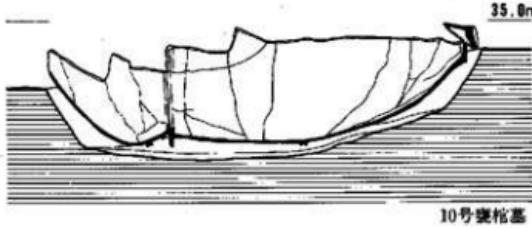
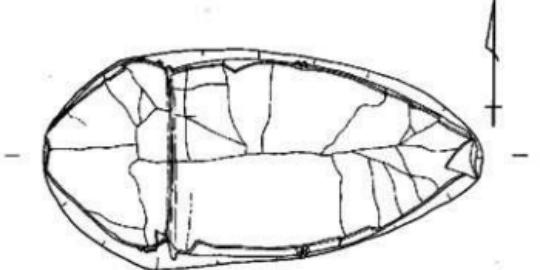
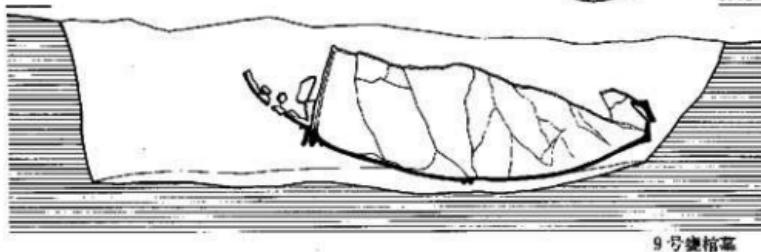
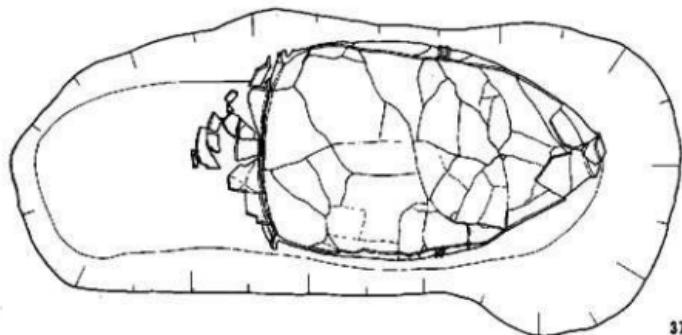


Fig. 5 6 · 7 · 8 号墓剖面图 (1/20)



0 1m

Fig. 6 9·10号壳棺墓实测图 (1/20)

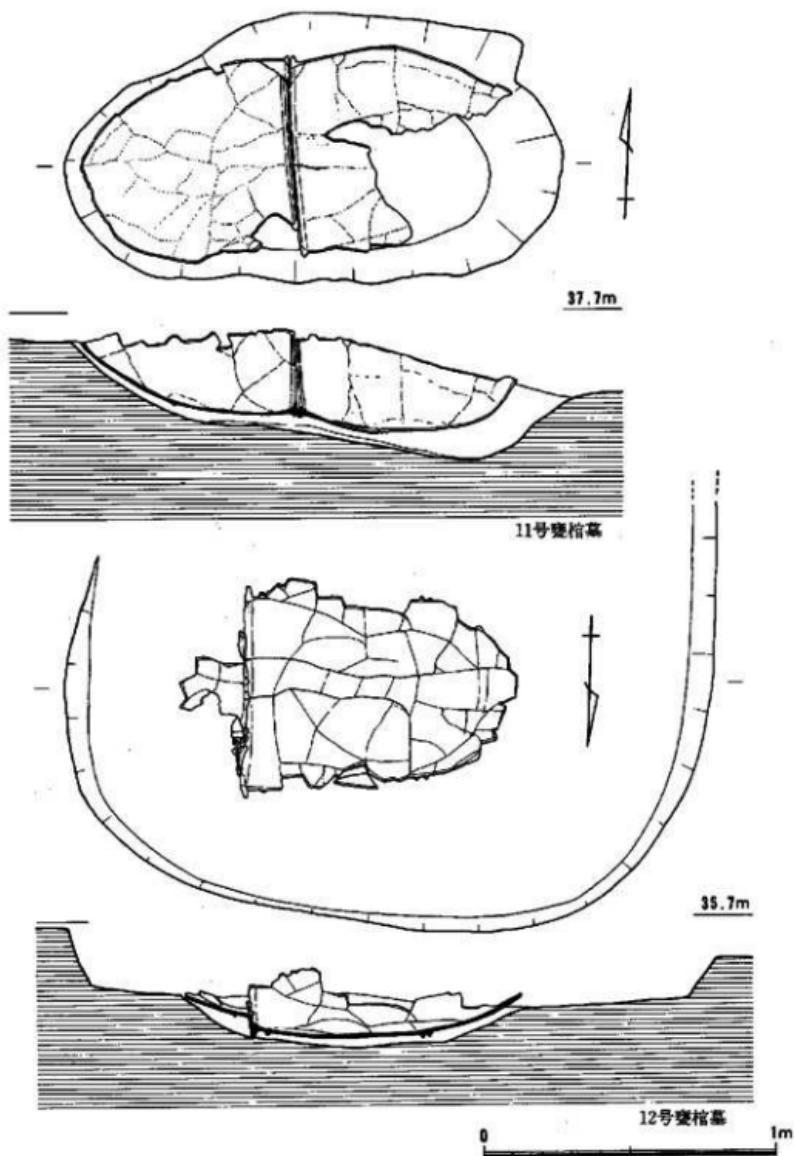


Fig. 7 11・12号斐棺墓実測図 (1/20)

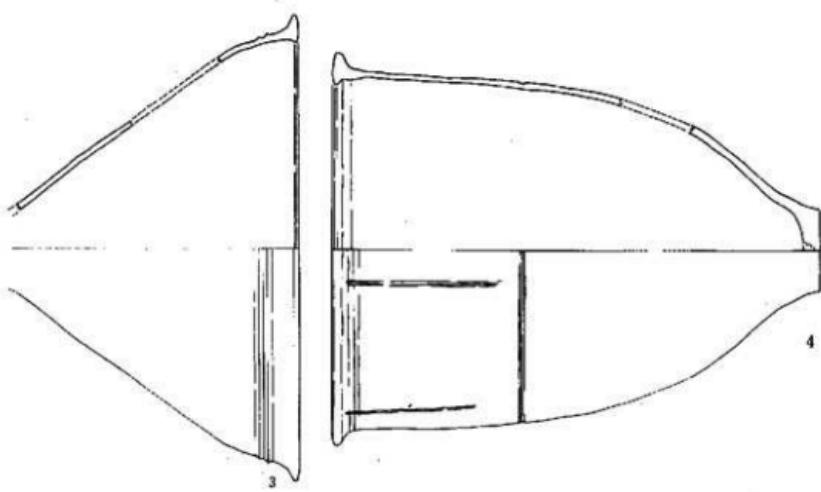
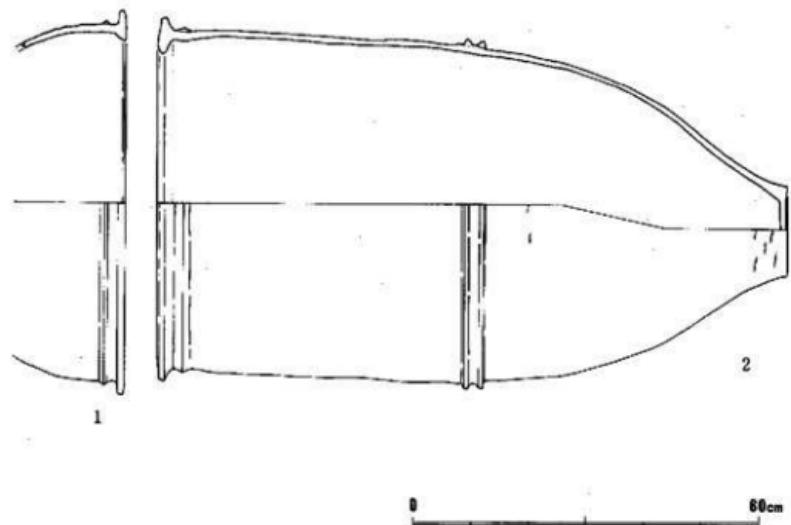


Fig. 8 1・2号艦実測図 (1/10)

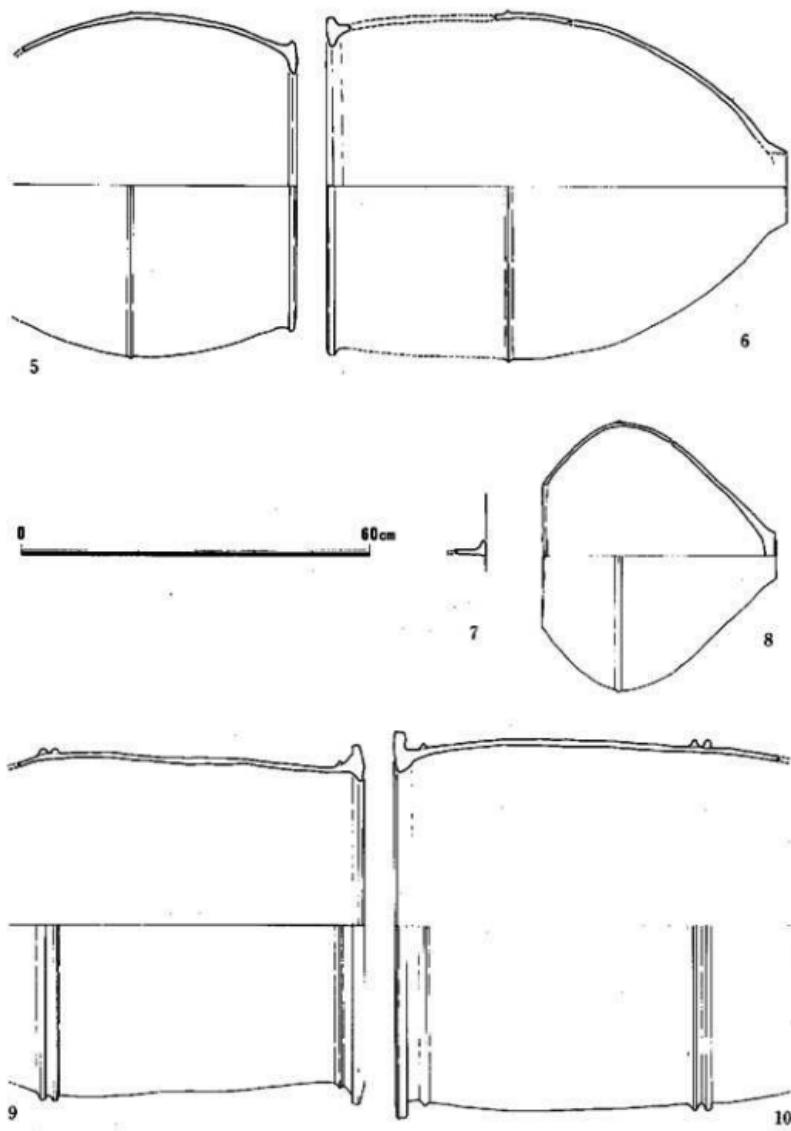
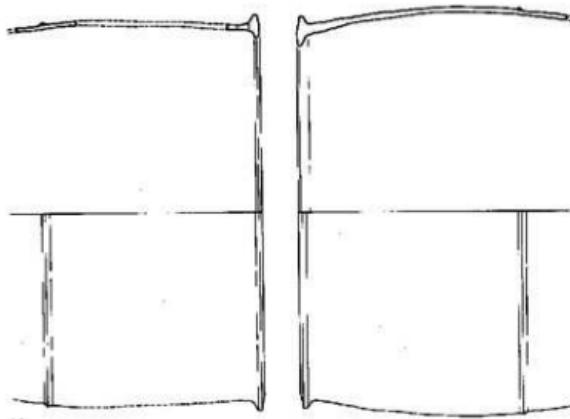


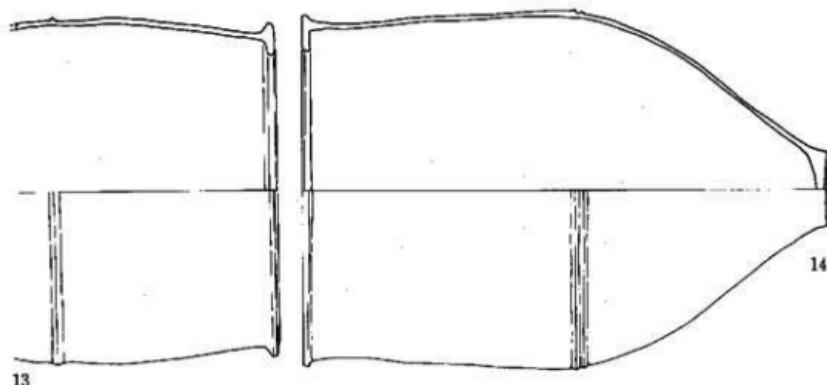
Fig. 9 3·4·5号竪棺実測図 (1/10)



11

12

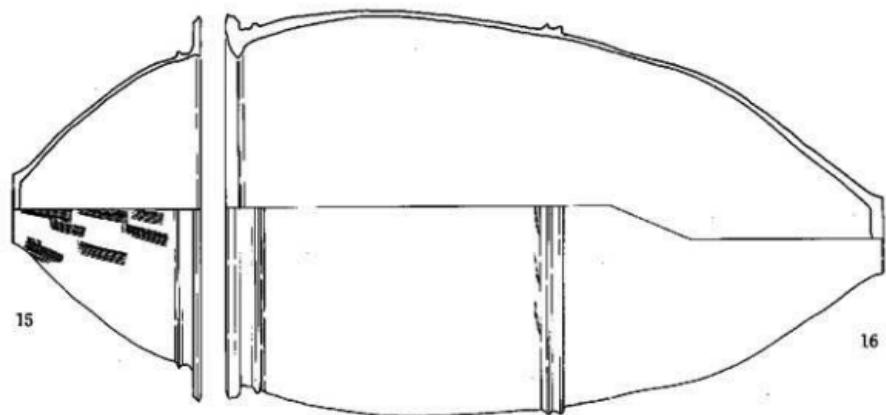
0 60cm



13

14

Fig.10 6·7号腰椎夹洞图 (1/10)



0 60cm

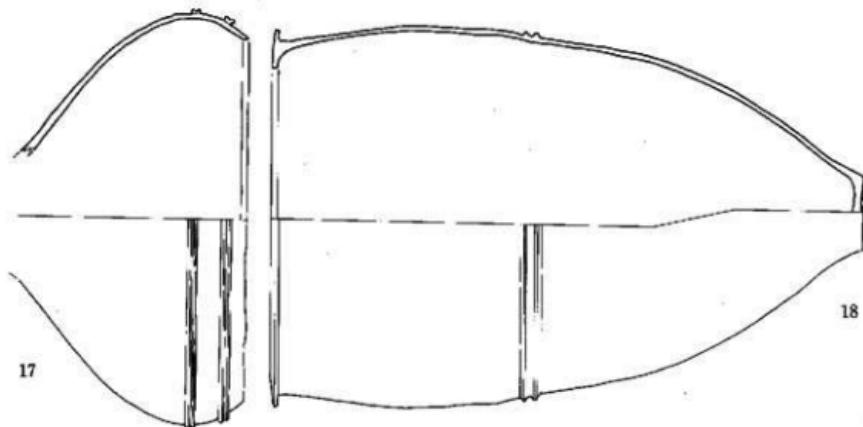
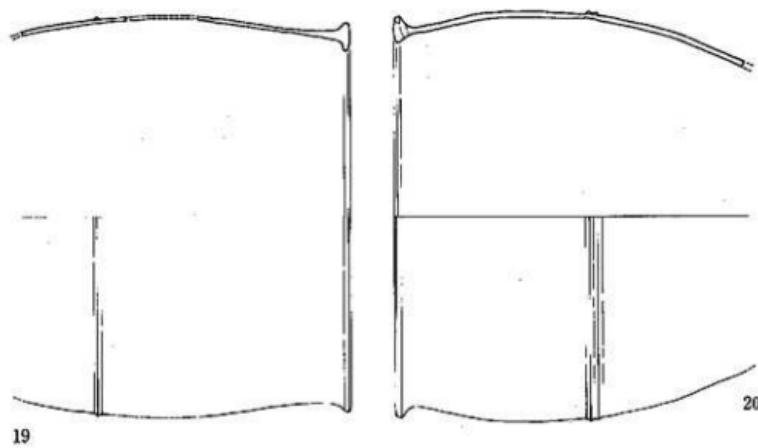


Fig.11 9・10号麦棺実測図 (1/10)



0 80cm

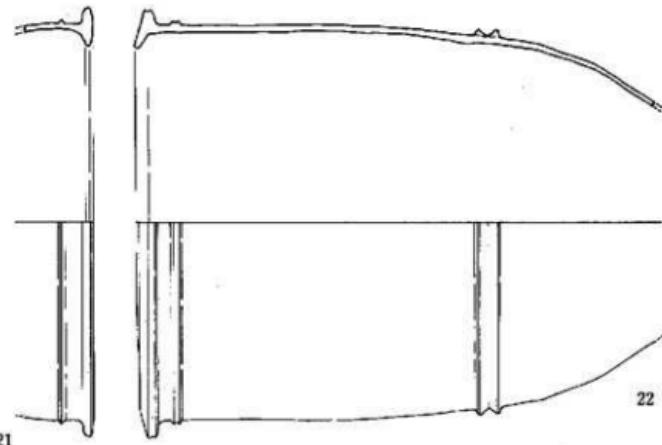


Fig.12 11·12号棊盤測図 (1/10)

番号	形式	法量	胎土	色調	挿図・図版
1号上甕	鉢形土器	復原口径 (外)66cm (内)55.4cm	石英・長石粒を含む	(表)明赤褐色2.5YR 5/8 (裏)褐灰色5YR 4/1	Fig. 8
1号下甕	甕形土器	復原口径 (外)63cm (内)50.8cm 器高109cm底径15.6cm	石英・長石粒を含む	(表)明赤褐色2.5YR 5/8 (裏)明赤褐色2.5YR 5/8	PL.76
2号上甕	鉢形土器	復原口径 (外)約80cm (内)70.4cm	石英・長石粒を含む	(表)橙色5YR 6/6 (裏)橙色5YR 6/6	Fig. 8
2号下甕	甕形土器	復原口径 (外)69cm (内)58.4cm 器高84cm底径14cm	石英・長石粒を含む	(表)にぶい橙色5YR 7/3 (裏)にぶい橙色5YR 7/3	
3号上甕	甕形土器	復原口径 (外)49.6cm (内)38cm 胴部最大径59.3cm	石英・長石粒を含む	(表)橙色5YR 6/6 (裏)橙色5YR 6/6	Fig. 9
3号下甕	甕形土器	復原口径 (外)59cm (内)48.6cm 器高78cm底径12.3cm	石英・長石粒を含む	(表)赤褐色2.5YR 4/4 (裏)橙色2.5YR 6/8	PL.76
4号上甕	鉢形土器?	復原不可	石英・長石粒を含む	(表)浅黄橙色10YR 8/3 (裏)灰白色10YR 8/2	Fig. 9
4号下甕	甕形土器	復原口径 底径8.0cm	石英・長石粒を含む	(表)にぶい橙色5YR 7/3 (裏)にぶい橙色7.5YR 7/3	
5号上甕	甕形土器	復原口径 (外)61cm (内)49.6cm	石英・長石粒を含む	(表)赤褐色10R 5/4 (裏)赤褐色10R 5/4	Fig. 9
5号下甕	甕形土器	復原口径 (外)67.6cm (内)53.4cm	石英・長石粒を含む	(表)浅黄橙色10YR 8/3 (裏)橙色7.5YR 6/8	PL.76
6号上甕	甕形土器	復原口径 (外)67.6cm (内)59.6cm	石英・長石・黒色の 細粒を含む	(表)にぶい橙色5YR 7/4 (裏)にぶい橙色5YR 7/3	Fig.10
6号下甕	甕形土器	復原不可	石英・長石粒を含む	(表)にぶい橙色7.5YR 7/4 (裏)にぶい橙色7.5YR 7/4	
7号上甕	甕形土器	復原口径 (外)58cm (内)46.6cm	石英・長石粒を含む	(表)にぶい橙色7.5YR 7/3	Fig.10
7号下甕	甕形土器	復原口径 (外)60.8cm (内)50~51cm 底径12.8cm	石英・長石粒を含む	(表)明赤褐色2.5YR 5/6 (表)にぶい黄橙10YR 7/3 (裏)褐灰色10YR 6/1	PL.77

番号	形式	法量	粘土	色調	挿図・図版
9号上甕	鉢形土器	復原口径 (外)66cm (内)52.4cm 器高32.8cm、底径11.3cm	石英・長石粒を含む	(表)褐色5YR 6/8 (裏)褐色5YR 6/8	Fig.11
9号下甕	甕形土器	復原口径 (外)66.4cm (内)51.6cm 器高113cm底径13cm	石英・長石粒を含む	(表)に近い褐色5YR 7/3 (裏)に近い褐色5YR 7/4	PL.77
10号上甕	甕形土器		石英・長石粒を含む	(表)暗赤灰色10R 4/1 (裏)明赤褐色2.5R 5/8	Fig.11
10号下甕	甕形土器	復原口徑 (外)65.4cm (内)52cm 器高102cm底径12.7cm		(表)に近い橙色7.5YR 7/3 (裏)明褐色7.5YR 7/2	PL.78
11号上甕	甕形土器	復原口径 (外)67.5cm (内)57.9cm	石英・長石粒を含む	(表)に近い褐色5YR 7/3 (裏)に近い黄褐色10YR 7/3	Fig.12
11号下甕	甕形土器	復原口径 (外)68.6cm (内)59.2cm 胸部最大径 70cm	石英・長石粒を含む	(表)明褐色7.5YR 7/2 (裏)灰白色7.5YR 8/2	
12号上甕	鉢形土器	復原口径 (外)73.6cm (内)60cm	石英・長石粒を含む	(表)褐色5YR 6/8 (裏)褐色5YR 6/8	Fig.12
12号下甕	甕形土器	復原口径 (外)73.5cm (内)60.7cm	石英・長石粒を含む	(表)淡赤褐色7.5YR 7/4 (裏)に近い褐色7.5YR 7/4	PL.78

飯田遺跡 5次調査出土甕棺一覧

甕棺の色調は「新版 標準土色帖」1988年度版に倣った。

甕棺製作の時期について

1号甕棺は、上下ともに須恵式新段階にあたる。2号甕棺の下甕は、城ノ越式甕棺を金海式甕棺にみられる沈線紋の退化傾向に留意して4型式でとらえた場合の第三段階、上甕の鉢形土器は、口縁部内側が張り出しつつあるので汲田式併行期まで下ると思われる。3号甕棺の下甕は、城ノ越式の第四段階、上甕は、口縁部内部が張り出すことから汲田式、しかも胸部中ほどに重心がくる古段階に位置づけられよう。4号甕棺は、出土状況からセット関係は確定できないが、上下ともに汲田式併行期である須恵I式に比定される。5号甕棺は、上下ともに須恵式段階にあたる。6号甕棺は、上下ともに底部を欠くが、口縁部外面のナデ調整や内側に張出す特徴など城ノ越式を脱し汲川式に移行した段階に位置づけられる。7号甕棺の下甕の器高は、110cmを超える汲田式でも大型の器種である。汲田式新段階にあたる。上甕は、その前段階に位

置づけられる。9号壺棺の下甕は、須玖式新段階にあたり口縁部が内傾するなど立岩式に移行する前段階の属性をそなえている。10号壺棺の下甕は、口縁下に突帯が回らず、須玖式段階でも古相を保っている。上甕に用いられた口縁打ち欠きの壺形土器も同じ土器相である。色調は全く異なる。11号壺棺は、上下何れも汲出式の古段階であり、下甕は、上甕に先行する型式である。12号壺棺は、須玖式新段階に位置づけられよう。

以上の時期比定の基本的な考えは、まとめに記しているので参照いただきたい。各土器相の壺棺は、各々4型式くらいの区分が適当ではないかと思う。

遺跡	地区	遺構	土器番号
松木	138街区	K-6	1
	140街区	K-10	3・5
有田	86次	K-03	2・8
	有田3次	SE-01	66・67
門田		K-08	79
		K-09	4・6
		K-24	59
北恵	6次	SK-28	27
	9次	SE-03	52
		SE-06	75
		SE-28	53
		SE-30	78
	37次	SU-03	7・9
板付	市住	SC-15	10
		K-27	17・19
	F6b	井戸	65
カルメル修道院	1次	K-1	14
福原新建	1次	K-13	15・18
		K-73	16・28
		K-79	22・23
		K-81	29・30
		K-201	38・43
		K-202	34・35
藤崎	1次	K-12	32・33
		K-82	55
		K-88	31
藤崎		K-13	51
		K-01	40
		ST-07	44・45
		9号土器基	20・21
四輪	B地点	包含層	25・26
博多	48次	260住居址	36
西新町	2次	K-10	48・49
		K-11	37・39
		K-13	50
		K-16	62・68
		K-19	58・60
		K-26	41・42
那珂	20次	SD-01	56・63・69・70・74・76
	23次	SD-44	54・57・71・72・73・77
		SE-83	80・83・84
宝台		祭祀	46
丸尾台		壺棺	61
二雲	南小路	K-2	47
	堀	K-06	64
	郡の後	土器層	81・82・85
田村	1次	SX-01	11
弥永	1次	II区Aトレ	12
淨泉寺	1次	40号Pit	13
		53号Pit	24

Fig.14 出土地点一覧

まとめ

甕棺墓にみる上蓋と下蓋の型式差については各報告においてその都度言及されてきた。また小児甕棺の組合せから型式の組列・先後関係を導いた論考もある。近年奥田 尚は甕棺に含まれた砂礫を観察し、墓域と砂礫採取地が十km程度離れている場合があること、上蓋と下蓋の胎土が異なる例が少くないことを指摘している。5次調査出土の甕棺墓の砂礫は肉眼で観察する限り一様に石英と長石を多く含んでいる。色調は観察表に示すとおりだが、上下で明らかに異なるものに10号甕棺がある。ここでいう異なるとは、色調の違う土器をセットとして取合せたという意味である。これはもちろん土器の焼かれた状況の違いによるともいえようが、甕棺の在庫品から被葬者に応じた選択の結果も含まれていると仮定したい。

甕棺の葬法については矩形の上蓋を掘り、その一方に横穴を掘って下蓋を据えて上蓋を合わせて埋め戻すのが一般的とされている。この時、遺体はどの段階で甕にいられるのだろう。下にプロセスチャートを示すが、いずれの場合も甕棺は集落あるいは墓域の何れかにストックされていたのであり、死亡時に取合せが決められたと推定する。小児棺については外面の器壁に煤が付着した日常土器の転用や共用と考えられるものも少なくない。このほかに副葬遺物の集中する特定集団墓では大型の見るからに立派な甕が用いられていることから生前に発注された専用棺もあったようである。

ところで甕棺内の入骨に付着した布に着目して、遺体は墓ですまきにして納棺すると説く橋口達也の論に従うとしても何處で納棺されたかによって葬送儀礼の様子は少し違ってくる。福島口出海は、アナフ遺跡の調査で祭祀土器群と甕棺や木棺の墓域出土の土器片の接合関係から埋葬列の区分を導いている。墓域出土の土器片を施薙か流入かに区別することは難しいとしても、接合関係の把握は埋葬の手順を知る上で有力な情報を提供してくれるにちがいない。甕棺のなかには蓋形土器などの口縁部を打ち欠いたものがあるが、打ち欠かれた部位との接合に期待したい。甕棺製作については、専業工人がいたか、テリトリーも含め明らかでない部分が多い。



- (1) 田崎博之「須恵式土器の再検討」『史蹟第122編』九州大学文学部 1985年
- (2) 奥田 尚「甕棺の砂礫からわかること」「福岡考古16号」福岡考古懇話会 1994年
- (3) 橋口達也「甕棺内人骨などに付着せる布・革」「篠山猛先生古希記念古文化論叢」1980年
- (4) 福島口出海「アナフ遺跡」「嘉穂町文化財調査報告書第13集」嘉穂町教育委員会 1992年

甕棺と日常土器

甕棺の組列については、森貞次郎の分類以来検討が重ねられてきた。80年代前半の重点的な検討課題は、金海式と総称されるものに中期に下る時期の型式が含まれていること、また型式として実態に乏しい桜馬場式甕棺の究明に要約できるのではないか。その間、型式学と時期区分との噛み合いは必ずしも良好とはいえないが、概ね共通の認識だけは生まれた。しかし「概ね」とは、日常土器との並行関係をはじめ肝心な部分が未消化というこの裏返しである。ここで前述の消費時の甕棺の性格を踏まえて、成人棺・中型棺・小児棺と常用土器との様相を考えてみたい。成人棺とそれ以外の土器が異なる生産ラインにあるとするなら、それぞれ範型の変化にある程度の軸組が予想される。だが、前期末から後期初頭にかけての二世紀半を超える期間を公約数として僅か7あるいは8段階の土器相で捉えるとき、両者の組織間の不協和音は搔き消されたかのような印象を受ける。この型式変化の基層にあるうねりのようなものが様式の本質なのかもしれない。

ここでは、甕棺の上蓋に用いられた鉢形土器の型式変化を基準に、糸原新井遺跡（前原市）のように甕棺の蓋を共通項として深田式とその前後の土器相の大枠を導いた。縄年に使用したのは、糸島、早良、福岡平野の資料だが、これは南海産うずまき貝であるゴホウラ製の「諸岡型貝輪」の分布域を意識した地域設定である。

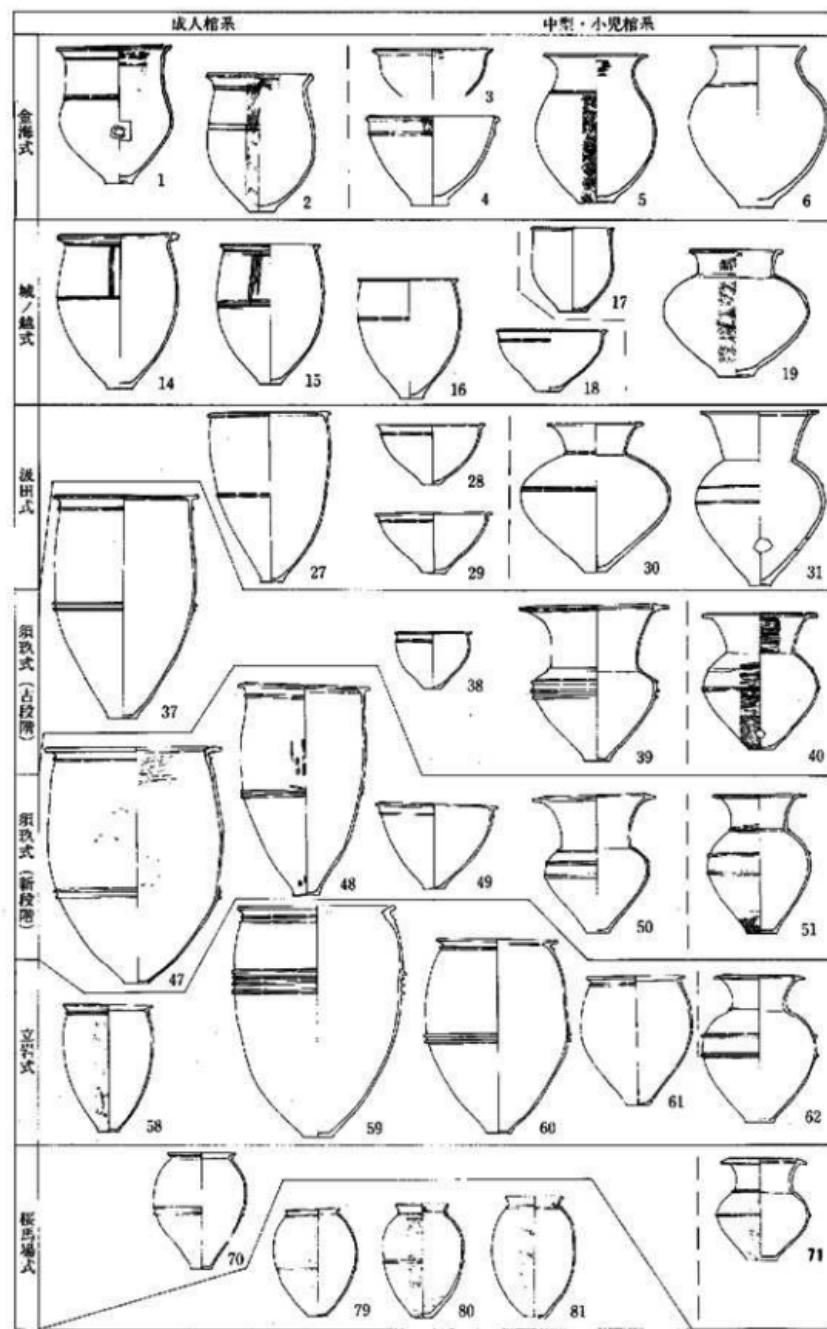
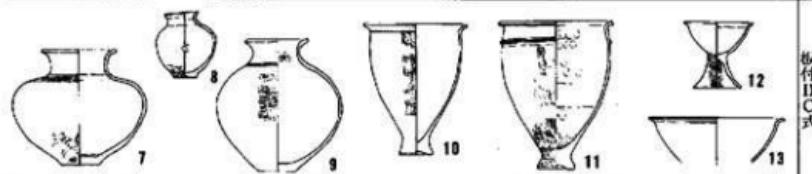
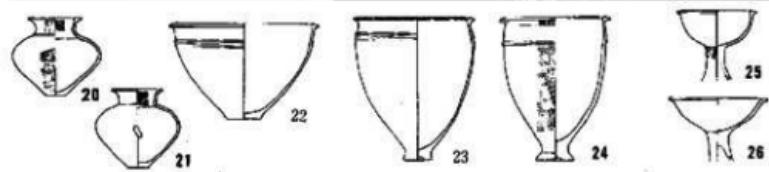


Fig.14 北部九州における弥生上器の様相

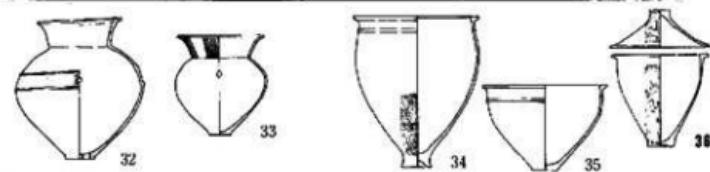
日常土器系



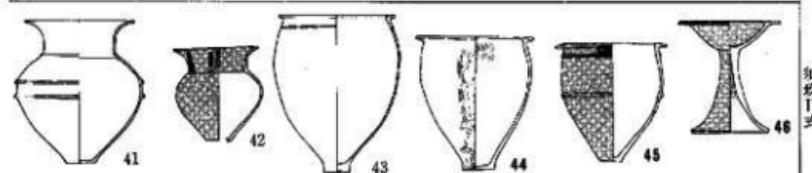
板付II-C式



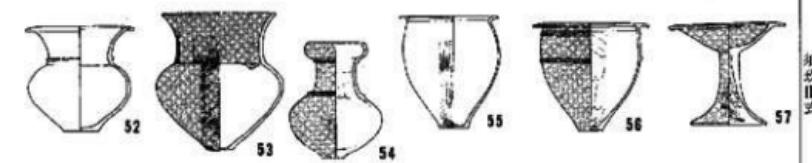
城ノ越式



須玖I式



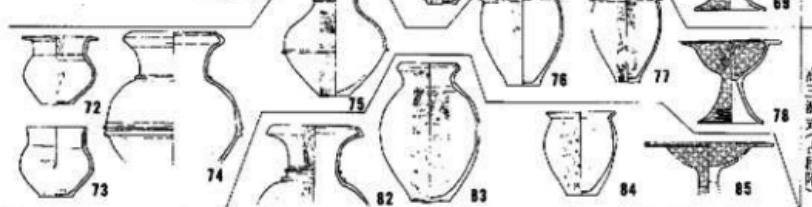
須玖II式



須玖III式



須玖IV式



高二輪式(古段階)

(成人棺 1/30・ゴチック 1/15 他は 1/20)

金海式・板付II式

妻棺と周葬小壺との共存関係から導かれる。有田86次3号妻棺では口縁部に新しい要素の妻棺に板付II式の小壺が伴う。胴部が下彫れ気味で、胴部下位に重心がくる段階を金海式と捉える。次段階としたカルメル修道院の1号妻棺に先行する型式である。また松木遺跡138街区6号妻棺は、有田86次3号妻棺に先行する型式だが、口縁下と胴部の突帯は、金限遺跡103号妻棺にも共通する属性である。装身具として南海産貝輪、副葬遺物に青銅利器が伴うものもこの段階である。妻・鉢形土器は「如意状」口縁、壺形土器に三角突帯と羽状紋を併せもつものもこの時期の特徴である。

城ノ越式

金海系妻棺の重心が、胴部中ほどから上部に移行する段階をさす。また金海式に見られる胴部上半の沈線紋は、徐々に簡略化され、施紋がなく胴部に突帯が回るタイプを含めると少なくとも四型式が想定される。篠原新建遺跡13号妻棺と79号妻棺の蓋の鉢形土器の型式によって並行関係を設定できる。多鋸細紋鏡を副葬する吉武高木3号木棺墓に伴う小壺はこの段階に属する。楽浪郡の設置によって運動する半島在来情勢の緊張が伝わってくる。妻・鉢形土器は断面三角形の粘土帯を貼付た口縁、壺形土器の口縁は平坦で内側に張出しをもつタイプに表徴される。棺内に青銅器や装身具の集中する特定集団墓の形成がはじまる。

銀田式・須玖I式

成人用妻棺は、口縁部が内側に張出し、胴部最大径が口縁下にくるタイプを指標とする。宇木汲田遺跡41号妻棺のように中型型鉢を副葬する例が知られる。多鋸細紋鏡の副葬も継続して行なわれる。篠原新建遺跡81号妻棺と202号妻棺の蓋の鉢形土器の形式によって並行関係が設定できる。口縁部に縱方向の暗紋をもつ広口壺(33)が現れる。妻・鉢形土器は「逆L」字口縁、壺形土器の口縁は平坦で内部にしっかりした張出しをもつタイプに表徴される。

須玖式(古段階)・須玖II式

妻棺のサイズは、器高・口径とともに大型化し、これまでの型式を描経期とすれば成人棺として完成期にあたる。口縁下と胴部に断面形「M」字形の突帯が回る。口縁部の断面形は、「T」字状をなす。いわゆる丹塗研磨のみられる壺・妻・高环・器台の各器種が成立する。口縁部の断面形は、「逆L字」口縁を基本とし、内側に僅かに張出しをもつタイプに表徴される。

須玖式(新段階)・須玖III式

成人棺は、口縁下と胴部の突帯は、断面形「コ」字形を呈する。口縁部の断面形は、「逆L」字状をなす。妻棺のサイズは、器高・口径とともに大型で棺内に前漢式鏡や装身具の集中する特定家族墓的な墓域も形成される。丹塗研磨のみられる壺・妻・高环・器台の各器種が盛行する。口縁部の断面形は、「逆L字」口縁を基本とし、内側の張出しは強調される傾向にある。

立岩式・須玖IV式

成人棺の断面形「コ」字形突帯はさらに大型化する。口縁部の断面形は、内側気味の「逆L」字状をなし、胴部が張り出す。中型棺の口縁部断面形は、「く」字形で外彫するカーブをえがくタイプが現れる。前段階に統いて棺内に前漢式鏡や装身具の集中する特定家族墓が形成されており、さらに階層性の広がりが看取される。丹塗研磨のみられる器種には目調整痕をそのままにしたもののがみられるようになる。口縁部の断面形は、シャープさを欠き、変形土器の「く」字形口縁はこの段階に成立する。

桜馬場式・高三瀬式(古段階)

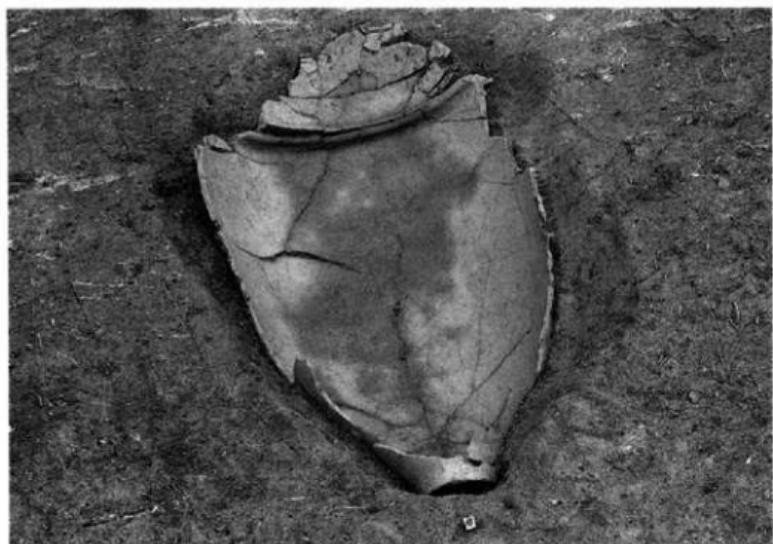
桜馬場式妻棺は、漢鏡4期の鏡と有鉄銅鏡や巴形銅器など青銅製創作遺物によって象徴される時期の妻棺型式だが実存しないため、研究における認識は定まっていない。ここでは那珂遺跡の溝にともなう資料を参考にあげることをめたい。丹塗研磨のみられる器種は減少し、底部に粗い目調整痕をそのままにしたもののが一般的となる。變形土器の底部は、75・76・77から83・84のように平底を強調しなくなる傾向が指摘できる。79・80・81は次段階の妻棺で、81には82のような複数のくっきりした複合口縁壺がともなう。



(1) 5次調査区全景（東より）



(2) 5次調査区（西より）



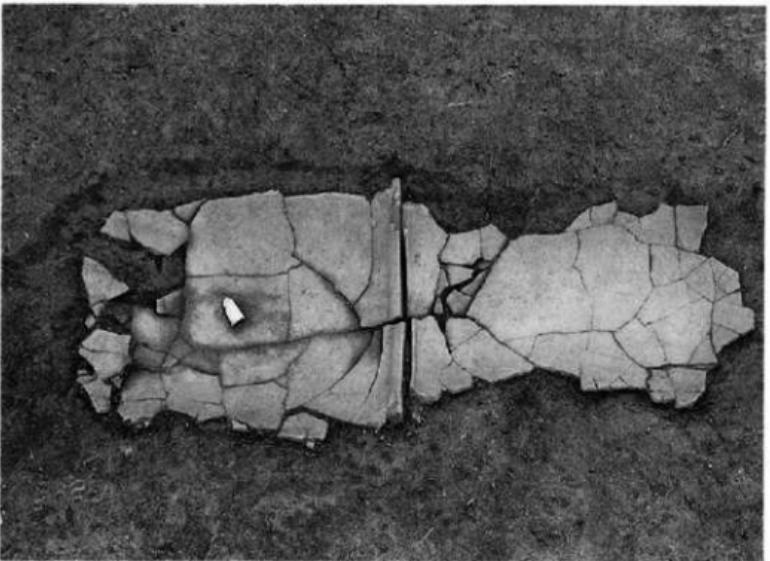
(1) 1号甕棺墓（東より）



(2) 2号甕棺墓（北より）



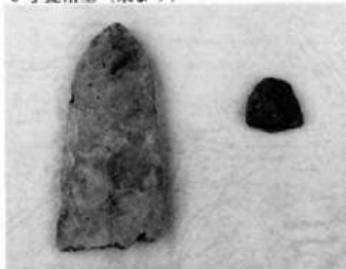
(1) 3号甕棺墓（北より）



(2) 5号甕棺墓（東より）



(1) 6号甕棺墓（東より）



(2) 5・6号甕棺墓出土石刺切先（縮尺約1／2）



(3) 5号甕棺墓出土石刺切先出土状況



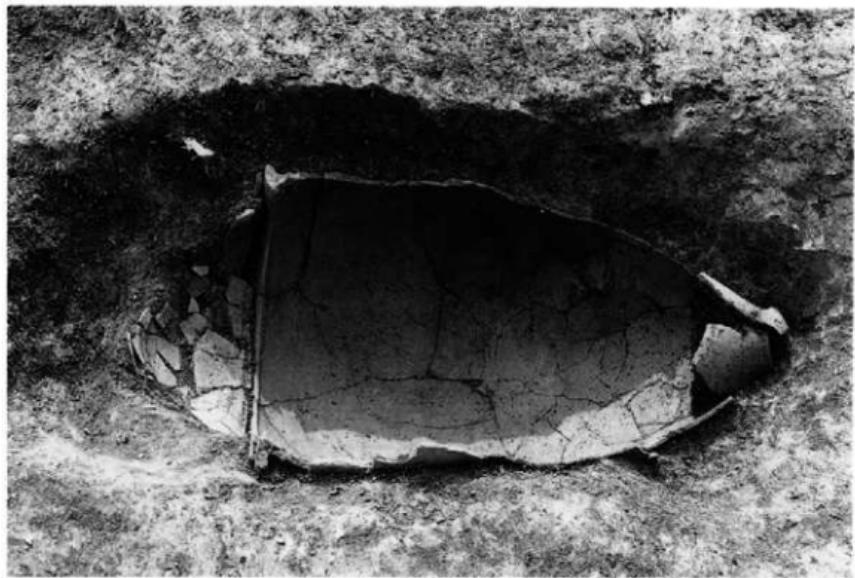
(1) 7号甕棺墓（北より）



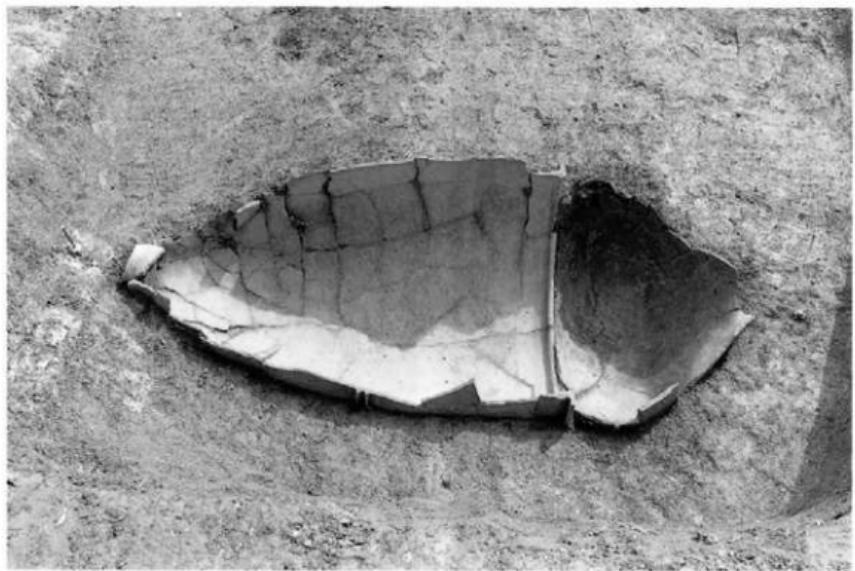
(3) 8号甕棺墓（北より）



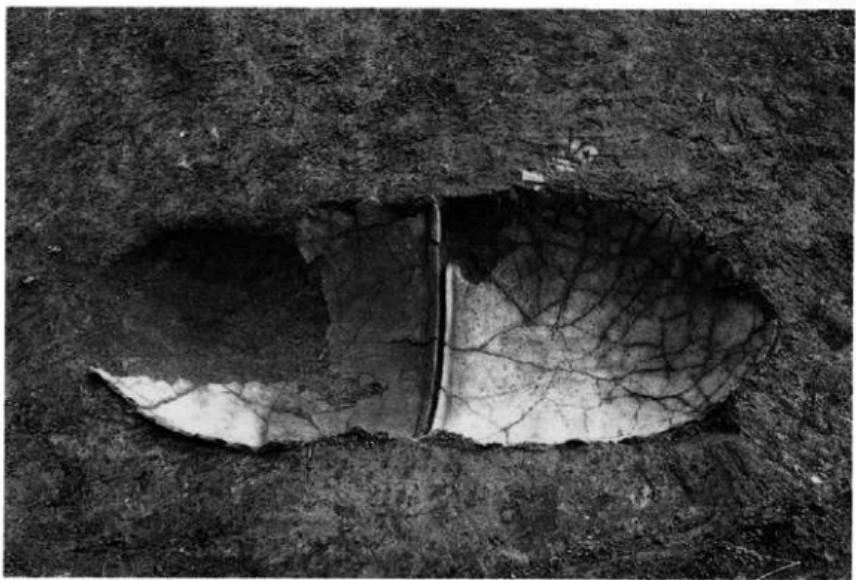
(2) 4号甕棺墓（北より）



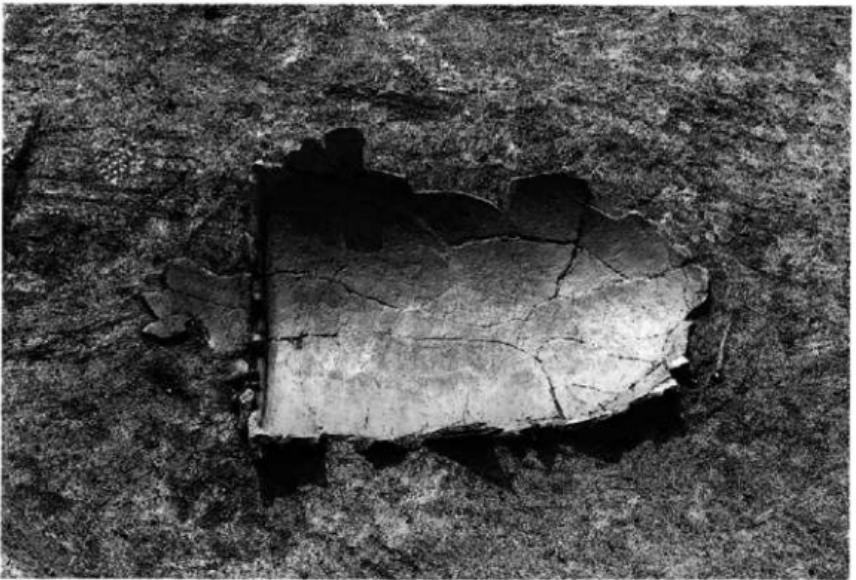
(1) 9号甕棺墓（北より）



(2) 10号甕棺墓（北より）



(1) 11号甕棺墓（北より）



(2) 12号甕棺墓（北より）



(1) 1号甕棺下甕



(3) 5号甕棺上甕



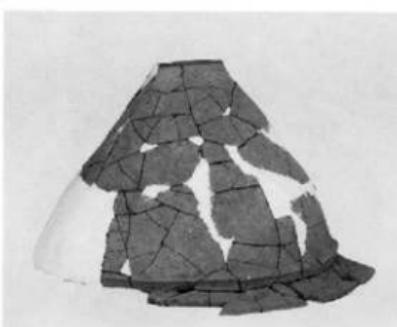
(4) 5号甕棺下甕



(2) 3号甕棺上甕



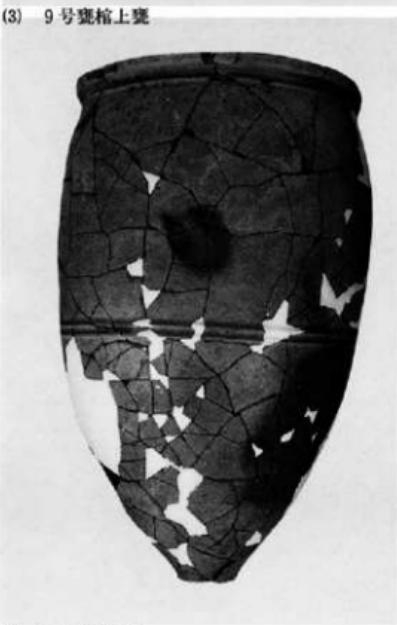
(1) 7号漆棺上盖



(3) 9号漆棺上盖



(2) 7号漆棺下盖



(4) 9号漆棺下盖



(1) 10号甕棺上甕



(2) 10号甕棺下甕



12号甕棺下甕

国道202号線今宿バイパス

関係埋蔵文化財報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書390集

飯氏遺跡群2

1994. 3. 31.

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 梶西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚8丁目2-15

